
ソードマンの聖杯戦争

永谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードマンの聖杯戦争

【Nコード】

N5011N

【作者名】

永谷

【あらすじ】

第五次聖杯戦争。何も知らずに巻き込まれる形で参加することになった衛宮士郎の目の前に現れたのは一人の男性。「俺を呼んだのお前じゃないのか?」「呼んでない」そうか、ならば縁がなかったんだ。俺は俺のやりたいようにこの戦争を駆け抜けてやる!第五次聖杯戦争再構成もの。
オリジナル設定の英霊が出てきます。ご注意ください。

第巻話：不本意な始まり（前書き）

はじめまして、永谷というものです。一応二作目、となります。

内容は Fate / stay night の第五次聖杯戦争の再構成となつています。セイバーが金髪の可憐で凛々しい青い騎士ではありません。一応他のキャラはそのままの予定ではありますが、セイバーだけオリキャラで、オリジナルの英霊が出張ってます。

SIDEとなつていない場合はセイバーじゃないセイバー視点で送りしてます。キャラの口調とか結構適当です。ご勘弁！セイバーさんは男です。です。イチャイチャはありません。Notベークンレタス。冗談として用いることはあります。土郎さん嫌いです。上手く進めば友情……。には行くかな？現代に見事に染まっています。気まぐれなので更新は不定期です。波が来たら更新という状況です。それでもよろしければ、どうぞご覧になってください。楽しんでいただければ幸いです。

第巻話：不本意な始まり

「もしやとは思うが、お前が七人目だったのかもな。

ま、だとしてもこれで終わりなんだが」

薄暗い倉庫に浮かぶ青い鎧に身を包んだ男の腕には赤い槍。

学校で俺の心臓をあっさりと冗談みたいに貫いたそれは、また同じ事を繰り返さんと動かされる。

今まで一度も見えなかったというのに、その動きはスローモーションのようだ。

この結果を俺は知っている。

学校で一度体験したのだから。

(・・・ふざけてる)

一秒後に訪れるだろう世界が認められない。

こんな所で意味も無く死ぬ訳にはいかない
何故なら俺は、助けてもらったのだ。

暗く冷たい廊下にポツンと置かれた赤い宝石を思い出す。

そう、助けてもらったのだ。なら、助けてもらったんだからこんな簡単には死ねない。

(ふざけてる)

こんな簡単に人を殺すなんてふざけてる。

こんな簡単に俺がしぬなんてふざけてる。

一日に二度も殺されるなんて、ふざけてる。

(ああもう)

本当に何もかもふざけていて、一秒後には死が待っているというのに怯えてなんていられない。

「ふざけるな、俺は　　！」

こんなところで意味もなく、お前みたいなヤツに、

殺されてやるものか

！！！！

視界が白く染まる。

「え」

光から生まれ出るように、それは魔法のように現れた。

ガギーン！呆けた俺の意識を戻すかのような鉄がぶつかり合う音。

光が収束する間を待たずに振り下ろされた槍を打ち砕かんと飛び出し、

突然だというのに躊躇も戸惑いも何もなく機械的な正確さでそれは男へと踏み込んだ。

「　　本気か、七人目のサーヴァントだと・・・！？」

弾かれた槍を構え直す男に追撃が走る。

突然の侵入者の攻撃を受けてたたらを踏む男。

「っふ、！」

その隙を逃さん、とばかりに土蔵内の空気が一瞬凍った。

今までの攻防はお遊びだ、と言わんばかりに不可視の域に達した何かが走る。

しかし槍の男もまた人外。狭い土蔵の中でも素早く防御に移り、

「るあああああああ！！！！！！！！」

カッキーン！

そんな清々しい音が聞こえて来そうなくらいに何かを振り切った。

壁がブチ破られる音、更に風通しが良くなった土蔵。

一仕事した、とどこか誇らしげに青い男が飛んでいった先を見上げる侵入者。

そして「そういえば」といった風にこちらを振り返る。

色素が抜け落ちた白髪。しかしそれは歳を重ねた物ではなく艶やかで、夜風に靡いている。

こちらを見据える瞳は赤。意志の強そうな瞳が見極めるようにこちらを睨んでいた。

長身を包むのは速さを重視した軽鎧。

その手には……蔵にあった30cmばかりの鉄パイプが握られていた。

一人吹っ飛ばすほどの衝撃を与えれば折れていてもおかしくないのに歪んですらいない。

一拍の沈黙。

厳しかった表情がユルリと人懐っこそうに、何かをねだる子供のように緩まる。

「なあ、」

「……な、なんだ」

「チエンジってあり?」

「は?」

「なんでさ?」

士郎サイドEND

「いやいやいや、ないわ、本気でないわ・・・使い魔だぞ。英霊だぞ。従者だぞ！」

「そんな夢いっぱい憧れいっぱいの召喚で何故同性を呼ぶ!・・・
・あ、お宅そついつの?」

「そついつのってなんだよ!」

「やあー。ほら、衆道とか男色とか」

「違う!っていつかお前なんだよ!」

憤慨する(恐らく凡そ多分)俺のマスター候補の赤毛の少年。

その姿はボロボロで、明らかに致死量だろう、と思われる箇所に傷を負い真っ赤に服が染まっている。

今現在俺が居る建物・・・物置？内も一騒動あったことを表すかのよう荒れている。

まるで人一人が出口に回るのを惜しむかのように壁をブチ破って退散した跡が微笑ましい。

「俺を呼んだのお前じゃないのか？」

「呼んでない」

「マジか。じゃあ良いわ。さっきの発言は無かったことにしてくれ」

夜分才邪魔シマシターと言いながら外へと続く階段を上る。

左手に令呪の兆しあったし、他にマスターらしき人物がいなかったのだから完璧あいつが俺のマスターだろう。

だがしかし、俺は右も左も分からない野郎の子守りをする為に来た訳ではないのだ。

否定されたのなら仕方がない、ああ仕方ない。縁がなかったんだ。俺は俺のやりたいようにやる！

先程吹っ飛ばしたご同業に早速狙われてるだろうし、長くはないだろうな。

次のマスターを探す為に外を目指す。

……正直、あの少年からは俺が嫌いな臭いがプンプンする。

俺はクラスを名乗ってないし、奴をマスターと呼んでもいない。

つまりまだ契約はなされていないというわけだ。俺はハグレサーヴアントという分類だな。

「お、おいっ?!」

躊躇う声が聞こえるがそれすら無視して階段を上りきり、鉄製の扉から外に出る。

と

「よお、随分と遅いお出ましじゃねえか」

「あん? 出口に回るのも惜しくて壁ブチ破って出てった奴がなんでこんなところにいるんだ?」

「てめえがブツ飛ばしたんだろーが!!!」

ダンダンと足を踏み鳴らして怒りを顕わにする青タイツ。

その手には赤い槍が握られている　　槍兵か。

つつーか沸点低いなあい。

くん、と鼻を鳴らす。

「ふうん、あんた混ざりもんか」

「ああ？」

「人間と……これは神か。半人半神ってやつか」

「よく分かったな」

「ああ、鼻がいいんでな」

特に人間に対する嗅覚はかなり鋭いと自分でも思う。

その為に作られたんだから当たり前なんだが、と考えるだけで止める。

思考は冷静で、表情も体のそこから湧いてくる衝動を現していないはずだ。

コロセコロセ

テキダテキダ

コロシタイコロシタイ

ペロリと口の端を舐めて押さえる。

「てめえ・・・本当にサーヴァントか？」

「失礼な奴だな。使えない目ん玉なら不要だな、よし俺が処分してやるよ」

先程蔵で拾った鉄パイプを握り直して構える。

それを見た槍兵の顔が怒りに歪められる。本当に沸点低いなこいつ。

「・・・いや、槍兵として戦う奴に対して明らかに本来の武器じゃない鉄パイプを持ってきたのがいけないのか。」

だが、これが俺の本来の戦い方だからなんともいえない。武器らしい武器で戦って欲しいならその槍寄せ。

「いい度胸だな、そんなもんで俺と渡り合おうってのか」

「悪いな、こんなもんしか無かったんだ」

「てめえセイバーだろうが、鉄パイプ振り回す剣士なんざ聞いたことねえぞ」

「じゃあセイバーじゃないんじゃないか？」

「ほお、じゃあお前は何のクラスだってんだ？」

「セイバーだが」

「死ね」

戦闘の開始の合図は短く、そして早かった。ちよつとからかっただけなのに。

なんてユーモアがないやつだ。

ブチブチと心の中で目の前の青い槍兵に不満をぶつけながら猛攻を流していく。

俺の手に触れた時点で鉄パイプは宝具として成り立っている。

でなきゃサーヴァントの攻撃に耐えられるはずがない。

ドツドツド！ガキガキガキ！

点にしか見えない突きを同じ軌跡を描く刺突によって防ぐ。

速い。そして上手い。

長物を扱っているのだから懐に入ってしまったえば、と思うが足を進める前に、

刺突による衝撃で後退せざるを得ない状況を作り出す。それも隙が無く、連続でだ。

「おらおらおら！どうした、さっきまでの威勢は！！！」

「俺としては撤退したいところなんだが」

「ふざけんな、てめえはここで死ね」

「あん？からかったことまだ怒ってんのか」

「殺す！」

ヒヒュ、ギャギン！

俺の首を刈り取るうとする槍の切っ先を見切ってかわし、一気に加速する。

懐に入った所で渾身の一撃を食らわせようとするが、すぐに槍が戻ってきて額を貫かんと繰り出される。

(やべ)

僅かに後退し、胸をそらせて、それでも掠る切っ先を鉄パイプで逸らし事なきを得る。

追撃が来る前にすぐに距離を取る。

「男前に穴が開いたらどう責任とってくれんだ」

「はっ、傷は男の勲章っていうんだろ、とっておけよ」

「断る」

ぺっと形だけで唾を吐く。

隙のない構えだが、ランサーは攻撃に移らない。十分射程であるのに、だ。

「いきなり速くなったり、強くなったり訳がわかんねえな、テメエは」

統一しやがれ、と不満を訴えてくるランサー。

「ばっか、んな魔力の無駄遣い出来るほど余裕じゃねえんだよこっちは」

「ああ？魔力供給されてねえのかよ、その坊主に。何だそれ、そういう修行か」

俺たちのやり取りを呆然として見ているだけでまるつきり蚊帳の外であった赤毛の少年に顎を上げる。

やはりアイツがマスターだと思って、既に契約したものと思ってるのか。

ま、召喚されておいて契約しないなんてありえないからな。

俺も単独行動スキルが無ければ契約せざるを得なかったわけだし。

つつか俺がこいつの相手してんだから逃げろよ………自殺志願者か？

「アホか、んなマゾヒストな修行意味ねえだろ。これ以上の成長はないんだから」

わざと制限をつけて力を増す………ってどこの漫画の話だつてんだ。

既に完結している存在である英霊は成長しない。

一応戦闘に関する記憶は座に戻っても残るので技量は上がるかもしれんが、筋力は上がんねえだろ。

「アイツは俺のマスターじゃねえよ」

「は？」

「俺呼んだのあいつじゃねえって、本人が否定してんだから契約してねえよ」

「……お前、馬鹿なのか」

「いいんだよ、俺だってアイツはお断りだし。という訳で見逃してくれるんなら嬉しいんだが」

「馬鹿が……お前はここで仕留めさせてもらっ」

あー、やっぱりー？

ステータス

クラス：セイバー

マスター：不明

真名：?????

性別：男性

身長体重：179cm 67kg

属性：混沌・中立

能力：筋力D + 耐久C 敏捷D + 魔力B 幸運E - 宝具EX

クラス別能力

耐魔力A++

A++以下の魔術は全てキャンセル。

現代の魔術師ではセイバーに傷を付けることも干渉することも不可能。

令呪の干渉もセイバー本人が許可しなければ無意味である。

保有スキル

心眼（偽）B

直感。第六感による危険回避。

魔力循環A

体内に魔力を循環させることにより魔力の無駄な消失を避け、体内に留まる魔力の質を向上させ、魔術による攻撃を無効化させる。その反動として魔術の使用が出来ない。しかし魔力が生成できず、マスターからの供給もない為、戦闘を続ける度にじわじわとだがランクは下がっていく。これはクラス別能力の耐魔力にも影響している。

単独行動B（A）

魔力循環によりマスターからの魔力供給を断つてもしばらくは自立できる。Aならば、マスターを失っても十日は限界可能。しかしそれも万全の状態からである。現在は無理をして五日がせいぜい。

宝具

殺戮に武器は選ばず

ランク：A+++

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：20人

手にした物に自らの宝具としての属性を与え、使用できる。セイバーが人を殺せると思えるものなら何でも良く、

一本の針から刀までセイバーが手にして離すまでCランク相当の宝具となる。

元からそれ以上のランクに位置する宝具であれば、そのランクのままセイバーの支配下に置かれる。

しかし真名による解放は出来ない。

多くの戦場を一人で駆け抜けて来たからこそその宝具である。

誤字脱字などありましたらご連絡ください。

第弐話・最優のサーヴァント（前書き）

一話目です。

弐話における凜、士郎視点から始まっております。

第貳話・最優のサーヴァント

凜SIDE

遠坂家の呪いともいえるうっかかりを發揮してしまい、

ランサーに再度命を狙われているであろう衛宮君を保護する為に夜の街を走る。

ああもう！父さんの形見まで使ったのに呆気なく死んでたら絶対に許さないんだから！！

日本様式の武家屋敷のような屋敷が見えてきた　衛宮君の家だ。

ランサーが気付いていないように、気付いていても間に合っているようにと、希望を胸に走る。

瞬間、　夜の空に光の柱が走った。

「んな　」

まさかまさかまさか

混乱する私を嘲笑うかのように、私の目の前の空に青い槍兵が舞っている……。

「……………なに、あれ」

「ランサーだな。独創的な撤退の仕方だな」

呆然とした眩きに応えるのは私の傍に控えていたアーチャー。

呆然と空を眺めていたが、直ぐにランサーが戻ってきた。

「あんの野郎！殺す！」とか喚いている。こんなに近くに居るというのに私たちの存在はアウトオブ眼中だ。

さっきの光の柱はサーヴァントが召喚されたのだろう。

んで、衛宮君の家には桜や藤村先生が出入りしているがこんな遅くまでは残ってない。

つまり消去法で言うならば衛宮君がサーヴァントを召喚して、ランサーを夜空に吹っ飛ばしたのだろう。

え、ということとは衛宮君って……………魔術師だったってことよね。

でもそんなこと私は知らない。私は冬木の管理者なのに。

つまりもぐり。

「ふ、」

「凜、どうするのだね」

「ふふふふふ」

「り、凜……?」

「あの野郎……よくも今まで踏み倒してきてくれたわね
え」

クツクツクツと笑う。

アーチャーが何か青い顔してるような気がしてるけど霊体化してん
だから分かるはずないわ。

「いいわ、そっちがその気なら私だってやってやるうじゃない……
」!

拳に手の平を打ちつける。

「凜、今は聖杯せんそ」

「いくわよアーチャー！無害そうな顔して私の目の前でのうのうと過ごしてきた馬鹿の顔を見に！！」

「了解した、マスター」

勿論いくら怒りを覚えていても、

今の衛宮亭（衛宮君の資金事情によっては私のものになる・・・まあ桜の為に残しておいてもいいけど（学生の間だけ）には

サーヴァントが二体いるのだ。なんの構えもなしに突っ込むほど馬鹿ではない。

状況はランサーの襲撃に衛宮君のサーヴァントが衛宮君を庇いながら対応しているところだろうけどね。

取りあえず状況を確認しようと、開けっ放しの門に向かう。

・・・随分と無用心ね、衛宮君。

凜SIDE END

士郎SIDE

怒涛の展開って言うのはこういうものだろうか……。

取りあえず状況が目まぐるしく、凄まじい速さで移り変わってくる。

俺を土蔵で助けしてくれた男は俺のお礼の言葉を聞かずに足早に外に出て行ってしまった。

「って！アイツ……！」

そもそも俺がああ青い男に追いかけられたのは青い男を見たからだ。

つまり俺の命の恩人である男も青い男に襲われる条件を満たしてしまっただ。

………まあ、なんで俺ん家の土蔵に突然現れたかは不明だけど。

と、兎に角、恩人に現状を話さなければ。

それに……もしかしたらまたあの青い男が戻ってくるかもしれないな

い。

鉄パイプをもっていったようだが、心許ないだろう。あつちは攻撃範囲の広い槍なのだ。

土蔵を見渡して武器になりそうなものを探す。

残念ながら木刀しかなかった……それに強化の魔術をかける。

「同調開始……つ、成功……した」

ほっと息をつく。

しかし安堵している暇なんてない。

集中していたから気付かなかったが、音が戻ってきて耳に響く鉄がぶつかり合う音が聞こえる。

「くそっ！間に合うか?!」

俺は急いで男を追う。

いきなりあの青い男を吹っ飛ばすほど強いかもしれないが、ほっつてなんて置けなかった。

急いで外に出る。戦っている音は止んでは始まり、止んでは始まり、ずっと留まっていることはない。

見慣れた夜の帳が落ちた庭。

そこは 戦場だった。

「男前に穴が開いたらどう責任とってくれんだ」

「はっ、傷は男の勲章っていうんだろ、とっておけよ」

「断る」

戦場に立つ影は二つ。

予想していた通り、青い男はすぐに戻ってきたらしく、俺の恩人は足止めを食らっていた。

戦闘をしているのに軽口をたたき合う……知り合いなのか？

いや、親しげに見せているだけで庭を纏う空気は確かに戦いの場だ。

「いきなり速くなったり、強くなったり訳がわかんねえな、テメエは」

統一しやがれ、と不満を訴える青い男。

対して恩人の方は呆れたように溜息を吐く。

「ばっか、んな魔力の無駄遣い出来るほど余裕じゃねえんだよこつちは」

「ああ？魔力供給されてねえのかよ、その坊主に。何だそれ、そついう修行か」

初めてこちらに話が降られる、がすぐに戻される。

魔力供給？どついう意味だ？

「アホか、んなマゾヒストな修行意味ねえだろ。これ以上の成長はないんだから」

む。意味がないなんてことないと思う。

頑張つて、努力した分だけちゃんと報われるはずだ。と反論したくなる。

勿論そんな暇などなく「何か勘違いしてると思うんだが」と恩人が

気まずそうに頭を掻く。

「アイツは俺のマスターじゃねえよ」

「は？」

「俺呼んだのあいつじゃねえって、本人が否定してんだから契約してねえよ」

俺は呼んでない。それに、マスターとかいう奴でもない。

なのになんで二人とも俺のことをマスターとか言うんだ？訳が分からない。

さっきから疑問ばかり増えている。

「……………お前、馬鹿なのか」

「いいんだよ、俺だってアイツはお断りだし。という訳で見逃してくれるんなら嬉しいんだが」

「馬鹿が……………お前はここで仕留めさせてもらっつ」

軽口は終わった。

士郎SIDE END

日本風の武家屋敷の飾り気のない庭。

月明かりがまっすぐに降りてくるその場に浮かぶ影は三つ。

その内二つは人ならぬもので、あとの一つは今夜の事件に巻き込まれた被害者。

趣味の悪い戦争に呼び出された青いケモノが笑う。

「馬鹿が・・・、お前はここで仕留めさせてもらっ

対する剣を持たず、主も持たない剣士が笑う。

「馬鹿め、そんな簡単に首が取れたら英霊なんて廃業だ」

一触即発の空気が平穏だった庭を戦場に変えていた。

ドクドクドク、と血液が循環する。魔力が体に満ちている。

ザワザワと肌があわ立つ。ドキドキと身体から沸き立つ衝動が抑えられない。

俺を英霊にまで押し上げた衝動　　殺人衝動が抑えられない。

「お前は俺の敵か」

「何当たり前のこと言っただやがんだ！」

「ここで退いてくれれば良かったんだが・・・ま、無理か。俺もそろそろ無理だし抑える必要もないか」

相手が半神だったから押さえられていたが、もうダメだ。

後ろにいる赤毛の少年なんて目に入らない。入れない。

だってあっちの方が殺しタイ。でも目の前の奴は敵だ。テキダテキダ。

優先順位を、マチガエルナ。

コロソウ、コロソウ、コロソウ、コロシツクソウ。

世界が殺意に凍る。

身体の中で抑えていた魔力が溢れる。

異変にテキのアカイ目が見開かれたが知らナイ。

持っているものが鈍器？んなもの関係ない。兎に角血が見たい。

そう、血が見たい。だから血が出るまで。青が赤に染まるまで殴る。その為に俺の手に握られているんだから。

俺の異変に気付いて直ぐに槍が振るわれる。

常人は勿論、英霊であっても容易く見切ることが出来ない域にまで加速された赤い軌跡。

「ふへ」

がぎい、ん！

鈍い音がして明らかに俺の命を刈り取ろうとした今夜最速の槍はあつけなく捕らえられた。

かなりの衝撃がいったはずだ。それなのに槍から手を離さないところは流石と舌を巻く。

悪態を吐く隙も与えずに先程の槍にも劣らぬ速さで鉄パイプを振り下ろす。

「ぎゅ」

折角懐に入ったのだ。先程の様に打ち飛ばすなんて勿体無いことはない。

確実に動きを止めて、俺の足元で血を・・・

キィ、ン・・・!

「・・・・・・・・」

死角からの完璧な不意打ち。

まっすぐに俺の頭を狙った必殺の矢は俺に届かなかった。

「んなっ・・・!」

というか、届く前に打ち消された。

今の俺の能力値ははつきり言ってチートだからな。

俺が生きてた頃は・・・・・・・・まあ、あまり変わらなかったが、チートに拍車が掛かった。

不意打ちをしてきた新たな参入者の顔を見るために振り返る。

ビクリと震える様を見て（怯えさせちゃって悪いなー）とか思いつつも、

その反応が面白くて溜まなくて、ペロリと口端を舐める。

「へえ、獲物が増えたな……今日は血に事欠か無そうだ」

赤い主従。

女とか男とか関係ない。

人間かそうじゃないか。

敵か味方が。それだけでいい。

「んで、あんたらも俺の敵でいいんだよな？」

とつかあの赤毛少年一体どんだけサーヴァント連れてくれば済むんだよ。

なんだ。サーヴァントホイホイか。良かった、契約しなくて。

めんどろだな、と思いつつもやっぱり人を殺すことがタノシクて笑う。

凜SIDE

今までの攻撃なんて、やりとりなんてままごと。

衛宮君が呼んだであろうサーヴァントの本質はこの絶対的な死だ。

長身ではあるが、アーチャーやランサーよりも低く、無駄な筋肉などないスラリとした体型。

見た目ではえば屈強な戦士ではない、のに。

向けられていないのに、殺気を向けられている。

いや、視界に映してはいないが、向けているのだ。遠坂凜という存在を殺そうとしているのだ。

そしてここは彼の射程なのだ。

剣を持たないセイバー。

剣を持っていなくとも、無骨な鉄パイプだろうとも
彼は最優のサーヴァントだ。

「凜、アイツはヤバイ」

「わ、か・・・て」

アーチャーの忠告なんて必要ない。どうみてもヤバイ。分かっている。その言葉すらいえない。

撤退すべきだ。

しかし・・・今まで私が培ってきた直感が告げる。

このままにしておけば衛宮君は死ぬ。

そう、他ならぬ自分が召喚したサーヴァントによって、生きながらえた命は刈り取られる。

令呪がある、とかそんなのは関係ない。

理解できる。令呪なんて魔術師が作ったものでしかない産物に止め

られるものじゃない。

確実に衛宮君はここで死ぬのだ。そして、私たちも。

「アーチャー、ランサーを援護して。セイバーの戦意がなくなるまでで良いわ」

「正気かね」

「手加減はしないで、殺しても良いわ」

「手加減などできる相手ではない」

そんな会話をしている間にも勝負が始まり、ランサーを地に叩きつけるセイバーがいる。

先程までのやり取りでは拮抗・・・いや、ランサーの方が余裕があったというのに数分でこの結果。

キリ、と弦が引かれる。

キィ、ン・・・！

空気を切ってセイバーの頭目掛けて飛んでいった矢は、届かなかった。

防御なんてしていない。

硬いのだ。途轍もなく。ダメージがセイバーに届いていない。

死神が振り返る。

「へえ、獲物が増えたな……今日は血に事欠か無そうだ」

ペロ、と獲物を見るような目で見て口端を舐める。

「んで、あんたらも俺の敵でいいんだよな？」

人間みたいにちょっと困ったように笑った。

保有スキル

魔力放出 A

武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、

瞬間的に放出することによって瞬間ではあるが幸運を抜かした全ステータスを2ランク上げる。

魔力によるブースター。

常時放出することによって常時ステータスのランクを上げていられるが、

2ランクの恩恵は並の魔力放出では得られない。

その為魔力供給がない今は瞬間的に、決め手となる時のみ放出している。

補正済み能力値比較

筋力 D + 耐久 C 敏捷 D + 魔力 B 幸運 E - 宝具 EX

筋力 B + 耐久 A 敏捷 B + 魔力 EX 幸運 E - 宝具 EX

殺人衝動 A

人間・人間の血が混ざっている存在全てに対する殺戮衝動。

対象となる存在と対立する場合のみ全ステータスがワンランク上がる。

人間に対する限定的な狂化である。

制御する伝承が失われている為、魔術的封印（令呪含む）も不可能なので自我による制御しか出来ない。

無理矢理に抑えている為、恩恵が得られない上基本ステータスも下がりが、計2ランク下がっている状態である。

つまり、殺人衝動を抑えず、魔力放出を使えば現在の能力が幸運を除いて全て4ランク上がる。

ぶっちゃけ士郎に呼ばれず、能力値だけをみれば最優・最強の名をほしいままにしていたらろう。

補正済み能力値比較

筋力D + 耐久C 敏捷D + 魔力B 幸運E - 宝具EX

筋力EX 耐久EX 敏捷EX 魔力EX 幸運C - 宝具EX

能力値だけで既にチートである。

第弐話・最優のサーヴァント（後書き）

誤字脱字があれば連絡してください。

指摘は受け付けますが、苦情は受け付けないので生暖かい目で見守ってください。

第3話・混沌とする戦場（前書き）

第3話目です。

互いに互いを助け合う時・・・戦場は混乱の場となる・・・
ぐだぐだです。

第参話・混沌とする戦場

士郎SIDE

「んで、あんたらも俺の敵でいいんだよな？」

軽い調子で訪ねた先には、穂群原のミスパーフェクト、遠坂凜がいた。

「と、遠坂?!」

明らかに場違いである。

何で遠坂がここに。っていうかなんで俺の家知ってるんだ。

あれ？隣にいる赤い男なんか見覚えあるな。

ってそうじゃない！何でこう、ヤバイ時に訪問者が絶たないんだ!？

幸い青い男は遠坂に気付いてない、ならば遠坂だけでも！

「遠坂！お前なんでここに・・・いやそれより早くここから離れろ

「！」

「は！？何言ってるのよ今一番危ないのは衛宮くんじゃない！逃げるわよ！」

手を掴まれる。や、やわらか・・・！

「じゃなくて！あいつは俺の恩人なんだ！放っておけるか！」

「恩人！？あの青いのはアンタ殺そうとしてんのよ？！衛宮君あなた正気！？」

「違う！そっちじゃなくて髪の毛の白いほう！」

「アイツが今一番やばいんじゃない！殺されるわよ！」

「な、なんで殺されなきゃならないんだよ！っていつか殺されるわけないだろ。犯罪じゃないか」

「ぐああああ～～～！！！！なんつであんたは状況の理解が出来ないのよ！見て分かるでしょ！！！」

「分かるわけないだろ？！」

いきなり殺されたかと思っただら生きてて、生きてたと思っただらまた殺されそうになって！

んで助かったと思っただらその恩人は変な奴と戦ってるし！」

こんな状況で自分の置かれた状況がちゃんと分かるわけがない！
でもこれだけはいえる。

俺の事なんかより遠坂だ。何の用で来たかは分からないけどすぐに避難させないと！

「凜、もういいだろう、帰るぞ」

「はあっ？！帰らないわよ！ここまで突っ込んできておいてこんな危なっかしい馬鹿放っておけるわけないでしょ！」

「むっ、馬鹿つてなんだよ。俺は遠坂の安全を考えてだな」

「自分から棺桶造ってる様な奴に考えてもらおう安全なんて無いわよ
！」

「棺桶なんて作ってないぞ俺」

「そうじゃないわよ！馬鹿！」

「また馬鹿つて……ああ、もういいから遠坂帰れよ。用事は明日聞くから」

「こん、の……！馬鹿っつ！！果てしないほど馬鹿っつ！
！！人の話聞きなさいよね、衛宮君の癖に！！！！」

「つう~~~~~！お、俺の癖につて………」

「うるさい！衛宮君！ときが私の心配なんて30年早いのよ！！」

「ランサー帰ったけどいいのか？」

「む、セイバー……でいいのか？ランサーを逃がしたのか」

「そりゃあこんな痴話喧嘩すぐ横でおっぱじめられちゃあな」

「……あぁ、」

「苦労しそうだな、赤いの」

「私はアーチャーだ」

「遠坂は女の子だろ！心配して何が悪いってんだ！」

「なに、このご時勢に女の子は守ってやんなきゃとかいってんの？
！自分すら守れないのに！」

「俺は男だからいいんだよ！っていつかこんな夜中に出歩いて何してんだよ危ないだろ！」

「だから、危ないのは衛宮君の方だって言ったら何回……」

ぐ、と遠坂が俯く。

や、ヤバイ・・・ちよつと言いすぎた、か？

売り言葉に買い言葉だったとはいえ確かにちよつと言いすぎたかも
しれない・・・

「あ、と、遠さ

「言えば分かるんじゃないよこんちくしょおおおおお！！！！！！」

見事な右フックに意識を刈り取られた。

「あ、決まった」

「やれやれ」

そんな会話が聞こえた・・・いつの間にあの青い男帰ったんだ？

士郎SIDE END

「違う！そっちじゃなくて髪の毛の白いほう！」

「アイツが今一番やばいんじゃない！殺されるわよ！」

「な、なんで殺されなきゃならないんだよ！っていうか殺されるわけないだろ。犯罪じゃないか」

「ぐああああ〜！！！！なんつであんたは状況の理解が出来ないのよ！見て分かるでしょ！！！」

一触即発の空気だったのに、いつの間にか痴話喧嘩が始まっていた。

ポカンとした顔でランサーも二人のやり取りを見ている。やっぱり呆気にとられるよな！。

下手したら・・・いや、あのままで行けば確実にここから生きて帰れなかったというのにあのやり取り。

「なあ、俺帰っていいか？今回は様子見だったし」

地面に胡坐を掻いたまますっかりヤル気を殺がれた様子でこちらに提案するランサー。

突然現れた赤いサーヴァントは二人のやり取りを見て頭痛を抑えている。苦労人だ・・・！

と。今はそれどころじゃないな。

「様子見かよ。だったら吹っ飛ばした時帰って置けよ」

そしたらこんな混沌とした状況にはならなかったのに。

「いいじゃねえか、見てる分には面白いだろ、アレ」

「否定はしないが・・・俺もマスター探しに行かなきゃだな」

「おいおい、本当にあの坊主と契約してなかったのかよ」

「してねえよ。俺の嫌いな臭いがすんだよあのガキ」

「ふうん？ま、お前とはまた鬪り合いたいからな。つまんねえ事で消えるんじゃないぞ」

「はっ、馬鹿め。本気の俺に手も足も出なかったくせに。大人しく隅っこに縮まっとけよ」

「テメエの心臓は絶対に俺が貰い受ける」

赤い槍をこちらに突きつけ、それだけ言うとさっさと塀を飛び越えてランサーは夜の街に消えた。

「お前にやれるほど安もんじゃねえっつの」

俺はこの世界の知識どおりに正しく中指を立ててその姿を見送ってやった。

「自分から棺桶造ってる様な奴に考えられる安全なんて無いわよ！」

「棺桶なんて作ってないぞ俺」

「そっじゃないわよ！馬鹿！」

「また馬鹿って……ああ、もういいから遠坂帰れよ。用事は明日聞くから」

痴話喧嘩はまだ続けている……。

つかランサー帰ったこと絶対気付いてないなあいつら。

このまま放ってマスター探しに繰り出しても良いが、眉を寄せて唸っている苦労人の姿を見て声をかけることにした。

「ランサー帰ったけどいいのか」

「む、セイバー……でいいのか？ランサーを逃がしたのか」

「そりゃあこんな痴話喧嘩すぐ横でおっぱじめられちゃあな」

「……………ああ、」

「苦労しそうだな、赤いの」

「私はアーチャーだ」

「ん、俺は一応セイバーだ」

「そうか」

「これ、いつまで続くんだ？」

「大丈夫だ、そろそろ終わる」

アーチャーに促されて二人を見ると、赤い少女が俯いている。

あーあ、泣かせたか？全く自分の心配をしてこんな死地まで来てくれた少女を泣かせるなんて鬼だなアイツ。

少年もヤバイと思ったのか直ぐにバツが悪そうな顔をして戸惑いがちに声をかける。

キュピーーンと影になっていた目が光った気がした。

「言えば分かるんじゃこんちくしょおおおおお!!!」

「あ、決まった」

「やれやれ」

見事な右フック。きっと世界も狙える。

カンカンカーン！とゴングを鳴らしてやりたいほどにキレがあり、あの細腕からは思えないほどのスピードだった。

アーチャーはやっぱり頭痛がするのか額を指で押さえている。

鈍い音を立てて少年が地に崩れ落ちて、ようやく今夜の聖杯戦争は落ち着いたのである。

「では我々は帰ろう」

「そうね。あとはセイバー頑張つてね」

「おいおいおい、一番厄介なもん押し付けてくなよ。つか俺もマス

ター探ししなきゃ何ねえんだけど」

「「は？」」

「この少年は俺のマスターじゃないぞ」

「は?!じゃあ他の誰がアンタを呼び出したってのよ」

「………たぶん、こいつだと思っが……呼び出した覚えがないっつーんだもん」

「男がもんとか言わないでよ。」

覚えがないって言ってもアンタを呼び出したのが衛宮君ならあんたのマスターは衛宮君でしょ」

「俺はコイツに俺がセイバーだって言ってないし、契約も完了してない」

「え、じゃ、じゃあ今のアンタって」

「ハグレサーヴァントってやつかな」

「衛宮君………こんな物騒なサーヴァントに首輪かけてないっつて………!」

あ、どかーんと来そう。ぶるぶると震える拳が尋常じゃない。

つつか物騒なサーヴァントって失礼だな……まあ、英霊なんて一人いるだけで十分物騒だが。

あー、でも俺殺人衝動のランクが高いから更に危険度ドンだな。

三人だけで、敵意がないから抑えられているだけで、敵意向けられたら全員殺しちまうからな。

しかし殺人衝動があるってのはばれてないはずだが……ま、あの殺気で十分危険か。

「というかそいつ聖杯戦争のことすら知らなそうだし、俺を召喚したのだって偶然だと思っぞ」

「嘘！そんな奴にセイバーが取られたって訳?!」

わなわなと震えるトウサカリン。

もしかしてセイバーが良かったのか？チラリとアーチャーに視線で問えば肯定。

おいおい、自分のサーヴァントの目の前で言うことじゃないだろ。

「なんだ、セイバーがいいんならここにいろぜ。ハグレサーヴァントだけ」

「あんたはお断り。絶対ヤバイもの」

うむ、その直感は正しい。大事にしたまえ。

「凜、それほどの英霊をこの小僧が御することができると思っている……」

「あ」

それほど上等なもんじゃないんだが。

正規の英霊じゃないしな俺。

セイバーというクラスについてはいても本来は違うカテゴリーに分けられるし。

ソードマンってのが一番俺に相応しいクラスだと思う。

でも「セイバーとどう違うんだよ」と言われてこのクラスに押し込まれたのだが。

剣を持ってないセイバーって致命的じゃね？

「うむ、何を隠そう今この状態で一番殺したいと思っるのはその少年だからな」

「な、なんでよ・・・あなたのマスター・・・じゃなかった、呼び出したのは衛宮君でしょ。」

聖杯を手に入れるチャンスくれたのは衛宮君ってことじゃない」

「別にいらないし」

「え」

「俺の願いは英霊になる時に自分の死後と引き換えに叶えて貰ったからな」

まあ、叶えて欲しいものはあと一つ二つ三つ・・・うむ、欲があるということは人間らしいことだ。

悪いことではない。

とりあえず切羽詰った、どうしても叶えて欲しいってもんはないということだ。

第参話・混沌とする戦場（後書き）

凜と士郎のやり取りを書くのはちょっと楽しかった！

誤字脱字などありましたら、[ご](#)連絡ください。

第肆話・初戦の後に（前書き）

四話目です。

一日目が長い・・・とても長い。

イリヤに会うどころか教会にすら向かってないといづ。

もうしばらくお付き合いください・・・

第肆話：初戦の後に

サーヴァントセイバーの召喚された土地

衛宮邸。

襲撃者は退き、戦場であった庭は夜に静まり返って本来の静けさを取り戻している。

しかし聖杯戦争は終わったのではない。

先程までの戦いですら始まりを告げるものでしかなかった。

赤い弓兵のサーヴァント。

白い剣士のサーヴァント。

二人のサーヴァントが揃った時、戦場は開幕を告げているのである。

「コイツは貴様のマスター、いや召喚者だろう。ならば貴様が面倒を見るのが道理」

「道理だ？んなつまんねえもん引つ張り出してきて押し付けようとするじゃねえよ」

「不可抗力とはいえ一度でも助けたのであれば最後まで面倒をみたまえ」

「助けたのはそつちも同じだろ？ま、あんななまくらじゃ傷一つつかねえけど」

「クツ、助けたのではなく不意を付いただけのことだ。まさか不意を付くのが邪道というようなたまではあるまい？」

「おおおお、弓兵は弓兵らしく目の届かない所でこそこそ隠れてガクガク震えてるのがお似合いだ」

「フツ、それがお望みとあらば夜道には気をつけることだな。」

座に帰ったら戦歴に刻み込んでおけ。マスターを選び好みして弓兵風情に負けました、とな」

「あんたら……いい加減にきなさいよ！アーチャー、衛宮君を運びなさい！」

「凜、何故私が」

「い・い・か・ら！」

一言一言言い聞かすように告げてから一つ息を吐くとウサカリン。

上げられた顔は憤怒の表情が一気になりを潜めて、アーチャーを呼ぶ声は慈愛すらこもっている。かもしれない。

「アーチャー」

「なんだ」

「これはお願いじゃないの、命令なの」

鬼だ！ここに鬼が、あくまがいる！！

「……………地獄に落ちろ、マスター」

せめてもの仕返しとアーチャーが少年を運ぶ手はぞんざいだった。

「衛宮君と契約しなさい」

「NO」

俺は日本人じゃないからNOと言える。

こうしてトウサカリンという少女に付き合ってるのは、まあ夕飯を
ごちそうになっているからである。

あれから俺たちはトウサカリンに沈められた士郎をアーチャー（俺は断固断った）が運び、

布団に寝かせた後居間？客間？まあ畳の敷かれた和室に三人で揃った。

手持ち無沙汰だったので机の上に置かれていたセンベイを取って包装を剥がしてバリバリと食べる。

「……………随分図々しいわね……………アンタ」

「ちょっとは魔力の足しになるからな。ま、お助け料って訳だ。足りんが」

中々美味だったので独り占めするのも悪いのでトウサカリンの方にも差し出してみるが、

なんか俯いてブツブツ言ってる。大丈夫かよ。

「……………うう、私のセイバー像がセイバー像が……………」

「トウサカリン、幻想とは壊れるものさ」

「アンタなんてセイバーじゃない……………」

それにトウサカリじゃなくてトオサカ、っていうかフルネームで呼ば

なくてもリンでいいわよ」

「おお、じゃあ俺もセイバーでいいぜ」

軽い自己紹介をしているとコトンと目の前に湯飲みが置かれた。

視線を向ければ赤い弓兵がリンの傍に座る所だった。

中を覗いてみると緑色の液体が入ってる。野菜ジュース？青汁？

「茶だ」

「ん？悪いな」

緑茶らしい。礼を言ってふうふうと冷ましながら口に含む。センベ
イに合うな。

食べ終わった包装紙を避けて、もう一枚と手を伸ばすとリンが更
うな垂れていた。

「アーチャーあんたまで……」

「どうせ進展無いんだし、家主も寝てんだし好き勝手にやらせても
らおうぜ。

怒られたら寝てたお前が悪いっていえばいいし」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「あんだよ」

「やりたい放題ねー、と思って。衛宮君のサーヴァントじゃないのに」

「随分と現世に馴染んでいると思ってな。君は召喚されたばかりだろっ」

「折角現界したんだし、遠慮なんてしてつまない英霊人生送るよりましたら。」

で、アーチャーの意見はもっともだが聖杯からのバックアップがあるだろうが」

俺の存在意義でもある殺人が禁止されてるのだからその衝動を他に置き換えて誤魔化さないと辛いものがある。

無益な殺人なんて好きではないから抑えることに文句はないのだが、自分で抑えるのは結構骨が折れる。

「そんなにここの生活が気に入ったんなら衛宮君のサーヴァントになればいいじゃない」

「ごめんだね、聖杯戦争やりに来たのに聖杯戦争知らないガキのお守りなんて。

アーチャーも嫌だろ？英霊相手に木刀で突っ込もうとするような馬鹿」

魔術師の端くれならば、俺らの存在の非常識さを察知して欲しいものである。

事前に察知できなくとも、俺がランサーと戦っているときに理解できたはずなのにあいつは逃げなかった。

俺の嫌な予感当たる。むしろ嫌な予感だから当たる。幸運Eは伊達じゃないのだ。

「確かに。だが私のマスターは幸いにして凜だ。お悔やみ申し上げるよ」

ツク、と嫌みつたらしく笑うアーチャー。

ここらでサーヴァントを減らす仕事でもするかな・・・おおそうすりゃマスターも手に入るな。

食事をするところだからやりはしないが。

戦意のないサーヴァントく食べ・・・魔力補給だ。

カスが付いた指を舐め取り、不機嫌そうにこちらを睨みつけてくるリンに指を突きつける。

「だからアイツのお守りはしないっつもの。そろそろ俺探しに行ってくるかな」

「ちょっと！本気で」

「本気です。嫌です。というかこんなヤバイ儀式なんだから監督役とか調停役とかそういうのいんだろ。」

死んで欲しくないんならそこに連れ込んでやるんだな」

というかこの聖杯戦争を始めた奴らこんな街中を舞台にするなんて何考えてんだらうな。

俺が生きていた時代とは違って魔術は秘匿するものってことになってるらしいし。

俺に言わせて見ればお前ら秘匿する気ねえだらって感じだがな。

こんな平和な世界じゃこんな物騒な奴らが戦ってるのは勿論、いるのだからって迷惑だらうに。

お上は考えることが違いすぎて分からんね、と溜息をついて立ち上がる。

「せめて衛宮君に何か言ってから行きなさいよ」

「混乱するだけだろーが」

「お茶菓子紛失してた方が混乱するわよ」

「そこはほら、リンが話を付けてくれれば」

「嫌よ。家主が気を失ってるってのにお茶菓子漁ってたなんて遠坂の恥だわ」

大体食べたのあなただけじゃない。と言われてしまつと何も言えん。

後悔なんて勿論しない。

どうやって共犯にしてやろうかを考える。

「……言つとくけど、食べないわよ。こんな夜遅くに物食べるなんて女の子にとっちゃ厳禁なんだから」

「腹が減った時に食べる、その何が悪いんだよ」

「あら残念ね、私お腹減ってないの」

「そんな小食だからポリュームが」

チュイン！

「何か言ったかしら？」

「そんな小食だからポリウムがすく」

ぞどどどどどどどどー！

「凜！やめないか！」

「うるさい！殺すわ！絶対にコイツは！」

「ふ、その程度の魔術で俺を傷つけようなんて」

「うわ！なんだこれ？！っていつか壁！壁に穴あいてる！！」

「・・・・・・・・だから言ったのだがな」

「・・・・・・・・も、もっと早く言いなさいよアーチャー！」

え、アーチャーが悪いのか？恐ろしい。

そんなやり取りを聞いたのか、襖を開けて家主が登場する。

「と、遠坂！？・・・とアンタか」

「お邪魔してるわ」

「勝手にお茶菓子食ってんぞ」

「いや、それは別にいいんだけど・・・この壁はなんだ」

「アーチャーと俺の視線がリンに向けられる。

うぐ、とバツが悪そうに視線を下げるリン。

「いいわよ！直してあげるわよ、そんなの私に掛かればあつというまなんだから！」

「おお、男らしい」

「遠坂がやったのかよ、これ・・・」

「アーチャー！直しなさい！」

「私か！？」

「あなたが私のこと止めなかったんだから同罪でしょ！」

「・・・はあ、まあこれくらいなら構わないが・・・」

発破を掛けられて渋々とだがガンドによる銃痕を直そうとするアーチャー。

それを腕を組んで偉そうに眺めるトオサカリン。

これが正しい主従の関係らしい……絶対こんな理不尽な主人の下には就きたくねえな。

そして俺は家主からの許可が下りたので堂々とセンベイを食べる。

バリッ。ボリボリボリ。

「あ、お茶いるか？」

「ん」

「どうぞ、って言うか良く分かったな、急須とか茶葉とかの置き場所」

「俺じゃねえよ、その赤いのが淹れてくれた」

「……アイツか」

ちよっと面白くなさそうにリンに扱き使われている赤いアイツを眺める少年。

「そついえばお礼言ってなかったな。」

俺は衛宮士郎。今日は本当に助かった、ありがとう」

「別に気にすんな、というか突然現れたことにつっこまねえか？」

「む、確かにそうかもしれないけどお礼はちゃんと言つべきだろ」

「お人好しめ」

「………そうだよ、お人好しだよ悪いが」

「ああ悪いね。そんな自己満足みたいなもん押し付けられるこつちが」

「なんだと」

「ちよつとあんたら何いきなり険悪になつてんのよ！」

ギシギシとなりそんな空気を感じてアーチャーの作業を見ていたり
ンが止めに入ってくる。

確かに俺がちよつと大人気なかった。自覚はしている。

出来る大人ならここで大人しくエミヤシロオの感謝の言葉を受け流
しておくべきだ。適当に。

自分の命が何度も失われる羽目になっているというのに、

その状況を理解する前に感謝する神経が気に食わないだけだった。

リンはコイツを俺に任せようとしているがごめんだ。

命がいくつあっても足りない。

勿論俺じゃなくてエミヤシロオの。直感で言うと40回くらい。

「まず、衛宮君は自分が置かれている状況をキチンと把握すること。

そしてセイバー、あなたはマスターを探しているのよね、だったら避難所でもある教会に行ったほうが早いわ。

どうせ私たちも教会に行かなきゃならないし、案内も監督役への口聞きもするわ。

その条件であなたも私たちに付き合って頂戴」

「断つたら？」

「冬木の管理者としてあなたの様なサーヴァントを放置して置けない。
い。

だからあなたには魔力供給が断たれて消耗するだけの今の状態で倒させてもらつわ」

第肆話・初戦の後に（後書き）

ちなみに、

シロウのことをシロオと呼んでいるのは遠坂嬢の指摘に習ってです。

ウとオの違いが知識では理解できても、

耳で聞くと曖昧になってよく分からないセイバーさん。

第五話：衛宮士郎式交渉術（対セイバー編）（前書き）

対セイバー編と書いてありますが、他の人編はあるか謎です。

取りあえず五話目です。お楽しみください。

第五話・衛宮士郎式交渉術（対セイバー編）

士郎SIDE

セイバーと呼ばれた男は遠坂の反応を楽しむようにニヤニヤと笑っている。

しかしそれも一瞬のこと。

「冬木の管理者としてあなたの様なサーヴァントを放置して置けない。

だからあなたには魔力供給が断たれて消耗するだけの今の状態で倒させてもらっわ」

遠坂の明らかな敵意を持った発言を聞いた瞬間に瞳が冷える。

声が低くなり、違う意味で反応を楽しむ笑みをその口元に浮かべる。

「へえ」

一気に凍った場で動いたのは遠坂の傍に控えていた赤い男。

まるで刃を首元に突きつけられたような空気。

喉が渴く。

拳が震える。

一瞬で命を刈り取れるのにじわじわと生かされている。

冷たい視線を真正面から受けているのに、遠坂は目を逸らさなかった。

「別にお前に案内されずともいいことだし、

監督役への口聞きもそれが監督役の仕事だから必要などあるまい。

そもそも、賞品が破格だ。欲しい奴なんて五萬といるんだから人員には事欠くまい。

監督役に頼らずとも、その中から適当に見繕ってマスターにしてしまえば良いだけだろ？

つまりこの地点でこの交渉は無意味だ。お前が切ったカードは何の交渉材料にもならん」

「交渉決裂ってこと」

「交渉も何もお前にはテーブルにすら着く権利がないって言うてるのね」

殺される。殺される。殺される。

遠坂は、あの赤い男は殺される。

俺の目が覚めるまで家に居てくれたのだ。状況を理解していない俺を心配して。

そのせいで殺されるなんて、それを見ているなんて 例え俺が殺されたって出来はしない！

「……ん、……し……」

「？」

「晩飯！ご馳走するから教会まで一緒にいってくれないか！？」

「「「………は？」「」」

「イライラするのは腹減ってるからだろ！

倒すとか倒さないとか交渉とか物騒な会話してないで飯食って落ち着こう！」

「………ふうん？ま。美味しいもの食わせてくれるならいいぜ」

「いいの?!」

俺の提案にしばらく考え込んでいたセイバーさんだが、

面白そうに眉を上げ、口端を楽しそうに吊り上げる……すごく怪しい笑みだ。

遠坂が(かなり不穏な気配を感じるが)了承の言葉をセイバーさんが言ったことを驚いている。

俺も驚いてるんだけど、どんなに怪しかろうが何かを企んでいようが了承は了承。

一応遠坂の言う『教会』までは付き合ってもらえるん……だよな?

80

「リクエストとかあるか?」

「この国の料理ならなんでも。俺腹減ってるから手早くな!」

「え、ちょ……ちょ?!」

「遠坂も食ってくだろ?それとも夕飯食べちゃったか?」

「………いただくわ……時間少し掛かるでしょ、外の空気吸ってくる」

深く深く溜息をついてから、疲れきった声で帰ってきた言葉に頷き台所に消える。

そこでほお、と息を吐く。

シンクについた手はカタカタと細かく震えていた。

「やべ、まだ震えてる・・・」

あそこで間に入るのはかなり危険だと言うのは俺にも分かった。

真正面からセイバーさんの敵意を受けた。それだけで「死んだ」と思った。

それでもそこで諦めることなんて出来なかった。

遠坂の手が机の下で真っ白になるくらいに握り締められているのを見てしまったから。

カタンと背後から物音がした。そこには遠坂の傍にいた赤い男がいた。

「なんだよ」

「なに、あそこの騎士様が「期待持たせといて不味かったらクロスゾー」と言っていたのにな。」

もはやこれは貴様だけの問題ではない」

何故かこの男だけは初めて見たときから気に食わなかった。

相手のほうも俺のことが気に食わないらしく、こちらを見てくる目は冷ややかに眉間には皺が寄っている。

それでもこうして台所に来たのは手持ち無沙汰になったのか、テレビを弄くりだしたセイバーのせいだろう。

「うるさい。お前もセイバーと一緒に待ってるよ。それが遠坂の所に戻ってるよ」

「その凜の命令なのだからしかたないだろう。何、少しは料理の腕には覚えがある。」

未熟者の貴様が足元にも及ばないほどではあるが」

「んな！」

フ、と鼻で一つ嗤うと冷蔵庫を勝手に開ける赤いアイツ。

「勝手に冷蔵庫を開けるな！手伝いに来たってんなら勝手に漁るなよ……」

「私が貴様程度の手伝いに身を置くはずがなかつ。私はあくまで凜の」

「私は衛宮君と低レベルな言い争いしろなんて指示してないわよアーチャー」

「り、凜……」

「衛宮くん？衛宮君も言い争ってる暇なんてないってわかんなかったのかしらー」

「と、遠坂……」

腕が光ってる。服の下で光ってる！そしてそれはキケンだと俺の本能が言っている！！

「アーチャー、私下らないことであなを縛りたくないと思ってるんだけど」

「わ、分かっている凜！」

「衛宮君もオキヤクサマを待たせるなんてそんな家主にあるまじき行為しないわよね？」

「も、もちろんだ遠坂！」

「よかった、分かってもらえて」

話し合いつて素敵よね、とにっこりと笑ってからテーブルへと戻っていく遠坂。

あかいかくまの姿が遠ざかりほっと息をつく。

「取りあえず、休戦を提案する」

「ああ、争いとは何も生み出しはしまい」

こいつとは決して相容れないと思いつつも、ここは無理矢理にでも合わせておくことにした。

士郎SIDE END

「おー、いつつてねびじょーん」

「どこのエセ外国人よ」

聖杯からのバックアップで知識だけはあったテレビ（テレビジョン）テレビ受像機とも言う）を眺める。

外から帰ってきたリンが呆れた顔をしているが気にせずテレビを調べる。

傍にあつたりリモコンという機械をポチポチと弄くってみるが電源が付かない。

「ふ、壊れてやがる」

「あんたがね。一番上の、右にある赤いボタンを押すのよ」

「はっ！」

「ミン、

「ちょ！もうちょっと丁寧に扱いなさいよ、後テレビに向けて押さない。今度は優しく」

「この時代の物は何でもかんでも柔だからいけない」

このボタンっていうのだってグニグニと柔らかくって本当に押しているのか気になるほどだ。

指の先が少し沈むほどに押してみたが付かなかつたのに、リンの言うとおりに押せば呆気なく付いた。

やはりこの時代の物はその時代に生きる人間に聞いた方が早いな。

「英霊の腕力を常識と考えないで頂戴」

「まるで非常識みたいに言うなよ……いまいち力の加減が分からないってのは正解だがな」

「聖杯からのバックアップで加減の仕方とかわかんないの？」

「聖杯のバックアップは万能じゃない。戸惑わないよう知識だけで経験はくれないからな」

「こうやって触って加減を確かめることしかないってことさ、と告げてからタタミを撫ぜる。」

部屋の真ん中にドドンと置かれている木製のテーブルを叩いてみて、

机の下を覗いてその造りと組み木の仕方を確かめる。

「ちょっと、机の下覗き込んでなにやってんのよ」

「あん？組み木の構造とか木釘の打ってある箇所とか……これ組み木だけで出来てんだよな」

「………そ、そうね」

不機嫌そうだった顔が俺の答えを聞いてすぐにバツが悪そうに視線

を彷徨わせるリン。

はっはーん。

「すかーと覗いて欲しかったのか？」

「ななななななな！違うわよ！」

「いやあ、ご期待に沿えず申し訳ない。そういうのに興味なかったもんでな。ま、求められたら」

「求めてないわよ！変な勘繰りして悪かったなーって思ってんだからあんたも流しなさいよ！」

きいー！と立ち上がって怒るリン。

いや、からかいがある。クツクツと笑っているといい匂いが鼻をくすぐった。

その先を辿ればエミヤシロオが大皿に山をなす和風ハンバーグを持って立っていた。

「お前ら何してんだよ・・・セイバーさんリモコン隅に寄せてもらえるか？」

「了解ー、すげえ量だな」

「アーチャーがセイバーならこれくらい軽く食えるって……
大食いかなんかの選手なのか？」

「お前は果たして天然か養殖か……まあ、これくらい軽い
わな。んーうまそう」

まだジウジウとかすかに音を立ててる焼き魚が前に置かれる。

湯気の立つ味噌汁とどんぶりに盛られたご飯。

アーチャーが持って来た大皿には大根と牛肉の煮物が大量に盛り付
けられている。

直ぐに台所を戻る所を見るとまだ品数があるらしい。うむうむ、待
ったかいがあると言う物だ。

「太るわね……」

「自分のペースで食べればいいさ」

リンのボヤキに応えたアーチャーが最後にポテトとレタス、卵のサ
ラダを机に置いた所で席に着いた。

「それじゃ、いただきます」

「「「いただきます」」」

結果から言くと

「今まで食べてたもんはなんだ！！！」

というほどに美味かった。

アーチャーはエミヤシロオが作ったものを一口食べて「ハンツ」と盛大に鼻で笑い、

更に「焼き方が甘い」だの「塩が足りない」だの「これだから未熟者は」だの

延々と語りだそうとしたところでリンの鉄槌によって食卓の平穩が守られたりといういろいろあったので割愛するが、

十分に美味しかった。うむ、和風ハンバーグのソースとハンバーグ

の相性は最高だと思っ。

というかアーチャー、ご馳走になっておいてその態度はいただけな
いと思うぞと脅迫でこの席を勝ち取った俺が言う。

この時代の人間であるリンも恨めしそうにエミヤシロオを眺めなが
ら唸っていた所を見るとかなり美味しいのだろう。

「そこまで喜んでもらえて嬉しいよ。セイバーさんは今までどんな
もの食べてたんだ？」

「俺？・・・・・・・・・・・・・・・・薄かった」

「え」

「いや、まあ素材の味は最悪だね！っていうのを思い知らされたっ
つーか」

調味料とか調理技術とかそういうものの偉大さを思い知らされたと
言うか。

時代を考えれば仕方ないことではあるがな。

「えーと、取りあえず教会まで付いてきて貰えるのか？」

「これだけご馳走になったらな。それ位の暇ならあるし構わねえよ」

「そうか、よかった」

食い物に罪は無い。

デザートの一チゴ大福を突きながら緑茶で口を潤す。

うむ、ごちそうさまでした。

第五話・衛宮士郎式交渉術（対セイバー編）（後書き）

そろそろ原作の方をやり直してみないとなあ。

なんせ原作やったの 年前・・・おおまかでしか流れが不明。

誤字脱字等ありましたらご連絡ください。

第陸話：食後の考察（前書き）

六話目です。

セイバーから見た凛と士郎に対する見解。

第陸話：食後の考察

五、六人前はある食事をデザートまで四人で食べつくし、食後のお茶を終える。

そして教会へ行く前の腹休めとしてエミヤシロオが不本意ながらも巻き込まれた聖杯戦争についての説明が始まる。

ゴロリと横になり、丸めた座布団を枕代わりにしているとアーチャーから小言を言われた。

「行儀が悪い。それに食後すぐに横になるのは体に悪影響だ。具体的に」

「要らん。英霊に健康云々なんて関係あるわけねえだろ」

「む。それはそうだが、私が言いたいのは健康に害があるからだけではなく心構えが」

「ああ！別にいいじゃねえか！なんだ、お前は俺の母親か！」

「誰が貴様の母親だ！仮に親だとしても貴様のような躰けのなっていない子供には育てんわ！」

「……遠坂、」

「衛宮君、あつちは放って置きなさい。こっちは確実に命が掛かっ

てるんだから」

「わ、分かってる」

「でもそうね、これ以上話の邪魔されるのは困るわ。」

アーチャー、話したいことがあるなら他でしなさい。でなきや消えて」

「凜……その言い方はなにやら問題があるぞ……」

まあ精神の未熟な敵と話すことなど何も無い。君が望むとおり霊体化させてもらおう」

リンの言葉遣いに対してなにか言いたそうな視線をリンに向けていたが、

勿論黙殺されたのでアーチャーは溜息を吐いた後こちらに皮肉をきつちり告げてから消えた。

あいつは一体なにがどうしたいんだか分からん……構いたいのかさうじゃないのか……。

(しかし……)

緩めていた思考を戻し、リンの説明を受けているエミヤシロオを見る。

驚いたり怒ったりと反応は様々だが、それだけで人となり分かる。お人好し。

まあ令呪の兆しがあり、

聖杯戦争に参加する権利を持っている　つまり、敵となる可能性を持っている人間に、

わざわざ聖杯戦争をレクチャーしてやるリンもお人好しなのだが。

アーチャーもそのことは理解しているだろう。

それなのに何故それを止めないのか……奴がいる方に視線だけ向ける。

……ま、リンに頭が上がらないってのもあるかもしれないがな。

(エミヤシロオ……何かあるのか?)

食事中に二人の関係を聞いてみたがそこまで深い仲でもなさそうだし、

知り合いの知り合い、といった方が適切かもしれない。その程度の間柄だ。

リンはお人よしだが、きつちりと公私の区別が出来る。敵味方の区

別が出来る。

そこがエミヤシロオのお人好しとは違うのだが、何故生かして生存確率を上げさせるような真似をするのかが不明だ。

しかも護衛に俺をつけようとするとか………意味分からん。

(とにかく情報が足りない)

たった一戦だが、魔力放出をして戦った。

マスターが居らず、魔力供給が出来ていない現状では今は良いがこれからは分からない。

魔力循環で消費が激減されているがささやかながら魔力は放出している。

霊体化してもいいのだが、俺の武器は俺の武器じゃない。現世にあるものを武器にするのだ。

つまり、霊体化していると持てない。

わざわざその場で調達しなければ素手で戦うことになるのだ。

切り札があるにはあるが………この状態で惜しまず連発するのは難しい。

ここには物が溢れているから良いが………どこで戦うかなん

てその場にならなければ分からない。

召喚されたばかりで地理なんて全く分からない。

教会へ行つて、用が済んだら町を回つてみた方がいいな。

出来ることならリンの弱みを握ることが出来ればいいんだが、

アーチャーの真名は一度宝具でもない攻撃を食らったただけだし不明だが、その一端を掴むくらいはしたい。

俺狙いじゃないサーヴァントでも襲撃してこねえかなー……………
幸運E - じゃそんな上手く行くわけねえか。

はあ、誰をマスターにするかも決めてないのにやることは大量だな。
心の中で溜息を吐いて考えを纏める。

(為るようになる！)

「え、つていうことはセイバーさんも英雄なのか？」

そりゃどういう意味だエミヤシロオ。

「ちょっと待て。過去の英雄って、ええ………!?」

え、っていうことはセイバーさんも英雄なのか？」

俺の作った料理を一口食べるや否やあっちもこっちも忙しそうに手を伸ばしていたセイバーさん。

生命が懸かっているんだ、と言わんばかりに誰も取らないのに食べ物詰め込むセイバーさん。

食後のお茶を幸せそうに啜り、満足げな表情で溜息を吐くセイバーさん。

アーチャーに小言を言われて大人気ないやりとりをするセイバーさん。

とてもじゃないけど英雄に見えない。

あ、いや別に遠坂の言葉を信じないって訳じゃないんだけど……行動がそれらしくない。

「ま、英雄っていつでもそれぞれだな」

ヨイシヨと寝転がっていた体を起してこちらの話に加わってくる。

それに対して遠坂が「そうね」と頷いてこちらを厳しい目で見てくる。

「でもこれだけは言えるわ。」

どんな英雄でも英雄なの。怪物じみた力を持つてるわ。

性格はそれぞれだし、中にはほだされるような行動を取る奴もいるかもしれないけど

それだけはどんな英霊も変わらないわ」

「英雄をどういう目でみているのかは分からないがな、エミヤシロオ。」

英雄って言うのは殺人の代名詞みたいなもんだ。人を殺さずにならぬ英雄なんて少なくとも俺は知らん」

少なくとも俺は知らん、つまり彼は人を殺して為った英雄なのだ。

それを言われて襲撃してきた青い男との一戦を思い出す。

背筋も凍り、一步も動けなくなるような残酷なまでに冷たい殺気を思い出す。

そうだ、だから遠坂は言ったんだ。

『中にはほだされるような行動を取る奴もいるかもしれない』と。

これは忠告だ。

遠坂と、他にもない本人であるセイバーさんからの。

でも、

「俺はセイバーさんを怖いとは思えないな」

「は？」

「わざわざ忠告してくれるなんていい人じゃないか」

「……………俺、頭痛くなってきたから消える」

「……………私も消えたい……………」

「む、人が御礼言おうとしてるのにその態度は無いんじゃないか」

額を押さえてよろよるとテレビの電源を入れ、チャンネルを変えてから消えるセイバーさん。

重く溜息を吐きながら額を押さえて頭を振っている遠坂が羨ましそうにセイバーさんが消えた先を見る。

そして再度深く溜息を吐きながらこちらに向き直って説明を再開する遠坂。

ちよつと二人の態度が面白くなって眉を寄せる。

……人のことお人好しお人好しっていうけどこの二人も十分お人好しだと思っただけだなあ。

言つと烈火のごとく怒られたり、

こののんびりした空気も吹き飛ぶような殺気を向けられるので口には出さないけれど。

(でも、嫌いじゃないな)

うん、嫌いじゃない。

ちよつとだけ心の中で笑ってから、俺が巻き込まれている聖杯戦争というものの説明を受ける。

この左手に刻まれた参加の兆しを使うか、使わないかを見極める為に。

「さて。話がまとまったところでそろそろ行きましようか」

どうやら大まかではあるが、聖杯戦争と、サーヴァントという存在についての説明が終わったらしい。

リンの言葉にエミヤシロオはきよんとんとして首を傾げている……
・お前……いや、何も言つまい。

折角霊体化して空気となっているのだ。リンに全て任せよう。俺はただの護衛だ。説明書じゃない。

「?行ってくてどこへ?」

「………あんだね。まあ、いいわ。

教会に行くって行ってたでしょ。そこにあなたが巻き込まれたこのゲーム……”聖杯戦争”の

監督役がいるから会いに行くわよ。そこでなら詳しい聖杯戦争のこと聞けるし。

衛宮君も聖杯戦争の理由について知りたいんでしょ?いざという時

の避難所でもあるから行って損はないわ」

「教会つて……確か隣町だったよな」

ただでさえ遅かったのに、暢気に夕食を食べ、食後のお茶まで飲んだ上、大まかな説明までしていたので、

時刻はもう深夜を指している……普通の人間が出歩く時間じゃないな。

聖杯戦争自体は夜に行うものが主だからリンたち参加者にとっちゃ大した時間じゃないだろうが。

「大丈夫よ。隣町なんて急げば夜明けまでには帰ってこれるし。」

それに明日は日曜なんだから、別に夜更かししてもいいじゃない」

「いや、そういうことじゃなくてだな」

どうせコイツのことだ、こんな物騒な時間に女の子が隣町まで歩くのが危ないとかなんとかだろー、

一番教会に行くのが必要な奴がなんで物事を先送りにするのやら……

俺も付き合うことになってるし、ここで明日に持ち越し……
なんていうのはご免だ。

「俺もアーチャーもいるんだ、万が一サーヴァントと遭遇しても早々やられやしねえだろ。」

「というか、リンが俺を教会まで連れて行くこととした時点で気付けど、護衛が欲しかったんだって。」

「勿論、リン自身の護衛の強化にもなるかもしれないが……本命はエミヤシロオのだろう。」

「アーチャーとエミヤシロオの仲は何故か悪いからな。」

「いざという時エミヤシロオを見捨てて離脱する、なんてことくらい起こりそうだな。」

「他のサーヴァントに遭遇でもしたら更に倍率ドンだろ。」

「う、……分かったよ。今から行くんだろ。」

「こうして、俺たちは教会までの道のりへ歩み出したのであった。」

「そつえばさ、セイバーさん」

「ん？」

玄関まで続く廊下の途中で呼び止められる。

「俺のことフルネームで呼ぶの、よしてくれないか？

遠坂のことも名前で呼んでるし、何か落ち着かない。

あとシロオじゃなくてシロウ、なんだけど

「あん？でもリンが」

「トウサカだったのをトオサカに直したわね、でも衛宮君の名前はシロオじゃなくてシロウよ」

「……ややこしい。んじゃ俺もセイバーでいいぜ。さん付けなんて何か痒い」

「ああわかった、よろしくなセイバー」

「いや、よろしくするつもりはないぞ俺」

きつちりと訂正を入れて夜の街へと繰り出すのであった。

第陸話：食後の考察（後書き）

食べてアーチャーとじゃれあってるだけじゃなくて情報収集もしますよ、と。

そして六話目にしてようやく土郎の名前を口に出して呼んだと言っ驚きの事実。

次からようやく教会に……。

一応次回予告としては、セイバーさんの真意ですね。

どうしてここまで付き合ったのか……その辺りがはっきりします。

誤字脱字などがありましたら連絡ください。

第漆話・画策する従者（前書き）

私的解釈・設定バリバリです。ご注意ください。

そんなこんなで七話目です。楽しんでいただけたら嬉しいです。

第漆話：画策する従者

流石に夜道を学生二人（しかも男女）で歩く訳にも行かないので、万が一のことを考えて保護者という役割を割り当てられて実体化したまま二人の傍を歩く。

俺の状態を考えたら、ちゃんとしたマスターがいるアーチャーがなるべきなのだが、

「生憎と私に着られる服がないものでな、残念だ。非常に残念だが二人の保護者の役目は君に相応しかろう」

「……………う、ぐうう……………！」

アーチャーの身長は190に近い。

そして学生のシロウだけが暮らすこの家にそれだけの大きさの服などない。

シロウが引つ張り出してきたロングコートを着れて、成人に見えるのは俺だけだったのだ。

リンに進言すればいいだけなのに態々実体化するとかお前、絶対大気ない。

これ以上時間をかけるのも馬鹿らしいし、ここは大人になって睨みつけるだけで済ますことにする。

そんなこんなで、苦汁を舐めさせられながらもお茶菓子と夕飯の借りを返す為教会を目指すのだった。

ぜってえアイツの引導は俺が渡してやる……………。

隣町にある教会。

影だけしか見えなかったそれは、坂を上がりきればすぐに見えた。

高台のほとんどを敷地にしたまっぴらな広場の奥に立つそれは小さいながらも豪勢なものだった。

しかし、その教会という建物には相応しくない空気は直ぐに感じ取れる。

……………途中にあった外人墓地など比べ物にならない。

既に死んだ身だから、死体を何千と見てきたから、感じられる。

死者の念じゃない……じゃあ、生者か……とにかくこの場は面白くない。不快だ。

臭いなどしないはずなのに、鼻に付くのは不快な臭い。

教会に入る前でそれなのだ。ならば中に入れば？

「俺はここにいる」

「え？」

「は？」

「俺の護衛は教会までのはずだ。マスター探しを教会の監督役に頼るなんてごめんだな」

特に、こんな臭いのする教会の主であれば尚更だ。

そんな奴が紹介するマスターなぞ……考え方が気に食わないシロウよりもお断りだ。

教会の中へと進んでいく二人の背中を見送って、夜空を見上げる。

……恐らく、俺が予想していることは当たっているはず。

聖杯戦争、サーヴァント、令呪……全ての事を聞けばシロウは理解するはずだ。

いや、シロウが理解できずともリンが理解する。

俺を召喚したのはシロウだ。

召喚し、現界した地点で俺とシロウには繋がりが出来ている。

契約を結んでいなくとも、俺のマスターは便宜上シロウになっているのだ。

勿論、遥かに薄い繋がりののできちんと契約をすればマスターの上書きくらいは出来る。

んで、ココで問題になるのが……俺は魔術師じゃない、ということだ。

魔力循環によって魔術の使用が不可能であり、魔術自体が効かないこともあって、

魔術に関する知識が……恐らく他のサーヴァントにすら劣る。

つまり、ラインを繋ぐ方法を知っている魔術師がマスターでなければならぬのだ。

……まあ、それ以外にも下世話な手段が無きにしても非ずだが。俺が嫌だ。

とにかく、俺がなんと言おうとシロウがマスターであるのは変わらない。

新しくマスターを探すなら……はつきり言おう、シロウは邪魔だ。

ここがマスターの避難所ならば、サーヴァントだけを失い、令呪が残った状態で駆け込むものもいるはず。

ならば棄権したマスターの令呪を取り除く手段が何らかの形で伝えられているはずだ。

そんでなきや令呪を持ったマスターが新たにサーヴァントと契約することを危惧した襲撃を受ける。

いくら監督役といえど下手にサーヴァントとやりあいたいなんて思うはずも無いだろうから、

そういった手段がある可能性はかなり高いはず。

シロウが戦争中にここに残るといふのなら、契約を結び、令呪を発現させて取り除いてもらう。

そして俺は新しいマスターを探す。それで済むはずだ。

幸いにして保有スキルの単独行動があるから数日はマスターなしで

動けるからな。

問題は、サーヴァント無し（と思っている）状態で聖杯戦争に参加しようっていう場合だ。

そこに「契約は確かじゃないけどお前俺のマスターだから」とか言えば、

確実にシロウがマスターという状態を維持されるだろうし……
・それはイヤだ。

絶対気苦労が耐えない！

命がいくつあっても足りない！（シロウの）

安全な所で隠れてくれるっていうならいいんだが………ぜってえんなこといわねえよな、アイツ。

「やっぱ殺すか」

溜息と共に軽く言う。

ジャリ、と背後で砂を踏みしめる音がした。

「誰をだね？」

振り返れば、予想通り敵意を瞳に滲ませながら立つアーチャーがそこにいた。

「……というか、リンと一緒に教会に入ったのかと思ってた。さっきまで近くに気配を感じなかったからな。」

敵意を向けられて殺人衝動が頭をもたげる。しかしそれを全力で抑える。

相手は武器を出してない。警戒でしかない。避けられる戦闘だ。

「ああ、あんたのマスターにや手を出さねえよ」

「衛宮士郎か」

「ん、まさかあんたら聖杯戦争が終わるまであいつの護衛してるわけじゃないだろ」

「確かに、そんな馬鹿な真似はせんな。しかし何故殺す？」

「邪魔だから」

俺は別に殺人が好きという訳ではない。

俺が人を殺すのは自分に益になる時と、敵意を向けられた時。

んで、シロウは邪魔だ。

「……………そうか、やはりアイツが貴様のマスターだったということが」

「ん。でも俺はアイツをマスターと認めていない。聖杯戦争に参加しないんなら長生き出来るんだがな」

どう思うよ？とアーチャーに訊ねる。

フム、と腕を組むアーチャー。

「無理だろうな。教会で聖杯戦争がどういうものか。聖杯がどういうものかを聞けばあいつは参加するだろう」

「サーヴァントがいなくとも？はつきりいってそりゃ命を捨ててるようなもんだぜ？」

「フン、貴様にはアイツがどういふ奴なのか理解出来ているのだろう。知った事を聞くなたわけ」

「あ……………だよなー、なんで俺はこんなに不運なんだ……………厄介すぎるマスターに呼ばれたもんだぜ」

殺すしか手段が無いってどうよ。

溜息をついているとアーチャーが不可解なものを見るような目でこちらを見てくる。

「殺すと言っているが・・・貴様はセイバーなのだろう、騎士道に反するのではないのか？」

「セイバーなのは空いてたからそのクラスに押し込まれただけで、俺は騎士でも何でも無い」

セイバークラスがない聖杯戦争なんて！って事じゃなからうか。

ま、俺はセイバークラスに押し込まれたただけなので騎士道なんて持つてないわけである。

「フム・・・しかし困ったな、貴様に衛宮士郎を殺させるわけにはいかんだよ」

「へえ、リンが怒るか？」

「・・・っていうかなんで知り合いの知り合い、程度の間柄であんなに親身なの？」

「知らんよ。人間関係の不思議とでも思っておくと良い」

「了解。ま、マスターの証である令呪さえ如何にかできるってんなら殺す必要はないんだが」

「……………ん？貴様はマスターを殺したいほど気に食わないから殺すのではないのか」

聖杯戦争も理解出来ない未熟者がマスターなんて気に食わん！殺してやる！とか、

聖杯戦争に無関係になったんなら見逃してやらあ！と思っっていると
思われてたっつてことか。

……………ってこいつ、俺のこと勘違いしてないか？

気に食わない！殺すとかそういう思考回路してるとか思っつてないか？

俺そこまで短気で唯我独尊じゃねえよ。

「んなわけねえだろ！新しいマスターと契約するのに邪魔だから殺すんだよ！」

「ならば令呪を無駄遣いさせればいいではないか。三回」

「……………ああ！」

「……………君は、……………まあ、悩みは解決したか？」

「おお、ありがとな！アーチャー！お前頭良いな！」

「……………普通の魔術師ならそんな馬鹿なことをするとは考え

られないが、衛宮士郎なら大丈夫だろう」

「そうだな」

ニヤリと笑う。

勿論ここで「無駄遣いじゃなくてもいい」とは言わない。

どんな願いでもいいのだ。どんな理不尽な願いでも不可能な願いでも。

戦闘で魔力は使ったが、耐魔力のランクが下がるほどに消費はしていない。

俺には令呪が効かない。

それほどの耐魔力がある、なんて丁寧に教えてやる義理は無いしな。

リンが俺に対して魔術を使ったことは無い。

どんな切り札を持ってこようと、俺には効かない。そこにきつと隙が出来る。

フッフ、アーチャーめ、俺が密かに気にしていることでおちよくったことを後悔させてやる……。

背が高いからってなんだ！ たった、 たった・・・・・・8cmしか
違わない癖に偉そうに！

179だって十分高いんだぞ！ ちくしょう！ せめてあと1cmとか
思ったことはあるけど！！

とにかく、これで俺の方針は決まった。

あとは教会から二人が出てきたときに全てが終わり、俺の聖杯戦争
が始まるだけだ。

第漆話：画策する従者（後書き）

セイバーさんのマスターは実は士郎だった、という話。

士郎の聖杯戦争参加に伴う被るかもしれない不利益>シロウという公式が既にセイバーさんの頭の中で成り立っています。

……士郎、敵多いなあ、身内に。

誤字脱字などありましたらご連絡ください。

第捌話・衛宮士郎式交渉術（応用編）（前書き）

八話目です。

以前の交渉術よりレベルが上がってます………セイバーの。

第捌話：衛宮士郎式交渉術（応用編）

凜SIDE

「マスターとして戦う。」

十年前の火事の原因が聖杯戦争だって言うんなら、

俺は、あんな出来事を二度も起させる訳にはいかない」

衛宮君の答えは………やっぱり予想通りだった。

それがどんなに無謀なことなのか分かっているのか………分かってて言ってるんでしょうね。

でもそこまで絶望的って訳じゃないのも確かね。

自称ハグレサーヴァントのセイバーがマスターの見当も付いてない状態で放し飼いだし。

衛宮君のこと毛嫌いしてたみただけど夕飯食べてる間は仲良さ気だったしね。

絶対に付け込む隙はあるわ。これは確実。

なんてったって衛宮君が呼んだサーヴァントですもの。

「衛宮君、ちよつと待った！」

「なんだよ、セイバー待たせてるんだから早く行かないと」

「そのセイバーのことで話があるのよ」

聖杯戦争への参加を表明してさっさと外に出ようとする衛宮君を引き止める。

ちよつと不機嫌そうに私の背後にいる言峰を睨む。

ああ、確かに帰りたいわね、直ぐに。

でもなんの作戦も立てないうちに突っ込んで討ち取れるほど敵は甘くないわ。

「いい？衛宮君。」

あなたがサーヴァントだけ倒して聖杯戦争を勝ち抜くって言うのなら、

サーヴァントをパートナーにすることが絶対条件よ。それは理解出来るわよね？

まさかまだ理解出来てない。自分でサーヴァントの相手が出る倒せるとかぬるい事ぬかすわけないわよね。

だって私説明したわよね。ここまで連れてきて上げて言峰からも説明受けたわよね」

「あ、ああ」

ギリギリと指を衛宮君の鼻に押し付けて一息に告げると頷く衛宮君。

よろしい、ちゃんと理解出来てるみたいね。

全く、これまでの時間が全部無駄だったと言われたらどうしてやるうかと思っただわよ。

「で、扉の向こうにはあなたが呼んだハグレサーヴァントがいる」

「セイバーのことか？」

「そう、いくらあなたのことをマスターと認めてなくてもあなたとの繋がりはあるわ。これ確実」

「でも、令呪ってのないぞ？」

まだ力のない聖痕が刻まれた手をひらひらと振る衛宮君。

「そんなのセイバーが契約の完了をさせてないからでしょ。現界させた地点で最低限のラインは繋がってるわよ。」

あなたは彼のマスターよ。あなたがその令呪の兆しを放棄しない限りね」

「だけどセイバーは俺がマスターになることを了承しないだろ」

「じゃああなた諦めるの？ハグレサーヴァントなんて早々いないわよ、言っておくけど」

「だからって嫌がる相手に無理強いなんて出来るわけないだろ」

断固として言うことを効かない衛宮君に溜息が出る。

こいつ、分かっているようでぜんっぜん分かってないわね、自分が置かれてる状況を。

「……………ここで潰しておくのも……………ううん、この馬鹿は令呪がなくても首を突っ込む。」

その時に隣りにサーヴァントがいるのといないとじゃ断然いる方がいい。

そう、桜の為にも……………衛宮君には死んでもらっては困るのだ。

毎日じゃないけど、時々だけと衛宮君と一緒に登校する桜は……………

・・・凄く楽しそうだった。ちゃんと笑ってた。

それだけでいい。私がこの馬鹿に手を貸す理由なんてそれだけで。

「衛宮君、本当に嫌いな相手だったらここまで付き合っ
てないわよ」

「そ、それは・・・・・・・・そうかも
しれない」

「でしょ？衛宮君との契約を断るにはちゃんとした理由があるはず
よ」

「・・・・・・・・そういえば」

「なに？なんかあったの？！」

「召喚後すぐに『チェンジってあり？』って聞かれた・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

その光景を思い出したのか沈み込む衛宮君。

桜ごめん・・・・・・・・衛宮君にセイバーつけるの、無理かもしれない・・・・・・・・。

凜SIDE END

ギィィ、蝶番のなる音が耳に届く。

顔を上げるとリンとシロウが教会から出てくる姿が見えた。

シロウの顔は何やら強張っていたが、俺の姿を見ると何故か安堵したように見えた。

聖杯戦争に参加しようが、しなかるうが教会から出てくる。

こちらに向かって歩いてくるシロウが口を開くのを待つ。

「セイバー、俺は聖杯戦争に参加する。

でも、俺がやりたいことは………悔しいけど俺だけじゃ出来ないんだ。

都合がいい、なんてことは分かってる。でも頼む。マスターに当てがないんだったら俺に力を貸してくれないか」

本当に都合がいい。

自分で最初にマスターであることを放棄しておいて、今度は力を貸してくれ、なんて。

それを全て理解していながらも、今この瞬間俺に殺される可能性があることを理解していながらも、

シロウは頭を下げている。

「シロウ　ひとつだけ、いいか？」

「ああ」

「お前は……名も知らぬ他人の為に命を捨てること出来るか？」

これだけは、これだけは聞いておかなければならない。

頷くならそれまでだ。

アーチャーが提案した計画を実行するまでもなく見捨てる。

そんな馬鹿に付き合う暇など……一秒だって持つていないのだから。

「俺は……命を捨てるなんて事は出来ない　でも、命を懸けて助けたいと思う」

「？」

「無駄死になんてご免だ。俺は正義の味方を目指しているんだ。

誰も助けないままでなんて、死ねない」

「……………ああ、」

頷く。納得する。

俺に届いた「死ねない」という声。

生にしがみ付き、必死に死に逆らおうとするその声に、惹かれた。

死に真っ向から立ち向かうその姿に　俺は応えたのだ。

だから、

名も知らぬ他人の為に命を捨てる馬鹿が呼んだのかと憤った。裏切られた気さえした。

でも、これなら……………納得は出来なくとも、待つことは出来る。

「えっと……………セイバー？やっぱ、ダメか？」

「ん？ああ、ん……………ギリで合格って感じ」

「ギリで合格って……ことは俺のサーヴァントに」

「なってやるよ。ま、条件はあるが」

「じよ。条件？」

顔を輝かせたシロウだったが、早とちりはいけないぜ少年。

なんでもかんでも世界は等価交換。

きっちり価値を理解してなきゃ損する一方だが、生憎と損してやる気は更々ないのだ。

俺は俺のやりたいようにやる！

「お前は俺に何を返せる？」

「え？」

「報酬だよ、報酬。」

当たり前だろ？お前の為に手助けをする、ならばその労働に相応しい報酬が与えられてしかるべきだ」

「ちよ、ちよちよちよと待った！報酬は聖杯で決まってるでしょ？！それ以上は過剰払いよ！」

先程までシロウの後ろでこちらのやりとりを静かに見ていたリンが割りこんでくる。

知り合いが詐欺に引っかかるうところどころにタンマをかける弁護人のようだ。

まあ、詐欺でも過剰払いでもないところが違うが。

「リン、良く考えろよ？報酬が聖杯だけだったら俺は他の魔術師当たったほうが確実だろうが」

「……………ああ、そういうこと」

「うむ、だからシロウじゃなきゃいけないような理由兼報酬をくれ。

あ、ちなみにこの世界の平和とか平穏とか人助けとかそういうの興味ねえから」

現金でも良いぜ、と親指と人差し指で丸を作ってみせる。

それを見たリンが口元を歪ませて「アンタ、なんでそういうの知ってんのよ」といってるが知らん。

唸るシロウに再度訊ねる。

「……………三食昼寝付き」

「・・・お前さ、もうちょっと捻れよ」

俺が打算ありで引き受けた時の報酬を持ち出すなよ。

サーヴァントに睡眠は必要ないし、そもそも昼寝してる間に襲われたらお前どうすんだよ。

「よし、じゃあ毎食デザート付きで三時にはオヤツ！毎食一品セイバーのリクエストに応えるでどうだ！！」

「のったあああああ！！！！」

ガツシイイ！と固く手を握る。

「アーチャー、私セイバーに夢見てたわ」

「今頃分かったのかね」

何か赤い主従がぼやいてるが気にしない。

マスターが決まった所で、早速契約を結ばせてもらおうとするか。

シロウの左手を取り、額に押し付ける。ん、ちゃんと繋がってんな。

「我が身は汝の敵を切る剣。

我が身は汝の身を守る盾。

聖杯の寄るべに従い、仮初めの担い手として認めよう」

キン、と一瞬令呪が脈動する。契約が結ばれたのだ。

「つつう………!!」

短く呻くシロウ。マジマジと令呪が灯った左手を見る。

よしこれで魔力の供給も

あれ？

「なあシロウ、お前俺への魔力供給のラインカットしてる？」

「は？」

「魔力が来てない」

ん？いやこれは来てないんじゃないかと………、

神経を集中させて自分と自分以外、マスターとなったシロウとの繋がりを見つける。

「ラインが、細すぎて魔力が十分に供給されてない」

「……………遠坂、」

「ちょ、そんな目で見ないでよ！……………そうね、衛宮君召喚の時ちゃんと手順踏んだ？」

「手順？なんだそれ」

「ああ……………！そうだった！そういえば衛宮君って」

キョトンと首を傾げるシロウを見て何かに気付き、絶望したように頭を抑えるリン。

……………そういえばシロウの家でシロウの魔術師としての力量の話が出てたな。

確か強化くらいしか出来ないって……………強化って召喚と分野が同じなのか？この世界じゃ。

随分と魔術が劣化してんなあと思っていたが分野の区別まで曖昧になってるとは……………

「そうよね、強化しか出来ない上に魔術の師もない。

それじゃあちゃんとした召喚なんて出来ないわ……………たぶん力技で無理矢理だったんでしょ」

うむ、やはり強化と召喚は分野が全く違うらしいな。わかってたけど。

チラリとこちらを見てくるリン。

リンなら、リンに任せれば………たぶん大丈夫じゃなさそうだな。

「解決方法はあるのか？」

「魔術を習得するには時間がかかるわ。」

……才能の有無にもよるけど、聖杯戦争中にラインを繋ぐ魔術を衛宮君が習得するのは不可能ね」

「う………そりゃ俺には才能なんてないけど………」

「ま、他に魔力を補給する方法の探索と、魔力の無駄な消費を抑える。これくらいしか出来んだろ」

「やっぱりそれくらいかしら。何かいい案でも出してくれると助かったんだけど」

チラリとこちらをリンが見て、それに習って窺つような視線をシロウが向けてくる。

契約を解除して、リンの手を借りながら正しい手順を踏んで再契約という手もあるかもしれないが。

しかしサーヴァントとマスターの契約を断ち切る方法なんて分からないので却下。

・・・・・・・・しかし面倒だな・・・・・・・・。

「なあ」

「何かあるのか？」

「チェンジってあり？」

「「ない」」

「うち。」

第捌話：衛宮士郎式交渉術（応用編）（後書き）

以下ひっそり舞台の裏。

ア「そういえば凜、ひとつ聞きたいのだが」

凜「何よ」

ア「そもそも小僧を関わらせたくないのならば、契約を交わす前に問答無用で記憶の操作をしまえばよかったのではないか？セイバーの邪魔も入らなかつただろうしな」

凜「……………あ」

ア「……………ふう（またうつかりか）」

一応保留としてくれますがセイバーさんの企みは続行中です。

頑張れ士郎。

誤字脱字等ありましたらご連絡ください。

第玖話：戦場が続く道（前書き）

九話目になり、ようやくバーサーカー戦まで来ました。

長かった…………。

第玖話：戦場続く道

俺は魔術師のことにしましてはからっきりだからな。

優秀な魔術師であり、お人好し、かつ説明好きのリンの説明で、

シロウに一通り自分の未熟っぷりを再確認してもらった所でこの場を離れることにした。

「教会での用事は終わったんだろ、そろそろ帰らねえか？」

「……まあこんなところで夜明けを迎えたいっつーなら俺は帰らせてもらうが」

「迎えないわけないでしょ。」

「そうね……まあそっちの主従の関係の向上は衛宮君に頑張ってもらおうとして、」

「ここまで連れてきたのは私だし町に戻るまでは一緒に行きましょう」

「そっちの主従の関係の向上……そう聞いてシロウがこちらに視線を向けるが無視だ。」

「頑張れといわれたのはシロウだし、戦闘の連携なんて無理なので関係を良くする意味がない。」

適当ーに付き合っただけだよ。貰うもんは貰うが。

アーチャーは既に霊体化しているらしく、三人だけで坂を下りて行く。

万が一のことを考えていたが、杞憂に終わりそうだな。

公園の中を通る途中、あるものを見つけて足を止める。

行きに見つけて引っかけたのだが、「教会に行くまで我慢しろ」と言われていたのだ。

「リン、お前どれがいい？」

「は？別に私はいいわよ」

「ここまで付き合ったんだからありがたく貰っとけよ。ぶっちゃけ俺ボタン押したい」

「子供か！……じゃあ、ミルクティー……これ、押し間違えないでよね」

「了解了解。シロウは？」

「俺？んじゃコーヒー、これな。硬貨がどれかわかるか？」

「おう、聖杯からのバックアップで完璧だぜ」

シロウから預かった財布をひっくり返して（シロウが「あ」とか
いってたが知らん）、

自動販売機の明かりを頼りに人数分の缶ジュースの代金を選び抜い
て投入口に入れる。

リンはみるくいていー

シロウは「ーひー、と。」

代金を入れる前に指差していた箇所を押していけばガコンと目当て
のものが落ちてきた。

「これ中身どうなってんだろうなー……………」

「おい、まさか解体したいとか言わないだろうな」

「言わん言わん……………いつかシロウが俺専用の自販機を買っ
てくれるって期待しとく」

「なんでね」

自販機一台分の働きくらいするぜー？

どれくらいの価値があるかは分からんが、道端にコロコロしてるし
あんま高くないだろ。

いや別にシロウに買ってもらわなくてもこれくらいシロウの家に運べるけどな。

でも確かそれ聖杯から来た知識の犯罪に入ってる気がするんだが・・・ばれなきやいいか。

二人にそれぞれの缶ジュースを渡して「んじゃ行くか」と歩きだそうとするとシロウは首をかしげた。

まさか座ってじゃなきや飲めない！とかそついうお上品な人種か？リンなら良いがやめてくれ。

「セイバーは飲まないのか？」

「サーヴァントは寒さなんて感じないからな。必要ねえよ」

「でもさ、俺たちが飲んでるのにセイバーだけお預けつてのもないだろ。」

それくらいの余裕は有るし遠慮なんてするなよ。お前らしくない」

「そりゃどついう意味だ。つつかアーチャーは華麗にスルーなんだなお前」

「そついえばいたっけ」

おま・・・俺より仲悪いな。

アーチャーも何か言ってるらしくリンが呆れたような目で虚空を見ている。

「お前らに取っっちゃ便利な飲料販売機だろうがな、

この世界の飲み物しらん俺に取っっちゃロシアンルーレットなんだよ。いらん気を使うな」

「む、それはそうかもしれないけどさ……」

「わあったよ。じゃあ適当に選ぶか」

チャリン、ピ、ガコン

物分りが悪いというかお人好しここに極まれりな我がマスター様の顔を立って適当に選ぶ。

リンが選んだ白いヤツじゃなくて、同じパッケージの黄色いヤツを選んだ。

シロウ？ふ。

ロングコートのポケットの中突っ込んで歩き出せば二人が追いかけてくる。

途中飲もうとしない俺を見てか「プルタブの開け方わかんないなら

開けてあげるわよ?」と、

リンがおせっかいを焼いてくれようとしたが、まあ概ね何事もなく交差点までたどりついた。

「ここでお別れね。紅茶ごちそうさま、衛宮君。ついでにセイバー。これ以上一緒にいると何かと面倒だし、きっぱり分かれて明日から敵同士にならないと」

じゃあ放っておけばいいのに、と言うのは禁句だろうか。

勿論、んなことすればシロウは間違いなく夜を越せなかった。

例え今日を越せたとしても近い内に殺されていただろうな。

でも、人の死なんてものはそんなものだと思う。唐突に、前触れもなくやってくる。

だから別に知り合いの知り合い程度の間柄でしかないリンが世話を焼くことなどなかった。

ぜってえ何かあるよなーと思いつつも、出会って数時間の俺が二人の関係を知らないことは出来ない。

んなことを考えてると、シロウもリンの行動に不可解なものを覚えていたらしく黙っていたが、

何かを思いついたように頷いて。

「 ああ。遠坂、いいヤツなんだな」

とか言ってる。……………いやまあいいヤツだけだな。

んないヤツで片付けちゃう辺りシロウなんだろーね。リンも驚きつつも眉を寄せてる。

「は？何よ突然。おだてたって手は抜かないわよ」

「知ってる。けど出来れば敵同士にはなりたくない。俺、おまえみたいなのヤツは好きだ」

「な」

リンが言葉を失くしている。

これが所謂青春ってやつなのか？何か違う気がしないでもないけど
そう思っとく。

「と、とにかく、サーヴァントがやられたら迷わずさっきの教会に
逃げ込みなさいよ。」

そうすれば命だけは助かるんだから」

「ああ。気が引けるけど、一応聞いておく。

けどそんな事にはならないだろ。どう考えてもセイバーより俺の方が短命だ」

「ふっ」

分かってねえ・・・！

何故か知らんがリンはシロウを生かしたがつてる。だからここまで付き合つて、避難所まで案内した。

んで、参加を表明したシロウの安全を考えて俺との契約にも一役買った。

それなのにその本人がそれじゃあ・・・まあ、教えてやるほど親切じゃないので教えないが。

リンも溜息を吐いて少し考え込み、

チラリとこちらを見た　　いやあ、俺にはどうしようもないぞ？
このお人好し。

「いいわ、これ以上の忠告は本当に感情移入になっちゃうから言わない。

せいぜい気をつけなさい。

いくらセイバーが優れているからって、マスターである貴方がやられちゃったらそれまでなんだから」

それまで、つまり俺も擬似的でしかないが死ぬってことだな。

自分の命を省みようとしないうしろには一番分かりやすい警告だ・
・いや、はっきり言わないと分からないそう。

だが・・うむ、リンはちゃんと分かっている・・・
・本気でチェンジってねえかなあ・・・。

少しだけ苛立たしそうな足取りで背を向けて歩き出そうとしたリンの足が止まる。

「　　ねえ、お話は終わり？」

夜の街には相応しくない幼い声が響く。

少しだけ不機嫌そうなそれは、紛れもなく少女のものだ。

視線が声に吊られるように坂の上へと滑る。

街灯だけの暗闇が、いつの間にか去っていた雲を押しつけた月の光に照らされている。

伸びる影は長い。

家路に続くその道の先 そこには一番会いたくない異形が佇んでいた。

「バーサーカー」

リンが呆然と、呟く。

シロウはきつと言葉の意味を分かっているだろうが、あれの異常さ、異質さは感じ取れているはずだ。

俺と違って隠すことなどしない。出来ない。

一度命じられれば理性などなく破壊と死を撒き散らすだけの暴風となるだろう。

そんな天災に似た人災が目の前に立っているのだ。

（ 人災なら防ぐ手があるのが常道だが、この人員で大丈夫なのかね。）

溜息を吐きつつ、あゝ運が悪い。運が悪い。と常日頃思っていることを心の中で呟く。

「こんばんはお兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

こちらの空気などお構いなしに微笑みながら少女は言った
シ
ロウに。

「シロウ、お前ってな」

「?」

「ほんつとづに・・・サーヴァントホイホイだよな・・・!」

「なんでさ!?!」

「ちょっと!気持ちは分かるけどそういう状況じゃないでしょ!」

あ、やっぱりリンも思ってたんだ。

この敵サーヴァントとのエンカウント率の高さは異常だと思う。

今夜だけで半数以上のサーヴァントと顔合わせてるぞ。狙ってもないのに。

「サーヴァントホイホイ?」

こちらの会話に顎に人差し指を当てて不思議そうに首を傾げている
白い少女。

なにそれ？と幼い表情がこちらに問い掛けてくる。

その少女から見えないように素早くリンに合図を出す。

シロウ？んなもん役に立たん。

「今日だけで既にランサーとアーチャーに会ってる。

んで、今現在お宅のバーサーカーと遭遇中。俺も入れれば計4体の
サーヴァントだ」

「うわぁお兄ちゃんったらもてまてだね！」

嬉しそうにはしゃぐ少女。

うむ、俺の運の悪さもここに極まれり、って感じた。

「でも良かったあ」

至極嬉しそうに、安堵したような口調と無邪気な笑顔で告げる。

「今ここに居るってことは間に合ったってことだもの。」

お兄ちゃんを殺すのは 私なんだから」

「っ!！」

緩んでいた空気が一瞬で凍る。

外見で騙されてはいけない。口調で誤魔化されてはいけない。

無邪気な笑みで細められていた大きな赤い瞳が笑みの形を持ったまま残酷に光る。

そのまま戦闘に雪崩れ込むか と思いきや、少女がはっと思いついたように目を丸くする。

「そういえば自己紹介がまだだったわね。」

自分が殺される相手が誰だかわかんないなんて可哀想だもの」

私ったらちよつと焦っちゃった、と急いた自分を恥ずかしそうに嗜める姿は子供そのもの。

少女は行儀良くスカートの裾を持ち上げて、丁寧に完璧な仕種で綺麗なお辞儀をする。

「はじめまして、リン。私はイリヤ。」

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン」

その名前にどうやら聞き覚えがあるらしく、リンの体が揺れる。

「……おいおい、まさかお前もサーヴァントホイホイの仲間入りとか言わないよな。」

リンの反応を見て何が良かったのか分からないが、少女は嬉しそうに笑みを零し、

「見たところリンのサーヴァントも準備が整ったみたいだし」

「っ！？」

気付かれてたか。

時間を稼いでアーチャーの弓兵に相応しい戦い方が出来る位置に移動させたかった。

リンは俺の合図をキチンと理解して指示してくれたらしいが……
……まさかこうも容易く見破られるとは。

俺謀とか策略とかそういうのでんでダメなんだよなあ。

まったく、自分の不運さがイヤになる。

クスクスと楽しそうに笑って、少女はそのままの表情で、

「 じゃあ殺すね。やっちゃんえ、バーサーカー」

背後に控えていた異形に、コロセと命じた。

第玖話：戦場が続く道（後書き）

ようやく長い一日の目処が立ちそうです。

いや、戦闘シーンでたぶんまた長々としそうですけどね。

誤字脱字などがありましたら、ご連絡ください。

第拾話：最優対最凶（前書き）

十話目です！二桁！一日目なのに！

真面目に戦闘しています。

そんな気軽に遊べるような相手じゃないですよね、彼。

第拾話：最優対最凶

巨体が飛ぶ。

バーサーカーが坂の上からここまで、何十メートルという距離を一息で落下してくる。

夜の闇を裂くように、何条もの光の弾丸が落下してくるバーサーカーをつるべ打ちにする。

八連。

矢と言うにはあまりにも膨大な威力が込められたそれが正確無比な精度を保って

宙を高速で、重力に従ったままの軌道で落下する巨体を射抜く。

「――！！！！」

ガギギギギンッ！！！！！！

「うそ、効いていない　　！？」

揺らめきもしない巨体を見てリンが驚愕の声を上げる。

俺は舌打ちをし、呪詛を吐く。

見ているか分からないがここには居ないアーチャーに『役立たず！』
と言ってやる。

バーサーカーの落下地点へと疾走しながら、

保険として用意していたロングコートに隠していた武器を取り出した。

士郎SIDE

呆然とした。

思わず叫びたくなった。飛び出したくなった。

バーサーカーへの恐怖や、暴虐なまでに突きつけられた殺気なんて吹っ飛んだ。

剣を持たないセイバー

分かっていた。ランサーと戦っていた時から。

あの時だってセイバーは鉄パイプなんてものでランサーと渡り合っていた。

ただあの時は危急で、何の用意も出来ないから　　って今もそうだった！

高速で落下してくる巨体。

それに迎え撃とうと疾風となって駆け出すセイバーの手には木刀。

何の冗談かと思った。

人の事を自分の命を省みない、命を捨ててる馬鹿だと言っていたが、セイバーは俺以上の馬鹿だ。

確かに力を貸してくれと言った。剣となり、盾となると言ってくれた。

だけど、そう、だけど！

俺の代わりに命を捨ててくれなんて言っていない

！！！！

ガギイ!!!

「は、？」

思わず駆け出そうとしていた足が止まる。

誰もが無謀だと思った迎撃。

誰もが想像した未来。

それは全て　　バーサーカーの必殺の一撃を木刀で受け止めたセイバーによって覆された。

士郎SIDE　END

落下と共に繰り出された俺を真っ二つにしかねない大剣を受け止める。

夜に停滞していた空気が震える。

重圧に耐え切れなくてコンクリートが抉れる。

俺の宝具”殺戮に武器は選ばず”によりこの木刀はCランク相当の宝具となっているが、

所詮これは保険でしかない。

ランサーやアーチャー程度の攻撃なら大丈夫だった。

しかしバーサーカーの攻撃はヤバイ。

俺が全力を持ってその攻撃を防ぎ、押し返そうとすれば この
唯一の武器は壊れる。

だからアーチャーの攻撃で僅かに気を逸らせてる内に、

行きにここを通った時に見当をつけておいた公共物を引っっこ抜いて
使おうと思ってたのに、

(アーチャーの役立たず！もつと気合入れて撃て！！)

リンが別れる時に「明日から敵同士」なんて言わなかったら見捨て
てやってた。

それが当然だ。

戦いが混迷を極めた際に死ぬのは防ぐ方法を何も持たないシロウだ。令呪を三回使い切るまでではあるが、それまでは守ってやるつもりだ。

守るのに一番手っ取り早いのは戦場からの離脱。

魔力放出状態であれば　　確実にシロウをここから離脱させてやれる。

なのに………あぁもういい！

頭を掻き篦りたいが、そんなことを考えている間も暴風じみた攻撃は続いている。

「――！！！！」

「ふっん　　！！」

ギーン！ガッ！

旋風のような剣の切っ先を見切り、真正面から受けて力を相殺させる。

避ける………なんてことは出来ない。

俺とバーサーカーのやりとりを呆然と見ているシロウが死ぬ。

ただの素人と変わらないシロウがあの大剣が抉ったコンクリートの欠片を受けたら、確実だな。

(それに　　ここには殺してはいけないものが多すぎる)

再度心の中で不運を呪い、舌打ちをして気合を入れる。

このままじゃ消耗する一方　　場所を変える。それしかない。

士郎SIDE

大剣と木刀。

無謀としか呼べない武器のぶつかり合いが一体何十回続いただろう。

視界で捉えることなど出来ない。

暴風と疾風。

風を伴って技も何もなく無造作に力任せに振るわれる暴風にしか見えないその大剣を、

完璧に見切って最小限の接触で弾き、流し、受け止める木刀。

有りえない。

常識では考えられない光景と剣戟が目の前にあった。

「
」

遠坂も、バーサーカーのマスターである少女も驚愕し、

剣技を持って巨人の猛攻を防ぎ切るセイバーの姿に見惚れていた。

(これが、サーヴァント……そして、セイバークラスの英
霊)

しかしそんなやりとりが続くはずもない それは打ち合っているセイバーも理解しているだろう。

弾き返す音だけだった剣戟の中に、不穏な音が混ざり始めている。

横薙ぎ振るわれた大剣を見切り、初めて避けたその時 、

魔力放出で輝いていたセイバーの赤い瞳に殺意が灯る。

不利な状況に刻一刻と追い詰められていつているのに唇が笑みに歪む。

停滞していた戦場が凍りつく。

「は、ああああああつ！！！！！！！」

「、――！！！！！！」

力任せに大きく振るわれた大剣という死地を潜り抜けたのは疾風。

返る刃さえもそれには届かず、愉悦すら籠った気合と共に巨体に木刀を振りぬいた　　！

ビギ、イ！！！！

セイバーの渾身の一撃に耐え切れず木刀がついに鈍い音を立てて碎けた。

「うそつ　　！！」

「アーチャー！援護！！」

少女が驚愕するのも当然だ。

ただの木刀。

そのただの木刀が、あのアーチャーの機関銃めいた矢の襲撃すら物ともしなかった巨体が、

傾いただけでも驚きなのに　　振るわれた木刀が描いたままに鉛色の体に傷をつけていたのだから。

そこに向けて放たれるのは遠坂の声に应えて落ちてくる銀光。

大気を穿ちながら飛んで来たアーチャーの矢は戦車の砲撃に匹敵する力を持って、

セイバーが超えたバーサーカーに刻まれた一筋の傷を撃った。

「……………!!!」

しかし、そう簡単に倒されないからこそ英霊と呼ばれるに至った者。セイバーの強力な一撃を受け、アーチャーの追撃を受け、倒れながらも自らの敵に武器を振るう！

「……………!!!」

暴れ出しそうになる殺気を抑えていたのか、一瞬だけ出来た隙を付かれセイバーが吹き飛ばす。

「セイバー!!!」

防ぐ手なんてなかった。

唯一攻撃を防ぐ手立てだった木刀は粉々になってしまった。

巨体が地に着いた地響きと、

セイバーがコンクリートの上に受身も取れぬまま落下したのは同時だった。

「バーサーカー! 追いなさい!!!」

「アーチャー、続けて!」

また、互いのサーヴァントに追撃を促すマスターの声も同時だった。

黒い巨人の傷は既に塞がっている。

少女に命じられるままに坂の入り口でよろよろと立ち上がったセイバーを追撃する。

追撃を阻止しようと奔るいくつもの銀光。

目的地に向かう視線を逸らそうとしてか、眉間に放たれたそれは尽く巨人の身体に敗れ去った。

「……………!!!」

バーサーカーはその巨体からは考え付かないスピードでセイバーに辿り着く。

同時に振るわれた大剣を見切り、セイバーは籠手で受け止める。

力を殺すことも出来ず、闇に吹き飛ぶ白。

凄まじい音を立てながら坂道を逸れ、外人墓地のあった空き地に突っ込む。

「……………なんてめちゃくちゃ……………」

それはどちらに対して呟かれた言葉か。

アーチャーの追撃を物ともせず、セイバーの渾身の一撃も致命傷に至らなかつたバーサーカーの異常さか。

それともそのバーサーカーに傷を負わせ、常に必殺の一撃を籠手のみで防ごうとしたセイバーの異常さか。

「……………いいわ、バーサーカー下がって。」

つまらない事は初めに済まそうとしたんだけど……………そうね、セイバーの健闘を讃えてあげる」

「ここまでやって、逃げる気？」

「見逃してあげるのよ。お兄ちゃんのセイバーには興味が湧いたの。」

リンはおまけで見逃してあげるのよ、感謝してよね　　次は殺すから」

追いかけてようとしていた巨体が止まり、マスターの言葉を聞いてその姿を消した。

白い少女は笑いながら、

「それじゃあバイバイ。また遊ぼうね、お兄ちゃん」

ひらひらと小さな手を振って別れを告げると夜の街へと姿を消した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

呆然と、突然の災厄が去った方向を見送った。

少女を追いかけることもせず、この場に留まっているということとは、

やはり遠坂も分かっているのだろう　　これ以上の闘いが無謀で
しかないことが。

セイバーがあの子の意表をついてくれた・・・・・・・・だから見逃
してもらえたとに過ぎない。

「って、そうだ！セイバー！！」

「追いかけるわよ、衛宮君！」

遠坂に言われるまでもない。

セイバーの存在を思い出した途端に俺は走り出していた。

士郎SIDE END

第拾話：最優対最凶（後書き）

十話目を書いて思ったこと。

真面目に書いてれば早く終わるんじゃない。

うん、合間合間に入れてるお遊びが原因だって気付いてた。

誤字脱字などありましたら、[ご連絡](#)下さい。

第拾壹話：災厄の過ぎた後に（前書き）

十一話目です。

長い一日がようやくく．．．．．終わりました。

第拾壹話：災厄の過ぎた後に

「つつつてえ〜〜〜・・・」

パラパラと落ちてくる石粉を頭を振って振り払う。

腕は 勿論ついでる。箆手は怪しい音を立てたが、魔力放出が間に合った。

殺人衝動を抑えていても耐久はA。下手な攻撃など通用しない。

問題は 腹に受けた一撃だ。

「普通あそこで攻撃してくるか？」

ボロボロの武器ではあったが、俺のあそこで出来る最大の一撃だった。

あそこで討ち取れるとは思わなかったが、武器という盾を調達する隙は作れると思った。

まさかアーチャーの追撃を受けて尚、倒れながら攻撃してくるとは思わなかった・・・。

油断　　、そう言ってしまうばそれだけなのだが、本当に予想外だった。

腹を見て　　やはり見なかったことにして上辺だけ修復し、鎧も修復する。

こんなものシロウに見せでもしたら・・・・・・おー人事、おー人事。

なんか聖杯から変な知識が・・・・・・まあとにかくだ。

あの巨体であるスピードって本当に反則だと思うわけだ。

アレ、間違いなくこの聖杯戦争で最凶に相応しいカードだわ。

粉々に為った墓石の中で倒れたままそんなことを考える。

もう全てうっちゃってしまって、聖杯戦争という嵐が過ぎ去るまでシロウの料理を堪能したい。

別に聖杯なんてぶっちゃけいらねえし。

シロウが何かやりたいって言ってたけど、聖杯に願う何かを持つほど器用じゃなさそうだ。

本人も「聖杯が必要」とは一言も言ってなかったしな。

そうだな……最後の相手がリンだったら譲ってやってもいいな。

あの赤い弓兵は絶対ボコるが。

そんな些細な未来を叶える為にもここで打ち碎かれるわけには行かないので起き上がる。

周りは墓石ばかり　武器にはなるけどあのバーサーカーを倒すには難しい。

あの異常さ……俺みたいにただ耐久力が馬鹿みたいにあるってわけじゃない。

本気を出してつけた傷も直ぐに治っていたしな　上辺だけなく、完璧に。

俺が戦っている間に逃げてくれればいいんだが……
シロウの性格だと難しいな。

リンが現状を理解して俺の意思を察して動いてくれると有りがたいのだが。

「大体リンもアーチャーもややこしいんだよ」

敵なら見捨てることも出来た。

味方なら宝具を使ってバーサーカーを殺すことも出来た。

でも現状は　　、一日限定の味方。

なんじゃそりゃー！！！！って叫んでやりたいものである。

まさか今日の友が明日の敵状態をこんな間が悪い時に思い知らされるとは思わなかった……………。

仮に敵であっても……シロウなら令呪を使ってでもリンを守れって言いそうだが。

あーあ、貴重な令呪使用の機会まで逃しちまって本当散々ですよ。

「ま、それだけ守りたいってんなら守ってやるのがサーヴァントってね」

幸いとこの身は守ることに長けている　　守った人間はほとんど死んだけど。

とにかくアーチャーにリンたちに逃げるように報告して貰えるよう伝えねえと。

残念ながら敵は今までのようにお遊びを含んだ戦闘で済むような相

手ではない。

ヒ、イン　　！

確実にトドメを刺そうと追ってくるであろう巨人を迎え撃つ為、

気合を入れて自分がついさっき転がってきた跡を見やると……
・一条の矢が飛んで来た。

紙が括りつけられたそれを空中で掴み、開く。

『敵は去った』

「は？」

信じられない。

明らかにこちらの方が有利だったろうに　　俺が吹っ飛ばされて
やった後何かあったか？

考えてみるが、あの少女が俺たちを見逃す理由が思いつかない。

アーチャーが切り札でも放ったのか？

いくら素人といえど一日だけの味方でしかない、敵であるシロウの

前で？

それだったらシロウが死んでいる可能性もなくはないが、ちゃんとラインは繋がっている。

ならば敵を生かしておいて敵に披露したと？それこそないだろ。

「セイバー！！」

「お、丁度いいところに来たな。アーチャーから敵が撤退したって聞いたんだがどういうことだ？」

必死な顔をして駆け寄ってきたシロウたちに軽く手を振り、アーチャーからの手紙を見せる。

すると凄く複雑そうな顔をしている……………なんなんだ？

「……………見逃してもらったのよ」

「はぁ？なんでまた」

「セイバーの健闘を讃えて、だとさ」

「アホか！んな理由で見逃してたら戦争の意味がねえわ！」

なんかの競技とも思ってたのかあのお子様は！

「……まあ、本心なんてわざわざ教えるわけねえか」

「それよりセイバー！お前腕大丈夫か？！いや、どこか怪我とか・
」

「ありやわざとだし、腕もちゃんとくっ付いてる。

打ち身なんて直ぐ治るっっていうかその心配ははっきり言っつて侮辱だぞ、シロウ」

「え、あ……悪い。でもセイバーも悪いんだぞ。木刀なんかで立ち向かうから」

「そうそれよ！なんでアーチャーの矢が通じなくてあんたの木刀が通じるのよ！！」

納得いかない！と噛み付いてくるリン。

シロウもそれもそうだとこちらを見てくるが、溜息を吐く。

「明日から敵なんだろ。そんなん教えてやれるほど余裕なんてねえ
」

「っ」

「とにかくいつまでもこんな所にいる訳にもいかねえだろ。帰るぞ」

「そうね、丁度近くに教会があるからここらへんの修復とかは綺礼にまかせちゃいましょ。」

アイツの仕事だし」

立ち上がり、再度教会に向かおうと足を動かそうとした時
背
後で何かが倒れる音がした。

振り返るとそこには、何故か地に伏せているシロウがいた。

「シロウ死んだか？」

「そこは心配するところじゃないの？」

「いやあ、死んだらそれまでだろ」

「そりゃそうだけど……まあいいわ。」

ただの魔力切れね、普通だったらとつくの昔に倒れてたんだし、しようがないっか」

「召喚にも魔力が必要だったし、今日はいろんなことが起きたからな」

まさに青天の霹靂。

ただ当たり前の日常を過ごしてただけなのにこんな物騒な戦争に巻き込まれるなんて、

シロウの運も相当悪いのかもしれない。

俺の幸運値も最高に最悪なので、もしかしたらそういう繋がりで召喚されたのかもしれないな。

悪運コンビ………生き残れなそうだな、シロウが。俺は生き残れるが。

「きつとアンタの無事な姿見て一気に気が抜けたんでしょうね」

「俺？んなに頼りないか？」

「木刀で立ち向かうなんて正気の沙汰じゃないって事だけはいっておくわ」

「銃刀法違反とかそういうのがあからな………ほんっ気で戦争やるには向いてねえよこの国」

こんなに簡単に壊れそうな町の中で、戦争も戦いも知らない平穩に浸かった人間。

そこにさきほどのバーサーカーの様な奴らが七人も暴れるんだから溜まったもんじゃないだろう。

………まあ、バーサーカーは言いすぎか。

だが、一人ひとりこの町くらい消滅させるくらいのもは持つてゐるはず。

ま、そんなこと考えてたつてしょうがないし、既に始まつちまつてるんだから意味も無い。

これからどうするかつてのが問題だ。

「さつさと帰るか」

「そうね」

「……………」

「……………セイバー、衛宮君をまさか私に運ばせようとか言わないわよね」

「さっきの戦いでほなんの消耗もしなかつた奴が、

まさか最後の最後まで最大の功労者に面倒見させようとしなないよな」

バチバチツと火花が散つた気がするが、俺の言葉を聞いてリンが二の句を告げなくなる。

一時ではあるが協力関係を結んでいた割には割に合つてないと思つていたらしい。

バーサーカーの攻撃を受けた方の手を振ると、がっくりとリンが肩を落としてうな垂れた。

フツ、勝った……………。

「……………アーチャー、お願い」

「セイバー貴様は早急に地獄に落ちた方がいい」

「ハッ、残念ながら英霊だから地獄行きは発行されねえんだ」

「っていつかアンタとだけ衛宮君のこと気に食わないのよ」

「別に運ぶ必要のないのに運びたいと思わないだけだが」

「……………そう」

別に俺が運んでやっても構わないのだが、

散々人を馬鹿にしてくれたアーチャーへの仕返しをする機会をわざわざ逃す気はない。

んで、アーチャーが嫌がることって言ったらシロウの手助けとかそういう事柄。

俺は楽できて、アーチャーへの鬱憤も晴らせる、と。正に一石二鳥。

流石に女の子であるリンに運ばせるような鬼ではないとここに記しておく。

「それじゃあ、私たちはもう帰るわ。他にもやらなきゃならない」とあるし」

玄関先でシロウをアーチャーから投げ渡され、

アーチャーがそのことに関してリンの怒りに触れひと悶着あった後、気付いたようにそんなことをいって俺たちの一日だけの協力関係は終わった。

「あ、ちゃんと衛宮君にはサーヴァントの説明をすること。

貴方が木刀持ってバーサーカーに立ち向かった時飛び出そうとしてたわよ、ソイツ」

振り返り様、そんな頭の痛くなるようなことを言い残して。

「説明、ねえ」

シロウを肩に担ぎ上げ、居間に向かいながらボンヤリと考える。

説明………でもいいのだが、その説明が意味のあるものかないものか。

俺は後者になる、と断言しておく。

サーヴァントの身を心配してあんな災害じみた人災に立ち向かう方が如何にかしている。

勇敢と無謀を一緒にしてはいけない。

この馬鹿の行動は無謀だ。そして呆れるほどに無意味だ。

「何度も言ってるっつもの」

タタミの上に降ろして、枕の代わりに座布団を丸めて頭の下に置く。

看病完了。いや、この屋敷の構造理解してないもん。

引き出しあければ掛ける物くらい……。

そこまで考えて、ふと疑問を覚えた。

………そういえば、なんでアーチャー布団の位置とか分かったんだ？

凄い今更で申し訳ないんだが。

マスターになつたばかりのシロウと出会ったのは今日が始めてのはず。

家屋の構造なんてどこも同じもんなのか？

でもこれだけ広くて他人の家だったら普通………わかんないよな。

んー？と首を傾げると暢気に気を失っているシロウの顔。

「ま、なるようになれ、だな」

取りあえずこの命を捨てないとか言っといてあっさりと投げ打ったマスターが起きたら、

きっちりかつちり問い詰めて………絶対俺を侮っているのだから関係をはっきりさせてやるぞ。

第拾壹話：災厄の過ぎた後に（後書き）

以下ちよつと舞台裏

セ「そういえばアーチャー、お前リンが命令するまで追撃しなかったよな」

ア「なに、役立たずは邪魔しないよう引っ込んでいようと思っただけさ」

セ「・・・・・・・・過ぎたことをネチネチと・・・・・・・・小姑かお前は」

ア「邪魔をしたからと私の責任にされては困るからな」

セ「俺が責任転嫁するようなヤツだとしても？」

ア「お茶菓子紛失の責を凜に押し付けようとしたのは誰だったかね」

セ・ア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

凜「あんたら・・・・・・・・・・本当にいい加減にきなさいよ？（イラッ）」

そんな帰り道での微笑ましい会話。

一日が終わっただけなのに既にやり遂げた感が・・・。

投稿スピードが若干落ちるかもしれません。

流石に一ヶ月以上放置・・・・・・・・にはならないと思います。

波に乗れたらまた連日投稿に戻るかもしれません。

誤字脱字などありましたら、ご連絡ください。

第拾弐話：従者からの忠告（前書き）

十二話です。

何度も書き直したので内容が不安ではありますが、
説明文が2話続くという暴挙はせずに済みました。
楽しんでいただければ幸いです。

第拾弐話：従者からの忠告

「そういえばシロウ、聞きたいことがあるんだが」

「ん？何だよ」

シロウの目が覚めた後、とりあえず腹が減っていたので飯を食べることにした。

問い詰めるのは後だ。朝食の時間が過ぎる。

んで、時間も無いしとぱぱっと手軽に作られた今日の朝食は、

ソバの上に山菜を乗せ、その上に半熟タマゴをオマケしてもらった山菜ソバだ。

付け合せにほうれん草の胡麻和え、俺のリクエストのだし巻き卵。

ズルズルとソバを啜りながら、シロウが寝ている間に頭の中で整理していた疑問をぶつける。

「この家ってお前以外の人間が住んできたことってあんのか？」

「俺以外？んー、爺さんが数年前まで一緒だったけどその前は知らないな。なんでだ」

「ん、ちよつと気になったことがあつてな。

その爺さんってどんなヤツだったんだ？若い頃ガン黒マッチョだったか？」

「なあセイバー、俺の家で一体何見たんだ？激しく気になるんだけど」

「気にするな。何も見ていない」

「本当か？……………ん、まあ外見は別に普通だったな。

黒髪でちよつと猫背で、身長はセイバーより低かったかな？」

全く正反対だな。

アイツは猫背なんて無縁なやつだ。まっすぐに伸びた背中と崩れない正しい姿勢を思い出す。

シロウの家の造りや物の配置を知っているのならシロウが知ってる奴が、

一緒に暮らした経験があるヤツかと思つたんだが。

……………思えばあの仲の悪さじゃああの弓兵とシロウの同居生活が送れるはずねえわな。

真名と弱点が分かるかもしれんと期待したが……………やっぱ上

手く行かないよな。

敵のリサーチをそこらへんにして、ソバに集中する。

うむ、上手い。これだけでも現界した甲斐があるといつものである。

汁を最後まで飲み干して、ゴトリと丼を置く。

昨日のシロウたちを見習って、「ごちそうさま」といえば「お粗末様」と返される。

「デザートは白玉だんごだ」

「おお」

「白玉には味つけてないから上につける黒い、餡子っていうのと食べた方が美味しいぞ」

「了解」

シロウの忠告に従って、白いつるつるとした団子と餡子をスプーンに掬う。

一口食べて、口の中に広がる素朴な甘みに両手を握り締めてじっくりと味わう。

昨日のイチゴ大福も餡子が入ってたけど、この餡子って果物の甘さ

とは全然違っただよな。

「セイバーは餡子とか大丈夫なんだな」

「ん、甘すぎるかもしれないが俺は気になんないな」

「餡子がダメなヤツとかいるからな。喜んでもらえて嬉しいよ」

甘いものは果物が主流だったので、この癖のある甘さは初めてだが・
・うむ、良い。

白玉のもちもちとした食感もけっこういいな。昨日の大福の食感の方が楽しかったけど。

二人でデザートを食べ終わり、

傍に置かれていた湯飲みに入っていたお茶を飲み干し、一息つく。

「お替りいるか？」

「お、頼む」

シロウの方へ湯飲みを寄せれば直ぐに注がれるお茶。

俺の湯飲みにお茶を注ぎ終わると、空になった器を持って台所にシロウは引っ込んだ。

俺はリモコンを弄くって、テレビをつけてニュースにチャンネルを変えて眺める。

平和だ。

うむ、俺たちは聖杯なんて必要ないから是非とも欲しい奴らだけでドンパチやって欲しい。

(そんな思い通りに行かないのはわかってんだがな)

少なくともランサーとバーサーカーには狙われているはずだ。

アーチャーは・・・別にこちらから仕掛けに行かなければ最後まで来ない気がする。

来たとしても狙われるのは俺だけだろうな。

リンはシロウを生かしたがっている。それは昨日の内に散々理解したことだ。

その理由が分からないところが不安ではあるが・・・まあ大丈夫だろ。

士郎SIDE

「さて、シロウ」

いつものまに茶の入れ方を覚えたのか、

とうに飲み干しているはずの湯のみの中のお茶を一口啜り一息ついで、

「ん？ちよつと薄いか」と批評をしてからセイバーは語り出した。

ちなみに俺の姿勢は相変わらず座りかけた 中腰状態である。

何故この体勢なのかといえば、目の前のセイバーさんが止めたからだ。

「昨日の件で弁解があるのならば聞くが？」

「昨日の件？」

昨日といえばセイバーと契約をした、がそれはセイバーも了承してくれたことだ。

その後バーサーカーとの一戦やらなにやら………っ

「セイバーお前やっぱり怪我してたのか?!」

「俺は昨日の問答を繰り返すつもりはないぞ。

……その様子じゃ、本気で気付いてないようだから言っておくが、俺がバーサーカーと立ち会おうとした時飛び出そうとしたんだってな?」

「そ、それはお前があんな木刀で立ち向かおうとしたからっ
!」

俺が声を上げると、セイバーは深く溜息を吐いた。

眉間には皺が寄っている。

「いいか、俺は意味の無い説明は嫌いだ。

説明をして欲しかったら理解しろ。そして感情で動くな」

「んなっ……!」

その物言いに、頭の中が真っ赤になった。

言葉を失う俺をじっと赤い瞳が見つめる。

こっちが冷静さを欠いているというのに、冷たい温度を保つその色が、

どうしようもなく気に食わなかった。

「……………ら……………か……………い」

「あん？」

「だったら、説明なんかしなくていい！って言ったんだ」

説明を聞いたならそれに従え、なんて。

だったら説明なんか聞かなくていい。自分でどうにかする。

……………具体的な案はないけど……………どうにかする！セイバーには頼らない！

「お前はガキか」

「なんだと?!」

「なあシロウ、お前は自分ひとりじゃ無理だから俺に協力を求めたんじゃないのか？」

「そ、それは・・・そうだけど」

「だったら、少しは余裕を持て。サーヴァントの戦いに首を突っ込むな。」

折角俺が手を貸してやってんのにお前が死んじゃ意味ねえだろ」

言うておくが、無意味に突っ込んで死んだ馬鹿の弔いなんざしてやんねえぞ。」と

腕を組んで嫌そうに表情を歪めるセイバー。

「誰もお前の意思を継いじゃくれねえよ。だからお前がやれ」

「ああ、分かった」

これは俺が決めたことだ。

逃げないと決めた。十年前の出来事を二度と起さないと決めた。

セイバーとこの聖杯戦争を乗り切ると決めただ。

ならば、こんなところで戸惑っている暇などあるはずもない

！

「セイバー、これからよろしくな」

「おう」

差し出した手をセイバーが握る。

俺よりも一回り以上大きい、籠手の上からグローブをつけたままの手。

暖かさなんて微塵も感じない。でもこの手が離されない限り、俺は戦っていける。

昨日の契約よりも、これこそが確かな契約のように思えた。

士郎SIDE END

聖杯戦争への参加の理由を聞いたとき、シロウは言った。

「聖杯なんかいらない」と。

曰く、この戦争に参加したのは聖杯戦争という椅子取りゲームに勝ち抜くためではなく、

勝ち抜く為の方法に、聖杯戦争とは無関係な人に危害を加えるやつを止める為、らしい。

若者がそれでいいのかね、とちょっと年寄りじみたことを思ってみる。

別に俺だって聖杯が特別欲しいと言う訳ではない。勝てたら貰う。当然の権利と報酬だ。

でもさ、万能の窯とか言われてるんだぜ？ちょっと位なにかあってもいいんじゃないかと俺は思う。

世界征服とか恒久平和とか人類滅亡とか地球爆発しろとかそういう大きいもんじゃなくてもさ、

おみくじで大吉当てたいとか美味しい料理を出す店見つけたいとか明日晴れたら良いなくらいの。

折角命を懸けて参加しているんだから、もし聖杯を手に入れたら、位考えてもいいと思う。

他人の為に命かけて戦うのなら、何かしら報酬を求めないと変なのだ。

まあ、求めようにも報酬は聖杯って決まってるんだが。うむ、破格だと思う。

しかしシロウはそれすらもいらないと突っぱねている。

(その生き方は……歪だ)

死者でしかない俺には、道具でしかなかった俺には何も言えない。言う権利すらない。

こつという馬鹿は結構しぶといから、ちゃんと傍で呼び戻してやれる存在が必要なのだ。

いや、呼ぶだけじゃ弱いな。

突き進もうとするだろうから、こつ首に縄括りつけて連れ戻すくらの気概があると尚いい。

……まあ、俺には関係のないことだけれども。

「取りあえず地理を把握しないことにはやってられん。町を回りたいんだ、が……」

コール音が耳に届く。

確か、あれだ。電話。

「ちょっと出てくる」

「居留守使つちまえ」

「んなこと出来るか・・・いっつ・・・」

正に天の助け、といわんばかりに安堵の息をついて立ち上がるシロウ。

しかし30分以上無理な体勢で居た為、足はがくがく腕も結構辛そうだ。ざまあ。

これでシロウも自分のサーヴァントを侮ったら恐ろしいと実感したはずである。

決して途中でシロウの体勢のことを忘れていたワケではない。

（こいつ、なんでこんな体勢で固まってんだ？）と思ったことはない。

俺としては電話なんざ放って置いて、早く町に繰り出したいのである。

戦場のように敵さんの武器がゴロゴロしてる訳でもないこの時代で、俺の戦い方はかなり不利だと思う。なんせ相手の武器もほぼ一品物だしな。

素手で立ち向かうのは些か難しい奴らばかりが揃っている。

剣を持たない剣士って本当に致命的だと思う　　ってそりゃ本当に剣士か？

………とにかく、物の配置を確認して、

いざどんな時にでも武器に出来るものを把握しておかねばならない。

あと自分に都合のいいフィールドの確保と、そのルートの確認な。

「セイバー、ちょっと俺出掛けるから留守番しててくれ」

………こいつ、聖杯戦争は日曜が定休日でも思っ
んのか？

第拾弐話：従者からの忠告（後書き）

なにかいい展開が思いついたら書き直す………かもしれない
ん。

でも確実にこのまま進められる気がします。

誤字脱字などありましたら、ご連絡ください。

第拾参話・弓兵の冬木観察記（前書き）

十三話目です。

ほのぼの（？）です。アーチャー視点書いてなかったな、と。

第拾参話：弓兵の冬木觀察記

アーチャーSIDE

日曜日、買い物客で賑わう商店街。

ものをいっぱい詰めた買い物袋を自転車に乗せて運ぶ主婦、

買い物籠片手に歩く主婦を陽気な声で呼び止める店の店員、

「
で、君たちは何をしているのだね？」

キョロキョロと物珍しそうに商店街を見回す長身の男と、冬の少女。

奇しくもその髪と瞳の色は同じで、傍からみれば歳の離れた兄弟のようだ。

しかし実際は聖杯戦争で命を取り合う中であり、敵同士だ。

それなのにこちらをキョトンとした幼い顔で見ってくるセイバーとイリヤスフィール。

何でそんなことを聞くのか、といわんばかりだ。

「イリヤスフィールが暇してるっていうから観光」

「セイバーが暇だっていうから付き合っただけなの」

「……………」

互いの主張に何やら言いたいことがあるのか、にらみ合うことどもふたり。

どちらが声をかけたのかは残念ながら見ていなかったが、二人とも暇を持て余していたらしい。

……………いや、セイバー、貴様は暇ではないだろう。

「セイバー、小僧はどうした」

「学校。付いてくんなって言われたから戦場の偵察に来たんだよ」

「貴様…………その手に持っているものはなんだ」

「お、流石弓兵目ざといな……………弓兵の名は伊達じゃないってか」

「貴様は弓兵を誤解している」

セイバーの腕に抱えられている紙袋を指摘すると、

フと軽く笑って格好をつけているが、全く格好はついていない。

セイバーの戦い方を昨夜見ていたから戦場の偵察の重要さは理解している。

ヤツが抱えているのが何らかの武器ならば何も言わん。

だが、

「戦場の偵察とっておいて何故江戸前屋のたい焼きが抱えられているのだ」

「オヤツ」

「貴様……まさか小僧に買収されて護衛をさぼったのではあるまいな……」

「ははは、まさか。

アーチャーは買い物か？」

「違う。バーサーカーのマスターとセイバーたるお前が一緒にいるのでな。」

少し気になっただけさ」

霊体化をして冬木の町を偵察していた時、

一緒に歩く二人を見てビルから落ちそうになったことは言うまい。

私の覚えているセイバーならこんな状況にはならなかっただろう。

目の前のセイバーは行動が読めない。

しかし、笑いあっていた人物が自分に不利益ならば殺すことが出来る人物だ。

(まったく、私もまだまだだな……)

とうに切り捨てたと思っていても、目の前にこうして現れると忘れていた感情が戻ってくる。

キョトンと不思議そうにこちらを眺める白い少女を彼が傷つけるといつのやら、

邪魔してしまいそうになるくらいには　私も甘いということだ。

わざわざ服を着替えて実体化してまで声をかけているのだから自分に呆れる。

「別に俺たちふたりだけじゃねえよな？」

「ええそうね。でもアーチャーは居なかったもの、分かるはずないわ」

クスクスとからかう様にイリヤスフィールが笑う。

「？それはどういっしょ」

「ああ？お前らなんでこんなところ……げ、アーチャーか
「よ」

聞き覚えのある声。粗雑な口調。

嫌な予感を感じつつゆっくりと振り返れば 目の覚めるような
青がそこにあった。

アーチャー SIDE END

人気のない公園には大人の男三人に少女が一人。

この世界の警察機関の下っ端が駆けつけてきそうな状況である。

しかし日曜だというのに人が居ない……誰か人避けの魔術でも使ったか？

まあ、人目を大いに気にしているアーチャーには丁度いいのかもしれん。

「君らは、馬鹿かね？いや、特にランサー、貴様が大問題だ」

「なんだ？喧嘩なら良いぜ、買ってやらあ」

「聖杯戦争は夜じゃないとしちゃいけないのよ？知らないの？」

うむ、見事に混沌としている。

俺はぶらんこというものに座ってユラユラと揺れながら三人を眺めている。

いや、イリヤスフィールも隣りに座っているので目の前で舌戦を繰り広げている二人か。

「何故、概念武装のまま実体化している！

実体化するならするで、この時代の服に着替える、たわけ！

セイバーでさえ人目を気にして着替えているのだぞ？」

「俺を引き合いに出すなよ。そういや、シロウも概念武装で出てく
うとしたら怒ったな」

お前ら言うこと似てるよなーと笑い混じりに告げればアーチャーは
嫌そうに顔を歪めた。

「すまん。ランサー、貴様はセイバーと同類だった」

「「おい」

ちなみに俺の格好はロングマフラーにハイネックのセーターにジ
ンズ。

上から下まで全部黒で統一している。

シロウが「着替えないなら家から出さないからな！噂になる！」と
必死に頼むので、

フジネエなる人物に弁当を届けに行く前に服一式を買いに行かせた
のである。

まったく、シロウといいアーチャーといい、いちいち細かいんだよ
な。

「ちょっと時代錯誤な人種かな？って見逃してくれるよ」

「くれんわ！言っておくがその格好は時代錯誤という言葉で済まされる物ではない！」

「買い物してきたが何も言われなかったぜ？アーチャーてめえよお、いちいち細げえんだよ」

「そ、その格好で買い物をしたのか、……………」

信じられん、とよるめく『兵』。

と、ランサーの「買い物」という言葉で思い出した。

「俺とイリヤのミルクティーは？」

「お、おお。アーチャーが突っかかってくるからすっかり忘れてた。おらよ」

「ありがとさん。じゃ、ほれたい焼き」

頼んでおいた飲み物を受け取り、イリヤスフィールに片方渡す。

予想外に熱かったのか、小さい手の平の上で缶を転がしている。

紙袋の中から個別に包装されたたい焼きをひとつ取り出し、ランサーに渡せば軽くお礼を言われる。

そしてそのやりとりを有り得ないものをみるような目で見ています
ーチャー。

「ほれイリヤスフィールも」

「………え」

先程シロウお勧めの店で買ったたい焼きを一つイリヤスフィールに
差し出す。

目の前にたい焼きを差し出されて、マジマジとそれをたっぷり眺め
た後。

「私に？」と小さく聞いてきた。

まさか自分がもらえるとは思わなかったらしい。

流石の俺も子供の前で自分だけ食べるような大人気ない真似はしな
いのだが……。

不安そうな声と、こちらを窺うように見上げてくる赤い瞳。

頷きで俺が問いに答えてもイリヤスフィールはまだ迷っているよう
だ。

「ほれ、毒見係」

「誰が毒見係だね」

「お前」

「貴様というヤツは……まあい、貰おう」

「そうそう、素直に受けとっておけ」

イリヤスフィールに差し出し、少し時間がたってしまったたい焼きを差し出すと、

ブツブツいいながらもイリヤスフィールの為かたい焼きの香ばしい香りにつられたのか、

アーチャーはたい焼きを受け取って齧り付く。

もそもそと咀嚼するその姿をじっとイリヤスフィールとランサーの三人で眺める。

もくもくもく、と味わうように咀嚼するアーチャー。

じいっとその口元、おいしさなど感じないといわんばかりの無表情を見る俺とイリヤスフィールとランサー。

「……………おいしい、から。君たちも安心して食べたまえ……………こっちを見るんじゃない」

「うむ、毒見ご苦労」

「わわ、熱・・・！」

俺から受け取ったたい焼きを膝の上に落して手を振るイリヤスフィール。

んー、子供って手の皮薄いからな。

出来立てがいいって思ったけど少し冷ました方が良かったか。

ちよっと反省しつつ、イリヤスフィールの膝の上に乗ったたい焼きを取り、

ロングマフラーを解いて、包装紙の上から適当に2、3度巻いてイリヤスフィールに手渡す。

「あ、りがとう・・・」

「どーいたしました」

ちよっとだけとまどいながらも目を細めて喜ぶイリヤスフィールは歳相応に見える。

ま、殺しちゃえーとか言わなきゃ・・・・・・・・・・そこも子供らしい残酷さかもな。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「あんだよ」

目を見開いて表情を固まらせるアーチャー。

ポカんとたい焼きを銜えたままという間抜けな表情でこちらを見るランサー。

「貴様が気遣い、だと・・・」

「いや、面白いもん見たと思ってな」

「よし、喧嘩なら買っぞ」

特にアーチャー、なんだその世界の終わりみたいな声は。

「もう三人とも子供なのね、食べ物食べてる間くらい大人しく出来ないのかしら」

「・・・・・・・・・・」

行儀良く口に入れていたたい焼きを飲み込んだ最年少にたしなめられる。

俺は悪くない。悪いのは赤い弓兵と青い槍兵だ。

しかしそんなことを言えば、更に子供扱いをされるのでおとなしく食べることにする。

「しかし、何故君ら三人が揃っているのだね？かなり有り得ない組み合わせだと思うが」

「買い食いしてたらイリヤスフィールを見つけて」

「そこにランサーが来たのよ」

「たい焼き奢るから飲み物買って来いってセイバーに頼まれたんだよ」

「それで待ち合わせがこの公園だった、というわけか」

いやー、流石の俺もここまでサーヴァントが揃うとは思わなかった。

アーチャーがいぶかしむのも当然のことだ。

俺たちの代わる代わるの説明を聞いて深い溜息を吐いているが。

「ランサーがしばらく劇物しか食ってないっていつからよ」

「ありゃあ人間が食うもんじゃねえよ」

どこか遠い目をして空を見上げるランサー。

一体どんな目に遭っているというのか……別に知りたくもないが。

知りたくないのでもヤツのマスターと鉢合わせることがないようこころで祈っておこう。

「そもそもサーヴァントは食べ物を食べなくとも平気だろうが……」

ボソボソとアーチャーが何か呟いているが無視だ。

たい焼きを食べ、ミルクティーで喉を潤しながら、

聖杯戦争にまったく関係ないことを話していた俺たちだったが、

「そろそろ帰るわ、バーサーカーが起きちゃう」というイリヤスフィールの言葉によって解散した。

「じゃ、じゃあさ」

「一応たい焼きの礼は言っておく」

「お前本当にあれだな。嫌なやつ」

「明るいうちは戦っちゃダメなんだよ？」

「」「分かってる」「」

うむ、しっかりしたお子さんだ。

石の匂いがする部屋。

人工的なものではない、ランプの火の明かりに照らされた一室。

そこには椅子に座り、手元の羊皮紙を眺める黒尻くめの男の姿があった。

「戻ったぜ」

突如現れた青い影にも、背後から掛けられた声にも

何の驚きも見せない男
言峰綺礼は視線を羊皮紙に向けたまま
ランサーを労った。

「ご苦労だった」

「……………オレの監視なんざ必要なさそうだったぜ」

「ああ、随分と仲睦まじいようすだったな」

微笑ましいものだ、と怪しく笑う言峰にランサーは顔を歪める。

視覚と聴覚の共融で公園での出来事を……………いや、

セイバーとバーサーカーのマスターに声をかけた時から一部始終を
この男は覗き見していたのだ。

「そういえば、アーチャーのマスターは凜だったな」

「ああ、そうだ。なんであのいけすかねえ野郎があそこに居たかは
知らんがな」

「ふむ、やはり凜も気付いているというところか」

何かに納得するように頷く言峰。

その「何か」がなんなのかは分からないが、ランサーには聞いておかなければならないことがあった。

「バーサーカーのマスターを監視するのも、護衛するのもいい
だがな、」

元よりランサーにはマスターを狙う効率など視野に入れていない。

英雄として相応しい戦い。

それが彼の望みだからだ。

敵マスターを庇う真似をすることに疑問は抱くが、そんなものはどうでもいいのだ。

「セイバーと戦うなどはどういうことだ。後から来たアーチャーともな」

両者とも一度手合わせをした相手だ。令呪の縛りは関係ない。

自分の思うままに力を振るえる相手を前に戦闘を止められた。そこだけはランサーには解せなかった。

「ふ、バーサーカーのマスターも言っていただろう。聖杯戦争は夜にするものだ」

「……ツケ、んじゃ夜まで待たしてもらわあ」

「ああ、戦いの場は用意させてもらう　　時期が来たらな」

「ならいい」

それだけ言うとランサーは姿を消した。

部屋に浮かぶ影はまた一つに戻り、静寂が戻ってくる。

消えたランサーを一度だけ振り返り、ふむと頷くと

「夕食でも奢ってやるとするか」

ポツンと呟いてから言峰は自分の作業に戻った。

第拾参話・弓兵の冬木観察記（後書き）

イリヤスフィールを聖杯と知らないセイバーはうっかり殺しちゃうんじゃない？

ということでもランサーさんが派遣されました。という話でした。

ミルクティー+たい焼きの組み合わせに弓兵さんに一言物申して貰おうと思いましたが………果てしなく長くなったので自重しました。

誤字脱字ありましたら、ご報告ください。

第拾肆話・日常の変わる音（前書き）

十四話目です。

桜さんがちょっと酷い目にあっています。しし注意ください。

第拾肆話：日常の変わる音

帰り道を辿りながら夕日に染まり始める住宅街を眺める。

ここは本当に　　人が多い。

「人間はここまで増えたのか」

今日商店街に溢れ返る人々を見て、まずその多さに驚いた。

そしてその無防備さに驚いた。

きっと俺が　　したら　　一人も残らない。

魔力が残っているからまだ大丈夫。そう自分に言い聞かせる。

いくら聖杯戦争といえども、全ての敵と戦うなんて状況にはならないはずだ。

「ああ。だから嫌なんだ　　こんな死に掛けの、世界なんて」

少し傾いただけでたくさん零れ落ちてしまいそうな世界。

かつてこんな平穩を望んだけど

いや、望んだからこそ。

自分がどれほど異質なものなのかということが分かる気がして。

「……ま、なるようになれ、だな」

寒さなんて感じないけど、手袋をはめた手の上から息を吐きかけてみたりした。

まるで人間がやるように。

この時代では日本といえども武家屋敷、というものは珍しいらしい。

おかげで直ぐにその白壁が続くシロウの家が分かった。

「戻ったぜー」

ガラガラと引き戸を開けて夕飯の支度を始めるだろうシロウに帰宅を告げる。

トテトテと軽い足音。

シロウとは違う、女一人分の足音に横に視線を走らせて傘を取る。

「……………え、あの……………どちらさまでしょうか」

「そっちこそ。シロウはどうした」

「先輩ですか？」

「センパイじゃないシロウだ」

「えっと……………」

侵入者は女。年頃はシロウとそう変わらない。

武器は持っていない。しかし足運びから何かの武術をやっているのが分かる。

髪は紫。肩を少し超えたほどの髪を右の側面の赤いリボンで止めて居る。

クン、と鼻を鳴らすと。人間と、異物の混ざった匂いが鼻に付く。

混ざりもん……………つまり一般人ではない。

ラインは切れてない。つまりシロウは生存している。ならば、

「答える気がないのならいい。じゃあな」

「止めるセイバアアアア！！！」

無防備な首を貫こうとした手はシロウの姿を目に留めて、止まった。ポカんとこちらを見て、自分の首に傘の切っ先が突きつけられてるのを見て、

目の前の少女はペタンとその場にへたり込んだ。

んーんーんーんー。俺、見誤った？

「何してんだセイバー！桜、大丈夫か？！」

「……は、はい、だい……じょうぶです」

「いや、普通見知らぬ人間が自分の陣地にいたら殺すだろ」

シロウは女子供に弱そうだし、特に注意しとかないとだろ。

俺も一般人が相手だったらそこまで警戒しないが………なあ？

人間という生き物に対して利く鼻に、人間ではない別のものの匂い

が混じっている。

これで「一般人です」といわれて「そうですか」で返せるほど俺は甘くないのである。

「殺すつて……！桜は……関係ないんだ」

「ああ、そうか。そりゃ悪かった。えーっと、サクラ？」

「は、い……」

うむ、すっかり怯えてるな。

まあ勘違いで殺されそうになったんだからそりゃ怯えるわなあ。

………つか、戦場になるような自分の陣地に無関係な人間を連れ込むなよ、シロウ。

事後でそれをいうのは言い訳でしかないとは思うが、そこはきっちりしていただきたい。

「悪かったな。シロウが危ない目に遭ってると思ったんだ。

ほら、シロウ女子供に弱いし、お人好しだし、見知らぬ人間ほいほい家にあげそうだし」

「だ、大丈夫です。怪我もしてませんから」

頭を下げた俺にパタパタと手を振って萎縮するサクラ。

やはり家にかかるほどの知り合いらしく、シロウの人となりを知っているので、

自分が掛けられた容疑を容易く想像出来たらしい。

シロウ、男だからと言って女相手に油断したら命がないぞお前。

今のところサーヴァントは男しか出ていないが、女性もいるので非常に心配である。

「士郎、どうしたの?!」

「あ、藤ねえ、ちょっとな」

バタバタと急いで走ってきた茶髪の女性。どうやらこの人がフジネエらしい。

手には竹刀を握っている……もしかしなくとも俺が不審者?

俺は何の説明も受けていない。

そして彼女らも何の説明も受けていないらしい。

自然、両者の立場を理解しているシロウに視線が集まる。

「……………あー、取りあえず、居間に行こう。そこで紹介する」
「おう」

傘立てに傘を刺しこみ、シロウの手を借りて立ち上がり歩き出した
サクラとシロウのあとに続く。

昨日も深夜外出をしていたし、今日の朝も昼近くまで寝ていたので、
保護者とかそういう人物がいないのだと思って実体化したまま帰っ
てきたのだが、

……………ちよつと失敗したかな。

恐らくシロウもそう思ってるだろう。

「で。誰なのよ、この外人さんは」

居間に着き、開口一番フジネエは俺の方を見て言った。

サクラもその意見はもつともなのか、とまどいつつも目を逸らさな
いでこちらを見ている。

ま、目を離していた隙に物騒な人物が気を許してる相手の陣地にい
たらそうなるか。

甘いものばっか食べていたのでお茶が欲しいなーと思うが、
流石の俺も「お茶」と言える状況でないのはわかる。

「オヤジの知り合いなんだ。オヤジが飛び回ってた頃に知り合った人だって」

「切嗣さんの？じゃあその人、切嗣さんを訪ねに来たの？」

「そういうこと。今日からしばらくうちで暮らすから。」

見てのとおり外人さんで勝手が分からないこともあるけど、よろしくしてやってくれ」

「「え？」」

勝手が分からない。

んな理由で殺されかけるのに慣れてる時代じゃないだろうに。

目を見開いて驚いている二人を見て（当然か）という顔をしているシロウ。

「別にずっとつてワケじゃない。

セイバーの滞在中に宿として家を貸すだけなんだから、そう驚くこ

とでもないだろ」

反論される前に反論を封じるように先制攻撃をしかけるシロウ。

おお、ちょっとだけ頼もしいな。こんな攻勢的なシロウも珍しい。

……まあ、シロウがどういうヤツかなんて2日しか顔を合
わせてない俺では分らんが。

うむ。今まで流されてばっかだったシロウが頼もしく見えるとは、
今日は赤飯か。

「……………あの。先輩、この人セイバーさんって言うんですか・
……………?」

「ああ、変わった名前だけだな。

あんまり日本に慣れてないんで驚かせるようなこともするけど、悪
いやつじゃないんだ。

さつきはセイバーも見知らぬ人が家に居たから驚いたんだと思う。

そのことについては俺も話してなかったのが悪かったんだ。大目に
見てくれると助かる」

「……………それは、いいんです。……………けど」

「……………」

やはり、サクラは怪しい。

この状況で気に掛けるべきことは名前じゃない。

なのにいち早く「セイバー」という名前に反応した。

シロウとも目を合わさない。流石に人の家の事情なので口には出していないが、

隣りにいるシロウの保護者であるフジネエの方に視線を移している。

まるで、最後の砦だというかのようじ。

(……………クロか?)

クロだとしたらかなり不味い状況だ。

シロウは無関係だと信じきっている。それは仕方のないことだ。

ぼつとでの俺とじゃ信頼度が違いすぎる。さっきの出来事が悪すぎた。

この状況で自分の陣地に居座られるようなことがあると……………ヤバイな。

「藤村先生。藤村先生は、セイバーさんの滞在を許可するんですか？」

「んー……………切嗣さんを頼ってきた人を無碍には出来ないし……………」

「ちょっと自衛に関しては問題ありかとは思いつけど……………最近物騒だもんねー。」

「夜に士郎一人つていうのもやっぱ心配だったし、ちゃんと注意しておけば間違いは起きないかな。」

「ね、士郎もそう思うんでしょ？」

「ふむ、どうやら夜は二人は各自の家に帰っているらしい。」

「出来れば聖杯戦争中は来ないでほしいのだが……………どうだろうなー。」

「と、当然だろ。オヤジの客なら俺の客だ。」

「失礼な事なんて出来ないし、日本に慣れてないんだから放っておけないだろ。」

「そうだよねー、海外と日本じゃ全然違ってもんね。」

「うむうむ、と腕を組んで頷くフジネエ。」

「いいんじゃない？ホームステイと思えばいい経験だし、こころって無駄に部屋も多いもの」

というフジネエの言葉によって俺のシロウの家への滞在が許可された。

サクラは終始無言だったが、最後に

「はい。私が意見できることじゃありませんから」

と、何かを押し込めたような表情でポツポツと呟いた。

うーん、修羅場だ。

ちなみにシロウはそんなサクラの変化に気付かないようで、

納得してくれたと思って安堵の息を吐いている
赤飯は取り消しだな、この鈍感。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えーと、取りあえず、夕飯の準備するか。セ

イバー、リクエストあるか？」

「お、んじゃニクジャガつての食いてえ！日本じゃ定番だって商店街で聞いた」

「わかった。セイバーの歓迎も兼ねて今日は力をいれるからな」

「おお、氣い使わせて悪いな」

氣まずい沈黙を破って夕食の準備に取り掛かる為台所に向かうシロウ。

惣菜屋さんで定番の日本食ってどんなのか聞いてきたんだよなー。

話も終わったのでお茶を飲もうと湯飲みと急須を………台所か。

「えーとフジネエ？とサクラはお茶どうする？」

「ブツ！なんでセイバーさんがフジネエって呼ぶのよ」

「シロウからフジネエって紹介されてたんだが」

「それは呼び名よー。私の名前は藤村大河っていうの。シロウの保護者兼任だよ」

「フジムラタイガか。俺はセイバー、短い間だけどシロウの護衛みたいなものかな」

「へえー、セイバーさんって何か武術でも習ってるの？結構良い体格してるもんね」

「剣を少し」

むむ、台所から「少しじゃねーだろ」という声が。

「それよかお茶どうする？料理は出来んがお茶くらいは淹れられるんだが」

「あ、湯飲みはあるからお替り頂戴。桜ちゃんは？」

「……………え、あ……………お願いします」

「了解ー、シロウこれ茶葉替えてくれ」

渡された急須には出漕らしが入っていたので台所に居るシロウに渡す。

手馴れた手付きで茶葉を捨てて、新しい茶葉を適量入れて返してきた。

「溶け込むの早いな」

「そうか？俺は俺のやりたいようにやるだけさ」

急須を受け取り、食器棚から一人分の湯飲みを持ち出して居間に戻る。

ポットの中のお湯を注いで、少しだけ蒸らしてからそれぞれの湯飲みにお茶を注ぐ。

「んー、今日は甘いものばっかだったからうまい」

「甘いもの？」

「うむ、商店街でシロウおすすめの江戸前屋に行ってきたんだよ」

「江戸前屋?! おみやげは? セイバーさんお土産は!」

「悪いな、予想外な知り合いが多数居て全部食っちゃった」

「そっかー、でも旅行しに一人で来たのに知り合いに会って世界は狭いのねー」

「ああ、ちょっと腐れ縁ってやつが恐ろしくなった」

本気でな。

あいつらなんであんなところろつろつろしてたんだか。

疑問に思えど答えてくれる奴おらず。

ズズ、とお茶を一口含み後でシロウにソレも含めて話さないとな、
と考える。

まずは夕食が何よりも先だが。

第拾肆話：日常の変わる音（後書き）

事情も人格も何も知らずに仲良くなんて無理。絶対。

桜さんのファンの方々には申し訳ないんですが、ご了承ください。

しばらくセイバーVS桜という状況が続きそうです。

セイバーさんは義務感です。桜さんは愛です。

誤字脱字などありましたら、ご連絡ください。

第拾伍話：秒読み開始（前書き）

一応まだ本編二日目です。日付って入れたほうがいいんですかね。

特に指摘がなければこのままにするんですが。

まあそんなこんなで十五話目です。

第拾伍話：秒読み開始

「ふうん、んじゃマトウサクラはシロウの後輩だったのか」

「はい」

センパイというのは名前ではなく、先輩という呼び名だったらしい。んで、マトウサクラが後輩。

同じ学校という教育機関に通っているらしく、ここには朝晩と食事を作りに通っているらしい。

そういえば着ている服も昨日リンが着ていたものと同じだ。

制服といって学生の証であり、統一しているのだそうだ。

うむ、なにやら複雑な世の中になっているな。

「セイバーさんは観光に来たの？」

「ん、日本の観光ついでにキリツグに会ったところと思ってな。

日本家屋で武家屋敷なんて珍しいから見たいと思ってたんだ」

「そうよね、外人さんにしてみれば珍しいものね」

見たこともあったこともないが、シロウのオヤジ「キリツグ」というのは理解出来ている。

ついでに日本の文化にも興味があることを匂わせておけば完璧だろう。

俺の言葉を信じて頷いているフジムラタイガ。どうでもいいけど口端にご飯粒付いてるぞ。

そんなこんなで互いの情報を交換しつつ、比較的にぎやかに夕飯は終わったのであった。

マトウサクラはやはりというかなんとというか、話にはあまり乗ってこなかった。

初対面の印象が最悪だから警戒するのはあたりまえだが、警戒の種類が違うんだよね。

なんつーの？俺だけをひたすらに敵視してる感じ。

恐怖とかそういう類ではなく、敵視。そこが問題なのだ。

……シロウは当てにならないし、独自に調べた方がいいかもな。

「そろそろ時間かな」

「藤ねえー。帰るなら桜の見送りを頼むー」

台所からフジムライタイガの声を聞いたシロウが声をかけてくる。

しかしそれに返事をせず、お茶を飲みつつテレビを眺めていた俺に視線を寄越す。

？残念ながら俺は視線を読むなんていう高等技術はまだ習得してないぞ。

首を傾げてみるとフジムライタイガは何事もなかったかのようにテレビに視線を戻した。

「……………もしもし。聞こえなかったんですか、藤村先生」

「悪いけど、それは却下。しばらくは桜ちゃんを送ってあげられないから」

居間に戻ってきたシロウに頭をぺちぺちと叩かれたフジムライタイガがそう返す。

ま、物騒だししばらく夜は自分の家にこもっていた方が正解だな。

「？なんでさ。藤ねえ、何か用でもあるのか？」

「えつとね。用じゃなくて、今日からわたしもここに泊まるから」

「はい？」

「あ、桜ちゃんもどう？おうちの方には私から連絡入れておくから安心だよ。」

女の子二人でお泊り大会とかどうなのよう」

「あ………は、はい、是非！藤村先生、たのもしいですっ！」

突然声を掛けられて呆けていたマトウサクラだったが、すぐに勇んでその話に乗っかってきた。

おいおい、一応保護者として泊まるってのは分かるが………マトウサクラを誘っちゃいかんだろ。

保護者として、教師として。

「いやフジムラタイガ。マトウサクラはダメだろ。」

いくら気安い仲と言っても未成年だし、何かあったらそれこそ問題なんじゃねえのか」

成人しているフジムラタイガはいい。行動の責任は自分で取れる。

しかしマトウサクラは未成年で、学生という身分。

その責任はマトウサクラが何と言おうとフジムラタイガや俺にくるのだ。

ぶっちゃけるとこんな時間まで外出させてる方がおかしいというものである。

「うぐ！それもそうかー。じゃあ桜ちゃんはシロウが送ってあげて」

「馬鹿か、こんな夜中に学生二人を歩かせるんじゃない。俺も付いてく」

「わ、私は平気ですから！泊まらせてください！」

「いやー、セイバーさんの言うことは正しいもの。いざという時のことも考えて、ね？」

「それでしたら尚更藤村先生一人じゃ心配じゃないですか！」

「いや、セイバーのことはちゃんと俺が見張っておくから心配要らないぞ桜。

これ以上遅くなるといけないから送ってくよ、セイバーも頼むな」

「了解」

夕食時は邪魔だったので隅に丸めておいたロングマフラーを首に巻き立ち上がる。

流石に3対1は分が悪すぎると思ったのか、それともなんの案も出てこなかったのか、

何も言えずにうな垂れているマトウサクラには悪い気もしないでもない（様な気がする）。

だが、ここは戦場になる可能性があるし、マトウサクラ自身も怪しい。

彼女をここに置くという選択肢は俺にはないのだ。

リンやイリヤスフィールやランサーみたいに「敵」とはっきりしていた方が扱い易いのである。

この、敵か味方が分からない、クロに近いグレーなのに手を出せないという状況が悪すぎる。

「「「.....」」」

「あの、送ってくれてありがとうございました。帰り道、気をつけてくださいね」

「ああ、桜も最近物騒だから気をつけろよ」

「はいっそれじゃおやすみなさい」

終始無言のままマトウサクラの家に着き、軽い別れを告げてから帰路に着く。

人気がないポツポツと街灯に照らされた夜道を二人で歩きながら話しかける。

「なあシロウ。お前ちつとも分かってないから言うけどよ。聖杯戦争なんだ。戦争なんだよ」

「分かってるよ」

「分かってねえよ。分かってたら大事な人間を戦場になるような場所に置きはしない」

「っ！それ、は」

「大事なんだろ」

令呪使っちゃうほどに「

左手を取ってみると、やはり令呪の一角が色を失っている。

チリと蚊に指されるほどに僅かに干渉してきた気配は令呪の縛りだったのだ。

「悪い、俺の不注意だ……でも俺は後悔してない」

「ならいいし、謝らなくともいい。ソレをいつ使うか決めるのはお前だ」

困るのはお前だといっておく。

きっとその言葉の真意をシロウは分かってないんだろうが。

ああ、それともう一つ言っておかねえと。フジムライガを家に留めるというのなら尚更。

「シロウ、俺はお前の護衛だ。フジムライガの護衛じゃない。

あの家が襲撃された時俺はフジムライガではなく、お前を優先する」

「なっ！」

「つつか契約する時いったる。人助けとかそういうの興味ないって」

俺はシロウが目指すような正義の味方ではないのだ。

いくらサーヴァントだといっても、限界はある。

ただでさえ魔力に制限が付けられてるんだから余分なことに割く労

力はない。

そこんとこぜってえ理解してないよなー、こいつ。

リンの前では弱点の暴露になるから完全には告げなかったが魔力供給が一切されてない。

それは今日シロウが起きた時に話しておいたのだ。

睡眠と食事があれば戦闘には一切支障がないといったのが悪かったのか。悪かったんだな。悪かったんだろーね。

「そうだけど・・・いや、分かった。藤ねえは俺が守る」

「うむ、それでそのシロウを俺が守る、ということでもいいな」

「ああ、苦勞かけるなセイバー」

身体を張って助けるとまで言われちゃ、サーヴァントとして守りきるしかないだろう。

「でもよ、シロウ。

いつか限界は来る。その時に日常か、戦争か、どっちを捨てるか選ぶ日が絶対に来る」

今日明日で捨てる、とは言えない　　そんなことできる筈がない
と分かってる。

その反応は普通のことだし、別に俺だって無意味にシロウを追い詰
めたいわけじゃない。

流石にそこまでの興味が無いというか、そんなことして楽しいの？
って感じだ。

なので俺は傍観する

「その時に、ちゃんと決めろよ。シロウ」

「ああ」

その日が来るのを騙し騙し伸ばしながら。

サーヴァントだ英霊だと呼ばれても、出来ることつつたら所詮そん
なもんなのだ。

ちっともありがたくないことこの上ない。

解決なんて出来ない出来ない。そういうのは正規の英霊様に頼んで
くれ。

夢見た方が負け。現実というのは結構そういうものだ。

でも、夢を見たらひたすらそこを目指し続けそうだよなあ、コイツは。

戦争の真っ只中だというのに抜け切らない甘さが何よりの証拠のマスター様を盗み見た。

こんな甘ちゃんて聖杯戦争の結末が見れるのだろうか……

ああ、運がない。

こっちもいろいろ譲歩してんだからシロウにも譲歩して欲しいもんだ。

士郎SIDE

「その時に、ちゃんと決めろよ。シロウ」

「ああ」

今ここで決めろ、と選べ、と選べ、といわないセイバーに少しだけ胸が温か

くなる。

先程の藤ねえの件もセイバーにとっては屁理屈でしかないのに守ってくれようとする。

俺のことをお人好しだと言いながら、

冷酷な顔をしておきながら、どこか甘くてお人好しな剣士が嫌いになれない。

でもコイツは甘くてお人好しだけじゃないのも分かる。

セイバーが言ったとおり、藤ねえか俺かを選ぶ時躊躇なく俺を選ぶだろう。

だから俺が強くならなきゃならない。

サーヴァントの相手はセイバーがしてくれる。

そういうものだと「へこへこ出てこられた方が邪魔だ」と何度も言われたから分かっている。

ならば俺は、その戦禍から藤ねえを守れるくらいに強くならなければならぬ。

それが俺に時間をくれたセイバーへのお返しだ。

「なあセイバー、朝と夜だけでいいからさ、稽古つけてくれないか

「？」

「稽古？……お前まさかサーヴァント相手に突っ込むとか
言わねえだろうな」

「む、流石にそこまで物分り悪くないぞ俺。

セイバーは俺のせいですつと付いていられる状況じゃないし、

セイバーが来るまでの時間稼ぎや、戦闘の時とばかりにならない
よう鍛えて置かなきゃだろ」

じとつとした目で見てきたセイバーに反論すればフム、と考えるセ
イバー。

顎に添えられた手袋をした手を見て、

そういえばセイバーの素手って見たことないなと思いつく。

食事中も外さなかったし……意外と潔癖症なのか？

「いいぜ、朝と夜に稽古つけてやるよ」

「ああ、……よろしく、な」

ニヤリと笑った顔がちょっとだけ怪しい。

セイバーさんの足取りが軽くなったと思うのは……俺の気のせいなのでしょうか。

士郎 SIDE END

第拾伍話：秒読み開始（後書き）

タイトルで気付いた人も居るかもしれませんが、使っていました。令呪。

そしてセイバーさんとの修行フラグ………土郎はきっと死にません。

長くなるとスパーンと省いていたことを思い出したので補足しますが、

一応セイバーさんの状況は原作セイバーとあまり変わりません。

しかし原作セイバーの様に霊体化できないわけではないのでご注意ください。

誤字脱字などありましたら、ご連絡ください。

第拾陸話：それぞれの向かう道（前書き）

十六話目です。

前半ちょっと暗い話です。暗い話は苦手ですよ。

あとセイバーさんの生い立ちをちょっと。

第拾陸話：それぞれの向かう道

桜SIDE

「どろじよう……」

先輩に送ってもらって、なんとか笑顔で見送って、部屋に戻って咳いたのはそんな言葉だった。

頭の中ではずっと同じ言葉が渦巻いている。

朝食の支度を手伝いに行った際、先輩の左手に聖痕が現れた時からずっと続いている。

どろじようどろじようどろじようどろじようどろじよう
先輩が聖杯戦争に巻き込まれたら。

だけどそれも今日、先輩の背後に控える白い人、セイバーさんを見て変化した。

どろじょろどろじょろじょろじょろじょろじょろじょろじょろじょろ
に知られたら。 私のことを先輩

どろじょろどろじょろじょろどろじょろじょろどろじょろじょろ
したら。 先輩が怪我でも

どろじょろどろじょろじょろどろじょろじょろどろじょろじょろ
とになったら。 先輩と、戦つて

どろじょろどろじょろじょろどろじょろじょろどろじょろじょろ
．．死ん、じゃったら。 先輩が、．．．

立ってられない。扉の前に蹲る。どうにかしなきゃ、と思っても
私にはそんなことできない。

「らいだー．．．」

頼れない。私からライダーを兄さんに預けちゃった。

姉さん．．．．．もっと頼れない。互いの家には不干涉と決めら
れている。

それに私なんか頼れるわけがない。

「先輩、先輩先輩．．．．私、どうしたらいいんですか」

コツコツ。背後の扉がノックされ、「桜」とおじい様が声を掛けてくる。

ザッと青褪める。

「衛宮の子供のところに行っておったのじゃろう、様子はどうだった」

「……………セイバーさんが、いました」

「ほお、セイバーを召喚したのか。お主から見てどうじゃった？」

「分かりませ、ん……………ごめんなさい、ごめんなさい」

「何、謝る必要などない。まだ聖杯戦争は始まったばかり、時間はある」

おじい様の言葉にほっと息をつく。でも次の言葉で心臓が縮まった。

「しかし相手は最優のサーヴァント、

なんの情報もないのでは今のライダーにはちときついかのう」

「……………あ、」

セイバーさんを狙えないなら、誰を狙うのか
想像もしたくない。

私の心中を知ってか、おじい様が安心させるような声で言う。

「なあに、可愛い孫の想い人じゃ。

お主がセイバーの情報を知らせてくれるなら手出しはせぬよ」

先輩には手を出さない。それが約束だった。

「桜、お主が衛宮の子供を救うのじゃ。聖杯戦争という危機からの」

「わたし、が？」

「うむ、衛宮の子供が参加する理由であるセイバーさえいなくなれば無関係じゃ」

戦争なんてものとは無関係な綺麗で、暖かい人。

そんな先輩が戦争に参加する理由であるセイバーさんが居なくなれば、

先輩は
無関係になる。

握り締めていた手を更に強く握り、前を向く。

「わかりました。頑張ります」

「おお、やってくれるか」

先輩、待っていてくださいね。

桜SIDE END

士郎SIDE

桜を送って、冷えた体をお茶で温めてから藤ねえは離れの方に。

そして俺たちは早速セイバーによる稽古を開始する為、道場の方へと足を向けた。

のが、数十分前。

既に俺はくじけそうである。

「おおおおおおらあ！どうしたシロウ！

んな体たらくじゃバーサーカーの攻撃の余波で降ってくるコンクリートは避けらんねえぞ！！」

ズドドドドドドド！と雪崩のように降ってくる丸められた座布団の嵐。

先生！セイバー先生！一昨日のバーサーカー戦とは比べ物になりません！！

木刀でなく、竹刀っていうのもかなり無理があると思う。

ただの座布団というなかれ、いくら筋力のランクが低いといっても英霊の中での話なのだ。

戦場で鍛えられた目は的確に俺の動きを読み、要所要所に座布団が

降ってくる。

「せい、せいは、あー！これ、余波じゃな・・・狙ってる！むさ、べつじゃ・・・ねえ！」

避け切れなくて竹刀で受け止めた座布団がぎゅるぎゅると音を立てて回り、落ちた。

「・・・これ、当たったら俺死ぬんじゃないだろうか。」

バカン！と座布団からしちやいけない音がして、身体が宙を舞い、視界が暗転した。

「おいおい、戦闘中に余所見出来るほど強くねえだろがシロウ。」

「いいか、サーヴァント相手じゃ・・・」

呆れ混じりの叱責する声がボンヤリと耳に届いてきたが、最後までは聞こえなかった。

うん、もう絶対にこの修行は止めさせる。命が足りない。

そう固く心に誓って、俺は意識も暗転させたのであった。

夢を、見ている。

記憶にない声。記憶にない景色。記憶にない人物。

ここまで揃っているのなら、これは記憶の再現じゃない。

これは 夢だ。

ソレが生まれた時にかけられたのは祝福でも喜びの声でもなかった。

ソレが生まれた時に掛けられたのは、与えられたのは たったひとつの呪い。

『 逃げることは許されない。お前は一振りの剣なのだから』

生れ落ちた瞬間。

もっとも純粹でもっとも脆弱で 誰よりも庇護が必要なモノ。

その時に彼は 彼が辿るであつたらう道の全てを閉ざされた。

それからというもの、彼の人生は全て戦場だったといつても過言で

はない。

本来戦うべき何百人を守る為、彼はたった一人で戦場を駆けた。背後の村の平穏を守る為、彼はたった一人で人生を過ごした。

ただ、それだけ。

剣には鞘

鞘には剣

剣と鞘は一心同体。

それがこの世の理というものだ。

そんな理からはずれた、たった一振りの剣 それが彼だったのだ。

ふざけてる。

だったらソイツは、その誰かは頑張った分だけ報われなければなら
ない。

人を救おうと頑張ったヤツが報われないのは嫌なんだ。

夢に入り込んできたその理不尽な物語に噛み付いた。

その先を、剣として人を守り、戦い続けた誰かの物語を、結末を見るために

「あ、・・・・・・・・」

夢の先は　　なんのことはない、自分の家の天井だった。

朝日を浴びて視界が白くぼやける。

夢を覚えている事なんてないのに、何故か誰かの人生の一端を綴ったあの夢は覚えていた。

夢だと分かっているのに熱くなったからかもしれない。

けど、覚めた今でも納得がいかない。

結末は見れなかったけれど　　決して俺が望むような結末じゃない気がする。

「む、いけない。朝食用意しないと」

今の自分の眉間には皺が寄っているだろう。

もやもやとした胸をすっきりさせるために朝食の準備を始めよう。

起き上がろうと手を突くと、身体に激痛が走った。

「あいててて……ちくしょう、セイバーのヤツちよっとは加減しろよな……」

痛みに呻きながら顔を上げると　俺の直ぐ傍でセイバーが眠っていた。

冬だということになにも掛けずに壁に寄りかかって座った状態で眠っている。

『魔力供給がないからな、出来る限り俺は眠っている』

そう言ったのはセイバーだ。

霊体化は武器が持てないから行動する時は出来る限り実体化しているといったいた。

(それにしても……)

サーヴァントだ、死者だ、英霊だと言っていたが、この季節にこれでは寒くないのだろうか。

思わず自分が今まで掛けていた布団を引っ張ってきて掛けようとした所で、

「んあ、起きたか。稽古どうする？筋肉痛で動けねえか？」

「あの修行のやり方は止めてくれ。他のサーヴァントと会う前にお前に殺される」

ゆるりと開いた目を擦り、眠そうに欠伸をするセイバー。

まだ寝たりないのではないかと心配になるが、すぐに向けられた目はきつちりと意思が灯っている。

「あー、フジムライタイガも言ってたな。

『ややややりすぎよう！セイバーさん何処の軍人上がりのスナイパー？！』って」

ケケケと笑うセイバー。ああ、藤ねえに心配掛けちゃった……

・これは監視が付きそうだな。

時間なんて限られているのに、と歯噛みしても時間は戻らないのである。

やはり剣をあわせる程度の方がいいかもしれないな。昨日の修行はダメ、絶対。

「なあ、セイバー」

「ん？」

「……朝の鍛錬も、頼むな」

「おう」

今俺は何を聞こうとしていたんだろう。

あの夢がセイバーの過去だなんていう証拠なんてないのに。

いや、もしあっても 俺はなんていえばいいのかわからない。

楽しそうに笑い、仮初めの生を謳歌するセイバーがいるから、尚更
に。

士郎SIDE END

パン、パパン！

竹刀がぶつかる音が朝日に照らされた道場に響く。

二月の初めの空気はひんやりとして、早急に寝ぼけた意識を引き締めてくれる。

「シロウ、ちゃんと見ろ！見えないなら筋肉を読め、動きを予想しろ、空気の音を聞け」

「む、無茶言うな！」

「うむ、俺も無茶だと思う。そこまでお前のスキルは高くない」

「つつぐぐぐ！」

魔術の師匠は勿論、剣の師匠も居らず、

戦場に身をおいたこともない人間にいきなりそんなことを求めるのは酷だと分かっている。

しかし、手を抜いて振るっている竹刀の動きくらいは見切ってもらわなければ話にならない。

勿論、無茶を言っているのでシロウは数十分でボロボロである。

学校・・・行くんだよな。このボロボロの身体で。

「シロウ、学校行くのか？」

「？当たり前だろ」

「リンが居るのにか？相手はお前と違ってちゃんとした魔術師だぞ」

「だからこそ有り得ないだろ。」

ちゃんとした魔術師だから『無関係な人間を巻き込むな』っていう協会のルールが

染み付いてるヤツだし、学校じゃ優等生って猫を被ってるんだぞ」

ふうん、やはり一般社会に溶け込むのならそれ相応の擬態をするもんなのか。

しかし、擬態は所詮擬態でしかない。

つつか本性を知ってるのにこの警戒心の無さっぷりはどうなんだ。運がない。あと二回頑張れ俺。

ま、無駄だと思うが一応シロウのサーヴァントとして忠告しとくか。

朝から晩まで忠告しっぱなしだな、俺………ほんっとうにこんな所を舞台にした責任者出て来いって話だ。

「人目があれば失くせばいい。それだけの話だ。その程度の魔術は会得してるだろ」

「遠坂が無関係な人間をどうにかするっていうのか?!」

「違いよ。この世にはな、人避けの魔術っていうそりゃあ便利なもんがあるんだよ。学習しろ」

「う、悪かった・・・怒鳴って。」

人気が無い所には近付かないし、日が落ちるまでには帰ってくるからさ、安心してくれよ」

あ、安心・・・シロウの口から安心・・・?!

この国では溜息を吐くと幸せが逃げるらしい。

俺の幸運値が下がったら絶対にシロウのせいだ・・・・・・・・聖杯で幸運値上げてもらうかな。

流石にEランクの壁を越えたくない。

「この冬木の町は以前とは違う。くれぐれも油断するなよ。警戒しすぎて困ることは無い」

「ありがとな、セイバー。」

大丈夫だと思うけど、俺の身に何かあったらセイバーにも伝わるんだろ?その時は頼む」

「確かに繋がりはあるし、危急の時は察知できるだろうが、そんな時はお前が死ぬ一歩手前だ。」

俺がそこに行った時にや死体でした、って落ちがつくさ」

「………そうなのか」

肩を竦めながら軽く言つと口元が引き攣るシロウ。でも学校、行くんだよな。」

そんなに譲れないもんがあるのかねー？俺には理解不能だ。

一つ息を吐いて耳に付けていた護符を片方取り、シロウに渡す。

「お前の協力者としてんな落ちで終わらせたら立つ瀬が無いからな。ほれ、これ貸しとく」

「これって……ピアス？」

「護符だ。一応礼装の一部だから何かあればラインの繋がりから察知するより早い。」

それにこれには『生存』の呪いが懸かっている。怪我すると酷いぜー」

「ひ、酷いって……しかも呪いなのかよー！」

俺にはこの呪いは既に効かないものになっているが、シロウならま
ったく問題ない。

この呪いはシロウの魔力を引き金にして確実にシロウ生かすだろう。
ま、呪いだから普通に生きてるヤツにとっちゃ辛いもんがあるがそ
こには目をつぶれ。

「ま、絶対死ねないから安心しろ」

「出来ない！その死なない、じゃなくて死ねないってところが特に
！！」

んなもん知らん。

第拾陸話：それぞれの向かう道（後書き）

セイバーさんが護符とってはいるものの、本来の分類は呪具です。
Not 宝具。

セイバーさんに渡した人たちがそれを身を守る護符と偽って渡した
ものなので

セイバーさんの認識では護符なのです。

まあ、生かしてくれるという意味では護符と言ってもいい、かな？
という曖昧さ。

誤字脱字がありましたらご連絡ください。

第拾漆話：対立する主従（前書き）

ユニークが一万超えました。PVも八万超えました。

別に一桁間違えたわけじゃありません。うん、超えてる・・・という
ことで！

つたない文章に付き合ってくださいる皆様に感謝！

密かに評価人数も増えていて嬉しいです！ありがとうございます！

感謝を兼ねて連日投稿ということで、十七話目です。

第拾漆話：対立する主従

妙な所だけ鋭いシロウがうるさい上、

なんだか学校の規則というものでピアス（という分類に護符は入れられるらしい）の着用が

禁じられていると言われたので付けることはせず、ポケットに忍ばせるという形になった。

しかし護符が禁じられる学校とはなんとも物騒なところなんだな。

護符とは名ばかりの呪いの一品だが、死ねないという事柄に関しては一級品なのに。

「ま、持つてるだけでも怪我の治りを早くしてくれるからな」

「そうなのか？」

「それに魔力を流してみる。血でもいいが。

ほれ、打ち身が治ってきてんだろ。それのおかげだ」

「ほんとだ・・・でも、いいのか？俺に渡して」

「俺の耐魔力が強すぎて効かねえんだ。効果が出るお前が持ってた方がいい」

「そっか、ありがとなセイバー」

気が遠くなるほどの年月貯められた上質な魔力が続く限り、

発動の為の僅かな外部からの魔力さえあれば腕の一本は軽くくっ付けられる。

数分立てばぼろっぼろのとでも近所様には見せられないシロウの様もあつというまに完治だ。

生前は憎くてたまらなかったものだが、今だけは感謝してやってもいい。

「あれ？先輩こんなところにいたんですか」

「桜、あ、起こしにきてくれたのか。悪いな、セイバーに軽く手合わせしてもらったんだ」

「えっあの、怪我は?!」

「大丈夫だよ。ちゃんと手加減してくれたから」

ひよこりと道場の入り口に姿を現したマトウサクラに心配させじとパタパタと手を振るシロウ。

もう少し遅かったら朝っぱらかすこいものがみれた気がする。

っていうか何なんだ。この夫婦のような会話は。

「起こしにきてくれたって事は朝食の支度は」

「はい、もうほとんど片付いちゃってます」

「いつも悪いな。桜だって朝練とか忙しいのに」

「いいんです。私が好きでやってるんですから！」

うむ。マトウサクラに気をつける。なんて言う雰囲気じゃないなこれ！

警戒する相手の前でお前を警戒させてもらうとか言えるワケ無いしな。

仕方ねえな。マトウサクラが居なくなってからシロウに話すか。

っつーか昨日の夜に話そうとしたらシロウが気絶しちまったんだもん。

シロウが悪い。うむ。

「じゃ、セイバーのリクエストくらいは俺が作るか。セイバー、何

「がいい？」

「だし巻き卵がいい」

「昨日の朝食に食べたが……あれは、いい。」

「あの、卵焼きでしたら私が作って……」

「だし巻き卵がいい」

「……そう、ですか」

「セイバー！いや、ほらさ、卵焼きとだし巻き卵って違うしさ。」

「そっだ、桜！桜が作ってやったらどうだ？いいよな、セイバー」

「何故お前が慌てるんだシロウ。良く分かん。」

「別に誰が作るうと美味しいだし巻き卵が食べられるんなら構わない。」

「だがしかし、俺はマトウサクラの料理の腕なんて知らない。」

「マトウサクラは料理が上手いのか？」

「ああ、俺が教えてたんだけどもうほとんど教えることはないくらいだ」

「でも和食はまだまだ追いつけませんよ」

ふむ、つまり和食という分類のだし巻き卵はシロウの方が上手いと。

じゃあやっぱり、

「シロウの方が上手いならシロウが作ってくれ」

「セイバー……………」

「あの、いいんです先輩。先輩に追いつけない私が悪いんです」

「頑張つて精進してくれ、マトウサクラ」

「はい、すぐに先輩を追い越しちゃいます。そしたら、その……………」

「そんな時は俺の方から頼むさ」

敵だろうとなんだだろうと作らせる。それが俺。

「はいっ！」

「……………じゃあ居間に行くか」

「おう」

桜と俺のやり取りを見て、桜の笑顔をポカンとした顔で見ている口ウだったが、

ほっと安堵の息を吐いた………おおお、何考えてるか丸分かりだなありや。

どうせ俺とマトウサクラの仲がそれなりに良好だとも思ってたんだろ。

馬鹿だなー、アホだなー、お人好しだなー。

敵だと明言するリンとだって笑いあえて、殺しあえるような存在だつてのに。

士郎SIDE

藤ねえが起きてきて、賑やかに朝食を終えて、一足先に出た桜から遅れて学校に行く。

朝食の時一瞬だけど冷たく細められたセイバーの顔が忘れられない。

ニュースで報じられていたガス漏れ事件。あれはきつと、サーヴァントの仕業なのだろう。

「シロウ」

学校に行こうと玄関で靴を履いているとセイバーが立っていた。

表情は真剣で、赤い瞳は戦っている時の様に冷たい。

「マトウサクラには気をつける。俺がいる時はいいが、リンと同じで学校では近付くな」

「な、なんだよそれ」

遠坂を警戒するのはわかる。

こっちは喧嘩なんてしたくないけど遠坂は明日から敵だと言っていた。

人目の多い学校じゃ心配なんていらないけど、それでも心配してしまっただろう。

それはいい………本当はよくないけど、まだ分かる。だけど桜は。

「桜は魔術なんかとは関係ない。聖杯戦争なんかも一切関係ないんだ」

「ふうん？お前がそう思ってるならそれでいい」

「どづいうことだよ」

信じていないとあからさまな態度で言われ語気が荒くなる。

睨みあげてもセイバーにとっちやまったく効果は無いけど、睨まずにはいられなかった。

ここで引けば 昨日のようなことになる気がする。

桜の喉元に走った凶器。

あそこで止めていなかったら、そう思うだけで目の前が真っ暗になる。

本当に桜が殺されていたら……俺はどうするか分からない。

勘違いだから、俺が説明不足だったから、そんな言葉を並べて押し込めた恐怖が

今のセイバーを見ていると甦ってくる。

「マトウサクラは俺を敵視している。敵だと認識している」

「それはセイバーとの初対面が最悪だったからだろ」

「シロウ、それだけだったらな、ただ恐怖を感じるんだ。わかってんだろ？」

恐怖で凍りつく。

動いたら死んでいると理解出来る　　恐怖なんて言葉で表すことすら温い死の予感。

一昨日三体のサーヴァントと対立したから分かっている。

人間という存在に対する殺人性、それだけ取ればバーサーカーとセイバーは似ている。

敵視を抱く前に、死を感じる。そんな存在を敵に回すなんて自殺行為だ。

遊びでしか生かしてもらえない。それが人間とサーヴァントの差。

だからセイバーは言っている　　桜に気を許すな、と。

でも、そんなことが出来るはずがない　　、

「……………俺には桜がセイバーを敵視してるなんて思わない」

桜が敵なんて思わない。桜は　　俺の家族のような女の子だ。

その桜を信じてやれなくて、何が正義の味方だ !

「そうか」

セイバーはそれだけ言うところちらに背を向けた。

落胆も怒りも呆れも何もない。ただ坦々とした無機質な声。

「セイ」

「お前がそれならいい、シロウ。」

元より俺はサーヴァントと戦うだけのモノ。マスターのことを気にする意味などなかった」

「な、」

「そうだ、そうだったな……初めからマスターは生かしてサーヴァントを斃す、

そういう協力を求められたんだったな。悪い、俺が忘れてた。俺の過失だ」

「セイバー!!」

思わず土足で家に乗り上げ、その背中を掴もうとしたが掴む前にそ

の姿は消えた。

でもセイバーは、あの馬鹿はいるはずだ。だから声を上げた。

「俺はお前を道具なんて思ってない！

ただ俺は、俺はお前に桜を傷つけないで欲しいだけなんだ！」

『シロウ、学校に遅れるぜ』

「そんなの後でいい！とにかく姿を現せ、話しにくい！」

『話は終わったし、これからの方針も決まった。あとはお前が学校にいくだけだ』

「マスター命令だ、いいから出て来い」

『……分かったから、お前は俺を道具として見てない。マトウサクラを傷つけて欲しくない。』

その要求に応えてやる。それでいいんだろ？

早く行け、学生の本分は学業だってフジムライタイガが言ってたぞ』

「お前……絶対分かってないだろ」

分かっているというのならば顔を見せて見ろってんだ。

セイバーが立っていた場所を睨みつけながらその姿が現れるのを待つ。

ここで引いてしまったら、きっと俺とセイバーの関係は協力者ではなくなる。

そんなのは、嫌だった。

『はぁー………これでいいんだろ』

「なんだよ、やっぱ納得してなんていないじゃないか」

溜息の後、やれやれといった風を装って現れたセイバーの顔は、まったく納得してなかった。

不機嫌そうに細められた赤い瞳は冷たい色をしている。

「別にいいじゃねえか、納得しました、そうですか、で。

シロウ、お前ちよつとわがままだぞ？」

「んな！お前に言われたくねえよ！

俺も黙ってたけどな、セイバー！お前がめついでぞ！？」

「がめつ……?!俺は正当な報酬しか求めてない……っていうかサービスしまくりだぞ?!」

「サービス?! いちいち報酬だ必要経費だなんだって行動する度に
なんか要求するじゃないか!」

「それは当然の報酬だ、大体お前の提案だったじゃねえか!

シロウが素人同然の未熟もんだから経費が掛かんだろーが! もっぺ
ん鍛えなおして来い!」

「俺が未熟なのは悪いと思ってるさ! だからセイバーに鍛錬頼んだ
んだろ!」

「なんでそんな偉そうなんだ! お前今日帰ってきたら覚えてろよ!」

「偉そう?! 偉そうなのはセイバーじゃないか、お茶請け切れると
怒るし!」

「おおそうだ、俺は偉いんだ! てめえよか何十倍も偉い英霊様だよ、
参ったか!」

「開き直ったな?! 大体セイバーは !」

「そもそもシロウは !」

学校には遅刻した。

士郎 SIDE END

第拾漆話：対立する主従（後書き）

士郎皆勤賞を逃すの巻。

いえ、皆勤賞だったかは謎ですが。

誤字脱字などありましたら、ご連絡ください。

第拾捌話：探究者の会合（前書き）

大分間が空きましたね、すいません。

きつと続いたり続かなかつたりします。不定期更新です。ご了承ください。

それでは、十八話目お楽しみください。

第拾捌話：探究者の会合

「ふうん、それで喧嘩別れしてきちゃったの？」

「おう、様子見に来たフジムライガに止められてな」

口論に熱中していてシロウは気付かなかっただけだが、電話がずっと鳴り響いていたのだ。

どうやらそれはホームルームとかいうものにシロウの姿がなかったのを見て、

心配したらしいフジムライガからの電話だったらしい。

うむ、フジムライガの登場を見たときのシロウの顔は見物だった。

何か俺も怒られたが。

「あ、フジムライガつつのはシロウの保護者だとさ」

「お兄ちゃんの保護者？」

「18歳でも未成年だなんてこの時代は随分過保護になったもんだ」

よなー」

その過保護さを利用したこともあるけどな。

隣りに座っているイリヤスフィールが俺のボヤキを聞いてクスリと笑う。

「あら、いいの？私はバーサーカーのマスターなのに自分の情報もらして」

「こんなん真名に繋がるもんじゃないだろ。

18以下で成人と見なされるとこが出身のヤツなんざ五萬といるだろうよ。」

大体俺は今バーサーカーのマスターじゃなくて、イリヤスフィールと話してんだよ。」

イリヤスフィールは違うのか？」

「………違わないけど。大体真名なんて関係ないわ。

どうせ私のバーサーカーが勝つんだから」

「そうそう、それでいいんだよ。今日はなー、肉まん買ってきた」

「ニクマン？食べ物？」

「おう、肉をまんじゅうで巻いたヤツって店のやつが言った」

人気のない公園にイリヤスフィールと二人、ベンチに並んで座っている。

シロウがオヤツの用意を忘れやがったので商店街に行つて、

肉まんという食べ物を買つて家に戻る途中、公園にポツンと立っている少女を見たのだ。

ま、暇だったし、いろいろあったし、こうして何でもない話に付き合つてもらっている。

ビニール袋から取り出した肉まんは紙袋で包まれていて、

白い湯気と空腹を誘う香りを冬の空に立ち上らせる。

「わぁ、真っ白・・・雪みたい」

「雪は湯気でねえし、冷たいだろが」

「そうね。ねえセイバー、それとっても熱そうね」

「熱いんじゃないか？前食ったたい焼きより湯気が・・・・・・・・・・
・ああ、マフラーか」

「うんうん、セイバーったらちゃんと分かつてるわね。」

あ。でも私に言われるまで気付かないのは減点よ?」

そりやしませんね、と謝って嬉しそうに赤い瞳を輝かすお嬢様に
以前たい焼きにやったように肉まんの包装紙の上からマフラーを巻
いて手渡す。

はむ、と齧り付くと「?」と首を傾げるイリヤスフィール。

「なあにこれ?お肉なんて入ってないわよ?」

「イリヤスフィールの口がちいせえんだよ。ほれ、俺は一口で到達
したぜ?」

「む!まんじゅうの部分が多すぎるのよ」

「イリヤスフィールがお上品に口小さくして食ってるからだろ」

「当たり前じゃない。私はレディなんだからはしたないことなんて
しないわ」

むぐむぐと口に入れた物を飲み込んで、

肉の部分に到達している断面をイリヤスフィールに向けて見せれば
口を尖らせた。

まったく、こういうもんは大きく口を開けて食うもんだってのにも
つとも分かってねえな、このお嬢様は。

俺の指摘にプンと顔を逸らして自分のペースで食べ始めたイリヤス
フィールに習い、

俺も肉まんに齧りついた。この寒さじゃ直ぐ冷めちまうからな。

「ねえセイバー」

「んあー？」

食べ終わったので包み紙を丸め、ビニール袋に突っ込んで新しいも
のを取り出していると、

イリヤスフィールが話しかけてきた。基本的に俺から話しかけるの
で珍しい。

「お兄ちゃんと仲悪いつていうなら、私のサーヴァントになる？」

「は？」

「他のやつらは殺すけど、

セイバーが私のサーヴァントになるっていうなら最後まで生かして
あげてもいいわ」

「ふうん……断つとくわ」

「な、なんで?!」

「ここで頷いたらよ、イリヤスフィールと話してることになんねえじゃねえか」

聖杯戦争に関係ない時間だから、俺はイリヤスフィールと並んで肉まんなんぞを食ってる。

ここで聖杯戦争の持ち出せば俺はセイバーのサーヴァント。

イリヤスフィールはバーサーカーのマスターになってしまう。

それはちょっと惜しいような気がする。

イリヤスフィールもそう思ったのが、コクンと小さく頷いた。

「……それもそうね」

「うむ。聖杯戦争の話は止めようぜ」

「うん」

「あ、でも肉まん分の情報は後で貰うからな」

一回は一回なのだ。対等である為に俺からだって聖杯戦争のことを

持ち込ませてもらう。

詭弁？屁理屈？ははは、そんな馬鹿な。

「……………セイバーなんか嫌い」

イリヤスフィール、この時代じゃただじゃ何も得られないもんなんだよ。

世の無常さを少女に説きつつ、俺たちは二人揃って肉まんを頼張るのであった。

「あんまり意地悪すると来てあげないんだからー！」

「ははは、情報取られっぱなしでいいんなら来なくていいぜー？」

「むー！別にいらないもん！バーサーカーには勝てないんだから！」

公園の横を通り過ぎる人が多くなってきたので早々に解散することになった。

情報？勿論聞きたいことをちゃんと聞かせていただきましたとも。当然の報酬だろ？

流石いいとこのお嬢様、踏み倒すなんてそんなことしなかった。ふ、ちよろいぜ。

可愛い負け犬の遠吠えを笑って聞きながら、走っていく姿を見送った。

「さて、と……」

シロウが家に帰ってくるまで時間はある。

イリヤスフィールに会える可能性はかなり低かったが会えた。

難しいかと思つた用件も済んだし、後は……後は、うむ。

「吉と出るか凶と出るか」

俺の場合大凶しか出たことないけどな。

辿り着いたのは柳洞寺 ではなく、その山の下方の地下洞。大
空洞の入り口。

以前森の中に仕込んでおいた出刃包丁を片手に、

魔術による偽装を潜り人一人がなんとか入れるほどの岩の隙間に身
をねじ込む。

明かりのない闇の中を進み、聖杯を目指すものなら既に用はない聖
杯戦争の大元、

大聖杯を目指す。

「 ここか」

今まで通ってきた空洞も広いものだったが、終着点は洞窟と呼べぬ
ほどに広大だった。

なんせ地下だというのに目の前に聳え立っているのは崖だ。

（地盤沈下とか起きねえのかな）

そんなことを思ってしまうのは、この洞窟に満ちる空気のせいだ。

七人のサーヴァントが揃い、聖杯戦争が始まってまだ三日目。

脱落者はおらず、聖杯戦争の終わりを待つだけのもの
なのに、
嫌な感じがする。

臭いものには蓋をしろ、という言葉に習って退散したい。

「地盤沈下しそつだから帰ります、つてわけにはいかねえしな」

ここでなにもせず帰ったら何の為に来たんだかわかりやしないの
で、

ガリガリと頭を掻きながら、崖の頂上をもう一度眺めて、歩き出す。

シロウは日が暮れる前には帰ってくるって言ったが、何が起ころか
わからないからな。

出来るだけ早く用を済ませて家で待機しとかねえと。

ランサーだったらこんなところひとつとびだろーな。いや、魔力
使えば俺も飛べるが。

そんな無駄遣いする気も起きないので、大人しく昇る。

「ふうん………こりゃ、圧巻だ」

崖を上りきって、頂上に辿り着いた俺の目の前に広がる光景に目を細めた。

魔術のことなど分からない。

目の前に広がる魔術回路がどれほどのものか、この祭壇にどれだけの価値があるのか、

何一つ理解出来ないが　　あまり歓迎できたもんじゃないことは分かる。

「一応ここから出てきた事になってるし、繋がりはあるよな……
……多分」

足元に広がる広大な魔術回路を一度撫で、感触を確かめる。

霊体になっているから可能………だとは思っただが、賭けだな。

大聖杯に腕を突っ込み、自分の魔術回路を大聖杯の魔術回路に重ねる。

うっかり取り取り込まれても踏ん張れるように実体化し、そのまま解析を続ける。

これで何も得られなかったら………大聖杯ぶっ壊す。

俺もシロウも別にいららないし、壊しても何の問題もない………
んん？

大聖杯が聖杯戦争のシステム面を管理してんなら壊しちゃえば聖杯
戦争終わらないか？

聖杯戦争がなくなれば冬木市は至って普通の町に戻るし、

聖杯戦争に巻き込まれる人々だっていなくなるだろう。元凶がなくな
るんだから。

「そりゃい、いつ?!」

ゾクリ、と逆流……いや、侵食してきた何かの気配を感じて一
気に手を引き抜く。

が、がっちりと固定されていて抜けない。

じわじわと侵食してくる何かが全身に到達する前に片手に持ってい
た包丁で

一気に実体化している無防備な腕をぶった切った。

噴出す血液。脳に伝達された痛みを少し呻くだけに止める。

切り離された腕に一瞬だけ体勢を崩すが、直ぐにその場を離れ大聖
杯から飛びのいた。

「おいおい・・・」

腕を修復しながら、溜息をつく。

情報と共に流れ込んできた 悪意。

それは有り得ない。大聖杯に溜まるのが無色の魔力ならば・・・
・それはあつてはならない。

「何でも願いの叶う魔法の釜―なんて可愛らしいもんじゃねえぞ、
コレ」

「あら、じゃあなんなのかしら」

洞窟に響く二人目の声は女のものだった。

ふわりと翻るロープ。

フードで隠された顔から覗く口元は笑みを浮かべている。

このあからさまな格好は

「よう、キャスター」

「こんにちはセイバー、敵の陣地に単身で踏み込んでくるとは随分と無謀なものね」

「はっ、そりやてめえよりも弱いやつが乗り込んできた場合たる。

実力が備わってりや、勇敢ってな　　で、喧嘩売りに来たわけじやねえんだろ？」

「あら、分かってるじゃない」

くつり、と互いに笑い合った。

第拾捌話：探究者の会合（後書き）

キャスターさん登場です。

女っ気なかったサーヴァント組みもようやく華が出てきたところで
す。

直ぐに旦那さんのところに帰りますけど。

誤字脱字などありましたら、ご連絡ください。

第拾玖話：雑木林の一戦（前書き）

十九話目です。

前半キャスターとの交渉戦（？）、
後半土郎防衛戦。

第拾玖話：雑木林の一戦

キャスター SIDE

「単刀直入に言うわ」

「おう」

「私と手を組まない？」

「何で」

「この馬鹿馬鹿しい戦争をさっさと終わらせる為よ」

まったく、最後の一人になるまで戦い続けるなんて馬鹿らしい。

私はこのシステムを作った人間の狙いなんてどうでもいい。

システムを作ったことには感謝してあげてもいいけど、そのルールを守り通す気はないの。

不完全であろうとなかろうと、願いが叶えばいい。

それを為すためには戦力が必要。門の前にいるでくの坊なんて役に立たないわ。

「貴方と私が手をくめ」

「いや、組む必要はねえだろ」

「なんですって?」

交渉を続けようとする、それを遮るセイバー。

こちらを見上げてくる瞳は不思議そう、聞き返した私に「いやよ、」と続ける。

「だってここで壊しまえは終わるじゃねえか」

あっけらかんと、なんでもないことのように、

むしろそれが当然のことのように言い切った。

「うちのマスターはお人好しで聖杯はいらねえってサーヴァントに直接いつてくる馬鹿だし。」

それ以前にこんな物騒なもん使ってまで叶えたい願いを持てるほど器用じゃねえし？」

「あ、あなたもそうだっていうの?!」

「俺？叶えたい願いがあつてコレで叶うってなら使うが、生憎と持ち合わせてないんでな」

ヒョイと両手を挙げて肩を竦めて見せるセイバーに絶句する。

聖杯戦争に呼ばれたというのなら何がしかの願いがあるはず。

嘘をついているのかと探ろうとしてもその飄々とした表情からは何も窺えない。

ああっ！門前のでくの坊だけで厄介なのに！

なんでこの聖杯戦争に呼ばれるサーヴァントは碌なのがないのよ！！

「じゃあ何故聖杯戦争に参加しているのよ貴方は!」

「願いはある。だがこんなもんにかねえてもらうほど安いもんじゃねえんだ」

腕を組んだまま不敵に笑うセイバー。

チロリと動いた赤い瞳の先にはこの聖杯戦争のシステム面を担う大聖杯。

「待ちなさい。貴方たちに必要がなくても私には必要なの。」

大聖杯を破壊するというのなら 相手になるわよ」

「あんだよ、この時代の人間大量虐殺したいってのか？随分物騒だな」

「違うわよ！そんな有象無象どうでもいいわ！」

大体大量虐殺なんて聖杯に願わなくとも容易く実行できるもの。

特に、私の網を張り巡らされたこの冬木市の人間の命など赤子の手を捻るようなものだわ。

生かしておけば延々と魔力を生み出し続ける。だから殺さない。たったそれだけ。

聖杯に死を願うほどの価値もない。

「ほーお、んじゃなんだよ。どんな犠牲を払っても叶えたい願いつてのは」

「そ、それはっ………！」

疑わしそうなセイバーの視線なんて気にならない。

私の願い　　本当は宗一郎様の願いを叶えて差し上げたい。

あの方が願うのならば聖杯戦争なんてそっちのけで全力を注ぐのにも異存はない。

でもあの人はとてもお優しく、無欲で、誠実で・・・キヤッ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・きも」

「殺すわ」

「おわっ！テメ、俺の背後に大聖杯あるってのわかってんのか!？」

「関係ないわよ。殺すわ」

「あるある！関係大有りだっつもの！あーちくしょ!」

崖の縁にいたセイバーが悪態について地を蹴り、宙に身を躍らせた。

そこを狙って魔弾を放つ。

「うおてめ！容赦なしか!」とかほざいているけど気にせず攻撃の手を止めない。

セイバークラスの耐魔力が高いのは知っていたけど　　これほど

とは思わなかったわ。

段々と威力を上げていつている魔弾の尻くがその身に届く前にキャンセルされる。

洞窟が崩れるといけないからせいぜいBランク程度の攻撃しか出来ないけれど、

この様子じゃAランクが届くかどうかとも怪しいものね……………
本当、化け物揃いだわこの聖杯戦争は。

「っち、当たりなさいよ！」

「お前が怪しい笑み浮かべながら身を擦じらせてるから悪いんだろ
ー！」

「うるさいわね、死になさい！」

「既に死人だつつの。条件次第じゃ……………つつ?!」

突然足を止めたセイバーに思わず攻撃の手を止める。

不審に思ってセイバーを見ると

「悪いな、俺のマスターが墓穴掘ってるから行ってくるわ。

あと交渉すんならまずマスターに声掛けな。一応あれでも俺のマス

「ターなんでな」

「ちよ、！」

どういふことなのか問い質そうと制止の声を掛けてもセイバーはあつという間に見えなくなった。

岩の僅かな取っ掛かりを足場にただけで洞窟の壁を縦横無尽に駆け回ったり、

風のように姿を消したり　あれ、本当にセイバーかしら。持っていたのも剣じゃなくて包丁だったし。

(でも………)

大聖杯の機能に関係のない崖の端が少し削れただけでまったくの無傷の大聖杯を見下ろす。

大聖杯を盾にすればよかったのにセイバーはわざわざその場を離れた。

それは即ち交渉の余地があるということに間違いなくて………

「ふふ、お人好しのマスターにお人好しのサーヴァント、ね」

さてまずは、セイバーのマスターを迎える準備でもしよつかしら？

キャスターSIDE END

士郎SIDE

弓道場の裏の雑木林。

女生徒を襲った”誰か”。

遠坂に短剣を放った”何か”を追って踏み入った雑木林にいたのは、

黒衣に身を包んだサーヴァントだった。

「は、」

喉を狙った一撃。

脳天を突き刺そうとした一撃。

どちらも俺の命を刈り取るうとしたサーヴァントの攻撃を防いだ。

しかしそんな偶然は続かない。次に襲われては防ぎようがないし、逃げられる術も持たない。

サーヴァントの動きを見るなんて俺には出来ない。

俺に出来ることといったら背中から襲われることがないように、

こうして木に背中を預けて次の襲撃がどこからくるのか待ち構えるだけだ。

「は、ははは

」

次に襲われたら間違いなく殺されると分かっているのにそれを待ち構えている。

そんな矛盾に笑いたくなる。

雑木林に響く鎖の音。

頭は既に真っ白で、時間の感覚なんてない。

見えない襲撃に怯えている今だって、「生きたい」と願う自分の夢でしかないのかもしれない。

ふと、武器を握る左手が目に入った。

「セイバー」

自分ではサーヴァントには太刀打ちできない。

ならアイツに頼るしかない。

令呪はサーヴァントに対する絶対の命令権だが、

それを使えばサーヴァントが本来なしえない魔法をも可能とする魔力の塊でもある。

コレを使えば、この窮地を脱する事だって出来るだろう。

だがそれは、

『元より俺はサーヴァントと戦うだけの物』

そんなセイバーの言葉を肯定してしまうものではないのか。

ただでさえ都合のいいことをいって協力してもらい、ここでも都合よく助けてもらうのか。

あと二つしかない切り札とも言える令呪を使って？

「は」

笑う。

「そんなの　　ごめんだ。」

俺はまだ、出来ることをやっていない」

そうだ。

拙いけれど、この腕には武器がある。

それに体だつてまだ動く。

場所が悪いのなら移動すればいい。

セイバーを呼ぶのは出来ることがなくなつて、万策が尽きた時
。

「驚いた。令呪を使わないのですね、貴方は」

「！」

声の上から響く。

上　やはり木の上に潜んでいるのか。

しかし話しかけてきてくれたのはいい。

話を続けて声から敵の位置を探ることが出来ればあるいは。

「…………ふん。生憎残りが少なくてな。こんな事で使ったら、この先やってられないんだよ」

「……………そう。私のマスターと違って勇敢なのですね、貴方は」

「では、私もやり方を変えましょう。」

サーヴァントのいないマスターに本気は出せませんから　貴方は、優しく殺してあげます」

声が止まり、ジャラジャラと鎖が鳴る音だけが響く。

……………来るか。

俺のやるべきことはまず、相手に有利な地であるこの林から出ることだ。

それにはあのサーヴァントの”釘”を数回受け止めなくてはならな

い。

椅子の足を強化しただけという頼りにするには心許ない即席の武器で。

バーサーカーの攻撃を木刀で受け止めたセイバーのコツを聞いておけば良かったかもしれない。

そのコツを聞く為に、もう一度あの馬鹿と話す機会を得る為に、ここは生き残らなければ。

（せめて、そう）

校庭で一度だけ見た、赤い弓兵が握っていた黒と白の一对の短剣を思い描いて手元を見る。

この棒が、あいつの武器ぐらい立派だったら、防ぐどころか反撃さえ出来るだろうに。

「行くぞ」

もしもの話を振り切って、顔を上げる。

雑木の出口まで、わずか三十メートル程度。

それだけを頭に入れて木に預けていた背中を離して
俺は走っ
た。

「っふ　　！」

頭上から放たれた一撃。

地面スレスレに着地したサーヴァントが左側から放った回し蹴り。

二度の襲撃を防がれた苛立ちか、正面から立て続けに放たれた剣戟。

その全てを尽く弾き返す　　！

「っ、そんな　　！？」

驚きの色を含んだ眩きと共にわずかに後退するサーヴァント。

しかしそれも一瞬のこと。直ぐにその眩きは苛立ちを含む。ぞ
つとするほどに綺麗なものに変わる。

「 貴方」

「は、大したことないな、他のサーヴァントに比べたら迫力不足だ
」!

立ち塞がるサーヴァントをなぎ払う。

「っ………!!」

黒いサーヴァントは俺の武器を受け止め、長い髪を靡かせて飛びの
いた。

「行ける ！」

もう邪魔はいない。

黒いサーヴァントは離れた。

あと、ほんの数メートルで出口に辿り着く。ならばこのまま

「いいえ、そこまでです。」

貴方は、始めから私に捕らわれているのですから「

「え　　？」

体が倒れる。いや、後ろに引っ張られる。

さっきまで忘れていた右腕の痛みが戻ってくる。

ただでさえ大穴が開いている腕が、何か得体の知れない力に引っ張られている　　！？

「まだ判りませんか？貴方の腕に刺さったそれは、私の杭だという事に」

「おまえの、杭　　しまっ・・・！」

サーヴァントの言葉を反芻して、状況が理解出来たと同時に左手を

右手へと伸ばすが、もう遅い。

血に濡れた腕はひとりでに持ち上がり、サーヴァントの意思に従ってそのままどこまでも

「なーんでそう、抜けてんのかねえ我がマスター様は」

シャンと涼やかな音がしたかと思うと、俺の手を持ち上げようと動いていた鎖が力をなくす。

腐葉土の地面に伸びた鎖を辿っていけば、見慣れた黒いブーツ。

視線を上げていけばこちらを庇うようにサーヴァントと対立する男の背中が見えた。

「セ、イバー………」

「勝てなきゃ呼べ。呼ばなきゃ勝て。そんでなきゃ戦うな」

「逃げてたじゃないか………」

「お礼は要らん。巻き添え食いたくなかったら」

一瞬にしていつもの軽鎧がセイバーの身を覆った。

「隅っこでガタガタ震えてな　　！！」

「　　つつ！！」

気合一閃。

セイバーが振るった武器は既に目に見えない。

しかし敵サーヴァントはその攻撃範囲を読んで一気に後方に跳んだ。その反動のまま、木々の間に紛れるように飛び上がり、姿を消した。

「　　逃げたか」

「そう、なのか？」

「でなきゃ首を貰ってる。　　ち、蛇は嫌いだ」

「蛇？」

まさかあのサーヴァントの正体がわかったというのだろうか。

出刃包丁を手持ち無沙汰に弄ぶセイバーに疑問の声をかけるが、答えは帰ってこなかった。

「衛宮君っ！！」

「遠坂っ!？」

こちらに向かってくる人影が見える。

隣りにはセイバー。目の前には遠坂　　ああ、俺は生き残れたのだ。

そう実感したらその場へたり込んでしまった。

士郎SIDE　END

第拾玖話：雑木林の一戦（後書き）

誤字脱字などありましたら、ご連絡ください。

第貳拾話：遠坂凜式交渉術（前哨戦）（前書き）

一週間以内……ギリギリ間に合いませんでした；
いやあ、月日が経つのは早いですね……すいません。

二十話目は土郎の手当てと遠坂さんの交渉話です。
お楽しみいただけたら幸いです。

第貳拾話：遠坂凜式交渉術（前哨戦）

敵サーヴァントが立ち去ったことを知って気が抜けたのか、

その場にへたり込んでしまったシロウの隣りに膝をついて傷付いた腕を取る。

「結構乱暴に抜いちまったけど大丈夫か？」

「ああ、一気に抜いてくれた方が助かった」

本来ならば血が噴出さないように治療の目処が立つまで刺さったままにしておくのだが、

いかんせん刺さっていたのが敵サーヴァントの武器だ。

破壊する術がない訳ではないだろうが、俺には不可能だったのでその場で引き抜いた。

まったく、あれが刺さっていた時点で逃げ場もなく、結末は決まっていたというのに、

じりじりと甚振るような真似をするとは………ほんと、蛇は気に食わない。

それともシロウが甚振りたくなるほどに興味を引いたのか？

ま、おかげでこうしてシロウの救出に成功したわけだが。

「って！何暢気に話してんのよあんたらはーっ！！

とにかく血止めしないと……！衛宮君、何か巻く物持ってない！
」？

「ああつと……あ、ハンカチ発見。いつも桜が用意してくれてるんで、きつと清潔」

シロウ、それは惚気か。

シロウの発言に突っ込みを入れる余裕もないのか、リンは差し出されたハンカチを見て呻いた。

「う、似たもの同士か。……セイバーは？」

「ない」

「その腰帯寄越しなさいよ」

「ばっ！ななな何言ってんだよ遠坂！」

きつぱりと言ったのに俺の格好を上から下まで眺めていたリンの目

に留まったのは腰帯。

二本あるなら一本くらいいいじゃない、といった所か。

腿に縫い付けてある鉄板が重いから二本で支えてるんだが……
ま、いつか。

しかしここで過剰反応するのは俺のはずであるのに何故お前が反応するんだシロウ。

「仕方ねえなーそんなに見たいってんなら」

「ちちち違つわよ！止血する為だっていってんでしょ馬鹿！いいから寄越せ！」

顔を真っ赤にさせてうるたえるリンに「へーへー」と頷いてずり落ちないように支えながら、

腰帯を一本だけ抜き取って渡すとリンはひったくるように奪ってチヤキチヤキと手当てをする。

ずり落ちないようにいつもよりもややきつめに残った腰帯を巻き、固く縛る。

「よし、これで応急処置はこんなところね。

……それで、あいつなんだったの？追いついたら交戦して

たみたいだから援護しようとか来たけど」

「俺も判らない。ここまで追いかけてきて、襲われた」

「俺もいないのに追いかけるんじゃないやねえっての。死にたいのかシロウ」

「わ、悪かったって。セイバーがいないってことすっかり忘れてた」

「……………はあ」

「……………はあ」

リンと二人で揃って溜息をつく。

まあ俺はリンとシロウが交戦してる時から気づいていたんだが。

いやー、まさか敵サーヴァントに突っ込むとは思わなかった。

うむ。見事にこれまでの忠告をさらっと無駄にしてくれやがったな。

「う……………そんな顔するなよ二人とも。正体は掴めなかったけど、ともかくあいつもサーヴァントだろ。」

なら、俺たち以外にマスターがいたって事がわかって良かったじゃないか」

「……………そうね。学校に私たち以外のマスターがいるって事

は知ってたけど、

ようやく尻尾を出したってワケか」

リンはとっくに第三のマスターに気がついていたらしい。シロウがちょっと口元引き攣らせてる。

大丈夫だシロウ、俺はお前に期待していることなんてなーんもないから。

今正に信頼度が底辺すれすれだから。

「む？待った遠坂、さっきの子はどうなった……！！」
「？」

「持ち直したわ。今は保健室で寝かせてあるから、もう大事はないと思う」

「そうか。それは、良かった」

目を細めて安心させるように笑うリンに、ほつと胸をなで下ろすシロウ。

どつやら話は落ち着いたようだ。

なら

「んじゃ、こっちの用事を済ませようか」

チャツ、と握っていた包丁をリンの喉元に突きつけた。

士郎SIDE

「
「
「
「

今までの和やかな空気が一気に張り詰めた。

少しでも遠坂が動けば、あの包丁は遠坂の喉を突き刺すだろう。

それが判っているから遠坂はまっすぐに睨みつけるだけで、指一本も動かさずにいる。

遠坂は動けない。ならば俺が動くしかない。

「セイバー?!何やってんだ!」

「何?敵サーヴァントのマスターがサーヴァント連れずに出歩いてんだぜ?

「コレを殺さないで何を殺せって言っただよお前は」

「殺すって……!遠坂は」

「お前を狙った。シロウは自分の命を奪おうとしたヤツを生かすつてのか?」

「遠坂は俺を殺そうと思えば殺せた。」

「そもそもアーチャーをけしかければ俺なんてとっくに死んでる」

赤い弓兵の名前を出して、

「なんでこんな肝心な所で出てこないのかと記憶の中のアーチャーを詰る。」

「とことん気に食わないが、最初から遠坂じゃなくてあいつが出てきてたのなら、」

「俺はこんなところでこうしてセイバーと会うこともなかった。」

それに遠坂はとんでもなくいいヤツだ。

甘えたとセイバーは言うかもしれないが、彼女に死んで欲しくない。生き残って欲しい。

「セイバー、お前がここで遠坂を殺すって言うなら　　令呪を使
つても止める」

「なっ　　っ！」

驚きの声を上げたのは遠坂だった。

思わず動きかけたその体は、セイバーの鋭い視線と、少し食い込んだ刃先によって止まる。

「命令権を持っているのはお前だし、それを使えるのもお前だ。

だから俺はお前が使うべきと判断したならその判断に異を唱える気はない」

分かっている。

桜の時だってセイバーは何も言わなかった。

ソレをいつ使うか決めるのはお前だ、困るのはお前だ、と言うだけで。

それが信頼から来るものならどんなに嬉しいことか。

でも違う、ということとは分かっている。

俺はセイバーに対して信頼に足るものをなにもしてやれてない。

自分の無力さを痛感して、早く強くなりたいと思う。彼に何かを返せる位に。

「俺は使いたくない」

「当たり前だな。限りある資源だ」

「違う。そうじゃなくて セイバーに命令で言うことを聞いてもらいたくない。」

俺は、セイバーに理解して、ちゃんと納得してもらいたい」

未熟な俺では戦闘で足を引っ張ってしまう。

戦闘面でセイバーの協力者として出来ることはまだ少ない。

ならばせめて、と思う。

夢で見た大人たちのようにセイバーを道具のように扱いたくない。

俺の意思を少しでも尊重してくれているのなら、俺だってセイバー

の意思を尊重したい。

勿論譲れないものもあるから……そこはとことん話し合うくらいしかできないけど。

「……………」

「それにセイバーはサーヴァントと戦うんだろ？」

マスターとの戦いは俺の分野だ。それくらい任せてもらえないか？」

「……………は、じゃあなんだ、お前がリンを殺すって言うのか？」

「殺さない。戦うってんならアーチャーを呼んで正々堂々と戦う」

「……………はあ……わあ……」

俺もあの弓兵の引導は俺が渡してやる気だったからな。

マスター死んで魔力切れで消える、なんてつまんねえ落ちつけさせる気はねえ」

「セイバー」

「礼は言つなよ。俺はマスターの指示に従っただけだ」

遠坂に向けていた包丁を腰帯に挟んで、腕を組み、居心地悪そうに

顔を逸らす。

セイバーがこの場を任せてくれたのなら話は早い。

遠坂の硬直していた身体が少しだけ力を抜いたのを見て、話かける。

「で、どうする？」

「なにがよ」

「俺は喧嘩する気はないけど遠坂が引き下がれないって言うならア
ーチャーを呼んでくれ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

遠坂はこつちを睨み、セイバーを睨み、悩みながらも苛立ちを含ん
だ微妙な表情をし、

プイと何も無い雑木林の方へ顔を向け、またこちらを恨みがましそ
うに睨み、

・・・・・・・・・・・・・・・・深く深く溜息をついた。

「やらないわよ。っていうか出来ないわよ・・・・・・・・・・また
借り出きちゃったし」

「だよなあ、本来ならリンの聖杯戦争も人生もここで終了だったも

んなー」

「分かってるわよ！兎に角、ここで一戦交えるなんて恩を仇で返す真似しないわよ！！」

悔しそうに恨みがましそうにこちらを睨む遠坂に、

にやにやとからかい混じりの声で追い討ちをかけるセイバー。

があー！と半ばヤケクソ気味にセイバーに噛み付く遠坂。

取りあえず、遠坂と喧嘩はせずにするだことにほっと安堵する。

自分で聞いてみたけど、やっぱり遠坂とは喧嘩なんてしたくない。

だから遠坂が引いてくれてすごく、助かった。

「じゃ、そろそろ行くわよ。辛いだろうけど、うちに着くまで我慢して」

「……………?」

セイバーと言い争っていたのに、

ざかざかと落ち葉を踏み散らしながらこちらに来た遠坂が突然手を差し出してきた。

遠坂の意図が分からずにその手を眺めて首を傾げて遠坂の目を覗き込む。

「だから、私の家に行くわよって言ってるの。」

衛宮君じゃその傷を治すなんて芸当出来ないでしょ」

「あ そりゃそうだけど、なんで？」

「何でもなにもないわよ。その傷、治療しないと壊死しちゃうじゃない。」

それで片腕にでもなられたら、私の落ち度みたいじゃない」

私を庇って出来た傷だし、とぼそぼそ呟いて目を逸らす遠坂をポカんとした顔で見上げる。

いつまでも手を取らない俺に痺れを切らしたのか「いいから」と俺の手を引く遠坂。

突然近付いた距離に目を白黒させながら戸惑う。

助けを求めてセイバーに視線を走らせれば、面白そうににやにやと笑う顔と出合った。あの野郎。

士郎SIDE END

わたわたと顔を赤くして慌てるシロウを見ているのもいいが、

折角出来た借りをここで返されてしまうのは非常に勿体無い。自分達で解決できる物事なら尚更。

「リン、シロウを放してやれ。それくらいの傷なら治す当てはある」

「はあ？衛宮君に？無理に決まってるじゃない」

「シロウ、お前何か忘れてないか？」

「え？・・・・・・・・・・・・・・・・あ！」

俺が示すものに思い当たって、

リンの拘束がわずかに緩んだ隙を付いて素早く掴まれていた腕を抜き取るシロウ。

ゴソゴソとポケットを漁り、取り出そうとした腕を俺は止めた。

「待てシロウ、一時休戦なだけでリンとは敵同士だ。意味は分かっているだろ、リン」

「……そうね。でも私もその傷がちゃんと治るって証拠を掴むまで引き下がれないの」

こちらが指摘した境界線を乗り越えてまで、敵であるシロウの心配をするリンに少しだけ驚く。

ふうん？と内心笑みを浮かべてリンの目を見るが、その瞳は逸らさず、まっすぐに俺を見る。

「ここじゃ誰の目があるかも分からないし、詳しいことは私の家で話したいんだけど、

衛宮君、それにセイバー　私の提案を受ける気はないかしら」

「提案？」

「ええ、損はさせないと思うわ」

「んで、その提案を聞く前提がシロウの治療方法ってわけか。

何も聞かさずに先払って交渉舐めてんのかって言いたいが……
・・シロウも限界だろうしな」

血止めをしているが、あくまでそれは応急処置でしかない。

これ以上放って置いて悪化することはあっても良くなることはないだろう。

リンは引く気はないし、俺はリンに手を出せない。リンが持ち出す提案も気になる。

「その提案、こっちに有利なものだろうな」

「ええ、私が考える分じゃそっちも受ける甲斐はあると思うわ。勿論、私にも利益はあるけどな」

「そこまで言うんならいいさ。リンは嘔吐かないしな」

「………えーと、治してもいいのか？」

「さつさと治しなさいよ。それともなに？衛宮君には自虐趣味でもあるわけ」

「あるわけないだろ！遠坂たちが話し合ってるから待ってたんじゃないか」

「あはは、話に夢中になってた隙に治しちまえばいいのにシロウはほんと痛いのが好きなんだな」

「んなわけあるか！たく、待ってて損した」

不貞腐れた顔をしてポケットから護符を出すシロウ。

穴の開いた傷口にそれを押し付ければ、血に含まれた魔力に反応して傷の修復を始める。

それを見たりリンが目を見開いて、ありえないものを見るかのように指に摘まれた護符を見る。

「……………なにそれ」

「護符」

「護符?! っていうか何その桁違いの魔力!? しかもほぼ何の工程もなく発動するってなにそれ!」

「まあまあ、そこらへんの種明かしまでするほど親切じゃねえよっとな」

「すごいよなこれ。もうほとんど痛みがない」

「すごいで片付けられるものじゃないでしょうに! うああ勿体無い」

あんたら何も分かってない! と叫ぶリンが非常に印象的だった。

第貳拾話：遠坂凜式交渉術（前哨戦）（後書き）

前哨戦とのことなのでここまで。

本番は次回に持ち越しとなります。

出来れば次回で三日目を乗り切りたい………善処します。

誤字脱字などありましたら、ご報告ください。

第貳拾壹話・遠坂凜式交渉術（対セイバー戦）（前書き）

二十一話目です。

残念ながら三日目を乗り越えられませんでした；
たぶん次の話まで三日目が続くと思います。

第貳拾壹話・遠坂凜式交渉術（対セイバー戦）

リンの家はシロウの武家屋敷とは正反対の住宅地にあった。

シロウの家が和風であるのなら、リンの家は洋風の古い歴史が刻まれたような洋館だ。

内装も古めかしい あ？あんていーく？っていうらしい。

で、リンの家の居間に通されるとふわりといい香りが漂っていた。

「ただいまアーチャー」

「ああ。茶の用意は出来ている」

「ご苦労様。二人とも紅茶でいいわよね、ミルクと砂糖は自由に入れて頂戴」

二人がけのソファに促されたが、一人がけのソファに座ってずりずりと自分の紅茶を回収する。

俺の行動を見てリンとシロウが微妙な顔をしているが知らん。

生憎と空いている席があるのに男と隣り合って座る趣味は俺にはねえ。

「紅茶、か。ミルクと砂糖入れるとどう変わるんだ？」

「えーっと、味が甘くて、まろやかになる………んじやないかな」

「セイバー貴様は良くミルクティーを飲んでいるだろう。あれと似たようなものだ」

「ふうん、調味料入れただけで名前変わるのか」

この時代の飲み物は不思議だ。

白い小ぶりの器の蓋を取り、砂糖とミルクを確かめて紅茶に注ぐ。

ミルクティーにしたいんだがどれだけいれりゃいいんだか。いや、両方入れたらミルクティーなのか。

「さて、学校で話した提案なんだけど」

一口だけ紅茶に口をつけ、気分を入れ替えたリンが姿勢を正して話を切り出した。

その背後には面白くなさそうに給仕をしているアーチャー、

……お前サーヴァントだよな、茶坊主じゃなく。

ちなみにリンと向かい合って座っているのはシロウ一人だ。

俺は二人を横から眺めている。

俺は基本的にシロウの指示に従うだけだしな！。

気に食わない時ややるべきことがある時は従わないが。

「衛宮君、休戦しない？」

「休戦って……休戦、だよな？」

まあいきなり敵意満々で、突然襲ってきた敵にいきなり「休戦しない？」なんていわれても困るわな。

聞き間違えたかとこちらに不安そうにシロウが視線を寄越すが、肩を竦めるだけにする。

この状況に持ってきたのはシロウだ。だったら自分で片付けてくれ。

ま、割に合わない提案だったら口出しさせて貰うけどな！。お、この紅茶うめえ。

「衛宮君は気付いていないかもしれないけど、

学校にいるほかのマスターが厄介なことしてくれてんのよ」

リン曰く、リン達が通う学校に悪質な結界が張られているらしい。

その結界の最終的な狙いは自分のサーヴァントの強化。

俺たちサーヴァントは基本的に霊体だ。つまり栄養となるのは精神と魂。

その魂を効率よく吸収する為、余分な物である肉体を溶解し、魂だけを取り出す。

ただそれだけの為の結界だ。そして生贄は学校に通う人間全員。

常に大人数が留まっているのだからこれほど適した場所はないだろう。

「……………狙いはいいんだが、やり方がお粗末っていうか馬鹿っていうか……………」

んー、アホか？って笑顔で見下してやりたい。きつと怒る。そこを更にからかつて……………ゴホゴホ。

「……………マスターはマスターだけを狙うわけじゃない、か」

シロウの膝に置かれた手に力が籠る。

理解はしていたが、身近でそれが現実起こって実感をした、ってところか。

シロウが何も気付かずに暢気に過ごしていたことに怒りと後悔を感じているのが、

わずかに俯いた表情から分かる　　なんで自分を責めるのかね？
俺には良く分からん。

シロウは犯人と自分に怒りを覚えている。

でも俺は　　無条件に賛成は出来ないが、真っ向から否定する気もない。

(呼び出されるサーヴァントはマスターに似ている所があるっていうけど、)

俺とシロウは例外、かもしれんな。

涼しい顔で足を組み、ソファに身を沈めて紅茶なんぞを飲みながら二人のやり取りを眺めていると、

アーチャーの冷たい視線がシロウから俺に移された。

俺らに取っちゃ当然の、しかしシロウ達にとっちゃ爆弾じみた質問を投げかけてきた。

「そういえばセイバー、貴様は魔力の供給が不十分だったな。貴様はどうなのだ？」

「俺？」

「っ、セイバーはそんなことはしない！俺がさせない！」

「ふん、本当に貴様ごときに舵が取れているのか？その割には随分と自由に満喫しているようだが」

この提案を考えたのはリンだろうし、アーチャーはあまり乗り気じゃないんだろうな。

リンを殺そうとしたのは気付いただろうし、俺がシロウから離れて好き勝手してるのを知ってるし。

んーでもなあ、アーチャー。

「提案はそつちが持ってきたんだろ？その質問がどついう意味か分かってんのか？」

「ハッ、初心者ぶるのは止めてくれセイバー。俺が何故その質問をしたか、貴様なら分かるだろう？」

「アーチャー！私から休戦を提案しているのよ？分かってるの貴方」

「凜、君とて気になっていたことではないのかね？ここははつきりさせた方がいい。」

セイバーがいざという時学校に結界を張っているサーヴァントのよ
うなことをしないかどうかをな」

「そ、それは……いいえ、私は士郎とセイバーを見込んで休
戦を提案したの。聞かなくていいわ」

一瞬だけ戸惑ったのは、戦闘中の俺を見ているからだろう。

そして俺に殺されかけたからだろう。

それでもリンは、最終的に「シロウと休戦協定を結ぶ」と決めた自
分を信じた。

リンのアーチャーを見返す目に迷いや戸惑いはない。

赤い主従がにらみ合ってすっかり蚊帳の外になっているので、はあ
と溜息を吐いて意識をこちらに向ける。

「こんなギスギスした状態じゃ休戦協定もないわな」

「せ」

「シロウも気になってんだろっし言っが、俺はやってねえよ」

信じるか信じないかはそっちの勝手だがな、と付け加えておく。

確かに保有スキルの極悪さからみればやってもおかしくないが、無駄な殺人は趣味じゃない。

聖杯なんて使う気はさらさらないのだから勝ち残っても俺にはプラスにならない。

残念ながら、返ってくるものがないのに労力使うほど勤労者ではないのである。

ただ働き？なにそれ不味いよ、の精神だ。

「シロウが他人を犠牲にしてまで聖杯欲しいってんならその手を使ってもいいが」

「いい！使わないでくれ！！」

「な？これだろ？別に俺だって無差別大量虐殺したいってワケじゃないしな」

ちらりと視線をやればブンブンと勢い良く首を振るシロウ。

この戦争に参加する理由が無関係な人間を巻き込むマスターを止める為、なんだから当然の反応か。

「ですって。これで疑問は解決したわよね、アーチャー」

「ふん」

「じゃ、疑いも晴れたってことで、

学校に潜む敵マスターがいなくなるまでだけど………休戦協定を受けてくれるかしら？衛宮君」

「もち」「なあ」「え？」

笑みを浮かべて首を傾げるリンに頷こうとするシロウを遮って間に乗り込む。

休戦協定の了承を遮られて二人はポカンとしていたが、すぐにこちらをむつとした表情で睨む。

うむ、手と手を取り合って戦場を乗り越えようとする男女は微笑ましいが、

微笑ましい情景だけで乗り切れるほど甘い戦場ではないのだよ少年少女よ。

「なによ、セイバー」

「休戦協定は学校のマスターを倒すまででいいのか？」

「ええ。よほどのことでもない限り協定は維持しないわ」

「ふうん。ってことは俺らがいなくてもバーサーカーを倒しうる術があるってことだよな。」

さっすが始まりの御三家。伊達に歴史を積んでないってか」

憧れちゃうぜ、と軽く言っつて椅子に座りなおして足を組み腕を組む。

「んじゃ、こつちもさつき切り札見せてやったんだからそれに見合うものを返してもらおう。」

この協定でお前らの利はこちらから攻撃されないこと。戦闘になった際の援護。

そして敵マスター搜索の足が増えること、

後は共闘するにあたり相手の手の内を状況次第で見ることが出来る、くらいか？

……ま、コレは俺らにも言えることだがな。

これだけだったらいーブンだが切り札を見せてやった見返りがない」

「う」

「別にアーチャーの切り札見せろってワケじゃねえ。」

リン、お前の切り札を見せるか、俺らが既に支払ったものに見合った対価を払ってもらいたい」

「凜、どういうことだね」

あの場にいなかったアーチャーには俺が何をいつているのか、

何に対しての請求をしているのかわからないだろう。恐らくリンはそこまでの説明をしていない。

学校からリンの家まで行く間に話で気を逸らせていたし、家に着いてからは協定についての話だけだ。

アーチャーはこういう交渉ごとには強そうだからな、参加は控えて欲しい。

リンに説明を求めるアーチャーの言葉を遮って更に畳み掛ける。

「ああ、言っておくが先払いした、という行為も加算してくれよ？」

たじろぐリンにニツコリと笑いかける。

「……ま、休戦協定結ばないってなら全部チャラになるけどな。

こっちが敵の甘言に騙されて手の内を晒した馬鹿だった、という落ちがつくだけで。

まあトオサカリンが、シロウに借り作って、自分から提案して、

更にリン自身が「損はさせない」と発言していながら、

自分から「やっぱ提案止めるわ」って言えるようなヤツなら、
「どな」。

「……………セイバー、お前さあ……………」

「シロウは黙ってる。で、リン？」

「うぐぐ、分かってるわよ！」

「おい、話がみえない。説明しろ」

リンは俺との交渉について考えてるし、俺は説明する気はない。

シロウにいたっては言わずもがな、である。アーチャーには蚊帳の外でいてもらおう。

顎に手を添えて、考え込んでいたリンが顔を上げてこちらを見た。

「私の切り札はそうバンバン撃てるものじゃないの」

「そりゃ切り札だからな」

「だからここで無駄に消費するわけにはいかない。

使うときには使うけどそれは今じゃない……貴方達から何か他に要求はある？

出来る限り善処するつもりだけど」

「ふむ……じゃあ、シロウに魔術師として基本的な指導をしてもらいたい」

「はあ？」

「こいつ魔術発動した時微妙に息切れすんだよ。ちょっと調子見てください。」

「んでおかしいところあったら直して欲しい」

強化しか使えない、とか言っておきながら強化使つと汗かいてるんだよな、時間もかかるし。」

戦闘中にそんな隙を見せてたら生きていけない。

鍛錬の時に調子を見ておいてよかった……使えないから使わないで鍛錬続けただけだな。

「ちょっと、それ手の内見せるってことじゃない。馬鹿？」

「馬鹿じゃねえよ。隙が出来るような魔術を主に使ってるんじゃない。闘中役に立たねえだろ。」

それに協定を結ぶ相手として基本的な力量は見ておきたいし、

そっちも少しは情報公開するつもりだったんじゃないの？」

「う、まあ、そのつもりだったけど……長くなるわよ？衛宮君が置かれていた状況とか聞かなきゃだし」

「別にいいぜ。いいよな、シロウ」

「え、ああ。俺は構わない。俺も遠坂のこと気になるし」

「ふーん？ま、いいわ。別に私が不利になるわけじゃないしね。それだけ？」

「まさか。あとは、俺は魔力温存の為にシロウに付きっきりってワケじゃない。

だから学校にいる間だけでいいからシロウのことも気に掛けてやってほしい」

「それは私に小僧の護衛をしろということか」

「優先順位はリンが一番だぜ？シロウが狙われてリンが狙われてなかつたら助けてくれてことだ」

「……………そこまでしてこの協定を結ぶ意味があるのかね、凜」

「アーチャーは消えてて。

いいわ、無防備な衛宮君を狙って馬鹿なマスターが引つかかるかもしれないしね」

「……………それってさ、」

「うむ。間違いなく生餌だな」

「やっぱり……………」

ずーんと落ち込むシロウ。自分が置かれた状況に文句があるなら強くなれ。

「他には？」

「んー、やって貰いたいことはこんなもんかな。期限は協定が続くまで。」

それまではリンが魔術に関しての指導してくれるから存分に利用しろよシロウ」

「ああ……………ありがとな、セイバー」

「俺に礼を言うんじゃないやねえ。リンによろしくとでも言っとけ」

「む、そこまで持って言うてくれたのはセイバーじゃないかお礼を言っただけが悪いんだ」

「軽々しく言うなって言うてんだよ。大体コレはお前の為じゃなく

て俺が」

「ちょっと、口喧嘩する前に協定結ぶか結ばないかの返答くれな
い？」

怪しくなってきた雲行きにまったをかけたのはリンだった。

こっちの条件はもう引き受けてもらえることになっている。ならば
協定を断る理由はない。

「どうする？シロウ、お前が決める」

「いろいろ条件つけちゃって悪いな……でも、こっちから
頼みたいくらいだ。」

喜んで受けさせてもらつよ遠坂。よろしくな」

「ええ、こちらこそよろしくね士郎。貴方が裏切らない限り私たち
は協力関係よ」

笑い合いながら手を握るシロウとリン。

さて、俺はこれからどうするかな。

第貳拾壹話・遠坂凜式交渉術（対セイバー戦）（後書き）

以下ちよつと舞台裏

士「なあ、やっぱり俺にも何か出来る事ないか？遠坂やセイバーたちに頼りっぱなしっていうのも悪いし……」

セ「そうだな……じゃあ敵の加虐心を、いや怒りを煽るような行動を心がけてくれ」

凜「あらそれなら大丈夫よ。士郎の無防備っぷりは呆れを通り越して怒りを覚えるから」

セ「そうなのか？良かったなシロウ、今のままのお前でいいってよ」

士「……桜、俺今凄くお前に会いたい……」

ア（霊体化してよかった）

切り札でもないのにセイバーさんが「切り札」連発しているのは仕様です。

誤字脱字などありましたらご報告ください。

第貳拾貳話・動き出す影（前書き）

・・・・・・・・えっと、すいませんお久しぶりです。遅くなりました。まさか自分でもここまで長引くとは思いませんでした。

一応不定期更新としていましたが本気で一ヶ月越えるんじゃないかと；

待っていてくださった皆様申し訳ないです；

取りあえず三日目は終わりました。

危うくもう壱話分増える所だったのでガリガリ不要なやり取り削りました。

なんとか壱話分に収めた第二十二話をどうぞ。

第貳拾貳話・動き出す影

予期しない訪問者が去り、山の魔女が去った柳洞寺の地下。

広大な洞窟、聖杯戦争のシステム面を担う大聖杯、

それら全てを見下ろせる天井の人が入り込めない僅かな隙間。

数分前に起きたサーヴァント同士の争いというにはお遊びといえる
争いを

終始眺める目　　そしてその争いを間接的に止めた存在が一つあ
った。

それはなにも出来ない一匹の蟲。

ただ眺めて情報を本体に届けるだけの役割を持った蟲だ。

湿った空気が籠る地下室。

入ったものが必ず顔を顰めるような匂いと気配が充満する密室。

キイキイとザワザワと耳から犯すような声と音が響く虫かじ。

そこでほうと安堵の息を吐いた小さな影

間桐家の当主間桐臓

硯の姿があつた。

深く皺の刻まれた顔には安堵と怒りと不快感と……様々な感情が表れている。

老爺の頭に残っているのはたった一つの言葉。

『だってここで壊しまえば終わるじゃねえか』

憎憎しいほどにあっけらかんと、何でもないことのように言い切ったサーヴァントの言葉。

「たかが聖杯にくべられるだけの生贄の分際で……」

あの言葉を聞いた瞬間、あれが何を言っているのか理解出来なかった。

しかし動揺と、怒りなどの感情はすぐに切り離され、やるべきことを行動に移していた。

孫に電話で遠坂の若当主の襲撃予定を早めさせ、

大聖杯を破壊しよう等と戯言を抜かしたセイバーのマスターを危機的状況に送った。

狙い通りにセイバーが地下洞から立ち去った時に今まで抑えていたものがあふれ出してきた。

しかし感情のままに動くことがどれだけ愚かなことかを臓硯は知っていた。

そもそも、この老人にはそんなことをするだけの余裕などない。

それを知っているのは他ならぬ臓硯自身だった。

「価値の分からぬ虚けものにやれるようなものでわなないわ」

セイバーのマスターに焦がれているもう一人の孫を動かしやすいように手を出さずにいたが、

これまでだ。

しかし最優と呼ばれるサーヴァントに、数段にランクが落ちたライダーが勝つのは難しい。

(なに、やる気が出ぬのならば出させてやればいいだけのこと)

かか、と嗤う。

「やて、どじするかのう」

まるでその眩きに応えるようにキイキイと轟が鳴いた。

士郎SIDE

「んじゃ、俺帰るわ」

スチャ、と手を上げてそれだけ言うとセイバーは一度も振り返らずに遠坂の家を後にした。

セイバー曰く、

「本来ならここに残ってやってもいいんだが、シロウとアーチャー・
……てめえら仲悪すぎ。」

こんなんじやいざとなった時シロウが逆に討ち取られるんじやないかと心配で

マスターの安全を第一に考える俺としてはだな、やっぱり確証が欲しいわけですよ。

という訳でせめて何事もなくシロウの家まで遅れたら俺も安心だから送ってけアーチャー」

・・・・・・・・らしい。

勿論俺もアーチャーも反論したが、

休戦協定の条件として出された「緊急時の護衛」の件を踏まえるとセイバーの心配は最もだ、と

他ならぬアーチャーのマスターである遠坂が頷いてしまったので勝ち目はなかった。

セイバー一人でも無理なのに遠坂まで加わったら勝てるわけがない。

「はあ・・・・・・・・」

「あら衛宮くん、休戦しててもやっぱり私の家じゃ憂鬱かしら」

「なっ！そんなこと」

「分かってるわよ。セイバーのことでしょ」

ニヤニヤと意地悪い笑みを浮かべる遠坂に机に突っ伏してしまいたくなる。

溜息を吐いただけで考えてることがバレるなんて……俺って分かりやすいのかな。

「ちょっと心配だったけどそれなりにうまくやれてるんじゃない？」

「……………あれでか？」

「士郎の安全のこと考えてくれてるじゃない。

初対面で「チェンジってあり？」って聞かれたって割には大進歩だと思っけど。

むしろどんな魔法使ったの？って感じよ

「む」

遠坂の言ってることは間違っていない。

確かにセイバーはいろいろと性格や行動に問題があるけど、ちゃんと俺のことを考えてくれている。

鍛錬だって付き合ってくれているし、

今日だって敵サーヴァントに襲われているのを察知して助けに来て

くれた。

今こうして遠坂に魔術師のことやサーヴァントに関することを相談できるのも、セイバーのおかげだ。

これで不満なんて言うてはいけない……………んだが、やっぱりアーチャーは苦手だ。

それに……………

「セイバーと桜が一緒なのか……………」

「何か問題なの？」

「へ？俺口に出してたか？」

「ええ、ばつちり。で、桜とセイバーがどうかしたの？」

心配だったら一刻も早く話を終えて家に帰ればいい。

しかし遠坂が折角話に乗ってくれてるし、真剣にこちらの話を聞いてくれている。

……………遠坂だったら何かいい案があるかもしれない。

それにセイバーも遠坂のことは一目置いてるようだし、

遠坂から言ってもらえればセイバーの要らない警戒も解けるかもしれないしな。

そうと決まれば話は早い。

「実はさ、」

俺はつい先日あった出来事を踏まえ、不安を遠坂に相談していた。

士郎SIDE END

380

「おい」

リンの家から出て数歩歩いた所で後ろから声を掛けられる。

振り返れば突き刺さるのは鋭い鷹の目。

黒い鎧と赤い外套が夕日の暖かい光に照らされて僅かにオレンジ色を帯びている。

腕を組んだまま、見下ろしてくる顔の眉間には皺が刻まれている。

……こいつずっと眉間に皺よりっぱなしだよなあ。戦ってるワケでもないのに。

折角優秀なマスターを引き当てたんだからもうちよつと楽しそうにしてもらわないと、

シロウを押し付けられたこちらとしては一言もの申したくなるし、ちよつかいだしたくもなる。

他人の不幸は蜜の味。につつき弓兵の不幸で飯が美味しい。っていうだろ？

「セイバー、貴様は何を考えている」

「だから俺はシロウが心配なだけだっつ。リンも『最もね』って言ってたじゃねえか」

「たわけ。そんな詭弁が通じるのは凜だけだ」

「ですよねー」。

うむ、この皮肉屋を見ているとリンやシロウの純粹さの大切さがわかる。

どうせどうにもなんないんだし、大人しく流されておけば良いというものを……ツチ。

「……まさかとは思いが、私がエミヤシロウと付き合っているらば、いれれば絆されるとでも思っているのか？」

「……ほだされてくれんのか？」

「だったらこれから全身全霊を掛けて、

今まで培ってきた知識と経験すべてをもって、

シロウのおはようからおやすみまでシロウにつきっ切りにしてやるが。」

「まあ、んな簡単に敵マスターに絆されるようじゃサーヴァントじゃねえわなコイツは。」

「ハッ、本気か？」

「そこまでお気楽な頭は持ってねえよ。俺は俺のやりたいようにやる。」

「……まさか嫌がらせとは言っまいな。」

「はははまさか。」

「凜には後で詫びておこう。小僧の利用価値がなくなったと。」

なに、最優のサーヴァントと呼ばれるセイバーを脱落させるのだ問題はない」

「おいおい、ちゃんと否定したじゃねえかよ。

それに聖杯戦争は夜になってからだってバーサーカーのマスターも言ってただろうが」

「なに、冗談だ。貴様にあわせてやったただけだセイバー」

「わーい、クソ弓兵ったらユーモアのセンス最悪ー」

ちやつかりと手にしていた双剣をしまうと、嫌みつたらしく口端を上げて肩を竦めるアーチャー。

うむ。こいつの成長過程がぜひとも見たい。

やりたいようにやってるのは本当なんだがなー。

……ま、敵の言葉を鵜呑みにするわけねえか。

「俺はやりたいようにやらせてもらっさ」

夜まで続きそうな魔術師談義なんて聞きたくなんぞねえのである。

「……………そうか」

「おう、じゃあシロウのこと頼むな」

「フン、凜の命令には従うさ」

「それ聞けりや安心だ」

ひらりと手を振って帰路に着く。

学校の結界見に行くつても良いが・・・いや、止めとくか。

この時間帯だと人が多いだろうし、

どんなものかも詳しく分かっていないのに一人で突出するのは愚の骨頂。

折角協定を結んだんだし利用しない手はねえだろ。

「でも……」

聖杯戦争は無期限ではない。敵が動くのもそう遠くないだろう。

結果がどうなるか誰が残るかも分からんが、この協定もすぐに終わる。

「この状況をどう使うか、だよなあ」

完全にシロウのお守りから解放されたワケではないが、

何か起こればリンとリンの命令を受けたアーチャーが迅速に対処してくれる。

つまり今まで以上に好きに動けるといいうワケだ。十分好き勝手やってた？ははは馬鹿な。

「んー、なるようになれだな」

取りあえず帰ってシロウが遅くなる旨を話し、夕飯を食おう。

士郎SIDE

遅い時間に家に帰ってきて、遅い夕食を終えて夜の鍛錬を終えた後、とつくに外は夜の闇に染まっていて、道場の床は蛍光灯の白い明かりが反射している。

魔術のこと、遠坂のこと、家に着く前に話そうと頭の中で組み立て

ていた報告は、

家の前でアーチャーに言われた言葉によって新たに生まれた疑問に押しつけられた。

「なあセイバー」

「んあ？」

鍛錬で乱れた息を整えて軽く道場の床を拭き終えたらしいセイバーに話しかける。

こいつ粗雑な所とか面倒臭がりな所とかあるが物は大切にするんだよな。意外に。

「俺は聖杯なんていらないけどさ、もし聖杯が手に入ったらセイバーはどうするんだ？」

「お？何か叶えたいもんでも出来たのか。」

うむ、折角命掛けてんだから手に入れたときの対応とか気になるよな」

「いや、俺は使わないぞ。セイバーが使ってくれ」

俺は聖杯が目的じゃないし、

聖杯戦争だつてセイバーが主体なんだからその賞品を受け取るのはセイバーで間違いじゃないと思う。

それで間違いじゃないんだけど……俺の主張を聞いてうへえとうんざりした顔をされるとその、凄く困る。

しかしそれも一時のことで、流すことに決めたのか直ぐに歪んだ顔を正して考える仕草をする。

「俺の願いねえ」

『聖杯を得れば叶わなかった無念を晴らせるだろうし、

短い時間であれ、人間としてこの世界に留まれるのだから』

そうアーチャーは言っていた。

聖杯戦争という短い期間だけの今でも人生を謳歌しているのだ。

ならセイバーは聖杯を手に入れて第二の人生を送るのかもしれない。

「そうだな、美味しいもの食べられて、自分のやりたいように出来ればなんでもいいさ」

「それが……セイバーの願いなの、か？」

ってもう叶ってるようなもんじゃないか。後者はその……
出来てないかもしれないけど」

「ん。だから聖杯なんて俺らには必要ねえ。そっちの方がお前にも都合いいだろが」

「それはそうだけども……でも、あらゆる願いを叶える願望機、なんだろ？他にないのか」

「そりゃこっちの台詞だっつもの。生きてるからこそって思うがなあ……あとよ」

腕を組み首を傾げていたセイバーだったが、

ものついでで思いついたようなタイミングで言い聞かすようにピ、と指を立てた。

これは遠坂が何かを説明する時にする仕草だ。

「あらゆる願いを叶える願望機、なんつーのは言い過ぎってもんだ。どんな偉才だろうと優秀であろうと、

このシステムを作ったのが人間ならば絶対に欠陥があるだろうよ」

誇大広告ってヤツだ誇大広告、コレくらいが限度です、って書いと

け。とブツブツいうセイバー。

しかしそんなフザケタ口調も一息ついて抜け落ちた。

さっきまでこちらに向けられていた視線は顔ごとこちらから見えない方に向けられている。

「人間が作った物に欠陥はつき物なんだよ」

『お前は一振りの剣なのだから』

「ま、それだけ覚えとけばいい。それに生き残れるかも微妙だしな、お前が！」

「なんでさ！……いや、まあそうだろうけどさ」

一瞬頭に過ぎった言葉が引き金に怒鳴りそうになるが、その前にセイバーに言葉を取られる。

しかしそれでよかったのかもしれない。

自分の過去が覗き見られてるなんて嫌だろうし、防ぐ手なんて俺には思いつかない。

これが原因で協力関係を破棄されたら困るのは俺だし……
って俺本当セイバーに悪いことしてるなあ。

(明日の夕飯は奮発しよう)

皆でわいわいと鍋を突くのもいいかもしれない。

士郎 SIDE END

第貳拾貳話・動き出す影（後書き）

セイバーさんが大聖杯に目を付けたのは全く聖杯のことを信用して
いなかったからです。

「魔法の窯っていうくらいなら人数制限一人っておかしいだろ。ど
うなってんだ責任者」というクレームを付けに行く客のようなもの
です。

魔法のランプ手に入れたら「回数増やせ」と真っ先に言う人です。

誤字脱字などありましたら、ご連絡ください。

第貳拾參話・届かない夢（前書き）

なんとか十二月になる前に更新出来ました！

今月の更新はこれが最後です。月二回ってお前・・・すみません。

二十三話目の内容は、

前半：第二回セイバーさんの過去話

後半：セイバーさんによる武術指南と見せかけた土郎いびりです。
オリジナル設定などが嫌いな方はご注意ください。

第貳拾參話・届かない夢

士郎SIDE

果たして、剣に言葉をかけるのは必要か。

答えは『否』。

では情けは、情は必要か。

答えは『否』。

最後に、鞘は必要か。

『否』。求めるのは切れ味、抑止力は不要である。

道具にかける言葉はない。

ならば「一振りの剣」と決められた彼に掛けられる言葉など、あるわけがなかった。

例えどんなに傷付こうとも、傷つけられようとも、その果てに村の平穏を守れても。

きつと彼は、彼の耳には「ありがとう」の一言すら、届けられなかったに違いない。

そして言葉だけでなく 彼の目は自分が守った人間の笑顔すら、目に映すことはなかった。

それは、どんな気持ちだったのだろうか。

交わされる言葉を聞いているはずなのに、

自分のことのはずなのに………ソイツはピクリとも動かなかった。

まるで命令以外の言葉は「理解」出来ないとも言っように。

果たしてそれは 生きているといえるのだろうか。

否、そもそも「彼」は生まれてもいない。

ソレに付けられたのは「剣」としての『銘』であって、「彼」の『名前』ではないのだから。

何も遮るものがない空は間もなく夜明けを迎える。

ポツリと一つ立つ影は真正面を見つめている。

しかしその瞳には空も広い大地も自分のいる世界も見えていない。

感情のない瞳が使われるのは『敵』を補足する時だけ。

広大な大地に、カタカタと音が響く。

人の身を人外となすほどの魔力放出を受けて腰に佩いた太刀が音を立てる。

合わない刀と鞘が奏でるその音にソイツの敵は恐怖に顔を歪め身を震わせる。

カタカタ、カタカタ、カタカタ　　死神の鎌が迫る音がする。

それはたった一人で戦場を駆けるソレには似合いの音だ。

血と脂で切れ味が鈍った刀を捨て、死体の刀を取り、死体の仲間を増やす。

そうだ、それが彼の　　アイツの戦い方だ。

だからアイツは武器を持たない　　それは「アイツ」の物じゃないから。

アイツは鞘すらもたない　　彼の為の鞘はなく、腰にある鞘ですら、死者の物だから。

届かない。

この手は絶対に届かない。

分かっている、コレはとうの昔に過ぎ去ってしまった記憶でしかないことが。

どうしようもないことだなんて、分かっている。

この世にはどうしようもないことがたくさんあって、自分が無力な人間だということも分かっている。

でもそれじゃ嫌なんだ。

これだけ苦労したんだから、あんなにも大勢の人の平穏を守っているのだから、きつと報われる。

そう願う俺と、それが所詮「願い」や「希望」でしかないことを理解している俺がいる。

まだこの物語は終わりを告げていないけど、分かるんだ。

俺が納得できるような
彼が笑顔で逝けるような結末じゃない
ことくらい分かるんだ。

届かない手を握る。どうしようもない衝動を抑えたまま、景色が遠ざかる。

最後に映ったソイツの顔もやっぱり、怒鳴りたくなるくらいつまらなそうな顔だった

ダン！と拳を畳みに打ち付けた音で目が覚めた。

視界に入り込んできた天井に一瞬戸惑うが、見慣れた自分の部屋の天井だった。

ジンジンと痛みを伝えてくる拳を感じて、初めて自分が寝惚けて畳みに拳を打ちつけたのだと理解出来た。

「つてえー……………」

「そりやいてえだろうよ。え、何お前そこまで寝相悪かったか？」

「寝相はいいほうだと思う。ただ夢見が……………
…なんでセイバーが俺の部屋にいるのさ」

痛みで少しは冷静になれたけど、正直セイバーには会いたくなかった。

セイバーは俺がセイバーの過去を覗き見してるなんて欠片も思っていないだろうし、

俺が感情のまま怒鳴ってもただの八つ当たりでしかない。そんなのは嫌だ。

俺はセイバーに八つ当たりがしたいわけじゃなくて……
……ん、俺どうしたいんだ？

ヤバイ、寝起きなのと夢と現実がごっちゃになってるのよ、

セイバーがここにいる不思議やらが頭の中をぐるぐると回って思考
がまとまらない……。

「なんでっってお前なあ」

はあ、と呆れたように溜息をつくセイバー。

「寝惚けてんの、それとも天然なの？」とか何気に失礼なことを言
っている。

寝惚けてるだけなのになんで天然って言葉が出てくるのさ。

「睡眠中なんてもっとも無防備な状態じゃねえか。」

昼間勝手にさせて貰ってる分夜くらいはちゃんとサーヴァントらし
くしてやるうって心遣いだよ」

「は？え？……じゃあ昨日起きた時傍にいたのは看病とか
じゃなくて見張りだったのか？！」

「それ以外に何があんだよ。ま、一応休止の形だな。なにか心配を
察するまでは起きない」

そういえば昨日も布団や毛布なんてセイバーの傍に無かったし、
今だって俺が買った服にマフラーを巻いただけで暖房器具の類もない。

「お・・・前・・・さあ・・・」

「あん？」

「気付かなかった俺も悪いけどさ、せめて布団で寝てくれよ・・・」

何年も家じゃ一人で寝てたから今更誰かと一緒の部屋で寝ることに違和感を覚えないわけではないが、

セイバーは男だし、今までだって気付かなかったんだから大丈夫だろう。

取りあえず客用の布団を一式こっちに持ってきて・・・そこまで考えて一大事に気付く。

そして今まで気付かなかった自分の間抜けっぷりに頭に手をやって溜息を吐いた。

「あー、ごめん。そういえば俺セイバーに部屋あげてなかったよな」

「おう」

「本っ当にごめん。お前なら勝手に居心地いいところ見つけて占領してると思ってたんだ」

「てめえ謝りたいのか喧嘩売るのがどっちかにしろや」

「いやだってセイバーが今更遠慮とかないだろ?!」

「よし、宣戦布告だな。覚悟しろ」

「まま待ってくれ！取りあえず部屋用意させてくれないか。何か落ち着かない」

俺の頭を鷲掴みしようとしてこちらに伸ばされた手を両手で防いで、

セイバーの部屋を用意させてもらうことにする。

っっていうか本当に何でセイバーは勝手に選ばなかったんだろ……
……。

士郎SIDE END

「うーむ……………」

「はあっ！」

「甘い」

「ガッ……………！ツツグ……………」

「悪い悪い、今朝はここまでにしとくか」

考えこんでいるのを隙と見たシロウが突っ込んだので、

攻撃が届く前に飛び込んできた勢いをそのまま利用させて貰って首を打たせてもらった。

背中から防御も何もなく倒れ、首を押さえたまま咳き込むシロウ。

シロウの勢いを利用したからこれだけですんでいるが……………、

うむ、やはり考えながらの鍛錬は危険だな。主にシロウが。

いくら殺人衝動を抑えているとはいえ、

俺の本能みたいなものだから無意識に人間を一撃で殺そうと手が動くんだよな。

まあその方が実戦を考えればいいのかもしいが……………。

「ゴホッ……隙付いたと思ったんだけどな……喉
いてえ……」

「お前の狙いが分かってから動いたとしても間に合うような相手に
捨て身の攻撃は自殺行為だぞシロウ」

いやほんと、時々というかしょっちゅうという確率で

こいつ死にたいの？と思うような行為ばかりかするよなシロウって。
やっぱ自殺志願者か？

「うぐ……ところでセイバー、なにか悩んでたみたいだけどどう
したんだ？」

「ん？ああ……大したことじゃないんだが、
シロウの命を奪わずにじわじわと痛めつけるにはどうすればいいか
と」

「セイバー？大したことじゃないことじゃないぞそれ」

「はははシロウ、言葉変だぞ」

「そりやおかしくなるさ！なんだよそれ！怖いぞ！」

「いやあ、学校でお前を襲ったサーヴァントのこと考えててな」

殺すつもりなら殺せたはずだ。

なのにシロウは殺されなかった。

まあいたぶるのが趣味っていうのならいいんだが、何かの目的があった場合が問題なんだよな。

どれくらいのダメージならば意識や命を保ったままで動かせるか、どの箇所を欠損または損傷すれば動けなくなるか、

兎に角シロウの限界を知っておく必要がシロウにはある。

えーっと……あれだ。『敵を知り、己を知れば百戦危うからずや』ってやつだ。

「敵の狙いや嗜好とかは情報が足りないから無理だとして、まずはシロウの限界をシロウ自身に叩きこ、じゃなくて理解してもらおうと思っただけ」

「そういうことなら……いきなりじわじわと痛めつけるとかいいでしたから驚いたじゃないか」

「悪い悪い。」

そんな訳で出来るだけ急所は避けようと思ってたんだが、無意識に

急所に手が伸びるんだよな」

「なんでも。というかセイバー、恐ろしいことをさらっと言わないでくれないか」

「隠してたつてしょうがねえだろ？まあ、やはりここはシロウに頑張っつて貰うとして」

「そりゃそうだけども、つて何かコツとかあるのか？」

若干目を輝かせてこちらを窺ってくるシロウ。

しかし俺は剣術とか武術なんて習った事ない戦場での叩き上げだったからなあ。

コツなんて……。「頑張れ？」の一言しか思いつかな！うむ！

「俺は剣術なんてからっきしだからな、お前が求める答えはだせん」

「……セイバーなのか？」

「セイバーなのになあ」

「……うん、何かごめん。じゃあ今まで通り……」

「いや、お前は誰かの形を真似て、自分の形に調整した方がいいだ

る。

ゼロから始めるには時間が足りなさすぎるからな。

幸いこの戦争はその道のスペシャリストばっかだし」

贅沢な見本市だよなあ、聖杯戦争って……まあ、視認できればの話ではあるが。

人間の動きじゃねえ！っていう動きするヤツの宝庫でもあるしな。

シロウなら……大丈夫だろ。

「セイバーの動きを真似るのか？」

「俺の動きを真似るにはお前には足りないものがあり過ぎる」

「足りないものってなんだよ」

「言っつていいのか？」

「………なんか凄く嫌な予感がするけど
言っつてくれ」

俺の確認にたじろぎ、悩み、葛藤していたシロウだったが、

まずは己のこのことを知るのが一番だと思ったのか決意を固めて聞く姿

勢に身構えた。

「まず身長が足りない腕とか足とかの長さ、つまりリーチが短い。

あと筋力と体重、経験が足りない。身の危険に対する直感能力もない。

あ、危険じゃないけど違和感を察知する能力は評価できるかもしれないが、

お前の場合いろんなものが足りてないのに首突っ込もうとするから逆にマイナスな。

いやそもそも俺自身魔力放出で強化してるんだからお前には無理だな。

魔術で肉体の強化っていうのも出来るかもしれないが俺には分からんし、

魔術ってのは短期で瞬間的に身に付くものじゃないってリンも言うてたじゃねえか」

取りあえずこんなところか？

同年代の奴らよりは身体も鍛えてあるし、

努力や継続させる根性もあるからこれからを期待ってとこだな。

一朝一夕じゃ身に付かないものを求めすぎたかもしれん……
本当のことだけどな！

「まずは自分の方向性を決めて、俺との鍛錬で体の動かし方を身に付けて、

いざという時の逃走経路を作れるような力を……シロウ？」

「俺が未熟だつてことくらい分かってたさ……」

そりゃ俺だつて身長欲しいさ、いや俺はこれから伸びるんだ、たぶんまだ間に合うと思う。

これから一気に成長期が来たつておかしくない　　というか俺と同じ体格の英霊なんていないだろ！」

「うむ。今回の聖杯戦争にはいないな」

憎憎しいことに今まで出会った男の英霊という英霊は俺よりも背が高い。

シロウの嘆きが痛いほどに分かる。俺だつて四捨五入すりゃ180cmだ！

……と、今は身長のこととやかやく言ってる場合じゃねえな。

「お前の戦闘の方向性を決めるだけだよ。それをどうするかはお前次第だろ。」

とりあえず今まで会って来た英霊の戦闘を見てどの形がしっくり来た？」

ないとは思うが俺と言ったら・・・・・・・・とことん叩き上げるしかないな。

家でも戦場を見せてやるぜ！

「しつくり来る、というか・・・・・・・・一番印象に残ってるのはアーチャーだ」

剣も、戦闘技術も、と呟くシロウ。

その顔は認めているけど認められないと言いたげな、複雑な表情だ。

「アーチャーね、分かった。その方法で行こう」

まずはアーチャーにお手本になってもらうか。

難しいが・・・・・・・・まあ、嫌がらせだとおもえば。

「うっ………やっぱりそうなるか………」

「シロウ、お前に選択肢などない」

前の選択が4択あっただけでもかなりの譲歩だとも思う。

つつか気に食わないなんて理由で駄々捏ねられるほどの余裕ねえだろお前。

「分かってるよ。じゃあアーチャーの形を思い出して手合わせしてみるか？」

「ああ、そっぴや学校でランサーとの一戦見たって言ってたな。じやあいつちよ」

「おはようございます、鍛錬の方終わりましたか？」

ひよこりと朝日を背にして覗き込むマトウサクラの姿が道場の入り口にあった。

いつの間にか朝食の時間になっていたらしい。

んで、そのあとシロウは学校か………やること多いな。

「んじゃ、続きは学校帰って夕飯食った後だな」

「ああ。桜も悪いな、最近朝食の準備まかせつきりで」

「いえ、私が好きでやってることですから。」

「頑張って修行して、いつか先輩を追い越しちゃいますからね」

「む。そう簡単に師匠の座は譲れないからね」

さて無意識バカップルは放って置いて掃除すつか。

第貳拾參話・届かない夢（後書き）

二泊してようやく自室をもらえたセイバーさん。

そこら辺は原作セイバーとの性別性格その他諸々の違いから起きた事件だと思ってやってください。

ちなみに士郎と桜を「バカカップル」と言ってますが、そういう関係ではないのであしからず。

誤字脱字などありましたら、ご連絡ください。

第貳拾肆話・衛宮士郎による巡回記録（前書き）

生餌としての役割を果たす士郎と食いついてきた敵の話です。

原作の流れに沿っているのでタイトルはアレでも、

士郎のターンはギャグでもほのぼのでもありません。ご了承ください。
い。

二十四話目も遅くなりましたが、楽しんでいただければ幸いです。

第貳拾肆話・衛宮士郎による巡回記録

「見られちゃ困るものなんてないし、好きに過ごしてくれていいんだ」

遠慮なんて似合わないことしないでくれ、と学校に行く前にシロウは困ったように笑った。

シロウの魔術師の工房といわれる場所は予想通り俺を召喚した土蔵で、

そこにはマトウサクラも入ったことがあるらしい。

魔術とは関係ない（とシロウは思っている）マトウサクラが入れるような場所に

魔術的な畏や呪いが掛かった物など置くわけがないというのがシロウの言い分だ。

シロウの言い分とかはどうでもいいとして（どうせ効かないから）、魔術的なものがごろごろしていないというのなら確かめて置きたかったことが一つある。

「ふむ、埃っぽくはねえな」

召喚されてから一度も足を踏み入れていなかった土蔵に入る。

初日にランサーに開けられた壁の穴は青いビニールシートで覆ってあり、

ビニールシートに遮られながらも太陽の光は土蔵の中をうすぼんやりと照らしていた。

この穴を見て「業者さんに連絡して修復してもらわないと……
……なんて説明しよう」と

ぼやいていたシロウを思い出して口元を歪める。

「と、こんなことしてる場合じゃねえな」

時間は有限だ。

それが分かっているながらこうして過去のことには足を止めてしまつては……
……老けたか？

俺も若くねえな、などと笑ってみたい気もするがそんな人間らしい行為は座に戻ってからでいい。

「時間が足りない」

そう、時間が足りない。

知識が足りない。

人員が足りない。

その癖求めるものは複数あるときた……いや突き詰めれば
一つか？ま、どうでもいいか。

全く欲深になつたものだと言ふ過去の俺は呆れるだろうか
いや、
見向きもしないだろうな。

だが、うむ。

「これが人間らしいというものなのだろう」

時間が足りないなら間に合わせる。

知識が足りないならあるものをかき集めて補え。

人員が足りないなら協力せざるを得ない状況に持ち込め。

「流れに身を任せて何でも叶うほど運は良くねえよってな」

言つてこれほど悲しいことはないが本当なのだから仕方ない。

下に続く階段を見つけ、そこを下りていく。

役に立つものであればいいんだけどな。期待はしていないが。

士郎SIDE

セイバーや遠坂には「何もしなくても大丈夫」と言われたが、

その言葉に甘えているワケにもいかないよな。俺にだって出来ることはあるはずだ。

違和感を察知する能力はセイバーのお墨付きを貰ったし、

数日前から感じているこの甘ったるい感覚が結界がもたらすものなら

遠坂が言っていた『不審な場所』 刻印を解除できなくても、

場所を特定するくらいは出来るはずだ。そこを遠坂に教えて解除してもらえばいい。

やった事がない、分からないといって何もやらず二人に頼りきりと

言うわけにはいかないのだ。

「よし」

そうと決めれば後は行動するだけだ。

数分で昼食を済ませ、校内を回る。

人目につくところはたぶん遠坂が見つけているだろうから、人目に付かない所だな。

昨日の黒いサーヴァントとの一戦を忘れたわけではないけれど、

放課後でもないから、日も高いところにあるし異変があれば直ぐに人目につくから大丈夫だろう。

が………。 昼休みは一時間。少しでも見つけることが出来ればいいのだが………。

「まさか、ここもか」

校舎の中を周り、念の為に外に出た。

グラウンドや校舎裏には異常はなかったが、この一帯 弓道場は毛色が違いすぎる。

校舎の中にも可笑しい場所は多々あったが、それは人目に付かない場所だった。

でもここは違う。

ここは人目につかないどころか、毎日人が集まる場所だ。

ふいに、昨日の雑木林の一件を　　林の間から一瞬だけ見えた人影を思い出す。

(慎二……………なのか?)

雑木林での一戦。

敵の姿を見極める為に走らせた視線が捕らえたのは桜の兄である間桐慎二の姿だった。

昨日は偶然だろうと言いつつ聞かせたが、これほどの異常を弓道場一帯に感じるとなれば、

もしかするかもしれない。

濃密な風、湿った空気は息苦しく、胸を押さえる。

「……………結界には基点がある、と遠坂は言ってたな。」

何ヶ所あるか知らないが、最初の基点がこのあたりにあるって事か
．．．．．」

吐き気がこみ上げるほどの濃密な風と匂い。頭に過ぎる嫌な予感。

気にかかることはたくさんあるが、兎に角結界のことをどうにかし
なければならぬ。

遠坂曰く、基点があるところにはそれらしい刻印があるらしいが．
．．．．。

．
．
．
．
．
．

．
．
．
．
．
．

．
．
．
．
．
だめか。

違和感を感じることは出来ても、結界を括ってる刻印なんて見える
筈がなかった。

でも収穫はあったな。

後で遠坂にここを報告して．．．．．、

「なんだ。探し物かい、衛宮」

「！」

突然掛けられた声に振り返る。

昼休み、人気の途絶えた弓道場に立っていたのは

「 慎二」

全て分かっているとも言いたげに笑みを浮かべる間桐慎二だった。

士郎SIDE END

「おっじょうつさん！」

「ひゃあ！」

正午は過ぎたというのに、人は途切れない商店街。

しかし行き交う人々は大人が多く、歩く度にひよこひよここと揺れる白い髪を見つけ声を掛けた。

跳び上がった驚いたのが悔しかったのか、白い髪の少女　イリヤスフィールに睨みつけられた。

「な、なんでセイバーがいるのよ」

「買い食い。で、可愛いお嬢さん、驚かせちゃまったお詫びに暇ならご一緒しないか？」

ガサリと音を立てるビニール袋にイリヤスフィールが顔を歪める。

お？いつもなら喜んでくれるんだが間が悪かったのか？

「どうしたよ。忙しいんなら断ってくれていいんだぞ」

「そうじゃないの……いいわ、付き合っただけ」

「おいこら、子どもが我慢なんかするもんじゃねえぞ」

眉を寄せて考えていたが、ふっきれた……というよりどこか諦めたように溜息を疲れてはたまらない。

溜息の後に笑えば誤魔化されてくれるような空気の読める人間じゃ

ねえっつの。

子どもに我慢を強いる大人だなんて思われたかねーよ。

そついう意味を込めて帽子の上から軽く小突くと、イリヤスフィー
ルが不貞腐れた顔で見上げてくる。

「私子どもじゃないもん」

「そつか。んで、何かあったのか？」

「別になんでもないわ。あんまりしつこいと女の子にもてないんだ
から」

「ははは、別にもてようだなんて思ってねえよ。嫌われようが聞き
たいことは聞いとく性分だからな」

「……………セイバーに仕返ししようと思っただけよ」

仕返し……………されるようなことしたか？

……………そついや昨日とても可愛い負け犬の遠吠
えを聞いた気がする。

「なんか奢ってくれんのか？」

「……………セイバーのバカ。女の子に恥をかかすなんて

許されないんだから」

「そりゃ悪かった」

「誠意がたりない！もう絶対許さないんだから！」

「誠意なんて俺に求められてもなあー。あ、ほれ、俺の誠意！」

ポカポカと叩いてくる小さい拳を受けながら考える。

誠意……俺に程遠い言葉だ。

しかしいつまでも叩かれてるわけにもいかないの、もっていたビニール袋を差し出す。

「なあに？これ」

「今日は二つやるっ！」

「タイヤキ？」

「ハズレ。ま、公園行こうぜ。そこ行つてからの楽しみだ」

クンクンと鼻を鳴らして覗き込もうとするイリヤスフィールを留めて、

イリヤスフィールの手が届かない高さまでビニール袋を持ち上げる。

俺の態度に頬を膨らませていたイリヤスフィールだが、「仕方ないわね」と笑うと手を握られる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうしたのセイバー？・・・・・・・・嫌だった？」

「ちげえよ。そんな不安そうな顔すんな。飲み物はイリヤスフィールが選んでくれるか？」

「！ ええ、いいわよ。甘い匂いがしたから甘いものでしょ？
任せておいて！」

「取りあえずミルクティーは除外な。あれは甘すぎた」

「そう？そんなに悪くなかったわよ」

そりゃお子様だからさ。

なんて水は差さずに手を握ったまま商店街を歩く。

「またアンコ？」

「それもあるなー」

「ちょっとくらいヒントくれたっていいじゃない。意地悪するとミルクティーよ？」

「そりゃちょっとなー……まあ、アムとカスタードクリームとチョコレートとか多種多様だな」

「そんなに種類があるの?! えーっと、じゃあ紅茶がいいわよね。」

でも自動販売機っていうので売ってるのは質が落ちるのよね」

「緑茶でいいんじゃない? シロウの家で結構出るけど美味いぜ」

「そうなの?」

「おう。あ、でも俺も自動販売機の緑茶は飲んだことねえな。……
……試してみねえか?」

「セイバーが私の屋敷に来れば最高の紅茶をご馳走してあげるのに」

「ははは、また今度誘ってくれよ」

販売機の前でそんな会話をした後、結局緑茶を二つ買って

……イリヤスフィールの持ってた金は受け付けてくれなかった
ので俺が換金して、

それをイリヤスフィールが払って公園に向かった。

「よおサボり魔。学生の本分は学業じゃなかったのか」

「げ、」

「お兄ちゃんだー！」

「なんなのこいつら。衛宮の知り合い？」

学校で授業を受けているはずの勤勉な生徒がサボり魔になっているところを見つけた。

「……………うむ、フジムライタイガに告げ口しよう。」

一番効果的な人物に任せるだけであって、なんかもう放り出したい気分になった訳ではない。

第貳拾肆話・衛宮士郎による巡回記録（後書き）

今回は本来は一話分だったものを量が多すぎると二分割したもので、

次回の更新は明日か今週中にはお届けできるかと思えます。

それでは、誤字脱字等ありましたらご連絡ください。

第貳拾伍話：戦慄の 鍋事件（前書き）

予告しておいた二十五話目をお届けします。

前半、中盤はなんの問題もないかと思いますが、最後の最後、今回にもこれからにも全く関係ない話で残酷表現（？）が出てきます。お嫌いな方はご注意ください。
引き返す目安は凜と出会った後の「商店街の話」あたりです。

第貳拾伍話：戦慄の 銅事件

いやもう、本気でなんでこんなところに居るんだ？

「アーチャーに世話になるなんざ真つ平ごめんだぜ！クラスメイトとボイコットだ！」ってことか？

んなわけねえわな。

「衛宮妹なんていたんだ」

「いや違うけど」

「はあ？じゃあお前妹でもない子供に自分のこと『お兄ちゃん』なんて呼ばせてるワケ。

……衛宮ってそういう趣味だっけ。これじゃあ桜も見込みないわけだ」

「誰がそういう趣味だ！ってなんで桜が出てくるんだ？」

「そうそう、だからいざって時の為に俺がこうして監視役として付き添ってんだよ。

なあイリヤスフィール」

「ふうん？お兄ちゃんてば私のことが好みなんだあ」

「だから違つて！ていうかいつの間にそんな仲良くなつてんのさ
お前ら！」

唇に人差し指を添えて、にんまりと怪しく微笑むイリヤスフィール
にブンブンと手と首を振るシロウ。

そんな必死の否定を見てイリヤスフィールが今までのからかう素振
りとは一転し、

少だけ眉を寄せて悲しそうに目を細めさせながら「私のこと嫌い
なの？」といえば、

「いや嫌いじゃない！嫌いじゃないけどそういうことじゃなくて！
と更に慌てるシロウ。

そしてこちらに目配せをしてニヤリと笑うイリヤスフィール。

それなりに憂さ晴らしが出来て「グツジョブ！」と親指を立ててや
る俺。

とまあシロウをからかうのはこの辺にしておいて、

「んで、学校サボって何やってんだ？」

「子どもの保護者には関係ないことだよ。

じゃあ衛宮、用事は終わったし僕は帰らせてもらつよ。

言っておくけど、今日のことは遠坂には内緒だからね」

怪しいと踏んでいたが今の発言で決まりだな。

戦争に巻き込まれているシロウが昼間とはいえアーチャーの保護下を離れて連れ歩く人物。

そしてリンの名前 聖杯戦争の関係者か。

マトウサクラとの関わりもあるようだし………後でシロウに問い質すか。

シロウもあからさまに「ヤバイヤツに見つかった」と言わんばかりの表情で俺の方を見ているし、

自覚をしつつも単独行動をし腐りやがったってことだよな。いい度胸だこのやろつ。覚えとけ。

ま、今は保留だけだな。

「ねえシロウ、暇ならシロウも一緒にオヤツ食べましょ」

「え？あ、いいのか？えっと、じゃあ邪魔させてもらっつよ」

「うんっ！今日はね、セイバーが二つくれるって言ったから私の分けてあげるね！」

「それはイリヤスフィールが貰ったんだろ？気持ちだけでいいよ、ありがとな」

「そう？あ、シロウだったらイリヤって呼んでもいいよ」

「そっか、じゃあイリヤって呼ばせてもらっな」

仲良さ気に笑い合うガキ共の間をぶち壊しにする保護者ってのものなんだしな。

「んじゃ、落ち着いたところでシロウはアンコでいいか？」

「俺？セイバーの分だろ？俺は別に」

「お前さあ、空気読もうぜー？お前だけ食わないって俺らが食いつらいじゃねえか。」

そもそも話お前の金だし」

「む……それもそうだな、じゃあ貰う。大判焼きか、ありがとなセイバー」

「イリヤスフィールはどうするよ。アンコとチョコレートとカスタードがあるけど」

「シロウと一緒にいい！」

「了解、と。ほれ熱いから気をつけな」

「ありがとう」

熱くないように包装紙の上からマフラーを巻きつけて渡せばお礼を
言われる。

その光景をシロウがポカンと見ている　　前もあつたよな、この
光景。

「あんだよ」

「いや………セイバーが気遣いするのがさ、珍しくて」

「アーチャーとおなじこというのね、シロウったら」

「げ、アイツも同じこと言ったのか………いやでも仕方ない
だろ、

セイバーが細かい気遣いできるとは思わないし」

「お前ら失礼だよな」

「そうよ？セイバーは意地悪だけど優しいんだから」

「そうそう、俺は優しくすべき時は優しいんだぜー。んで、俺はチ
ーズと」

二人に大判焼きが行き渡ったとの確かめてから、袋の隅に取って
いたチーズを取り出す。

と、微妙な表情でこちらを見るシロウとイリヤスフィール。

「ほら、な。分かるだろイリヤ」

「そうね。セイバーったら大人気ないところあるものね」

「二種類ずつ買ったらチーズ一つしか買えなかったんだから仕方ね
ーだろ」

「いや、そこはイリヤの選択肢の中にいれてやれよ！」

「却下だ！俺は全種食いたい！」

「大人気ない！」

言い争いが続くかと思いきや、クスクスと心底楽しそうな笑い声に
止められる。

口元を押さえて、小さな肩を震わせながら俺とシロウのやりとりを
見ていたイリヤスフィールだ。

「二人とも子どもみたい。こんなに寒いと冷めちゃうわ、早く食べ
ましょ？」

「「それもそうだな」」

最年少に諭されて、微妙な顔で大判焼きを頼張る……………
なんかデジャヴが。

「喧嘩してもいいけど……………ううん、やっぱり二人は喧嘩しちやダメなんだからねー！」

「分かった、気をつけて帰るんだぞイリヤ！」

「前向いて歩かねえとすつ転ぶぞー！」

「そんなへましないもんー！」と元気よく両手を振りながらピョコピョコと跳ねると、

俺とシロウに背を向けてイリヤスフィールは帰路に着いた。

そんな小さな姿を見送ってから、今更学校に戻る気もないのかシロウも俺と一緒に帰るらしい。

「あ、夕飯の材料買うから商店街寄ってってもいいか？」

「別に構わねえ」

「今日は鍋にしようかと思っただけどさ、」

「鍋？」

鍋って調理器具だよな。

この時代の人間は調理器具を食糧にする食文化があるのか？

いや確かに『石のスープ』とかあるが、アレは別に石を食べるわけじゃなく……。。。

「セイバー、お前が勘違いしているのが凄く分かるから言っけどさ。

別に鍋をボリボリ食べるってワケじゃないからな？煮込み料理みたいなもんだよ」

「ああー、そっぴや寒いから今日は鍋にしようかしら〜とか言ってたな。それか」

キムチナベボタンナベトマトナベとかその形をした鍋使って作る料理かと思ってたのだが、

それ自体を材料にする煮込み料理ってワケか。ん？ボタンは食い物か？

「スープの味とかメインの食材とか希望があるなら聞くけど、なんかあるか？」

「あら衛宮君、奇遇ねえ」

「お、リンじゃねえ……か」

シロウの問いにんー、と悩みながら、

商店街を歩く際に耳に入ってきた情報の中で気になるものを思い出しつつ

商店街に繋がる道を並んで歩いていると、突然後ろから声を掛けられた。

見知った声になんの警戒もせずに振り返ると 貼り付けた悪魔の笑みに出会った。

「放課後に話し合いたいことがあるから一度落ち合いましょうって話してなかったかしら。」

それとも私の予定じゃ今日のことだったけど、衛宮君の予定じゃ明日のことだったのかしら」

アーチャーが気付いてたから良かったけどもし言われなかったら私はいつまで待ってたんでしょね。

なんて長い台詞の全てを微笑んだまま、一息で言い切った。

穏やかな表情で言い切って、ふと一息をいれるとリンはにっこりと笑みを深くした。

「私、何か聞かなきゃいけないことがあると思うのだけど？」

「すみませんでした」

サボリの上に同盟相手との約束すっぱかしたのかよ、救いがねえなシロウ。

救おうとも思わねえけど。

自分には非しかないことを自覚しているのか、シロウは九十度の直角で頭を下げたままである。

リンの怒りの矛先がこちらに向いていないので改めてリンの様子をじっくり眺める。

リンの手にはシロウとあまり変わらない学生鞆があったが、

その華奢な肩には夜逃げでもしてきたかのような大荷物が掛かっていた。

「リン、その荷物どうしたんだ？夜逃げか？」

「んなわけないでしょ！ってそれも言っけなかつたの？士郎」

「あー、そういえば言っけの忘れてた」

「？」

「魔術指南や作戦会議のこととか考えると拠点はひとつの方がいいってことになつたの。」

藤村先生の目もあるし士郎が私の家に来るのは無理だから、

士郎の家を拠点にすることになつただけど……聞いてなかつたみたいね」

「うむ、初耳だ」

「う、悪かつた！帰つたら一番に言っけべきことだつただけど……すつかり忘れてた」

忘れんなよ。

……そういえば突然聖杯の話なんてもの持ち出してきたよな、興味ないくせに。

リン・・・・・・・・・・はないな、

んじゃアーチャーにでも聖杯のことにに関して吹き込まれてそっちに意識もってかれたってところか？

「ま、過ぎたことグダグダ言ってたってしゃあないわな。

フジムラタイガにはそっちでうまく言っとけよ」

「ああ、それは考えて有るから大丈夫だ。じゃあせめて荷物持つよ遠坂」

「あら、気が利くじゃない」

大荷物を見て、目的地が一緒ということもあってかすかさず荷物持ちを進み出るシロウ。

うむ、実にいい心がけだ。

「て、商店街寄るんじゃないの？」

「あ、そういやそうだった・・・・・・・・でも行くんなら一緒に行っただ方がいいよな」

「そうね」

「んじゃ途中で材料捕獲しようぜ」

「は？」

「俺一度商店街で聞いてからずっと興味あつたんだよなー、猫鍋つての」

「土郎、商店街付き合つからそれだけは止めて頂戴」

「食卓に出す以前のはなしだろ！やらないよ！」

「セイバー貴様、よもや腹が減つたからとネコさんに手を出したとはいわんだろうな！！」

「のあ！突然出てくんじゃねえよ！」

「いいから答えんか！」

「俺は料理は食べる専門で作るのは専門外だつつの！」

「そつか、ならいい」

唐突に現れて、鬼気迫る表情で胸倉を掴んできたアーチャーはあつけなく姿を消した。

「………一体なんだつたんだ？つつかでかい凶体の男が猫」さ

ん」ってお前……プ。

「セイバー、お前は絶対に料理するなよ？材料の捕獲も調達も禁止だからな？」

「んだよ、折角食費を少しでも浮かしてやろうって俺の心遣いだつたのに」

「うん、ありがとう。でもいらない。絶対止めてくれ」

この時代の食糧事情は複雑怪奇だ。

第貳拾伍話：戦慄の 鍋事件（後書き）

以下ちよつとしたおまけ

凜「というかセイバー、猫鍋の話題でおいしそうとかあったわけ？」

セ「いんや？可愛いよねーとかそういう話題だったか？」

士「なんでそこで食べれる話になるのさ」

セ「あん？だってこの時代の人間って料理にも『可愛い』って評価つけんだろ？」

それと同じかと思ってたんだが違ったみたいだな、その反応だと」

士「ああ、頼むから生きてる動物に手は出さないでくれ。

ペットがいなくなつたとか最近野良が見当たらないとか聞きたくないからな？」

セ「わかつてるよ。全く、疑い深い奴らだなー」

凜・士「」（セイバーの場合シャレにならない）もの）（からな）
……………」

黒船来航とかその付近でだかぼんやりですが、外国人が牛とか食べるって言って牛を農作業には必須の存在であり、家族の一員のよう
に可愛がっていた当時の日本人達はそれを聞いて戦慄したらしい。
という話を聞いた記憶があります。

まあ犬とかは良く聞きますし、猫を食べるっていう国もありますか
らね。

一応この話を書くに当たっての前情報をば・・・・・・・・作者は猫好
きです。食べません。

誤字脱字などありましたら、ご連絡ください。

第貳拾陸話：フラゲクラッシュャーセイバー（前書き）

別名：セイバーのハーレム化阻止計画、又は敷居の高くなった衛宮家
でお送りする二十六話目です。

新年あけましておめでとございます。ご挨拶が遅くなり申し訳ないです；

新年初更新がこんなですいません。

ですが。

そう簡単に無自覚ハーレムが出来ると思ったら大間違いです。
話数が増えようと限界までラブには持っていきませんよ。ええ。

覚悟は出来ましたか？それではお楽しみください。

第貳拾陸話：フラゲクラッシュャーセイバー

桜SIDE

『この短期間で怪しまれずに探るのは難しかろう』

お爺様はそういって、しばらく泊り込みでの偵察を許可してください。
った。

その間の修行は勿論休みだ。

でもそんなことはどうでもいい。

偵察としての使命より、あの家に帰らなくていいことより、何よりも

先輩の傍にいられるということが嬉しかった。それだけが頭
を占めていた。

先輩を裏切るような行為をするのに、嬉しさを感じるなんて何て卑
しいんだろう。

それでも、それでも浮かれてしまうのは止められない。

「桜ちゃんの部屋は……大丈夫ね、何か足りなかったら遠慮なく言ってね」

「はい、ありがとうございます」

お爺様から電話で連絡してもらって、

先輩の家の宿泊は保護者の許可もあるということと藤村先生も納得してくれた。

たぶんセイバーさんも何も言わない……………と思う。

ううん、絶対に勝ち取ってみせる。

「突然桜ちゃんがしばらく泊まるって知ったら士郎びっくりするかもね」

「そうですね、ちょっと驚いた顔が楽しみです」

「授業サボったお説教しようかと思ったけど桜ちゃんのお泊り会だもんね、

今日は勘弁してやろう!」

「フフ、ありがとうございます」

ミカンを剥く手をそのままに、顎をあげてフフンと笑う藤村先生に笑って御礼を言う。

でも時間を無駄にするわけにはいかないのは私が一番分かっている。授業を欠席したのは先輩だけじゃなくて兄さんもだった。つまり時間が残されていない。

先輩、先輩は私が

ガラガラガラ

「あ、士郎かな？」

「かもしれませんね、私見てきます」

「お出迎えかあ、青春ねえ」

「藤村先生！もう」

二ヨ二ヨと笑みを浮かべる藤村先生に軽く注意をいれて、玄関に向かう。

顔、赤くなってないといいんだけど 藤村先生がからか

うから。

先輩の声が聞こえる。

あ、セイバーさんも一緒なのかな。

思わず足が速くなる。早く先輩を驚かせたい。

「先輩！おかえりなさ……………」

なんで、遠坂先輩が……………いるんですか？

桜SIDE END

見知らぬお嬢さん（リンのことだ）と一緒に買い物という面白い状況を、

商店街のおっちゃんにシロウが囃し立てられるなどいろいろあったが

特に何の問題もなく今夜の夕飯の材料をゲットした。

ちなみに、商店街の人間の中にはシロウとマトウサクラをセットとして見てた者もいて、

俺とリンが………なんて恐ろしい勘繰りをする奴らもいたが、無知とは罪深いな。

色恋沙汰にはとんと疎いシロウですら足早に罪人から俺たちを引き離すような状況だったとだけ言っておこう。

やー、俺は別に構わないんだがリンとその護衛兼保護者がな。

どうせ一週間も経たない内に消えるんだし言わせたいヤツには言わせとけって思うんだが、

ブツブツとリンの独り言をシロウと二人で聞き流して歩いていけば、

あっという間にシロウの家に辿り着いた。

ガラガラと玄関の引き戸を開ければその音を聞いてか、トタトタと軽い足音がした。

心なしか足取りが軽い。

しかもこんな風に狙ったように出迎えるのは珍しいな。

「先輩！おかえりなさ………」

予想通りマトウサクラがいつもよりも若干嬉しそうな笑みを浮かべて出迎えたが、

視線が俺、シロウ、そしてリンに流れつくとその笑みはすぐに曖昧な笑みになってしまった。

引き攣らなかつたのは 感情を抑えたんだろうな。あーあ。

ニブチン野郎はそんな表情の変化に気付かず、珍しくマトウサクラが出迎えたことに首を傾げている。

ま、いつもなら夕飯の下ごしらえしてて居間で「おかえりなさい」だからな。

「さく」

「どうして……どうして遠坂先輩と一緒になんです？」

「事情はあとで説明するから。取りあえず玄関は寒いから居間に行かないか」

「……………そうですね、では遠坂先輩どうぞ」

「ありがとう」

来客用のスリッパをリンの前に用意するマトウサクラ。

その表情とこの場の空気はこれから始まる修羅場の序章みたいなもんだろう。

更にこの状況にフジムラタイガが加わるんだろ？

シロウとリンはどうやって自分の主張と要求を通すんだろうな。いや楽しみだ。

(っつーかこいつらよ)

マトウサクラの宿泊を一度阻止した俺が立場的に阻止せざるをえないの……分かってんのかな？

俺の言い分は後回しにただでリンが泊まるの納得した訳じゃねえしな。

ってか、自分の陣地に休戦中とはいえ敵を泊めるとかないわ。

俺もシロウも魔術方面には明るくないんだから仕掛けし放題じゃねえかとかいろいろ言いたいが、

大事なことを相談しなかったシロウが悪いので言わないで置く。うむ、何もかもシロウが悪い。

ってか俺の茶々入れ程度で撤退させられる理由しか作れなかった時点で終わってるがな。

いや本当楽しみだ。ちょっとは成長してっかな？

まあ、

「なんで遠坂さんがいるのよおおおっ！！？」

第一関門くらいちゃちゃっと突破してくれねえとな。

「」

リンの屋敷は只今改装工事中で、ホテル暮らしよりは学生らしいし、先生であるフジムライガが既に泊り込んでいる分安心して安全だし金もかからないので、

途中で出会ったシロウの誘いに乗らせてもらうことにした　と
というのがリンの言い分。

本当に改装工事してんのか見に行かれたらアウトだよな。とは言わない。まだ。

リンも魔術師だし幻覚系などの魔術なり使ってそこらへんもカバー済みだと思うが、

どうだろな。リン変なところで抜けてっからな。

あーでも魔術は秘匿するものってなっただけ。

んじゃそんな大々的に使っちゃいかんのか……いや、聖杯戦争自体大々的か。

本当この時代の秘匿の線引きってどうなっただか。俺には理解できん。

と、そんなこと考えてる間に話が進んでた。

やや私情も含んだフジムライガはリンに完封されて眉を寄せて唸

っている。

しかしそれも少しの間で、観念したように溜息を吐いた。

「むうーん。そうね、そういうことなら丁度良かったし」

「丁度良かった？」

「あれ、土郎まだ聞いてなかったの？」

今日ね、桜ちゃんのお爺さんから電話があって暫らく家を空けるけど、

留守がちな間桐君とじゃ心配だからって桜ちゃんを少しの間預かって欲しいんだって。

『日頃から世話になっている衛宮君と藤村先生に預けるのなら安心して家を空けられる』

なーんて言われちゃったら引き受けない方が失礼ってものよ」

ははは胡散くせー。

と思うのは俺だけらしく、

フジムラタイガに至っては「これだけ信頼されるなんて教師冥利に尽きるってものね!」などと言ってる。

人間として、教師として、やはり保護者からの信頼は嬉しいのだから。

「こうなったら一人も二人も同じようなもんだし女三人で」

「セイバーさん！」

「んあ？」

「セイバーさんは……その、いいんですか？」

「俺ねえ」

ぶっちやけ構わん。

餓鬼に手を出すほど飢えてるワケじゃないし。そもそもそういう色恋沙汰に興味ないしな。

誰かとそういう関係になることもそういう関係を強要することもない。

「たかが居候の俺がシロウの家のことについてとやかく言う筋合いはねえだろ」

フジムラタイガがおれ、縋りつくようにこちらを見ていたマトウサクラの瞳が影になる。

ここで俺が何にも言わなきゃこんな状態で日々を過ごすのか？うわ、
ぜってえやだ。

このドンドロした空気で飯とか食いつれえわ！

「一つ言わせて貰うとするなら、ちっと軽率すぎんじゃないか？つ
てことだ」

「軽率？」

「お前ら知り合いの知り合い、程度の仲なんだろ？」

その程度の間柄の男の家に泊まるとか、いくら教師がいるっていつ
てもねーよ。

フジムラタイガも、いくら自分がいるからって他の同性の友人を探
させるべきなんじゃないか？」

ずっと済み続けていた家を改装工事ってんなら、予定を立てて行く
はずだ。

別に災害に遭ったってワケじゃないしな。

猶予があったのに何も動かなかった………なんていうわけね
えよな。

「それともえーっと、トオサカリン？お前同性の友人頼れねえ理由でもあんのか？」

それこそ、知り合いの知り合い程度の仲でしかない男の家に泊まるような理由が。

「はっ、まさか頼れる相手がいないのか？そりゃ悪かったな」

「心配なく、親しくしてもらっている相手はいますので！」

思わず、というように息を飲み少しだけ優しい視線で謝るとさすがに返してくるリン。

口調は丁寧ではあるが、視線は（どういうことよ！？）とその心情を訴えている。

フ、恨むなら何の相談もしなかった上、感情の機微を読めないシロウを恨め。

「んじゃ、そっち当たった方がいいんじゃないか？」

見ての通り学校関係者でもなんでもない男が居座ってるからな。

親しい友人の家のほうが安心で安全だと思うが………俺間違ってるか？」

「え?! いえ、セイバーさんの言うとおりでと思います!

そうね遠坂さん、セイバーさんの言う通り美綴さんに相談してみたら??

今日はもう遅いから泊まってもらって・・・いいですよ? セイバーさん」

「何故俺に聞く。ま、もう遅いし今更出てけとは言えんだろ。

トオサカリン」

「なんでしょうかセイバーさん」

「改装工事すんならもうちっと計画的にな」

「フフフ、そうですね。お騒がせしてしまいました」

「ははは、別に俺は居候だから迷惑なんて思っていないぞ」

「フフフそうですか、それならよかった。ええ本当に」

「ははは」

「フフフ」

「(こ)、怖い・・・」

「(良かったんですね? これ、で・・・)」

「（遠坂さんとセイバーさんが怖いよう・・・!）」

「衛宮君、電話お借りしてもいいかしら？出来れば案内もお願いしたいのだけど」

「えーあ、ああ・・・じゃあ桜、夕飯の支度お願いしていいか？

タラとホタテの寄せ鍋しようと思って材料買ってきたから」

「は、はい！その・・・あの、頑張ってください」

「うん、ありがとな」

（セイバー！セイバー!）

む、危急時にしか通じないはずのシロウからの念話が。

・・・それほどの脅威だというのかトオサカリン
恐ろしい子・
・・・!

「お、このミカンあめえな」

「あ、セイバーさんは甘い方が好きな人？」

「うむ。酸っぱいよりは甘い派だな」

恐ろしいのでミカンを食べながら縮こまっていよう。

ミカンうまい。

第貳拾陸話：フラゲクラッシュヤーセイバー（後書き）

セイバーさんは敵でも味方でもない、という状態です。

ご飯をご馳走してもらってるので味方より。

でも決して崩れないご飯>>>シロウという優先順位。

プラス「俺がいなくても如何にかできるってんならやってもらおうじゃねえか！」というちよっとした対抗意識。あ、あと誰に連絡もせず弓兵の保護下を離れたことも加算されてたりします。

今年もこんな感じでだらだら〜と続くか飽きる日が来るかのどっちかというような傾向ですが、今年もよろしく願います。長い目で見てやってください。

誤字脱字などありましたら、ご報告ください。

第貳拾漆話：危機迫る晩餐会（前書き）

お、お久しぶりです・・・；

更新を待つてくださっている方がいるか分かりませんが遅くなりましてすみません；新年の意気込みも虚しくさっそくほぼ二ヶ月未更新って・・・。

本当、お待たせしましたな二十七話目、楽しんでいただけると幸いです。

第貳拾漆話・危機迫る晩餐会

士郎SIDE

居間から連れ出され、声が届かない離れの廊下まで来ると、腕を組んで苛立たしげに遠坂は呟いた。

「まさかセイバーが口出ししてくるとはね」

遠坂の引越しの件について、今日初めてセイバーに聞かせたことだったが、

あの時セイバーは特に反対意見を言わなかったから賛成していると思っていた。

反対だったらどんな状況でもその意思を伝えるヤツだし、通らなかつたら嫌味のひとつくらい言いそつだ。

何もいわなかったから、桜に促されてこの件に異を唱えたことに驚いた。

セイバーの真意が何処にあるのか分からない。

「悪いな遠坂。俺の方から持ちかけたことなのに」

「別に士郎のせいじゃないわよ。あいつの性格が悪くてひねくれているだけで」

「はは、でもさ、ちゃんと話し合わなかった俺もやっぱり悪いと思う」

協力して欲しい、って言い出したのは俺の方なのにセイバーには何の相談もしなかった。

今回だってセイバーには話しづらいこととはいえ、何も話さず事後承諾という形だった。

多分………また今回も「お前が困るだけだ」と言われて終わりだと思っていたんだ。

セイバーには悪いと思う。でもこの件については簡単に引き下がるワケにはいかない。

この件は俺だけじゃない、桜のことも関わっているんだから。

セイバーに疑われている桜がこの家に留まるというのなら尚更だ。

「遠坂、この件は俺に任せてくれないか」

「……この辺で首輪をきっちり掛けておけばいいのに土郎はお人好しね。」

まあ、だからこそ協定を結ぼうと思ったんだけど（ボソ）

「悪かったな、お人好しで。でも直さないぞ」

「フン、別に治せなんて言っていないわよ」

最近よく「お人好し」と言われるが、俺は俺のやりたいようにやっているだけだ。

それが誰かに「お人好し」と言われても、この性格を直したいとは思わない。

少しむっとして言い返すとブイとそっぽを向かれる。

しかしそれも一瞬のこと。

遠坂が何か思いたしたように急にこちらに振り返り、ピと指を一本立てた。

「それに、いくら協力者だからって甘えないでよね！

自分のサーバーヴァントのことはマスターである自分で見るに決まっているでしょ。

言われなくても私はそこまで干渉しないわよ」

「・・・・・・・・」

え、えーと・・・・・・・・。

遠坂の発言に様々な思考が頭を過ぎっていく。

「随分セイバーのことについて相談したし、世話になったような気がするんだけど・・・・・・・・」

うん、俺協力関係になる前からいろいろと遠坂に迷惑かけてるよな。

今回だってセイバーの行動についてのことだし。

「そ、それはっ・・・・・・・・！そう、あんなの放し飼いされたら冬木の管理人として困るのよ！

だから仕方なくやってるだけで、今回は違っわよ！士郎がちゃんと話し付けなさいよ！」

「ああ、うん・・・・・・・・ありがとな、遠坂。遠坂が居てくれて本当に良かった」

「・・・・・・・・」

うん、やっぱり遠坂はいいヤツだ。

元々何の不満もないけれども、協力関係であることに再度安心する。学校のマスターを如何にかするまでという期限付きだと言われている。でも嬉しく思う。

感謝の気持ちを込めてまっすぐに礼を言う。

「あ・・・あなたは・・・っ！見当違いなお礼なんて言っていないでさっさと玉砕してきなさいよ！」

「玉砕とか縁起悪いこというなよ！俺だってちょっと不安なんだぞ？！」

この件は俺がやるべきことだと思いはしてもやはり、セイバーを説得するのは不安になる。

流石に食べ物じゃ吊られてくれないよなあ・・・・・・・・。

いや、セイバーなら夜食も付けてやればあるいは・・・・・・・・いやでもなあ。

「い、先……………」

セイバーの説得法を考えて自分の思考に沈んでいると、

会話がなくなり静かになった廊下に声が響く。桜だ。

桜には調理を頼んだから藤ねえかセイバーが来るかと思ったんだけど……………働け二人とも。

「桜、こっちだ。わざわざ呼びに来させて悪かったな」

「あ、離れの方に居たんですね。じゃあ何処に泊まるか決まったんですか？」

「いえ、もう少し他の部屋も見せてもらおうと思ってるの。桜、後で案内してもらえるかしら」

「はい、勿論です」

何事もなく会話をする二人を眺める。

遠坂を見て少し様子桜の様子が可笑しかったような気がしたんだが気のせいだったようだ。

本当、あとはセイバーだけだよな……………いや、弱気になるな俺。頑張ろう。

士郎SIDE END

シロウとリンが出て行って真面目な話は終わったので適当にテレビをつけて眺める。

夕方のニュースを眺めてると相変わらず朝やっていたものと同じ報道が続けられている。

あーはいはい、ガス漏れ事件ですね。何日同じもんやってんだよ。

ニュースのキャスターやお偉い専門家や評論家の人間がテロや組織的な犯行か、

などと見当違いな仮説を立てている。

(ほーんと、こんな大々的に報道までされちゃって………秘匿ってなんだろうなあ)

聖杯から流れてくる知識から秘匿の意味を調べてみるがやはり俺の知ってる秘匿だ。

シロウから辞書借りて調べてみるかな。

『秘匿』：真相（犯人）に辿り着かなければ誰に見られてもいい。
みたいになってたりして。

もしそうだったらシロウも弓兵と槍兵の戦いを見ていきなり魔術の儀式なんて結びつかせなかっただろうし、

「コスプレした人たちが何か凄かった」で終わってただろうな。

おいおい、それじゃシロウ殺され損じゃねえかあっはっは、とまあ冗談はここまでにして。

手口は同じ。

広範囲に渡って聖杯戦争の参加者の目に留まっただけでもない、

己の手口は見せずに魔力の収集が来ている。

リンから聞いた学校に結界を張っているお粗末なサーヴァントとは大違いだ。

バーサーカーは無理、ランサーはこんなまどろっこしいやり方はない。

アーチャーはリンの監視が行き届いてるし、こんな生かさず殺さずなんて手法俺には無理。

残るはアサシン、ライダー、キャスターだけが……ま、キャスターが有力候補だな。

アサシンもライダーも見たことないから分からないので判断はつかないけど。

(どつちにする)

さっさと片付けないと面倒になることは分かりきっている。

キャスターがやってたら面倒だなー。

協力関係にならないかと接触された時「マスターに一声かける」って言っっちゃったもんなあ。

こんなことやってるって分かったら拒否するだろうし。

「あらそう、じゃあ仕方ないわ」って諦めてくれるような性格してなさそうだしあのキャスター。

.....

.....

うむ、交渉の席に俺も同席させてもらえるよう祈っておこう。

「士郎と遠坂さん遅いねえ」

「ん？そうか？そうだな」

フジムライガの呟きに時刻を見れば、なるほど二人が席をはずしてから三十分を余裕で過ぎてている。

作戦会議でもしてるんじゃないかと思っっている俺は気にならないが、フジムライガはそうではない。ついでに、俺たちのやり取りを聞いて調理の音が止まる。

「あ、あの、もう盛り付けて運ぶだけなのでお二人を呼んできて貰えますか?!」

今までゆったりとマイペースで進められていた調理の手があわあわと動き出す。

サラダに使らしいレタスがザルで水を切ることもなくそのまま皿に直行している。

メインの鍋はなんとか完成していてコンロに掛けられて煮込まれているが、

その他のものは皿に盛られるのを待っている状態で、これから何が起きるか不安過ぎる。

「盛り付けなら俺とフジムライガでやっつくからマトウサクラが呼びに行つて来たらどうだ」

「えっ!?!」

「四人分の鍋は重いだろうし、落とされたら困る」

「そうそう、火傷したら大変だもん。桜ちゃん、二人とも呼んできてよ」

「あ、ありがとうございます!じゃあ呼んできますね、あとはよろしく願います!」

エプロンをつけたまま一度だけ頭を下げると足早に居間を後にするマトウサクラ。

ふ、取りあえず危機は去ったな……。

「んじゃ、俺は鍋持ってくから盛り付けよろしく頼むな」

「え」

「え?」

第貳拾漆話：危機迫る晩餐会（後書き）

以下、ちよつと舞台裏

セ「適当に皿に乗せちまえばいいんじゃないのか？」

藤「待つてセイバーさん！料理はまず目で楽しむものなのよ?!
そんな暴拳を私は見過ごすわけにはいかないわ！」

セ「目で………？笑っちゃうような盛り付けすんのか？」

藤「ちがあああう！芸術的に！食欲を誘うような盛り付けをするのよ！」

セ「俺にや無理だな。頑張れフジムラタイガ」

藤「セイバーさんの裏切り者おおおっ！ここでバツチり決めて土郎を見返したいと思わないの、セイバーさんは！私たちにだって料理は出来るって！」

セ「（鍋事件を思い出し中）………仕方ねえな。やるか」

藤「セイバーさんなら分かってくれると思ったわ！まずコンセプトを決めましょー！」

ア（凜！早く来い！鍋以外の夕食がダメになるぞ！）

去った危機、そしてそこにある危機。

次回更新は多分今月中には出来る、と思います。

遠坂さんの居候話は多分次回で決着つきます。

誤字脱字などありましたらご報告ください。

第貳拾捌話：信頼と親心と（前書き）

今回はわりとシリアス色が強い、話です。

藤村先生の話でもありますが、出番が少ないので性格口調に不安が残っております。そういうのが苦手な人は要注意。

一応遠坂さんの居候話には決着をつけたつもりです。

それでは二十八話目、楽しんでいただけたら幸いです。

第貳拾捌話：信頼と親心と

「客用の布団は俺が用意するから、桜、遠坂に部屋の案内してくれないか」

「はい、では遠坂先輩いきましよう」

「ええ、ありがとう桜」

「っ、い、いえ、これくらいのこと…」

笑いかけられて挙動不審になるマトウサクラの後をリンがついていき、

続いて布団を用意する為に部屋をあとにするシロウ。

そして夕食後のお茶をのんびりと楽しみながらテレビを見る俺とフジムラタイガ。

少年少女がいなくなり、特に話すこともなく居間にはテレビから流れる音だけが響く。

しかしそれもシロウ達が居なくなったのを見計らったフジムラタイガの手によって止められる。

「ねえセイバーさん、ちょっといいかしら」

「どうした？フジムラタイガ」

士郎SIDE

遠坂が泊まる部屋に布団を持っていき、軽くベッドメイキングを済ませてから

後のことを桜に任せて俺はセイバーと藤ねえのいる居間へと向かった。

勿論、遠坂の件だ。

「藤ねえ、セイバー、ちょっといいか？」

「どうしたの？なんか足りないものでもあった？」

「いやそつじゃない。遠坂のことで話があるんだ」

両サイドに座る二人が見える位置に正座して二人の視線を受け止め

る。

「遠坂を泊めるの今日だけってなったけど、やっぱりしばらく泊めさせてくれないか」

「理由は？」

「二人に相談しなかったことは浅慮過ぎたと思う。何も言わずに決めて悪かった。」

でも遠坂を誘ったのは俺なんだ。

それを急に反故にするなんて遠坂に悪いと思う。

二人に心配を掛けるかもしれないけど間違いは起さないって誓う。

だから遠坂をしばらくここに泊めること許可してくれないか」

目を逸らさずに二人の言葉を待っていると藤ねえが「うーん」と唸った。

セイバーだけが反対してたのかと思ったけどまさか藤ねえもなのかな？！

「土郎、私はそういう心配はしてないの。なんて言っただって土郎を育てたのは私なんだから！」

「え？あ、うん、ありがとう？」

「士郎がそこまで言うんなら私も居るし、桜ちゃんも居るし寝泊りは離れだから私は構わないわ。」

勿論、だからって何かしたら分かってるわね、士郎」

「ああ勿論、何もしない」

「ならよろしい、私からは言うことはないわ」

うむ、と腕を組んで頷く藤ねえ。

ほっと安堵してセイバーの方へと目を向けるとセイバーは暢気にミカンを剥いていた。

「……………おいセイバー、俺真面目に話してるんだけど」

「ん？ああ、別に良いんじゃないねえの。家主が決めて、同居人もOKしてんだから」

「いっておくけどお前も同居人だぞセイバー」

まるで自分は無関係と言わんばかりの態度にむっとする。

放って置けばトントン拍子で話が進むのに馬鹿だなあと言わんばかりの視線を受けるが、

気付かない振りをして「で、どうなんだよ」と答えを促す。

「他に行くところないってんならしょうがないだろ。」

マトウサクラにもお前から再度説明しておけよ」

「……………いいのか？」

「反対されたいのか？」

「いやそうじゃないけど！」

お人好しめと溜息と共に呟きを吐いた後に返ってきた答えに拍子抜けする。

頷いてくれと意思を込めて睨んで見たが、まさかこつも簡単に許可されるとは思ってたなかつた。

まじまじと不機嫌そうな顔を見れば更に眉間に皺が寄る。

「んじゃそろそろ私は桜ちゃんと遠坂さんの様子見てこようかなー」

「あ、頼んだ藤ねえ」

腰を上げて居間から出て行く藤ねえに一声掛け、

ひらりと振られた手を見送り足音と気配が遠ざかっていくのを確かめてセイバーに目を向ける。

「なあ、なんか言いたいことないのか？」

「お前が必要と感じて決めたことなんだろう。魔術のことに関しちや俺は素人同然だからな。」

魔術師であるお前らが決めたんなら反対する気もねえよ」

「……………なんか怒ってないかお前」

「怒ってねえよ。怒られるようなことしてんのかよお前」

「そんなつもりはないけど……………最近よくわからないタイミングで怒られるからさ」

「そりやお前が鈍いからだよ」

「そんなことはない」と言いたいがジト目で見られると言葉に詰まってしまう。

俺そんなに鈍いかなあ？

む？鈍い？

「ってことはやっぱりセイバー怒ってるんじゃないか？」

「シロウ、怒りたいのか？お前は」

「いいや、怒られたくはないぞ」

「んじゃ、さっさとマトウサクラに言い訳でもしてこい」

話は終わったと言わんばかりにしっしと手を振られる。

これ以上追求しても更にセイバーの怒りを煽るだけのような気がするので退却しよう。

士郎SIDE END

首を傾げながらもマトウサクラに説明をしに行ったシロウが戸を閉めるのを見届けて溜息を吐く。

シロウ達が居ない間のフジムライガとのやり取りを思い出しフウと一息吐く。

「信じてる、ね」

は、と声だけで笑う。

シロウもリンもマトウサクラも居なくなり、テレビの音さえもなくなった室内。

そこでフジムラタイガは姿勢を正して真剣な表情で俺に話しかけてきた。

問い返した俺にフジムラタイガは少しだけ悩むように瞳を伏せたが、直ぐに悩みを振り切って言葉を続ける。

「士郎が何をやってるのかわからないけど……きつと、セイバーさんが関わってるのよね」

「……………」

「あ、別にセイバーさんを責めてるわけじゃないのよ？」

なにしろ、士郎が決めたことだと思っから」

安心して！と手を振りながらも、困ったように笑っフジムラタイガ。

俺が来てから僅か4日。

一週間も経たない内からシロウ自身も、シロウの周りも変わりはじめている。

シロウが子どもと言える歳からずっと傍で見てきたフジムライタイガがその変化を感じ取れぬワケがない。

それでなくとも人間は変化に敏感な生き物だ。

異分子がいればすぐに分かる。

それでも彼女は受け入れたのだ。

懐が広いとも言えるかもしれないが、俺にはあまりにも無用心に見えた。

何故こんな簡単に異分子を受け入れられるのか謎でしかなかった。

「んで、フジムライタイガは何が言いたいんだよ」

俺に身を引け、とでも言いたいのか。

あまりにも検討違いな言い分だが、まあシロウ側の人間からみれば元凶は俺だから仕方ないだろう。

しかし俺が予想していたものとは違う言葉が出てくるのはその目を見れば分かる。

敵意なんてない。こちらを窺うような瞳が俺を見てくる。

むう、本当になにが言いたいんだ？シロウ関係の人間はよく分かん。

「うん……遠坂さんのことだけどね、私はいいと思ってるの。」

士郎が必要だと思ったから誘ったんだと思うし、信じてあげたいから。

だからセイバーさんもちょっと目をつぶって欲しいの」

「（そっちな！）……シロウから言ってきたら、な」

「ありがとう」

「居候の機嫌なんて伺ってんじゃねえよ。ったく、なんでお前らは揃いも揃ってそうなんだよ」

溜息をつきつつ、ミカンを剥いていく。

フジムライタイガは具体的にではないが何か起こっているのを気付いている。ならば、

「聞かないのか？何が起こってんのか」

今ここで俺に聞くのもいいだろうし（俺が素直に話すかどうかは別として）、

シロウに直接聞いてもいい。

少し難しいだろうが泊まる理由としてリンに聞くっていうのも手だ
と思う。

「士郎なら間違ったことはしないって信じてるから」

「ふーん」

家族のようだとっても所詮他人。

何が間違いか、間違いでないかの価値観も違うだろうにそこまで言
い切れるのは凄いな。

これが『保護者』っていうものなのだろうか……分かん。

一応大切にしているってのは分かるので、

「大切なら何の事件に巻き込まれるのか位は把握しておきたいと
思うのが

人間ってヤツだと思っただがなあ……ほら、心配ってやつ。

そういうのはしないのか？フジムライガは。」

「そりゃあ心配よ。でもね、セイバーさん」

「ん？」

「私だからこそ出来ることがあるかもしれないじゃない。

知らないでいるからこそ出来ることがあるかもしれないじゃない。

士郎が何も言わないってことは私にこのままで居て欲しいって思ってるからだと思っの。

だからね、私はいいの

「……………そうか」

「うん」

「そりゃ結構辛いと思っぞ？」

巻き込まれるかもしれない事の事を全く知らないってのも辛いし、
気になることを気にしない振りってのも辛い。

それでもフジムライタイガは「うん」と決意を固めて軽く頷いた。

「だって私は士郎の『保護者』だもん」

「そうか」

フフンとおちゃらけた風に笑っていたフジムラタイガを思い出す。

あの時は適当に頷いて置いたが、

「やっぱり気になってんじゃないか」

俺がシロウに理由を聞いて、はぐらかされた時すこしだけ気落ちしたように見えた。

すぐにいつもの調子に戻っていたが………それでいいのかねえ、と思う。

フジムラタイガも、エミヤシロウも。

「ま、俺には関係ねえか」

二人の真意なんざわかんねえので、その一言に戻る。

第貳拾捌話：信頼と親心と（後書き）

なんか続きそつな雰囲気ではありますが、続きません。

次回からはまた聖杯戦争関係の話に戻ります。

誤字脱字などありましたらご報告ください。

第貳拾玖話：剣士との逢引（前書き）

一週間には間に合いませんでしたが二十九話目です。
題名とは打って変わって色気も何も無い内容ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

第貳拾玖話：剣士との逢引

正午を告げる放送が響いてから数分後、士郎や凜たちが通う穂群原学園の屋上。

冬の冷たい風が吹き荒ぶこの場所はいくら日の光の恩恵が得られてはいても非常に寒く、

好き好んでこの場に来ようなどとは思わないだろう。

しかし今日はそんな屋上にひとつの影が現れる。

赤毛の短髪が冬の風に揺れ、唐突に強まった風に制服に包まれた肩を竦める。

赤毛の生徒　　衛宮士郎はキョロキョロと辺りを見回して声を潜めて問い掛ける。

「セイバーいるか」

声に反応してか、建物の影からカタンと音がした。

その直後影から姿を現したのは銀色のポットを持った長身の男性セイバーだ。

「ん」

「待たせて悪かったな、寒かっただろ」

「だからサーヴァントは寒さなんて感じないっての。いい加減学習しろよシロウ。」

ま、お前が朝作ってくれたスープのおかげで暖かく過ごせましたがね

「そっか、それならよかった」

「んじゃ、この色気も面白みも何も無い逢引をとっと終わらせるとするか」

「………だからつき合わせて悪かったって言うてるじゃないか」

この冬の寒風の冷たさにも匹敵するほど寒い状況に置かれているのはワケがある。

そうでもなければこの問題は本来リンやシロウ、魔術師やその心得がある者の領分だ。

未熟者のシロウは期待を抱く以前の問題として、リンがここに居ないのは理由があるのだ。

好き勝手に動いていい限られた時間を俺がここで潰しているのは、

勿論シロウのせいだ。

既に日課となっていている夜の鍛錬を終えた後、掃除を終えた俺を捕まえてシロウは言った。

『相談したいことがある』と。

発言の内容、発言した時の表情、二人きりという状況
嫌な予
感しかなかった。

嫌な予感？そりゃ的中するさ、俺の幸運値E-だもん。

自分を幸運の持ち主だと思ったことは一度も無かったが、

この冬木の聖杯戦争に召喚されてから不連続きではなかるーか。

うむ、冬木市は俺にとって鬼門なのかもしれん。良いところつつつたら食事のみってどうよ。

とまあ愚痴はその辺にしておくとして。

シロウが言うにはシロウを襲った黒いサーヴァントは、

驚いたことにシロウの友人である「マトウシンジ」というヤツのサーヴァントだったらしい。

そして学校に張られたたちも悪けりゃ頭も悪い結界を張った張本人

だったとか。

マトウシンジ曰くシロウ襲撃はサーヴァントの勝手な行動。

学校の結界は自分の身を守る為らしいが、……………明らかに胡散臭い。

これはあれか、俺がともだちも何も居なかったから

友人関係とかそれにおける信頼関係云々に対する常識がないとでもいうのか？

いいやシロウがお人好しなだけだな。

お前マトウシンジの言い分聞いて信じてとか、ないわ。

「お前さあ……………自分でも思ったんだろ、戦いたくなきゃ保護してもらえって」

「ああ」

「それでもやらなかった、ってことは戦う意思があるという事だ。

リンに敵視されてるってなら尚更教会に行くべきだ。

マトウシンジ自身が魔術師としてのルールをどう思っているよ」と

リンはルールを守るヤツなんだからリンから襲われることはねえだろ」

「……………」

「シロウ、何か言うこと……………いや、言い訳はあるか」

俺の話が正論だと言うことは理解しているらしい。

しかし心に引つかかることがあるらしく素直に領けないようだ。

どうせあれだろー、友人が言ってるから信じたいーとか

自分から手を出さないって言ってるんだからわざわざ突っつきたくないとか言う甘い考え。

まあ俺に相談したってことはシロウ自身も違和感を感じたって事だな。

もうその時点でこうして相談乗るのも馬鹿馬鹿しいが、

聖杯戦争に関係することなら一応シロウのサーヴァントとして付き合わなきゃな。

ああ面倒臭いかったるい。蛇嫌いなのになんで真っ先に関わってくる！

……………ほんと俺って運悪いな。

「……………ない。」

でもセイバー、俺は慎二が自分からは何もしいっていうならそれを信じたい。

だけどセイバーが言うとおり腑に落ちないものも感じているんだ」

「ふむ、まあ頼られたのになにもしないってのもなんだ。一つヒントをやるろう。

敵は何故真つ先にあの結界を張ったと思う」

「えーっと、確か自分のサーヴァントを強化する為」

「うむ、で？」

「で？……ああそうか！強化しなければ動けない、そうだなセイバー！」

「うむ、サーヴァントも連れずに無防備にうるちよろするマスターを襲う位しか出来んということだ」

「だから悪かったって言ってるだろ……」

「んで、他の奴らとドンパチするにや強化をする必要がある、

故に何の考えもなく目先の欲に囚われて自分の手の内を晒す挙句、

リンの管轄内でリンに喧嘩ふっかけるような行動に走った」

魔術師であるリンを敵に回したくないと思うなら出来ない行動だ。すげえ考えなし。

知識だけはあると言っているようだが、本気で魔術師としての知識があるのかを問い質したい。

いや、出会う機会があれば問い質そう。顔は覚えてる。

「シロウが現状維持をしたいのなら今の状態を続けさせる。

それか悩みの原因である結界その物をどうにかするかだな」

俺の予想じゃあそんなシロウのやりとりも無駄に終わるに一票ってところだな。

結界のことといい、会話の内容といい、公園で会った時の印象といい、

他人を自分より下に見てるようだし、

そういうヤツに限って短気だから思い通りに行かなきゃすぐに行動に出るだろ。

万が一シロウに言ったとおり「手出しされなきゃ自分も手を出さない」ってんなら、

動けもせずリンの目に触れぬよう隠遁学園生活ってところか？わお楽しそう。

人の不幸は蜜の味ーってな。

俺が楽しい隠遁学園生活について考えていると目の前で胡坐を掻いていたシロウが唸る。

「そうなんだよな、結界が厄介なんだよ」

「あーやめとけやめとけ。」

リンでも解決できなかったんだからお前にも出来るわきゃねえだろ」

「そりゃそうだけどさ………んん？待ってくれ」

「ん？」

「結界は魔術だよな」

「いや俺にはよくわからんが一応魔術の一種だろ」

「魔術ならセイバーの耐魔力で消せないか？」

クラス別能力

耐魔力 A++

A++以下の魔術は全てキャンセル。

現代の魔術師ではセイバーに傷を付けることも干渉することも不可

能。

「んー、いいところ付いてるがどうだろうな。」

発動後の魔術なら消したことあるが発動前の魔術を消したことはないからな」

「セイバー」

うわぁいやな予感。正直に返した俺の馬鹿野郎。

「俺のせいで魔力を温存しなきゃならないのは分かってる。けど放つておけないんだ。」

頼む、明日俺に付き合ってくれないか」

ですよー……………という訳で今に至るワケだ。

んで、結果だけ話すとするワケだが、

「こりゃ無理だな」

「すっぱり!？」

「躊躇する時間に意味があるか？」

「いやないけどさ」

そりゃ良かった。意味があるなら躊躇してやってもいいが気を使う必要もねえからな。

「手が無いつてワケじゃないが」

「まだあるのか?!」

「学校がなくなってもいいなら」

「いいわけあるか!」

「お前なあ、人命と建物、どっちが重要だと思っよ？」

まるで「非常識!」とシロウ程度に責められているようなので仕返しを試してみる。

俺？時には建物のほうが重要な時もあるだろうよ。そこら辺は臨機応変にな。

俺のささやかな仕返しは成功したらしくシロウは唸っている。

ここで人命を尊重して学校喪失事件なんて起こしたら宝具も使うし、俺もバカの仲間入りだが。

「ちよつとあんた達なに物騒な会話してんのよ」

「と、遠坂?!」

何故驚く。一緒に登校したのは他でもないお前なのに。

「学校一校まるまる失くす、なんてこと止めて頂戴。

確かに人命も大事でしょうけどそれは本当に最終手段よ」

「そつだぞセイバー」

「悩んでた衛宮君が言える台詞じゃないわよー？

兎に角、良かったわ。アーチャーが学校の屋上でセイバーの姿を見たっていつから来てみて」

「ははは、流石に真昼間から目立つ行動取るわけねえだろリン」

「ええ、夜でも止めて頂戴ねセイバー」

だからやらねえっつもの。

第貳拾玖話：剣士との逢引（後書き）

誤字脱字などありましたら、ご報告ください。

第参拾話：協定の意味（前書き）

大分間が開いてしまつて申し訳ありません。

今回は前回の話の凛視点と続きをちよろつと書いた物です。

一向に進む気配のない聖杯戦争・・・・・・・・もう、三十話に突入したんですけどね。

内容はシリアス？です。

第参拾話：協定の意味

凜SIDE

間もなく授業の終了を告げる時刻に針を進める時計を見て、黒板に書かれた授業の内容を書き写しながら頭の中で聖杯戦争のことを考える。

聖杯戦争と言っても、学校にいる間は学校に悪趣味な結界を張ってくれたマスターが最優先ね。

勿論冬木の管理者としてキャスターのことも放っておけない。

それに桜や士郎、セイバーのこともあるし………はあ、問題は山積みね。

溜息は吐かず、一度だけ目を閉じてやり過ごすと傍に控えているアーチャーが声をかけてきた。

『凜、どうやらセイバーが学校に来ているようだ』

（セイバーが?! セイバーは昼間は魔力の温存の為に士郎の家に居

るはずじゃ……!?)

『……凛、いくら協力しているとは言えそれは学校に結界を張っているサーヴァントに関係することだけだろう。』

まさか君は学校に潜むサーヴァント一本に絞ってくれるとも思っていたのか?』

(っっ!)

『小僧だけならそうだったのかもしれないが、あのセイバーだぞ?』

(……そうね、油断してたわ)

協定、と一口に言っても『休戦』協定なのだ。

敵マスターを倒すまではこちらから仕掛けないし、あちらからも仕掛けない。

もし敵マスターとの交戦を察知したら協力する。

そして……これが重要なこと。

セイバーは敵マスターの搜索・探索には関与しない。

セイバーは確かに「敵マスター搜索の足が増える」と言ったけど、

その後に「学校にいる間だけでいいからシロウのことを気に掛けてやってくれ」と言った。

つまり学校には近付かないということだ
結果は学校に張られているのに、だ。

セイバーは嘘は言っていない。

事実士郎は空いた時間を使ってマスターの搜索をしているんだから……ああああっもう！

そりゃそうよね、セイバーにとっちゃ学校がどうなるうが関係ないわよね！

関与しないことで敵サーヴァントの強化が起こる確率は上がるけど、いざ事が起こりそうになったら真っ先に私達が動くし、自然にセイバーにも伝わるもの！

（なんか私悪魔と取引している気分になってきたわ……）

『「ご」利用は計画的に、と言ったところか』

（クリーニングオフとか適用されるのかしら）

『するのかね？』

（出来てもしないわよ！今更何て言えって言うのよ！）

うっ、セイバーの高笑いが聞こえてきそうだわ………。

(あら?でもおかしいわね、じゃあ何でセイバーは学校に来ているのかしら)

まさか全サーバントのマスターが学校に潜んでいるわけじゃないでしょうに。

今まで通りにセイバーは他サーバントの偵察をしていればいい。

協定を結ぶ時の条件にあるんだから土郎のことだってある程度は心配しなくてもいい。

絶好の機会だというのに何故………

『どつやらエミヤシロウが呼んだらしいな。』

ヤツの作ったスープが入った水筒を持っているのだから無関係ではあるまい』

(土郎が協力を求めたってこと?)

『さてね。残念ながら私にもセイバーが何を考えているのか分からない。』

君の結んだ休戦協定のおかげで更に学校に縛り付けられているので目が離せなくてね』

(~~~~~っ！)

だから何でこう、いちいち嫌味つたらしいのこのサーヴァントは！
非は私にあるって分かってる。分かってるから謝るべきだとは思う。
思うんだけど！……………はあ、でもちゃんと非は認めるべきよね。

(悪かったわよ……………確かに油断してた)

『……………別に君が謝ることではない。君は君の思うように行動すればいい。』

言った筈だ、私は君のサーヴァントだ。ならば君を全力でサポートする、それだけだろう？』

(っ！ええそうね、ありがとうアーチャー)

昼休みを告げるチャイムが鳴る。

途端騒がしくなる教室を抜け、向かうのは屋上。

一足飛びで駆け上がった階段の先。屋上の扉から物騒な会話が聞こ

える。

声をかけてもセイバーはやはり驚かない。

どうやら結界のことは私たちに押し付ける気だったようだけどそうはいかない。

自分から飛び込んできたんだもの、覚悟は出来ているわよね。

軽い会話を交わして、ニツコリと笑う。

「で、勿論説明してくれるわよね衛宮君」

彼らが話していたのは結界関係　なら協定を結んだ相手としては聞く権利があるものね？

凜SIDE　END

「結界は魔術だろ？」

だからセイバーの耐魔力ならなんとかなるかもしれないと思って

セイバーに無茶を言って来てもらったんだ。えつと………何か問題があったのか？遠坂」

「ま、結果はこの通りお手上げってところだな」

どこか好戦的な目を向けてくるリンに両手を挙げて肩を竦めてみせる。

実際、俺のクラス別能力では太刀打ち出来るものではない。

ここに来て掴んだ物があるのは確かだが、敵の真名を知るまでには至らない。

「リン、妨害し始めてからどれくらい経つ？」

「ここを発見したのが31日だったから4日かしら。それがどうかしたの？」

「お前は結界を張ったサーヴァントのマスターをどう見る」

「そうね、こんな目立つ所にこれだけのものを張るってことは相当切羽詰ってるはずだわ。

仕掛けてくるのならもうすぐってところかしら」

4日。それだけの日数が経っているのならば痺れを切らす頃だろう。

シロウが何か言いたそうな顔をしているが無視だ無視。

『シロウの友人』という肩書きはなんの保障にも免罪符にもなりはしない。

というかマトウシンジはリンとシロウが協力関係なのを知っていて正体をばらしたんだよな。

……それは凄く不味いことなのではないか？

味方だといっているリンの敵であるマトウシンジを庇う。

そんな器用なことが出来ると思っているのだろうかシロウは。

そしてその状況に持ち込んだマトウシンジは。

(いやそうか、シロウは庇っていないかと思っっているのか……
本当にシロウの判断基準がわかんねえ)

リンに協力することを選んだのならマトウシンジのことは話すべきだろ。

まさかシロウも『休戦』の協定のみに頼いたというワケじゃあるまいに。

もしそうだったら自分の陣地に敵を泊めるとかないもんな。

流石にそこまで考えなしじゃない、と言いつれない所が俺の不運さを裏付けてるよな。

……はあ、俺はなんて運が悪いんだろう。

(兎に角、この妙な三角関係のことはシロウに任せるとするか)

シロウ自身が考え、選んだことだ。どうにか出来る自信があるんだろう。

シロウのサーヴァントとして何かやるべきなのかもしれないが、

人間関係は理解不能なことが起き過ぎるからな。正直めんどくせえ。

それに時間は迫っている　近い内誰かが脱落するような戦闘が起こる。

協定を結んでいることもいれ、俺としてはリンに残って貰いたいが状況によるな。

なんにしる事が起こる前に確かめておくべきことがある。

「この結界が発動すれば時間との勝負になるだろう。

何をどう選択するかは現場にいるお前らに任せるが、これだけは言っておこう。

いざとなれば　　いや、誰も死なせたくなかったら最初から全力で望むべきだ。」

「セイバー？あんたもしかして敵の正体が・・・」

「いや全く分かん。」

完成した結界なら時間の勝負にもならんかもしれんから頑張れより
ん」

「紛らわしい言い方しないでくれるかしらセイバー」

ジト目で睨みつけてくるリンに笑って返して、

「んじゃ役立たずは帰るわ」と軽く言ってからひらりと手を振る。
と、

「セイバー、ちょっと待ってくれ！」

「む？」

唐突にシロウに呼び止められる。

「今日の礼だ。ありがとな、付き合ってくれて」

「・・・礼なんていらねえって言うてんだろ」

紫の包みに入った弁当箱を渡されて戸惑う。

手袋を通してじんわりと伝わってくるその温もりは……頭を搔き篋りたくなってくる。

もやもやとする胸のうちを吐き出すかのように溜息を吐いて、シロウに耳打ちする。

「無条件に信じ、疑うことも怒ることもない。」

「……お前の言う友だちとは随分都合がいいものだな、シロウ」

「っ！」

「選択するのは何もリンだけじゃない。覚えておけ」

息を呑むシロウの声だけを聞いて、顔を見ずに弁当を小脇に抱えて屋上から飛び降りる。

俺の言葉を聞いてシロウが何を選び、どう行動するかは知らない。

だからそう、

「だけど、俺は……」

そんな咳きと共に握り締められた拳も、俯いて隠された表情も知らなかつた。

第参拾話：協定の意味（後書き）

悩みを解決させてあげるなんて優しさは一切ないセイバーさん。

お弁当が暖かかったのは土郎が藤村先生に頼んで家庭科室のレンジを使わせてもらったからです。食べるのが好きなセイバーへの土郎の精一杯の心遣いです。

話の内容的に書くのが難しくてこの話はかなり書き直したんですよ………だから何かおかしな所があれば修正するつもりです。気になった箇所があったらご連絡していただけると幸いです。

いろんな人間関係が複雑化している聖杯戦争………更新は近い内に！

誤字脱字などありましたらご報告ください。

第参拾壹話・揺らぐ決意決める意志（前書き）

今月の更新はこれで最後になります、三十一話目です。

．．．．．原作でもそうだけど土郎単独行動多いですね。
朝や夜は誰かと一緒にでも外出時は殆んど一人．．．．．。
性格が災いしてるんでしょうかね。

第参拾壹話・揺らぐ決意決める意志

凜SIDE

「つく、逃げられたわ……話は終わってないのに」

自分の用件だけ済ませてさっさと退散したセイバーに舌打ちをする。

逃がしたのは惜しかったけど、いつまでもここでポケットとしてる暇はないわ。

「士郎？」

セイバーが去った後を見つめたまま動かない士郎に声をかける。

立ち去る前にセイバーに何か言われたようだったけどそれが原因でしようね。

アイツにどんな思惑があるかはわからないけど自分のマスターを追い詰めてどうするのよ……。

(ひとりで悩まないで頼ればいいのに)

夢で見た馬鹿な男みたいだ。

ひとりじゃ受け止めきれないのに辛いことは自分だけに押し留めようとする馬鹿な男。

誰もが笑顔でいられる未来なんてものを理想に走り続けた馬鹿な男。

(土郎は違う)

ちらちらと覗く夢で見た男の影を否定する。

桜のこともセイバーのことも周りに相談できる。頼ることが出来る。

でもその相談は果たして彼の為のものだったのか

「土郎」

一瞬過ぎった考えを振り切ってもう一度声を掛ける。

反応は無い……………ってなんかイライラしてきたわね。

こっちが心配して声掛けてるのに無視ってどうなの。

こうなったら殴ってでもこっちに意識を戻してやるっじゃない

「悪い遠坂！あとで埋め合わせさせてくれ！」

「ちよっ!?!？」

突然顔を上げて駆け出した士郎はこっちを一度も見ることなく、
言いたいことだけ言つと屋上からさっさと立ち去ってしまった。

『………凜』

「何も言わないで頂戴アーチャー、埋め合わせしてくれるって言っ
てくれるんだもの」

空ぶってしまった手を握り締め、拳を手の平に打ちつける。

ああでも、士郎に会う前に呼び出されてるのよね。

朝クラスメートから聞いた言付けを思い出して更に機嫌が降下する。

「放課後屋上で………って何を考えてるのかしらね、間桐君
は」

凜SIDE END

シロウ達と別れ、商店街を通って公園に立ち寄る。

無人の遊具が冬の風に吹かれてキィキィと寂しげな音を立てて揺れている。

誰もいないことにほっと安堵してから備え付けられたベンチに腰掛ける。

傍に暇潰しに持ってきていたシロウの歴史の教科書と銀色のポット、そして弁当を置く。

「クソ、シロウめ……………」

イライラもやもやと今まで感じたことの無い不快さが胸の辺りに渦巻いている。

原因は分かっている　我がマスター様であるシロウだ。

だって信じられるか?!

解除も出来ない、発動すれば死人が出る、発動のタイミングも不明！

そんなもんが仕掛けられている
聖杯戦争に無関係な人間が多い学校に、だ。

別にそれだけならいい。

死体の状態、環境の変化などの情報から敵の戦闘スタイル、武器、
宝具、真名を導き出すだけだ。

んで、自分の身に火の粉が降りかかってきたら情報を利用して討つ。
俺の役割はそれだけだ。

マスターがシロウじゃなければ何人無関係な人間が死のうが構わな
い。

でもアイツは言った。

聖杯戦争に無関係な人を巻き込みたくない。

俺に協力を願ったのはそれを為すためじゃないのか。

俺とリンとアーチャーの力があっても人質の命の保障にはならない
のか。

それほど無能で無力だと思われてんのか。

それともその願いは、友人のことを守る為なら捨てられる程度のものであったのか。

「お前の願いがその程度のもんだってんなら……俺は、」

待つ必要など、

「セイバー？」

「お、やっと話しかけてきたか」

少し前から気配は感じていたので居たことは知っていたが、

話しかけないのなら何かしらの理由があるのだろうと思って放っておいた

イリヤスフィールに声を掛けられる。振り返った先には少し不安げな顔があった。

「またお兄ちゃんと喧嘩してきたの？」

喧嘩、ねえ……。

「喧嘩になると思うか？」

「シロウじゃ無理よ」

「だろー？いちいち反応するのも大人気ねえし……………」

「あら、セイバーは自分で思ってるよりも子供よ？」

クスクスと笑われる。

その笑い方がまるで一生懸命大人ぶる子供を見ているかのように居た堪れない。

あー、いやまあ、確かに大人気ないことをしている自覚はあるが……………まあいいか。

「どつちが悪いか私には分からないけど、仲直りしないの？」

「何故俺が」

「そつかあ、じゃあシロウは私が殺してあげる。

それならシロウは私のものになるし、セイバーも私のものだもん」

ね、いい考えでしょう？と微笑むイリヤスフィールは子供そのものだ。

無邪気だからこそ、自分がどんな残酷なことを考えているかも分からない。

「……いや、イリヤスフィールは賢い。分かっているよ、いるのだろっ。」

「シロウがどうであれ、俺は自分の意思を曲げる気はない」

俺は確かに決めたのだ。

令呪三つ　残り二つのそれが消えるまではシロウを守ってやる
うと。

シロウの死体を見るのは、令呪の輝きが失せた時のみと。

危ねえ危ねえ、もう少しで座に戻ってから後悔するところだった。

まあ、意図的に無駄遣いさせても構わねえよな　とか思ってるけど
な！

むしろ最初からそう決めてるしな。さあてどうしてやるっかシロウ
め……………フッフ。

「それにな、イリヤスフィール」

「なにかしら」

「俺はおまけでついていってやれるほど安くはねえんだ」

イリヤスフィールの目的はシロウだ。

ならばそれ以外はおまけだ。付録だ。添え物だ！

シロウの添え物……？フ、そんな耐えられるか！

生憎とそんなポジションに納まってやれるほど安くはないのである。

「ふふっ、それもそうね。」

でもセイバー？勘違いしちゃダメよ？」

「あん？」

「私はセイバーのことが好きだから誘ってあげたのよ？」

「あー、そりゃ光栄なことだ」

「ええ、咽び泣いて喜ぶべきよ」

「はははそりゃ無理な話だ」

だって俺幼女趣味じゃねえもん。

「セイバー？今何を考えたか言ってみなさい？」

「そつだ、今日は弁当持ってきたんだ！食おうイリヤスフィール！」

「………仕方ないわね」

手のかかる子供を見るような目で見られる。

でもこの柔らかい微笑みもすぐに子供特有の期待のこもった物に変わるだろう。

殺すだなんだといっているが、

イリヤスフィールがシロウのことを完全に悪く思えない所で留まっているのは分かっているのだから。

でなきや『お兄ちゃん』なんていいながらはしゃげるわけが無い。

あ、でも出汁巻き卵を含め卵ものは俺のだからな。

イリヤスフィールと別れ、早急に調べる必要があることを調べ終わ

りシロウの家に戻ると、

「おかえりなさい」

明らかに不機嫌です。と言わんばかりの表情と声をしたリンが頼杖をついて居間に座っていた。

だが、俺の背後を見てきよとんと表情を改める。

「あら？士郎とは一緒じゃなかったの」

「シロウ？シロウは学校なんだからどっちかと言えばリンと一緒にじゃないのか」

流石に御手手繋いで仲良く下校。とは言わないが、

クラスは違えど同じ学年同じ学校なのだから時間はリンの方が合わせやすいだろう。

帰る場所も同じだししてつきり一緒に帰ってくるかと思っただがそうではなかったらしい。

「……………私は先約があったから一緒には帰ってないわよ」

眉をピクリと動かしてカツカツと机にその形の良い指を打ち付ける。

「どうやらその『先約』と何かがあったらしい。」

「ここまでリンをイラつかせるとは………趣味が合いそうだ。わざとイラつかせたら、の話ではあるが。」

「どうした？振られたか？」

「はあ？！冗談じゃないわよ、あっちから呼んでおいて時間になっても来なかったのよ！」

「だからさっさと帰ってきてやったわ！」

「フン、とそっぽを向くリン。」

「どうやらドタキャンされたらしい。あながち振られたという表現も間違っていないってところか？」

「リンを一方的に呼び出せるってすげえヤツもいるもんだな」

「別にアイツだから行った訳じゃないわよ………妙に突っかかってくるわねセイバー」

「そうか？まあリンの弱みでも握ればとは思ってるがな」

「弱みでも何でもないわよ。ただムカつくだけ」

クツクツと笑いながら告げれば口元を引き攣らせながら据わった目で睨まれる。

勿論リンに睨まれた位では怖くもなんともないので笑い続けていると、大きく一つ溜息を吐いた。

「そもそも慎二の呼び出しに応じた私が馬鹿だったのよね……
・あああ！無視しとけば良かった！」

ムキーと怒りを顕わにするリンをからかうよりもリンの発言の中の『シンジ』に直感が働く。

シンジ………そんなに珍しい名前じゃない。学校にも何人か同じ名前の奴くらいいるだろう。

だが、俺の中ではリンの言う『シンジ』と黒いサーヴァントのマスターである『マトウシンジ』は

同一人物だと直感が告げており、嫌な予感ほど当たることは分かっていた。

「リン、シロウを最後に見たのはいつだ？」

「え？アンタと屋上で別れた後すぐに別れたけど。」

あ、そういえばセイバー、士郎をからかうのもほどほどにしなさいよ。

なんかアイツ随分考え込んでたわよ」

「そうか。アーチャー、お前は見ていたな」

「クツ、そうだな、小僧はマトウシンジのところに行ったぞ」

「はっ?! ちょっとアーチャーどういうことよそれ!」

「何、簡単なことだ」

「ああ、簡単なことだ 説教が足りなかっただけだ」

本当に手の掛かりすぎるマスター様だ。

何の用で行ったかは分からないが単身敵主従の元へ向かうなんてアホ過ぎる。

「喜ベリン、もうすぐで悩みの元が一つ減るぞ」

さて、問題に単身で頭を突っ込んでいくバカマスターを迎えに行くとする

ガラガラ

「先輩！大丈夫ですかっ、もう家に着きましたから直ぐに手当てを・
っ！」

「だからそこまで酷くないって、っっ」

「わかりました！わかりましたから黙っててください！」

明らかに尋常じゃないマトウサクラの声と、くぐもったシロウの声。

会話の内容からシロウは怪我をしているらしく………あ、リ
ンが救急箱に飛びついた。

「あとで説明してもらっから」

そう捨て台詞を告げてから玄関へと続く襖を開けて玄関へと駆け出
していった。

次いでマトウサクラのほっとした声。シロウの謝罪する声。罵倒す
るリンの声。

「あ、俺やる気失せたから寝るわ」

「私も消えていよう」

やる気メーターが底辺を突破するという現象が俺の中で起きたので
寝るとしよう。

シロウの怪我？フ。

第参拾壹話・揺らぐ決意決める意志（後書き）

以下ちよつと舞台裏

イ「むむ！この弁当生暖かい……もしやセイバー、お主に腰掛けていたな！？」

セ「滅相もございませぬ！これはシロウめが懐にて温めていた物でございます。

その証拠にシロウの胸元には飯粒が……」

イ「おお、お主ほどの主思いの家来はいまい……ってセイバーほんど？」

セ「うんにゃ？付いてなかったぞ。というか人肌じゃ温まんねえって」

イ「そうよね、びっくりしちゃった」

昼食前の一芝居（歴史の教科書から抜粋）。

そろそろライダーさんに参上して欲しいところ……。
花はあれどもサーヴァント側にはないので。ね。

誤字脱字などありましたらご報告ください。

第参拾弍話・ささやかなる前進（前書き）

おお、前更新から1週間経ってない……あ、ライダーさん
すごくちよつとです。

密かに裏で動いてる人とかそんな人の狙いだとかそんな感じの内容
となっております。

そんな三十二話目ですがお楽しみいただけたら幸いです。

第参拾弐話…ささやかなる前進

「ちょっと転んだだけなんだ」

騙される奴がいると思ってんのかと真剣に問い質したい気分になせ
てくれる嘘について、

自分でもやっぱり無理があるかなと思っっているのか、誤魔化すよう
にシロウは笑った。

だがその場には騙されることは当然なく、怪我をしたという事実を
見てしまって、

笑顔に誤魔化されることも出来なかった人間ばかりが揃っているわ
けで。

「そんな理由が通じると思ってるの（んですか）！？」

と真っ向からダメ出しを食らっているシロウを徐々に霊体化しながら
眺めている従者が一人。

もうちょっと捻ろうぜ、シロウ。

バレバレな嘘は神経を逆なでするって事をシロウはそろそろ学習す

るべきだと思う。

犬の尻尾を踏んづけてしまつて運悪く首輪がついていなくて追いかけてられて噛み付かれた〜とか。

噛み跡なんて無いけど。そんなことが起こるヤツはコントの神様に愛されてるに違いない状況だけど。

ん？誤魔化す気がないだど？

当然だろつ、人をからかうことはつまらないことばかりの英霊人生の数少ない醍醐味だと思つてゐる。

シロウに更に人の神経を逆なでする言い訳の仕方を伝授しようかと悩んでゐる内に、

シロウを追求しつつも手当てをする手を休めないリンとマトウサクラによつて手当てが終つてゐた。

「桜、遠坂、ありがとう。大分楽になつた」

「いえ、当然のことをしてただけですしそんなお礼なんて……」

まっすぐにお礼を言われて照れ照れと挙動不審になるマトウサクラ。

このまま甘酸っぱい青春空気に雪崩れ込むかと思いきや、そうは問

屋が卸さない。

「楽になったなら、さっきの苦しいいわけよりまともな理由が聞けるのよね衛宮君」

リンの言葉にはっと我に返るマトウサクラも「もう誤魔化されませんよ」と決意を新たに向き直る。

「ごめんな心配かけて。でも今は……………」

言えない、と続けようと思ったのだからシロウはそこで止めた。

マトウサクラの表情は真剣だ。

真剣だけど、とても脆い。言葉を間違えれば直ぐに崩壊しそうな線で留まっている。

「悪い、喧嘩したんだ……………桜に失望されたくなくて嘔吐いた。ごめん、本当にごめん」

「……………それは、兄さんですか？」

「違う。でも相手は言えない」

「……………」

お、俺は夢を見ているのか………？

シロウが相手の表情から空気を読み、まともなことを言っている！

しかも何の揺らぎも無くさらりと嘔吐してる！

そんな器用なことが出来たのか？シロウは実はできる子なのか？！

「桜、これ以上は無理だって分かってるでしょう？」

「はい………でも、もう喧嘩なんて止めてくださいね」

「分かってる。気をつける」

絶妙なタイミングでリングがフォローを入れ、マトウサクラもこれ以上は無理だと思ったのか引き下がる。

少しだけ思いつめた顔をしているが一線は越えなかったようだ。

今日は赤飯か……いや、この状況で赤飯頼んだら確実にこの家の人間全員敵にまわすな。

敵に回したとしてもたかがしれてるが。せめてもの祝いとして「豆」飯を頼もう。

「で、本当は何があったんだ？」

「セイバー、帰って来てたのか」

着替える為に自室に戻ったシロウの後に続き部屋に入り、実体化して話しかける。

「っていつかお前怪我治してから帰ってこいよ。そうすりゃ面倒なことにならなくて済んだのによ」

「これは聖杯戦争の為にセイバーに借りてるものだろ。」

今回は聖杯戦争に関係ないことだったんだ。使えるわけ無いだろ」

「？」

相変わらずシロウはわけの分からないものさしを持っている。

いや、もしかして聖杯戦争と関係のあるマトウシンジと何かしらあったの怪我じゃないのか？

ガチで喧嘩なの？聖杯戦争中に？馬鹿なの？死ぬの？

「これは俺の我が仇だ。だから使わなかった」

「お前が何を言ってるのか分からん。日本語に訳してくれ」

「日本語だよ。」

慎二殴ってきた」

「ほお
」

そうか、やはり喧嘩相手はマトウシンジ……………ん？

友だち宣言どこいった？

計画は至って簡単なものだった。

失敗しても成功してもそれなりに旨みのあるほんの小手調べ程度の
策略。

だがそれは 計画が実行されればの話であって、

まさか計画が実行されなかったなどという結果は間桐臓硯には予想

出来なかった。

しかしその予想外のことが現実であるのは目の前でライダーの名前を呼ぶ孫が証明している。

「なんで出てこなかった！」と叫ぶ間桐慎二。

「エミヤシロウには手を出さないという条件でしたから」と返すライダー。

「誰がお前のマスターだと思ってる！」と声を荒げて主従の立場を主張する。

「今のマスターはあなたです。ですがそれはサクラの命令があつてのものです」と冷淡に告げられる。

計画は至って簡単なもの。

休戦協定を結んでいる衛宮士郎と遠坂凜の二人に一人ひとりに協力を持ちかける。

始めに声をかける相手が衛宮士郎というのが最低条件だ。

あのお人好しな性格であれば友人という立場にいる間桐慎二がマスターであることは喋らない。

一応警戒をして学校にいる人間が人質であることを臭わせておけば確実なものとなる。

休戦協定を結び、協力をしているのに敵を庇うその行為はどういうことか。

衛宮士郎は遠坂凜の信用を裏切ったことになる。

それを面白おかしく遠坂凜の前で言えばいい。

助言する理由など遠坂凜に恋情を抱いている間桐慎二にはことかかない。

勿論ここで自分のサーヴァントとその所業をバラす必要はない。

ただ衛宮士郎が裏切ったと言えば良い。

学校に潜伏しているサーヴァントは複数いるのだからそいつが結界を張ったと言えば良い。

潜伏しているのはキャスターなのだからこれ以上の適役はいないだろう。

そうすれば簡単に遠坂凜の不信感を煽るか芽生えさせることが出来るだろう。

結界がどういふものか分かっているのだから尚更に。

あとは二人の関係が内から壊れていくのを眺めれば良い。

潰しあってくれるのならば文句など無い。

こちらは今までどおり大人しくしておいて、機を見て結界を発動し、魔力不足を解消する。

計画通り衛宮士郎は遠坂凜に間桐慎二のことを告げず、敵を庇った。

そして今日、遠坂凜と接触し衛宮士郎の裏切りを発覚させるつもりだった。

うまくいっていたのだ。間桐慎二が衛宮士郎の誘いに乗らなければ、調子に乗りやすく、口を滑らせやすい孫を思っで計画の全てを話さなかったことがここで仇となった。

「言つとおりにしていればあの二人の協力関係を崩せる」とだけ言ったことが。

ここで間桐臓硯が間桐慎二を罵倒することは実に容易いことだ。

が、それはとても無意味であり、その不満を怒りに変えてこれ以上の失態を演じることになる可能性が高い。

衛宮邸に潜ませている孫娘からは何の成果も得られない。

当初から成果など期待してはいなかったが、ここまでくると孫達の無能さに溜息しか出てこなかった。

良い事と言えば戯言を抜かしたセイバーが大聖杯の破壊を止め、別の目的で暗躍しているくらいだ。

「時期は早いが仕方ない……………」

「？」

標的を変える事にしよう。

まずは使えないものを使えるようにしなくては。そして使えるものを調達しよう。

「……………友だちという人種じゃなかったのか？」

「慎二は友人だぞ？でも、許せないこともあるだろ」

うん、そうだな。

すごく真つ当な意見だけどすごく遅い。

「ふむ、完全に敵対してきたということか……………ん？じゃあなんでお前生きてんだ？」

「セイバー、お前に嫌われるようなことばかりしてるとは思っけどさ、」

もうちょっとオブラートに包んでくれるか？」

「自覚があるなら黙ってる。嫌われてるヤツが気遣いをしろと頼める立場か阿呆」

「……………すみません」

かといって黙られても困るので先の疑問に答えるように促す。

「えーっと、敵対するとはいったけど慎二に対して殺意はないと証明したから……………」

「近い内にお前消しますよーといわれて見逃してくれると思うか、サーヴァントが」

もしかして何の願いも持っていないサーヴァントばかりだと思ってるの？馬鹿なの？

俺みたいなのは例外で、

聖杯という優勝商品を目当てにサーヴァントは召喚に応じるってりに説明受けただろ。

「う……む、ぐう……」

「つつかなんで殴ったんだ？殺意が無いって言うておきながら」

「学校の結界を解くように説得しにいったんだ。」

例え遠坂に敵視されてるとしても聖杯戦争に無関係な人を巻き込むのは間違ってる。

遠坂と敵対したくないなら直ぐにやめるべきだし、

それこそ遠坂は魔術師のルールを守るヤツなんだから教会に行くべきだって。

学校の人たちを人質にする意味なんてないって………そしたらアイツ」

ぎゅ、と拳が握られる。

「サーヴァントの餌なんだっていいやがった」

「ふむ」

「俺を襲ったのも慎二の命令を聞かずに勝手に行動したからだって言うてただろ？」

だから説明を十分に受けてなくて、魔力を集めるだけのものだと思ってるのかと思ってた。

でもちゃんとアイツ分かってたんだよな。どうやって魔力が集められるかも、全部」

それ聞いたら許せなくて殴ったんだ、とシロウは言った。

しばらくライダーの名前を呼んでたが来ないと分かった途端に殴り返してきて殴り合いになったらしい。

んで、普段鍛えている上最近俺との鍛錬で頑丈さを増してるシロウに勝てるわけが無く、

足腰立たなくなったマトウシンジに「協定関係である遠坂に教えさせてもらおう」と宣言したらしい。

「お前さ、リンがそれ聞いて協定関係続けてくれると思ってるか？」

はっきりいってこのままマトウシンジ主従を亡き者にして、

リンには知らん振りを決め込んだ方が良く。それが賢い生き方ってもんだ。

「分からない。でも遠坂に協力するって言ったんだ。

罪滅ぼしにも何もならないって分かっているけど、ちゃんとのおつと思ってる」

うむ、そんな器用な生き方できる訳ねえよなコイツ。

なんせ、

「ごめんなセイバー、お前がライダーのこと苦手だっけ気付いてる。

それでも俺一人じゃ無理なんだ。遠坂と決別したとしても慎二をこのままにしておけない。

だから改めて頼む、協力して欲しい」

とサーヴァント相手に真剣に頭を下げてくるような馬鹿なのだから。

「なあシロウ、お前は俺の出した条件を守らなかったことがあるか？」

「ない」

「じゃあ俺もお前に協力をしない理由なんてねえよな」

「っ、じゃあー！」

「ぶっちゃけマトウシンジを亡き者にした方が早いんだけどそんな気ねえんだろ」

「ああ、慎二は許せないことをしようとしてるけど……俺はやっぱり慎二を友人だと思っててる。」

それにさ、桜も悲しむと思うんだ。桜には出来るだけ笑っていて欲しい、だから殺せない」

「狙いが敵サーヴァントのみならサーヴァントである俺がでなくてどうするよ。」

お前はふんぞり返って後ろで見守ってりゃいいんだよ」

「セイバー、ありが」

「礼は何もかも終わってから聞く」

「……そっか」

うむ、本当に礼を言われる筋合いは無い。

何故なら

「で、トオサカリンはどうするつもりだ？」

「……本当にアンタって性格悪いわよね」

敵になるかもしれないマスターに盗み聞きさせるような駄目サーヴァントなのだから。

あ、でも説明する手間を省いてあげる良きサーヴメントでもあるな。

第参拾貳話・ささやかなる前進（後書き）

三十二話内で計画が成功してもしなくても云々は、

間桐君なんて捨て駒ですよ。ということですよ。

成功すれば説明通りですし、失敗しても土郎の所業は事実なのでギクシヤクしますからね。

令呪一角消えるだけでライダーさん消えなくて済みますし。

誤字脱字などありましたらご報告ください。

第参拾参話：敵と味方と協力者（前書き）

前更新から二週・・・・・・・・・・時が流れるのは早いものですね、すいません。

凜嬢との協定はどうなるのか、そんな感じの三十三話目です。
少しでも楽しんでいただければ幸いです。

第参拾参話：敵と味方と協力者

トオサカリンの出現にシロウは驚いて俺の背後に現れたトオサカリンを見ている。

勿論俺は気付いていたさ。というかこれくらいの気配察知できなきゃサーヴァントなんて辞めちまえ。

いつまでも背後を取られているのも気持ちのいいものじゃないので俺もトオサカリンへと向き直る。

俺とシロウの視線を受けてトオサカリンは口を開く。

「 私は、別に士郎が私以外のヤツと手を組んでも何も言ってもりも無いわ。」

私達が結んだのは休戦協定だもの。それ以外の行動を制限する権利なんて私にはないわ」

うむ、当然だな。

条件の中に協力関係をトオサカリンに絞ることなど挙げられていない。

「でも士郎が言ったとおり慎二が学校に結界を張っているサーヴァントのマスターだったのなら別。

自分勝手な判断で協定の条件を反故するようなヤツと共闘なんて危なくて出来ない」

うむ、これも当然だな。

犯人に繋がる重大な情報を隠していたんだ。

もしこのまま戦闘になったとしたら、

シロウがどう言おうがトオサカリンは背後のシロウも警戒しなくてはならなくなる。

俺からしてみればそこまでして継続するほど旨みのある協定とは思えない。

俺だったらばっさり切るな。

ま、トオサカリンは俺じゃないし、立場とか事情とか人間関係とか違うからな。

いやー、どうするか見ものだな。(観客気分)

「士郎を許してあげられる程お人好しじゃないの」

「ああ」

ほう、トオサカリンは決別を決意したか。

ん？俺は何も言わないぞ。

トオサカリンが決めたならそれでいいだろ？口出しする意味が無い。

シロウもトオサカリンの意思を尊重すると決めたのか俺の方を一度も見ない。

しかしシロウ見事に振られちまったなー、ケケケ。

「本当に悪かった遠坂、この埋め合わせは絶対にさせてもらっから」

「貸しーっつてことね」

「ああ。取りあえず今夜は泊まっていくか？

いや遠坂が早く帰りたいうって言うのなら止められないけどさ……
……」

敵宣言を真正面から相手から受けといて、

今から「帰る」と言えば「もう遅いし送ってくぞ」と言いそうな所がシロウクオリティ。

段々とシロウの考えそうなことが分かってきたのだが、

いまいちその反応・発言にどうやれば辿り着くのか理解出来ないな。

……まだまだ俺も人間に対しての理解が不足してんのかな？

「何言ってるのよ、帰らないわよ」

「そつだよな、もう時間も遅いし危ないから帰るのはあしt」

「話は終わってないもの」

「え？」

きよとんと目を丸くして不思議そうにトオサカリンを見るシロウ。

先程の出来た貸しをここで使うのかね？と考える俺。

予想通りの反応を返されたことが嬉しいのか笑みを深くするトオサカリン。

「士郎のことは許せないけど、敵の思惑通りに動いてやる気もないの。

そもそもこれから戦闘に持ち込もつって言うのに人員減らしてどうしろってのよ」

リンは今日の放課後マトウシンジに呼び出されていた。

シロウの話と予測でしかないが自分に来るであっただろう話。

その二つを合わせれば敵の狙いがなんだったのか位気付いているだろう。

ここで喧嘩別れしてしまうのが敵の思う壺であることも。

もしここで決別してしまえば助力が難しくなる。

シロウだけならまだしも、俺は敵の敵が味方、などという甘い考えは無いからだ。

トオサカリ・・・じゃなかったな、アーチャーが追い詰められていたら確実に無力化する。

満足なマスターを得られず弱体化しているライダーよりも、

正規のマスターを得ているアーチャーを如何にかする方が今後の聖杯戦争に有利になるからな。

シロウが怒ろうが知らん。

令呪を使ってくれりゃ万々歳だ。

(ま、計画通りにや進まなそうだけどな・・・俺らが最初の標的になる可能性もあるわけだし)

勿論そこら辺はこっちでもいろいろ準備させてもらうが……
その必要はなさそうだな。

「じゃ、じゃあ……!」

「折角借り作ったのに踏み倒されちゃ溜まんないもの。

言っておくけど次私を裏切るような真似したら死ぬほど後悔させてやるんだから」

「ああ！絶対しない、約束する」

元々この取引メリットとデメリットがあっただよな。

決別すれば敵が増えるが全ての時間を自由に使え、かつ裏切りを心配しなくていい。

しかもその敵が誰を狙うかもはっきりしているので状況を利用した奇襲が可能。(俺がやるうとしてたことな)

しなければ時間を割いて敵になりそうなマスターの魔術指導。しかし力量を把握できる。

いや他にもメリットあるか、シロウが戦争っていう意識ないから……
……メリットだらけじゃん。

リンがお人好しというか正々堂々という姿勢をとっているからメリツトにならないだけだ。

そう考えると変なヤツが来るよりマシだよなあ………実はシロウ運良いのか？

「再度協定を結ぶにあたって私から条件を付け足させてもらっわ」

「む？」

いろいろと考えているといつの間にか話が進んでいた。

シロウにまかせっきりにしとこうと傍観者の姿勢でいたが「条件」という言葉に反応してしまった。

「セイバー、一郎が学校に居る間アーチャーに護衛を頼んでいたけどあれを条件から外させてもらっわ」

「ふむ」

「一郎は馬鹿だから常に目を光らせてなきゃダメだって今回のことで十分理解したわ」

「む、その言い方は酷いんじゃない」

「敵の甘言に騙されていた衛宮君は黙って頂戴」

「はい」

「魔力に関しては霊体化してればいいわけだし、セイバーには士郎に付きっ切りでいてもらう。」

そもそもサーヴァントがマスターから離れている現状がおかしいのよ。

これが私から出す条件。この条件が受けられないっていうなら話はなかったことにさせて」

つまり今までの自由な時間が取れなくなるってことか。

シロウがこちらをジッと見ている。

「付きっ切りって言っても何らかの理由で離れざるを得ない状況になった場合は省くよな」

「何らかの理由って？」

「俺らが協力関係になるのと同じで他の奴らも協力関係を結ぶ奴らが出てくるかもしれん。」

その際に敵の計略によって分断させられたりした場合一時とはいえ離れざるを得ないだろ」

「……そうね。いいわ、止むを得ない事情があった場合は省くことにする」

「そりゃよかった。出来ないことをやれなんて無茶言われたらどうかとハラハラしたぜ」

「わざとらしいわね……言っておくけど私が士郎を許せないって言った時あんたニヤニヤしてたわよ」

無理難題を押し付けられずに済んでフヒーと安堵の息を吐いていると、

リンが目を据わらせて苦々しい顔をしながら指摘をしてくる。

俺に取っちゃ「あーあ、シロウ振られちゃって……プスー」という笑いが、

リンに取っては「ブハハ、まんまとうまい具合に決別してくれたぜ！企むぜ！」とあくどいものに見えたらしい。

うむ、相互理解って言う物は難しいものなのだな。

いや、ちゃんと企んでいたがな。敵同士になるんだし遠慮なんて不要だろ？

「よお、見張りごころーさん」

夕飯もその後のもろもろも終わり、衛宮の屋敷の住人が寝静まる頃。見張りをしている屋根の上にひょっこりと軽い調子で顔を出してきた男を睨みつける。

ニマニマとからかうように浮かべられた表情が気に食わない。

「フン、貴様の狙い通りに事が進んで満足か」

「狙い通り？」

「気づいてないとも思ったか？」

凜が小僧を追いかけた気配と、部屋の出入り口付近で耳をそばだてていた気配。

それらを感知していながらお前はあの小僧の心境を凜に聞かせたのだらう。

凜は甘い。貴様はそれを利用して小僧の傍に凜を置いた」

セイバーは性格の把握がうまい。

その人物がどうすれば動き、何を必要とし、自分の思い通りに動かす為^レに何をすれば良いのか。

静かに状況を見て確実に行動に起す。

弱体化したライダーなぞ今の状態の私なら一人でも退けることは可能だ。

だがエミヤシロウには凜の助力が必要だ。

だからセイバーは臭わせた。自分を敵にしたら痛手を負うのはお前らだと。

「最初は小僧を殺すと息巻いていたのに随分と仲が良くなったものだ。

ここでの日常がよほど楽しかったようだな？エミヤシロウの味方になるくらいに」

「楽しまなきや損だつて最初から言つてんだろ。」

お前も意地張つてねえで状況を楽しむ柔軟性身につけたほうがいいぜ？

いくらサーヴァントだつて精神的なダメージは免れねえだろ」

「誰のせいで苦労していると思っている」「

おかげでこちらの狙いからまた遠ざかった。

ギリと睨みつけてもセイバーはこちらのことなどお構いなしに「ふむ」と考え込んでいる。

「しかしあれだな」

「む?」「

「俺エミヤシロウの味方をしているように見えたか?」

「なにを……」

肯定でも否定でも無く、疑問。

本当にどうして私とその発言に行き着いたか分からない、と言わんばかりに問い掛けてくる瞳。

それをみて理解した。

エミヤシロウへの助力もまた、セイバーの狙いを遂げる為の通過点に過ぎないのだと。

「ん、ああ。そうだな、俺はシロウのサーヴァントなんだから味方面して当たり前だろ」

自分の心の声がつっかり出たことに気付いたのかすぐに肯定をする。しかしその発言が本当に「うっかり」だったのかも私には見極めることが出来ない。

「セイバー、貴様何を考えている」

「シロウの生存さ」

クツリと笑うその表情は決して本心を告げているようには見えなかった。

アーチャー SIDE END

第参拾参話：敵と味方と協力者（後書き）

最近メリットデメリットの話が多いと思いますが……御気にせず。

本文で出たメリットの話

セイバーさんはズバーっと省いてますが協力関係でいたほうがメリットは多いです。敵の本拠地という気の緩む場所に居を構えることが出来て、セイバーさんに対する情報源（藤村先生と桜嬢）も多く、魔術に関して疎いので畏掛け放題。また、魔術師の工房まで覗けるというオマケ付き！しかも士郎という絶対に裏切らない確証を得た味方までついてくる……。少しでも戦争という自覚が無いというのが分かっていただけたら幸いです。これ本当凜じゃなかったら士郎終わってましたよね。運がいいんだか悪いんだか……。これが主人公補正っていうものなんでしょうね。

誤字脱字などありましたらご報告ください。

第参拾肆話：襲撃者の夜（前書き）

何か妙に風が強いのですがこちらの地域だけなのでしょう。と思いつつ三十四話目です。

題名から戦闘シーンか！？と期待してくださった方すいません。それは次回です。

戦闘シーン次回に回した為今回の話は短めですが、楽しんでいただければ幸いです。

第参拾肆話：襲撃者の夜

「そついやアーチャー、お前が聖杯に願う願いつてなんだ？」

「唐突になんだ」

「え」

「なんだその問い返されることを想像していなかったといわんばかりの間抜け面は」

星が輝く空の下、場所は屋根の上、己ら以外に人気もなく、

前までは敵同士でも今は敵を同じくする仲間　　。

「夢を語り合う絶好の情景だと思ったんだがな」

「セイバー、その知識は何処から持ってきてきているんだ？聖杯か？」

「テレビや書物……ああ、ひよつとして夕日と土手の方がよかったか？それとも海か」

「違う」

熱血路線だったかーと頷いて尋ねると眉間に更に皺を寄せて苦々し

く答えるアーチャー。

この土地の風習に則って語り合おうと思ったんだが、どうやらお気に召さないようだ。

頭が痛いのか眉間の皺を伸ばそうとしているのかその両方なのか、深く溜息をつきながら眉間に指を当てていたアーチャーがジロリとこちらを睨んできた。

「貴様は自分の立場を理解出来ているのか？」

今は協力関係とはいえこの件が片付けば敵同士。

そのような相手にわざわざ自分の情報をくれてやるほどお人好しではない」

腕を組みながらいつものペースに戻ったアーチャーはクツリと笑う。

「理想の語り合いがしたいのなら 他に適任がいるだろう。アレとやね。」

アレは随分と貴様のことを気に掛けているようだったからな、

嬉々として話に乗っかってくるだろうよ」

馬鹿にしたように鼻で笑うアーチャー。

アーチャーの「アレ」っていうのはシロウだろうな。

だが別に俺もアーチャーと友情を育みたいとか夢を語り合いたい訳ではない。

勿論シロウとも語り合いたいと思わん。

「自覚があるなら構わない」

「？」

「弓兵、お前は俺に何を考えている、と聞いただろう？ 敵にそんなこと聞くなってことだ」

アーチャーの願いに少しだけ興味があつたのは本当だったがそれを知ることが難しい。

聖杯への願いを語るとはそれに至るまでの道、つまり経歴に触れるということだ。

ぼやかすことは出来るかもしれない。しかしその願いは願う者の性格を現す。

この聖杯戦争に呼ばれる英霊がただの道具、駒として呼び出されるのなら構わない。

しかしこのシステムを作った奴が完璧主義だったのかそれとも悪趣味だったのかは知らんが、

英霊の性格も、記憶も、無念も完璧に再現して呼び出される。

俺が何らかの目的を持って動いている事をアーチャーは知っている。それを教えるってことは俺の性格や狙いといった安くない情報を与えるって事だ。

あまりにも馬鹿な質問に適当にシロウのサーヴァントとして模範解答を答えておいたが。

マトウシンジの策略、シロウの裏切りを越えての協力関係の再締結。
決して少なくはない困難を乗り越えて握られた手に仲間意識とかそういうものが芽生えたのかと思った。

うむ、実に迷惑だ。

まあ俺の予想は見事に外れてくれたらしいので一安心ってところか？別に気の緩みを利用してアーチャーの情報を収集しようだなんて思っていないんだからね！とっておく。

「……………それを言いたかっただけなのか」

「うむ」

「変な小芝居などせず初めからそう言え」

「これを機にお前のユーモアのセンスが磨かれればと思っただけな」

「……貴様はからかいたかっただけだろう」

「フ、答えの分かっている質問をするほど無意味なことはないぞアーチャー」

「貴様は　　っ！」

「夜の訪問客とはなんとまあ礼儀知らずな」

夜の冬木市、夜の衛宮邸はとても静かで今までと変わったところなど、

最近のテレビ報道で流れているガス漏れ事件もあって人通りが少なくなっただけ位しかない。

しかしそれはなにも知らずに生きている大多数の人間の視線。

英霊として名を残し、サーヴァントとしてこの地に呼ばれた俺達にはすぐに分かる。

アーチャーが弓を出し、襲撃に備えようとしているのを止める。

「待て弓兵。」

わざわざこちらに近付いているということは接近戦を主体としたヤツだろう。俺が出る。

お前はその広い視野を以って周囲の警戒を緩めるな。単体だとは限らないからな」

「了解した。買って出たからには侵入させるなよ」

「ハッ、そんなへましねえよ。お前こそ闇討ちされんなよ」

仲間意識など微塵も感じさせない優しくない言葉を掛けられてその内容に笑う。

屋根から一息で飛び降り、縁側の下に隠しておいた鉄パイプを引っ張り出す。

「さっさとお帰り願ってとっとと寝るか」

トントンと鉄パイプで肩を叩きながら近付いてくる気配に神経を尖らせた。

アーチャーSIDE

キーン、と夜の衛宮邸に鉄と鉄のぶつかり合う音が響いた。

セイバーが私に周囲の警戒を任せたのは先の理由だけではないだろう。

この襲撃の音で聖杯戦争に関係のない人間が様子を見に来られては困る。

特に 藤ねえあたりは竹刀を構えて我一番と突っ込んできそうな気がする。

自分の生徒であり、家族であるような存在がここにいるのだから当然とも言えるが。

いくつになっても変わらない家族の姿を思い出して苦笑しつつ、

巻き込まない為に凜に襲撃を伝えようと

『アーチャー！何が起きたの！？』

『恐らくサーヴァントの襲撃だ。既にセイバーが対峙している。』

単独行動とは限らないので私は周囲の監視と警戒を続けているが問題はあるか』

『無いわ、そのまま続けて。余裕があったらセイバーの援護も請け負って頂戴』

『了解した。それと凜、この襲撃の音で他の住人が目を覚ますと厄介だ。対処を頼む』

『オツケー、藤村先生と桜はこのまま眠っててもらおうわ。だからそっちは任せる』

凜に現状の報告とそれに伴う自分の行動を伝え、

これからの行動の支持を受けて凜にも厄介事が増えないよう行動してもらおう。

凜ならばこちらから言わなくとも分かっているだろうが……遠坂家の呪いがあるからな。

フ、と遠い目をして空を見上げてしまう……いろいろなあつたな、と。

「む、そんな場合ではなかったな」

直ぐに我に返りいつでも矢を番えられる様に弓を出して周囲の警戒を続ける。

眼下には夜の街が広がるばかりで敵の気配は勿論、人の気配も

「あれは」

フラリフラリと人目につかぬ様に衛宮邸を後にする人影を視界に入れて目を細める。

明らかに普通ではない様子に小さく舌打ちをする。

「エミヤシロウ……なんて手のかかる……」

ゆったりとした足取りではあるが着実に進むその先は 柳洞寺。

既に弓は構えてあり、矢はいつでも撃てるよう番えられている。

ここからエミヤシロウを殺すのは簡単なことだ……しかし何故か手が動かない。

『凜、少し離れる』

『は？ちよつとアーチャー』

一方的に会話を切り、弓を消して夜の町を駆ける。

衛宮邸に掛けられている結果は作動していない。

ということとはセイバーが敵を抑えているということに他ならない。

「様子見くらいはしてやるか」

記憶とは違うセイバー。

記憶とは違う襲撃。

ならばあのエミヤシロウも別の道をたどる
意味の無いことが。

いや、それ以上は

どちらにしる考えなければならない。

何故あの時弓を引けなかったのかを。

アーチャー SIDE END

第参拾肆話：襲撃者の夜（後書き）

柳洞寺編が近付いてきた所で浮上してきた問題がひとつ。
小次郎の口調とかがまったくさっぱり分からない、です。
佐々木さん………どうしましょかね。原作やり直してきま
す。

今月の更新はこれで最後だと思えます。

誤字脱字などありましたらご報告ください。

第参拾伍話：道の決まっている迷子（前書き）

GW連休！ということまで1週間経っていませんが、いつの間にかユニークが三万越えてた感謝の念を込め、更新させていただいた三十五話です。ありがとうございます！
人混み苦手なので恐らく仕事以外はモソモソと執筆続けていると思われます。
それでは少しでもお楽しみいただけたら幸いです。

第参拾伍話：道の決まっている迷子

開始の合図も何も無く、その姿が目にと留まった瞬間に飛び出し、

俺の宝具で強化した鉄パイプを振り下ろした。

ま、こんなもん挨拶代わりみたいなものだ。その証拠に敵も危なげなく受け止めて押し返してきた。

キーン！

鉄と鉄とがぶつかり合う金属音が夜の静けさを裂いた。

次いで夜空に響く音の余韻を打ち消すかのような地を這う鎖の音が続く。

ジャララララ

引いていく武器とそれに連なる鎖の音。

それはまるで たった一合で終わってしまったことを惜しんでいるように。

そこまで考えて白い剣士はクツリと口元を歪めて喉を鳴らす。

戦いは面倒だ。

やりたいやつだけやっている。巻き込むな。

ずっとそう思っていたが何のことは無い
結局俺も奴らと同類
って事か？

押し返された力のままシロウの家の塀の上に降り立つ。

自嘲的な笑いを浮かべて向かいに建つ家の屋根の上、

月明かりを受けてくつきりと浮かび上がった敵の姿を挑戦的に見上げる。

地面に付きそうな程に伸ばされた薄い紫色の髪。

夜に紛れるかのような黒衣に身を包んだその姿は既に一度見ている。

マトウシンジのサーヴァント、ライダーが月光に鈍く光る武器を手にこちらを見下ろしていた。

「随分と唐突ですね。貴方は自分から仕掛けないタイプだと思って
いましたが」

「敵には敵に相応しい態度をとるのは当然だろう襲撃者。」

深夜に何の連絡も無く押しかけてくるような無作法者に説いてやる暇も時間もない。

わざわざ賤けてやる情もないからな」

少しかだけ責めるような色を含んだライダーの物言いを鼻で笑う。

ランサーなら喜び勇んで、アーチャーならば冷静に武器を構えて戦闘に雪崩れ込むだろう。

敵という以外に戦うことに理由などいらぬ。それがサーヴァントだし、課せられた役割だ。

こっちが珍しくヤル気なのだから乗ってきて欲しいものである・・・
・・・まあさっさと終わらせたいだけだが。

・・・しかし、わざわざ話しかけてくるとは時間稼ぎか？

アーチャーの技能を信じていないとは言わない（とも言えない）が本気で早々にご退場願うか。

人間では致命傷に至る傷もサーヴァント相手では意味がない。

だが鉄パイプじゃあ首を飛ばすのは難しい。核を狙うか。

殺意に目を細めて武器を握る。

「・・・深夜に何の連絡も無く・・・」

ポツリと呟くように俺の言葉を繰り返すライダーに動きを止める。

武器から手は離さないが、考えるような素振りを見せるライダーに眉を顰める。

「セイバー、貴方は……………朝に玄関から訪ねるといいますか？」

誰がんな事言つたあああああ！

そしてまるで「正気か」と問い質すような視線を俺に向けるんじゃないねえ…！

と叫びたくなつた俺を誰が咎められるであろうか。むしろ叫ばなかつたことを褒めて欲しい。

ご近所の目に気を配りすぎるシロウに対しての配慮が出来る優秀なサーヴァントには

もう一品くらいリクエスト枠を増やしてもいいと思うのだがどう思うシロウ。

「そうですね、朝に来なければ話し合う権利も与えられないというのなら出直しましょう」

「いや待て。勘違いしたまま去ろうとするな」

坦々とした物言いと雰囲気から冷静なツツコミ要員かと思いきや、ボケ要員だったという罫。

朝の忙しい時間に来るんじゃないかねえよ。非常識だな。もし俺の朝食が遅れたらどう落とし前付けてくれる。

ん？つつか話し合い？

「寝首をかきに来たんじゃないのか？」

「気配も消さずに来る訳がないでしょう」

まあごもつとも。

でも事前の連絡も何もなしに深夜に気配も隠さずに来たら困か喧嘩売ってんのかと思うぞ普通。

あれ、俺が普通じゃないのか？戦闘ばつかに気が行っててそこから入ん疎かなのか？

いや、それでも

「話し合い、か……」

はっきり言って意味が無い。

こっちがライダー側に要求するようなことは俺らで片付けることが出来る。

サーヴァント二体と立ち向かえるような状態じゃないことは見れば分かる。

「何を頼みたいかは知らんがこちらに受ける利がないな。

自分の立場と状況の把握をしてから協力者を仰げ。

単身で交渉に来たヤツをどうこうする程余裕がない訳でもない。ここは見逃してやる。

だが次、のこのこと俺たちの前に現れたらその時はその仮初めの命刈らせてもらう」

行け、と視線だけで告げて立ち去るのを見送ろうとするのだが、ライダーは動かない。

ライダーも馬鹿ではない。分かっているここに居るのだろう。

が、俺はシロウじゃない。決意の籠った交渉も決死の覚悟のその姿勢もなんの意味も無い。

本当ライダーは運が無いな。弓兵だったら……いや、アイ

ツもそこまで甘くないか。

「そうですね、学校の関係者の命など貴方には関係のないことでした」

「.....」

「では、私の命と言ったらどうです?」

予想外の発言に相手の真意を探ろうとその表情を見るが、意識を向けられたことへの安堵しかない。

.....本気で切羽詰っているようだ。

何かの狙いを持って参戦した聖杯戦争から「降りる」と言っているのだから。

もしくはその「頼みたいこと」がライダーの参戦理由なのか?

こちらの考えを無視してライダーは続ける。

「セイバー、あなたの状態は分かっています。私ほど酷くはないとは言え魔力の供給も極僅か。」

それなのに貴方は単独行動を続けて魔力を消費している。いくら弱体化しているとはいえ私も英霊です。

まさか何の消費もせずに勝てるとは思っていないでしょう？それをゼロにするとやっているのです」

「これはお前のマスターの指示なのか」

「いいえ。私の単独行動です」

「どういふことだ」

「それは言えません。私が貴方にしてもらいたいことはある人物への助力です」

貴方ってことは「俺」に対しての交渉ってことか。

自分の命を懸けて他者に助力を願うってことは、自分じゃどうにも出来ないってことか。

む？しかしわざわざ俺に願うって……俺の真名が分かっているのか？

「わざわざ俺を指名するということは俺の真名が」

「分かっています。」

ですが、貴方のマスターであるエミヤシロウ。

そして協力者であるトオサカリンにもあなたは自分の狙いを悟らせずに物事を行っている。

その隠密性を見込んで頼みたいのです」

「悪いが断らせてもらおう。前と今では状況が違うことくらいお前も理解しているはずだ。

どこの誰かさんのおかげで俺はシロウの監視をしなければならぬいからな」

考える素振りも見せず言い切つて肩を竦めて見せる。

ライダーと戦うことで魔力を消費するかもしれんが、ライダーの頼みの方が魔力を消費する。

後者を取つて人助けをするほど俺はお人好しじゃねえからな。

「ライダー、そもそもお前がそいつを助けたいつて思ったのは何でだ？」

「それは……………」

「ソイツがお前に助けを求めたからだろ？だからお前は応えたんだろ。だつたらお前が助ける。」

生憎と俺は事情を察して何も言わずに助けるなんて真似はしない。

そんなお人好しじゃない」

助けて、という言葉だけで動くのはシロウみたいなお人好しだ。

そしてライダーはそのお人好しを真っ先に省いた。

ならば俺が仕方ないと腰を上げるようなものを用意すべきだ。それが交渉してもんだろ。

ま、事情も良く知らない。助ける対象も、その敵も知らない。

そんな状況で受けるにはかなりのもんを要求させてもらっけどな。

「ソイツがお前に助力を願ったんならお前にその力があるってことだろ」

「………そうでしょうか」

何故そこで落ち込む。お前英霊だからちよっとは自信以って物事に挑め。

というかな、

「お前も自分の力がソイツに必要なだと思っただから今まで残ってたんだろ。それをあっさり投げ出すなよ」

はっきり言ってマトウシンジの下について何か良いことあのかと問うてみたい。

魔力供給も満足にされてなくて、助きたい人への助力も出来ずに歯噛みして、

結局はこんな性悪の敵サーヴァントの下へと自分の命を懸けて助力に来る始末。

そこまでするってことは、本当にソイツが好きなのだろうよ。

なら自分が助けたいって思うのも、願うのも当たり前だろ。それを俺が茶々入れるってのも、なあ？

利益が無いってのもあるけどな！うむ！低賃金断固拒否！

「セイバー……………」

「っつーか弱体化してるとはいえ英霊が勝てないようなヤツがいるんだなあこの時代にも」

「あ、いえ、殺害することは出来ますよ」

「帰れ、そして殺して来い。話はそれからだ」

「いえしかしサ……じゃなくてその人には呪いの様なものが」

「それこそキャスターンとこ行け！畑違いだ馬鹿野郎！」

思わず叫んでしまった俺は何も悪くないと思う。

俺の役割は殲滅とか殺害とかそういうので、呪いや魔術はベテランがいんだろ！

帰ってくれんなら魔女の本拠地くらい教えてやらあ！

「あの魔女は気に入りません」

「……………そうか」

顔の半分を覆っているというのに、

ここまで雄弁に怒りを訴えられるとは意外とライダーは器用なのかもしれん。

理由？藪突くような真似してまで聞きたいと思うほど興味は無い。

女同士の喧嘩なんてもんに関わったっていいことなんてなんも無いと聞いたことがある。俺もそう思う。

「まあやりたいことあんなら自分でどうにかするんだな。

自分で出来なきゃ出来そうなヤツを協力せざるを得ない状況に持ち込め」

仲が悪そうなキャスターを協力せざるを得ない状況に持っていか
ら、

そりゃあ良い気分になるだろうよ……俺は協力しないけど
な。

「そうですね、では迷惑をかけたので一つだけ」

「ん？」

「エミヤシロウが魔女の元へ行きましたよ。」

アーチャーも向かったようですが……あそこには門番がいますか
らね

「了解、相談くらいなら乗ってやるよ」

「……………そうですね、ありがとうございます。では武運を」

「礼をするとあっさりと立ち去っていくライダーを見送って溜息を
吐く。」

「何でお礼なんていうんだか……………」

次に俺たちの前に現れたらその仮初めの命を刈らせて貰うとライダーに言った。

宝具次第じゃどうなるか分からんが、戦力差は歴然だ。

俺は手加減する気はないし、アーチャーもリンも言わずもがな。

シロウだってマトウシンジからライダーを離そうとしているし、サーヴァント戦は俺達次第だ。

「ま、この状況を乗り越えてでもって思うほどなら………価値はあるかもな」

それにしてもライダーといいキャスターといい色惚けしてんなあ。

命短し恋せよ乙女って言うって聞いたが………乙女って柄じゃないよなあっはっは！

と両者に真っ向から喧嘩を売るようなことを考えつつリンの元に走る。

妙に敵との遭遇率が高い衛宮邸の留守番を引き受けてもらっつ為に。

第参拾伍話・道の決まっている迷子（後書き）

ようやく出てきましたライダーさん。

私の中のライダーさんはちょっと抜けてます。ボケかツッコミかです。いったらボケ。

喧嘩っ早いのは蛇が苦手なのでさっさと排除したくて。

それでも相談受けると言ったのは土郎とアーチャー、柳洞寺の情報を貰ったから。

そしてライダーの助けたい人が男だと勘違いしてるセイバーさん。

今回は柳洞寺編に突入です。

誤字脱字などありましたらご報告ください。

第参拾陸話・月下の逃走戦（前書き）

なんか毎度言ってるような気もしないのではないですけど、お待ちせしましたすいません；

微妙に増えるお気に入り登録してくださっている方々には申し訳ないです。

一応戦闘シーンらしきものはあるの、かな？という疑問が残る三十六話です。

自分で予想していたよりも一日が長い、です……………。
少しでも楽しんでいただければ幸いです。

第参拾陸話・月下の逃走戦

夜の街を飛び、峠道を越え、寺院へと続く参道を駆け抜けて辿り着いた先。

闇と化した木々が並ぶその間、月明かりを受けてぼんやりと浮かぶ石段。

その終着点である山門を見上げながらあたりに漂う空気を訪問者は睨みつける。

「へえ、流石つてところか」

以前訪れた柳洞寺と今セイバーの目の前にある柳洞寺は別物だ。

いや、建物は何ら変わらない。変わったのは取り巻く空気。

冬木の町の住人達から集められた魂　　魔力が空気を淀ませている。

この膨大な量の魔力をかき集め、貯めるためなのだろう、

土地の命脈はとうの昔に山に住む魔女によって汚されている。

ここは彼女の陣地。彼女の為に彼女が作り、彼女が勝つ為に用意された場所。

ならばそれ以外の人間にとってこの地は 死地だ。

「 行くか」

一度だけ己の思考の渦に沈むように目を閉じたが、それは瞬きのよ
うに一瞬。

赤く光る目と咳かれた声には決意が灯っていた。

人とはかけ離れた跳躍力を利用して目の前に立ちはだかる階段を駆
け上がる。

流れていく景色は目に入らない。

あと一息。あと一步。

数秒前までは遠くに見えた山門が目の前に現れる、というところで
セイバーは足を止めた。

夜というのに開け放たれた山門。

訪問者を迎えるがごときその門の前、月を背にしてゆったりと立つ
一つの影。

見たことも無いほどの長い長刀。

当たれば折れてしまうのではないかと思うほどの長い刃はその考えを嘲笑うかのように鋭く、

月明かりを反射した刃は闇夜に走る一筋の光のようだ。

セイバーも速さを重視してはいるがその身に纏う物は軽鎧。

しかし立ちはだかる人物は防御など捨てたと言わんばかりの

そこまで考えてセイバーは口元を歪める。

（捨てたのではなく、邪魔なのか　その重りが）

その潔さ。自分の剣技に確固たる自信を持ったその姿勢。

目の前に立ちはだかる男こそセイバーの名に相応しいのではないかと思う。

「うちのマスターを引き取りに来た」

「目的はこの先か　ならば構えよセイバー。」

我が名は佐々木小次郎、此度はアサシンのサーヴァントとしてこの門の守りを任せられている」

「悪いが名乗り上げるほどの名は持ってないんでな、割愛させても

らじげ」

名乗りたくない名を名乗らせるほど悪趣味ってんなら、と言った所で侍は首を振った。

「よい。名前で敵を知ろうとするほど無粋ではない。

それに、渡されたものをそのまま返すなど、貴様はそれほど素直な質ではあるまい」

「ああ、俺らの間に交渉なんざ必要ない」

「そつだ。我らに言葉など不要。敵を知ろうとするならば

ヒヒュ、と刀が闇夜に翻る。

アサシンの足運びに伴ってジャリ、と砂が鳴る。

階段の上と下という位置の違いはあれども互いの場所への距離は三十メートルほど。

やろうと思えば一息のあとには武器を交わし、剣技を凌ぎあつことになるだろう。

「この刀一本あれば事足りる。そつだろうセイバー」

アサシンは楽しそうに笑う。

聖杯からの「敵サーヴァントを排除しろ」という声に加え、純粹な人間という敵。

抑えきれずに溢れ出る殺気を柳のように受け流していた男は居ない。

一触即発。どちらかが、いやこの状況下で何かが動けばそれが開始の合図となる。

その状況にセイバーは　　クハッ、と嗤った。

「言っただろう、俺らの間に交渉なんざ必要ない………一戦交える必要もないってことだよ」

「っむ！」

アサシンが行動するよりも早く石段を蹴った。

元より上段にいたアサシンが有利なのは分かっている。

しかし三十メートルほどの距離を疾走するアサシンよりも、横に飛ぶ俺のほうが早かった。

山門に続く正規の一本道。

そこを外ればサーヴァントにとって鬼門といわれる柳洞寺に張られた結界に飛び込むことになる。

この結界は確かに厄介な物だ。

だが俺よりも対魔力の低いアーチャーに出来て俺に出来ないことなどない。

「悪いな、こっちは急いでんだ。また酒持ってきてやつから見逃せ」

「悪いが出来ない相談だ。」

既に一人見逃してやっているのでな、これ以上はあの魔女に何を言われるか分かったものではない」

「気にも留めてねえじゃん」

月明かりを遮断した木々が乱立する林の中、木々の間を縫って走る。

門番というのならば門からかなりの距離を取れば諦めざるを得ないだろう。

俺達にも言えることだが、襲撃者は俺らだけではないのだ……
・の割りには追いかけてきてるけど。

(俺もあまり離れる訳にはいかないな……離れると音による状況把握が難しい……仕掛けるか)

月に照らされた夜空を侵食するように精一杯伸ばされた葉の間。

そこから一瞬だけ、柳洞寺の白壁の奥、ロープを翻して空に浮かぶ一つの影を見た。

確かに尽きることの無い魔力を集めてるにしても、随分と大盤振る舞いしていたキャスター。

たかがシロウに対しての攻撃法としては過剰すぎる。ならば傍にアーチャーがいる。

んで、シロウとのラインはまだ切れてない……つまり、アーチャーが救助しているということだ。多分。

「いや、そんな面白いとこ見ないで何見るよ」

アーチャーがシロウを気に食わないように、シロウもアーチャーのことが気に食わない。

そんな二人が雨のように降り注ぐ魔弾を協力して回避する、という光景が思い浮かばない。

思い浮かばないような光景を見て見たい。あ、ついでにシロウが手遅れになる前に助けねえとな。

整地されていない凹凸の酷い地面につき、足で速度を殺して林の中で止まる。

同時に白い塀の上、瓦の上を跳び越すようにしゃがんだ状態から足を伸ばして地面を蹴る。

瞬間。

ザクリ、と突き立てる様な殺気を肌で感じた。

「飛ぶ鳥を落すのは　私の得意とするところだ」

試すような、楽しそうな、期待するような、そんな声。

瓦の上、石段よりも足元が危うい場所に立っていてもその姿勢がぶれることは無い。

「最優のサーヴァントと呼ばれるセイバーのサーヴァントよ、その剣技　　試させてもらおう」

あれほどキャスターの魔術による破砕音が響いていたというのに、今は止んでいる。

チリリと肌を焦がすような刺激を感じる。これは殺気だ。敵意だ
そして予感だ。

アサシンはサーヴァントとしては異質な存在だった。

通常のサーヴァントであればその身に纏う物一つとっても膨大な魔力を秘めている物が多い。

それがそのサーヴァントの象徴である武器であるのなら尚更。

しかし随分と特徴のあるアサシンの持つ長刀からはそこまでのものは感じなかった。

普段なら脅威と感じない。

だが、高まっていく殺人衝動とこれまで培ってきた経験と直感が言う。

アレは自分に害を為せる敵だ、と。

つまり最優先事項。即座に抹殺しなければいけない。他に興味を向けるな。コロセ。

コロセコロスコロセコロセル、アレはニンゲンだからカントンにコロセル。

何故ならば、オレはソノタメに作られタ。テキを殺すタメに鍛えアゲラレタ　一振りの剣。

「んっ　グ！」

全力で排除しようとする無意識に魔力が放出される。

（いや、ダメだ。

キャスターと、アーチャ……が、いるとは、え………殺しては、ない、………る）

ガリガリとこちらの意識を削ってくる聖杯からの声と内から響く声がうるさい。

ああやるよ。やる。こんな悪趣味な戦争一生続けようとするほど暇人じゃねえんだよ！でもちよつと待て！

殺意の肯定に一瞬声は弱まるが、すぐにやかましく脳を揺さぶる。

まるで極度の眠気に襲われたかのように一瞬意識が遠ざかるが、あの一言によって意思が固まる。

お前が死ねば、誰が後ろのを守るのか。

自由に身動きが出来ない宙でアサシンの技を受けるなど愚の骨頂。

あつちは自分の技を繰り出す条件が揃っているというのに俺には揃ってない。

ならば

あちらの揃っている条件を尽く壊せばいい。

逃げの一手を打っていたこちらがヤル気を出したのを見てかアサシンの口元に笑みが浮かぶ。

こちらは既に落下し始めていて、数秒後には柳洞寺の内側に入るだろう。

一般的な刀では距離を縮めなければ刃は届かない。しかしアサシン

の射程は長い。

「秘剣
」

勝負は技が繰り出される前。

アサシンの眩きを合図に、セイバーは素早く構えると同時に行動に移っていた。

「らあ………っ！」

短い気合と共に、セイバーの大降りではあるが十分に速さの乗った腕から銀光が射出される。

塀の上に構えるアサシンと塀を越え、落下しているセイバーの距離は近距離というには遠く、

かといって遠距離と言つにも中距離というにも近すぎる。そんな曖昧な距離から投擲された何か。

バーサーカーなら一瞬怯む程度……いや、怯みもしないだろっ！一撃。

むしろサーヴァントならば誰も傷付けることが出来ない一撃。

何故ならば

「ふっ………む？」

打ち落とす対象をセイバーから目前に迫るものに変えてアサシンはその長刀を振るった。

手ごたえは殆んど無かった。面白いほどあっけなくその一撃は無力化したのだ。

夜の柳洞寺にカラアンカランと鉄の軽い音が響く。

音の発生地に素早く目を向ければそこに横たわるのは見事に切断された鉄パイプ。

英霊であるサーヴァントに傷を付けられるほど時を経た訳でも、魔力を通された訳でもない、

何処にでもあるような鉄パイプがそこにあった。

「悪いな、秘剣はまた今度見せてもらおうわ」

パン、と軽い破碎音。

グラリと揺れるアサシンの視界の端に捕らえたのはこちらに腕を突き出しているセイバー。

既にその足は柳洞寺の中に付いていた。つまりアサシンは侵入を防げなかったのだ。

己の役割を果たせなかったにも関わらずアサシンはその口元に笑みを浮かべていた。

「その言葉、忘れるな」

「ん」

軽い返答に頷いて、アサシンは直ぐに崩れかけていた体勢を整える。

既にセイバーは第二撃目を構えていた。

「ふっ、ははは！その小石か、私の体勢を崩したのが！」

「まあな、そんな高い所から高みの見物よろしく神様の振りしてっから罰当たったんだよ」

セイバーが目を付けたのはアサシンの防御力の低さ。そして立ち位置だ。

何か飛来してきても避けることが出来る素早さと、身のこなし、そ

れが出来なくとも打ち落とせる剣技。

立ち位置は塀の上という限られた場所。加えてささやかな物とはいえ瓦の凹凸、斜面がある。

今までいた石段とは断然違うのだ。それ故行動が限られてくる。

勿論横に避ければいいが、アサシンは攻撃態勢に入っていた上冷静な判断は二人の距離が許さない。

咄嗟に打ち落とすか回避するかの判断を求められるのだ。

ならば攻撃態勢に入ってたのだからそこからそのまま動いた方が早いのは当然のこと。

小石は保険として林の中で拾っておいたものだ。

先の攻撃が上手くかわされ、標的がセイバーに移ってきた場合の為の保険。

武器である鉄パイプを失ったのだからセイバーは無手である。

小石じゃサーヴァントであるアサシンを傷つけることも攻撃することも出来ない。

それならば他のものを攻撃すればいい……例えば、足元の瓦とか。

セイバーの宝具により、彼の手から離れるまではCランク相当の宝具となる。

たかが小石と侮る無かれ。魔力放出でランクの上だった筋力を持って放たれる小石である。

それは十分凶器となるであろう。

勿論セイバーの手を離れた地点でタダの小石なのでそこまで莫大な被害は期待できないが。

以上のセイバーの企みによりセイバーは結界の内部。柳洞寺へと侵入できたのだ。

「しつこく追ってきたのにやけにあっさりだな」

「私は門番だ。その妨害を超えて通った者の背中に切りつけるほど無粋ではないのでな」

腕を組んだまま肩を竦めてみせるアサシンに「そうか」とだけ告げてシロウ達のもとに足を向ける。

「ま、仕事頑張ってくれ」

「そうさせてもらおう。こうして刃を交えるだけでも私はいいが、あれはそうではないからな」

「………交えたか？」

「技というのは別に剣や槍を持って交わすだけのものではあるまい。

その点で言えば貴様はセイバーというには少し風変わりな存在だな」

「おお良く言われるわ。聞き飽きたくらい」

「そうか。ではそろそろ戻らせてもらおう。貴様もマスターを連れ戻しに来たのではないか？」

「ああそうだったそうだった。このまま帰ろうかと思っちまった」

冗談を混ぜつつ笑いながらアサシンと別れた。

最後に再戦の約束をきっちり約束させられたが、まあそれが果たされるのもすぐだろうよ。

「取りあえず迎えに行くとするか」

柳洞寺がこの時間帯に相応しいように静かになってから大分経つ。

出来ればキャスターやアーチャー相手に地雷踏んでなきやいいけど・・・シロウだしなあ。

第参拾陸話・月下の逃走戦（後書き）

一応補足。

原作でアサシンがアーチャーを見逃した云々って言うていたことと、アーチャーはアサシンが居ることを知っていた、と仮定した結果、アーチャーは正門を避けた。アサシンは門の周辺はそれなりに出歩けるのではないかと思いい行動範囲を広くした次第です。あとキャスターさんより耐久低いという事実にはビックリしました。Eですよ。敏捷はかなり高いんですけどね。

一応アサシンとセイバーさんは顔見知りです。酒盛りする程度には。

誤字脱字などありましたら、ご報告ください。

第参拾漆話：戦場からの帰還は遠く（前書き）

三十七話目です。

キャスターさんのヘッドハンティングの話。
あと合流するセイバーさん。

第参拾漆話：戦場からの帰還は遠く

既に止んでいる主にキャスターの魔術による破壊音の震源地へ向かえば、

境内にてシロウたちを見つけることができた……のだが、姿を認めて足を止める。

キャスターという敵の前だというのにシロウは感情のままにアーチャーに向かって何かを言っている。

それに対してアーチャーは傍目から見れば冷静にかわ……すことなく理屈でねじ伏せている。

……仲いいね、お前ら。

敵陣の真っ只中で、敵の目の前で敵を無視して口論しちやえるほど仲いいならお前ら主従になっちゃえよ。

アーチャーならシロウの足りない物を補って余るほどのもの持っているし、

クラスの特徴として魔力のストックとか出来るから魔力不足に喘ぐこともないし。

うむ、凄くいい考えだな。

大丈夫、リンのことならリン自身でどうにでもできる。

俺のことは放っておいてくれ。

よし、そうと決まれば話は早い。

折角の交流の場を壊し、親睦を深める機会を逃すのもなんなので、邪魔者は帰るとしよう。

別に人が魔力の節約をしつつアサシンをかわし折角助けに来てやったというのに、

口論しているあいつらに愛想が尽きたとかそういうわけではない、
とっておく。

「ふ」

お見合い定番の「後は若い者同士で」という心境で踵を返そうとしたところで、

楽しげに笑うキャスターの声が響いた。

「気に入ったわ。貴方たちは力も、その在り方も稀少よ。敵に回してしまうのは惜しい」

「？」

はあ、と首を傾げるシロウ。敵に回すには惜しいって言ってんだから気付けシロウ、鈍い！

シロウから目を逸らし、先程とは一転して真剣な顔でキャスターを睨みつけるアーチャー。

「……………ちょっと待て。何が言いたいんだ、おまえ」

「判らない？私と手を組みなさい、と言っているのよ。」

私なら今のパートナーより優れたモノを用意できるわ。

坊やにはセイバー以上のサーヴァントを。貴方は今のマスターより優れた魔術師と契約できる」

悪くないでしょう、と言わんばかりに口元に浮かべた笑みを深くするキャスター。

ま、はつきり言ってシロウには俺は手に負えないサーヴァントだからな。そこら辺は俺も自覚している。

だからこの辺でキャスターの提案に乗って、

シロウにあったサーヴァントをパートナーにするのも悪い話ではないだろう。

アーチャーは……………どうだろうな、シロウ関係のことじゃな

けりや連携上手くいつてるし。

踵を返そうとしていた足を止め、物陰に隠れて話に耳を傾ける。

「悪い話ではない筈よ。私にはこの戦いを終わらせる用意がある。

言ったでしょう、勝つ事なんて容易いと。どう？生き残りたいのなら、私に従うべきじゃなくて？」

「
「

そう、用意がある。

だがその用意は完璧じゃない。

足りないものがあるからこそこうしてキャスターは誘っているのだ。

選ぶのはシロウやアーチャーではなくキャスター。

キャスターが生かしてもいいと思っているから誘っている。

守りはアサシンがいるけどあいつあそこから動けないもんなあ。

多くのサーヴァントが柳洞寺付近にいる訳ではない中、これは痛い。

でもここで頷くとなあ、キャスターが上位に立つことになって、シロウ達は従うことになる。

「セイバーは俺に協力すると言ってくれた。

遠坂とも裏切らないと約束した。

例え二人が俺に愛想を付かしたとしても、俺からは絶対に手を離さない」

何気に隣りにいるアーチャーの存在をスルーするあたり仲がわる・・・
・・・ゴホン、良いと思う。

口に出さなくとも信頼出来る間柄ってすごいなー、あこがれちゃうなー。俺は辞退するが。

きっぱりと言い切ったシロウとは違い、アーチャーは何かを考慮するかのよう沈黙している。

それに対して何を思ったのかシロウが発した言葉を遮るように言葉を発する。

「拒否する。君の力を借りる理由がない。

それ以前に、君の陣営はいささか戦力不足だ。

いかに勢力を伸ばそうとバーサーカー一人に及ばない。まだ与するほどの条件ではないな」

「そう。交渉は決裂、という事？」

「そうだ。だがここで君と戦う気はない。この場に居合わせたのは私の独断でね。」

マスター命令ではないから君を討つ理由はない。ここは痛み分けという事で手を打たないか」

「え　？」

まさかアーチャーが見逃すとは思っていなかったシロウが声を上げる。

キャスターも僅かに首を傾げてフードの下から探るような視線をアーチャーに向ける。

しかし見てもその真意がわかるわけでもないので、素直に疑問を口にした。

「……意外ね。アナタのマスターは私を追っていたでしょう？なのにアナタは私を見逃すと言うの？」

「ああ。おまえがここで何人殺そうが知らん。それは私には与り知らぬ事だ」

「　　あら。ひどい男、毒は使いようということ？」

「私のマスターはマスター殺しに精力的でなくてね。」

その分、おまえが他のマスターを潰してくれるのなら何かと助かる。

この戦いの決着は、その後でも遅くはあるまい」

最後に互いの意思を確かめるように視線を合わせ、笑みを浮かべると、キャスターは黒衣を翻す。

「っ、待てキャスター……！！」

「馬鹿か貴様。追えば確実に死ぬぞ」

消えようとするキャスターへとシロウが走り寄るが、静かな叱責とともにアーチャーに阻まれる。

キャスターの簡単な魔術に手も足も出ず、ここまで誘い込まれたシロウとキャスターの差は明らか。

ここでキャスターとの戦闘が可能であるアーチャーが戦線を外れると言ったのだ。勝ち目はない。

『魔女』と呼ばれることを嫌っているキャスターを『魔女』呼ばわりしたこともそうだが、

勝ち目も策もなにもなく感情のまま走り出そうとするシロウは自分の行動が自殺行為だと自覚はないのだろうか。

ないんだろーね。

そんなシロウを気にも留めずにキャスターの黒衣はゆらりと風に乗
り、姿を消した。

「アーチャー。なんでキャスターを逃がした」

「戦う時ではなかったからだ。ここで切り伏せたところで、アレは
すぐさま逃げおおせただろう。」

今の空間転移、見逃した訳ではあるまい？」

「
」

シロウも馬鹿じゃない。理解はしているのだろう。

サーヴァントよりもマスターを狙う。

それが聖杯戦争における正攻法であり、周囲にも自分にも危険のな
い方法。

特にキャスターのような実態を掴みづらい相手なら尚更この手段を
取らざるを得ない。

でもシロウは、

「理解出来たらしいな。キャスターを倒すのならマスターが先なの
だ。」

いかに空間を跳んで逃れようが、

依り代であるマスターが倒されれば、キャスターとて消えざるを得ないからな」

「……………それは判ってる。けど、だからって見逃すのか。

街で起きてる事件は全部あいつの仕業なんだろ。キャスターを止めない限り犠牲者は出続ける。

俺は、そんなのを放っておくなんて出来ない」

コイツは理屈で考えて行動するなんて出来ない。

それが出来るのなら学校関係者全員を助ける為にマトウシンジを殺すことが出来る。

発覚しているマスターを殺すことすら出来ないようなお人好しだ。

アーチャーは言う。

リンと自分ではキャスターを倒すことは出来るがバーサーカーは倒せない。

だが聖杯戦争を終わらせることが出来る、つまりバーサーカーを倒せるとキャスターは言った。

ならばそれまではどれだけ犠牲が出ようが見逃す。

それがその犠牲以上の人を助ける為なのだ。

その為にも　ここに住んでいる人々は邪魔だと。

アーチャーは正しい。

平和に浸かった人間の目は邪魔だし、サーヴァントの性質上犠牲者は必ず出る。いや、既に出ている。

俺らが出来るとはそれを少なくするか、大きくするかだ。

シロウもそれは判っている。アーチャーの言うことも理解出来る。

それでも納得できないのだろう。

憤慨し、感情を抑え切れなかったのか、続く言葉を聞きたくなかったのか、アーチャーに殴りかかる。

でも実力が天と地の差ほどあるので容易くかわされる。おどけて見せたりするあたりやはり性格悪い。

(……………しかし、)

シロウのことを分かってきたつもりだが分からなくなってきた。

始めは街の住人たちに危害を加えるだけでシロウの怒りの対象とな

ると思っていた。

だからキャスターの行動はシロウは放っておかないし、手を組むのは難しいと思っていたんだが、

明らかに死人が出る状況を故意に作り出しているマトウシンジ自身をシロウは殺さないと言う。

生かさず殺さずのキャスターは許さなくて、殺そうとしてるマトウシンジは許す？

むう、やばい。シロウの思考回路が分からない。あれか、サーヴァントとマスターの違いか。

「うるさい、誰がおまえなんかには友情を感じるもんか！」

ガウ、と噛み付くようなシロウの声に意識を戻した。

気付けばシロウは寺の方へと向かっていて、その後ろをアーチャーが追いかけている。

「いいからさっさと遠坂の所に帰れっ。頼まれたっっておまえの手助けなんていららないんだからっ」

背後のアーチャーを振り返ってそれだけ言い切ると、フンと顔を背けて歩き出す。

おいおい一人で特攻しようっていうのか、せめて俺を呼べよ本当に自殺志願者だなシロウは。

面倒臭いがシロウのサーヴァントとして放って置くわけにもいかなのでしたらだと腰を上げる。

「そうか。懐かれなくて何よりだ」

氷のような殺気が放たれる。

アーチャーの手に双剣が現れてそれが一閃するのと、

「なに？」

シロウが振り向き、飛び退いたのは同時だった。

「あ　ぐっ・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

肩口からばっさりと袈裟懸けに切られ、その足元にはボタボタと血が流れ落ちる。

予想外の出来事が起こった為か、

それともその痛みで思考を奪われたのかその顔と声には苦痛の他に疑問の色が浮かんでいる。

必殺であった一撃をかわしても、明らかに死に繋がる一撃。

「は あ」

よろよろと後退するシロウ。

次の一撃が振るわれれば逃げることは叶わずにあっさりとシロウは終わる。

予測を現実にするように無情に真意を問う間も言葉も与えずに剣が振るわれる。

ガギイツ、！

シロウの首を狙って一閃された剣は横から伸びた籠手により防がれた。

しかしそれでもそれを振りぬこうと押し付け鉄が擦れ、鈍い音が鳴る。

「セ バ……………」

「テメエ・・・・・・・・これを狙ってたのか」

「ふん、でなければその小僧の自殺に付き合いはせんよ」

寺に向かうシロウを口で諫めはしても決して行動には移さなかった。

その地点で気付くべきだった。

アーチャーがシロウ殺しを確実にする為に俺との距離を取っていたことを。

「何かしら準備しているかと思っただが、まさか無手とはな 随
分舐められたものだ」

「ハ、お前相手じゃこれでお釣りがくらあ」

「そうかね？では遠慮なくこちらの用を済まさせてもらおう」

双剣の片方、俺の左腕の籠手に阻まれた白い剣とは対の黒い剣が翻
る。

がら空きになった胸を狙った一撃を空いている右手でシロウの服を
掴んで飛び退いてかわす。

「うぐ っ・・・・・・・・！」

「あ、悪り」

シロウの方に気をやるのを忘れていて着地と同時にシロウが地面に落ちた。

軽く謝り具合を見ようとそちらに気を向けようとするが両手に剣を携えて駆けてくるアーチャーと対峙する。

詳しく診れなかったが、シロウの傷は致命傷だ。意識だって辛うじて保っているに過ぎない。

「シロウを殺す気か」

「そつだ、戦う意義のない衛宮士郎はここで死ね」

白と黒の双剣が振りかざされる。

速度と力に乗せた斬撃が生まれる前に踏み込んで籠手を噛ませ、未然に防ぐ。

体重を乗せて押し切ろうとするアーチャーを押し返し、また距離を取る。

「戦う　　意義、だって………?」

自分が襲われた理由を痛みに言葉と息を途切らせながらシロウが問う。

「そつだ。自分の為ではなく誰かの為に戦うなど、ただの偽善だ。

おまえが望むものは勝利ではなく平和だろう。

そんなもの。この世の何処にも、有りはしないというのにな

「な　　んだ、と」

静かに告げるとシロウの反論を聞き流し、話は終わったとばかりにアーチャーが駆け出す。

一気に距離を詰めてきたアーチャーを迎えようと構えたが突然双剣をあらぬ方向に投げ捨てた。

「っ?!」

武器を投げ捨てたアーチャーの行動に驚き、それが止む間もなくその手に新たに剣が現れる。

唐突に現れた寸分違わぬ双剣に内心驚くが、それ位別に驚くものではないと冷静さを取り戻す。

(いや、)

シロウの命を刈り取らんと疾走してくるアーチャーを迎え撃とうと構えつつ思考を廻らす。

先ほどから違和感が、何か重大なことを見落としているような

「さらばだ。理想を抱いて溺死しろ」

投げた武器が地に落ちる音など しなかった。

「シロウ、避ける！」

弓兵の狙いに気づき、首を狙った左右からの交差する剣を受け止めながら叫ぶ。

夜の闇の中、地を這って進み、首を刈り取ろうと首をもたげた死神の鎌が無情に迫る。

その足音が、空を切る音が耳を掠めた時にはもう、遅かった。

第参拾漆話：戦場からの帰還は遠く（後書き）

．．．．．これで士郎が死んで最終回とかいったら怒られそう。
いや、やりませんよ。ある意味面白いかな、とは思いましたが。

誤字脱字などありましたらご報告ください。

参拾捌話：戦場からの帰還（前書き）

三十八話目です。

一応これで五日目は終了です……………。

参拾捌話：戦場からの帰還

士郎SIDE

「さらばだ。理想を抱いて溺死しろ」

憎しみの籠もった声は俺に向けられたもの。

セイバーの肩越しに見えた鋼の瞳は目の前にいるセイバーではなく俺を睨んでいた。

憎しみも殺気も言葉も 飛来する凶刃も俺に向けられている。

そのことに セイバーは呆れるかもしれないけど すごく安堵してしまった。

キャスターとの一戦を、その時使われた戦法をセイバーは見ているから、

セイバーを信頼していない訳じゃないが………やっぱりアイツが怪我する可能性はない方がいい。

「シロウ、避ける！」

珍しく切迫したセイバーの声が耳に届いた時には既に行動に移していた。

視界は霞んでいて、自分が今何処にいるかもおぼろげ。

迫ってきているだろう白と黒の短剣の姿も見られない。

アーチャーから受けた一撃による痛みにより、もう何も考えられない。

考えられない　　けど、アーチャーの言葉に反発したい一心でただがむしゃらに体を動かした。

「ぬっ　　!?!」

獲物をなくした短剣が空を切り、地面に突き刺さる。

自分の意思とは関係なく後ろに　　底なしの闇に引っ張られる。

疑問に思う間もなくガン、という衝撃が背を襲った。

硬い石段にぶつかった衝撃にグウと息が吐き出されるが、
それだけで落下の速度は抑えきれず体は硬い石段を転がり落ちてい
った。

士郎SIDE END

アーチャーSIDE

（ どういうことだ？ ）

アーチャーは自分の身に起こった違和感と置かれた状況に戸惑って
いた。

衛宮士郎が突然山門から続く石段へと身を投げたことには驚いたが、
その隙は一瞬。

その一瞬はセイバーにとっては十分反撃をなしえる隙だったとい
うのはわかる。

目くらましの頭突きに始まり、開いた距離を埋めることなく繰り出された中段蹴り。

その中段蹴りに振るわれた右足を軸にし、距離を詰め、意識が疎かになった上段への回し蹴り。

体勢が崩れ、米神を刈り取った回し蹴りによって意識が混濁しているところに打ち抜くような正拳突き。

そんなセイバーの怒涛の連撃をアーチャーはその目に捉えることが出来ていた。

武器を持たず、魔力放出もせず、狂気に捕らわれることもないセイバーの動きが捉えることは簡単だ。

だというのにアーチャーは一連の攻撃全てを叩き込まれ、地面に四肢を付いていた。

（身体が、重い　　これは……………令呪の縛り？）

自分の身の違和感にステータスを見ればランクが下がっていた。

何故だ、と自問するアーチャーはザリザリと砂利を踏みながら遠く足音に気付いたと同時に顔を上げた。

顔を上げればセイバーがアーチャーの手放した双剣の片割れ、干将を拾い上げている所だった。

アーチャーの視線に気付いて冷たく光る目を細め、口端をあげて笑ってみせる。

「さて、種明かしが必要か、弓兵」

タダじゃないけど、と声なき声が聞こえたのは気のせいではないだろう。

「いらんよ。セイバー貴様は……キャスターのようなヤツだな」

凜はここに来る前にアーチャーに指示していた。

『余裕があつたらセイバーの援護も請け負って頂戴』と。

それに私はなんと答えた？簡単だ。何の疑いもなく『了解』と答えてしまった。

その地点でセイバーと敵対することが自らの首を絞める行為となつてしまったのだ。

「俺としてはシロウの保障さえしてくれれば良かったんだが、やっ

ぱり狙い通りには行かなかったようだな」

不運だ、と我が身を嘆くセイバー。

溜息を吐いてからちらりと走らせた視線の先、山門の石段には衛宮士郎がいるのだろう。

特に慌てることもなく暢気に話しているということは私の襲撃は失敗に終わったと言っているのか……。

「さて、どうする弓兵。まだ抗うというのならこちらもそれなりの対応をさせてもらうが」

「二度にわたって仕損じたのは私の失態だ。これ以上失態を続けるつもりはない」

「そうか、ならいい」

短く頷いて早々に話を打ち切ったセイバーに眉を寄せる。

こちらの失態をこれ幸いと突いて回るようなヤツだと思っていたのだが。

「従者の失態の責任はご主人様にとって貰うもんだろ？」

首を傾げながらニヤリと至極楽しげに笑うセイバー。

万全ではないからこそ、その状態で出来うる限りの策を弄する

「敵になる前に退場してもらいたいものだな、貴様には」

厄介な敵になりそうだ。

アーチャー SIDE END

話し合いという平和的解決が無事になされたので石段の中間地点、
広くスペースを取られた場所の端に引っかかるように倒れているシ
ロウを迎えに行く。

辛うじて護符を血に濡れた手で掴むことは出来たのか、

患部に当てられてなくても護符は作動し、止血を済ませ、緩い速度
で傷が修復されていく。

力なく地に伸ばされた手から護符を拾い上げ、患部に当てる。

「せ・・・いばー？」

「ん、大丈夫か」

「俺はだい、じよぶ・・・アーチャ、は・・・？」

「話し合いで平和的解決済みだ」

「・・・」

なんだその胡散臭そうな顔は。

しかし周囲にあの目立つ赤い外套もなく、山門にも人影がないと分かる。と安堵したように力を抜いた。

だがそれも束の間。直ぐにアーチャーと交戦する切っ掛けになった。出来事を思い出して跳ね起きる。

「そ、うだ・・・キヤスター！キヤスターを止めないと・・・！！」

「アホか。こんな状態で戦えると思ってんのかお荷物」

「俺なら大丈夫だ。それよりもキヤスターを・・・あ、れ？」

立ち上がろうと膝を立てた途端にへたり込むシロウを支える。

アーチャーにやられた傷も治っているのに何で、って顔してんな。

「傷は治ってもお前の身体は限界なんだよ。それに子供は寝る時間だ。とっとと帰るぞー」

シロウの足が動くようになるまで待ってたらこいつ確実に特攻するよな。

という訳でここは足腰が立たない内に退散することにしよう。

頭の中で行動を決め、シロウを肩に担いでさくさくと石段を降りていく。

「なっ！こんなの直ぐに治る！だからキャスターうぐ……………」

「ほらなー、俺の手刀程度で気を失うほど疲れてるんだから大人しく休めって」

「……………」

キャスターキャスターうるさいので手刀を叩き込めばあっさりと気を失うシロウ。

アーチャーにも言われたのに…………ううむ、アーチャーに言われたからこそ、なのか？

ついつい反抗したい年頃なのか？迷惑な。

よいしょ、と力が抜けた拍子にずり落ちたシロウを抱えなおして帰路につく。

(それにしても……………)

リンの発言力がここまで高いとは思っていなかったな。

リンがシロウの家に開けた穴の修復や茶坊主を頼んだりと、

実にサーヴァントらしくない扱いをされているな、とは思ったが、あれほどの影響力なら頷ける。

シロウとアーチャーの不仲から戦闘になるかもしれないとここに来る前にリンに相談したのだ。

返ってきた答えは「問題ないわ」。

種明かしはしてくれなかったが、令呪を使ったか、何らかの魔術をつかったか。

でもサーヴァントの行動に干渉するほどの魔術をリンが使えるか……難しい、か？

リンの力量がどれくらいかも分からんしな……………。

かといって敵に有利になることに令呪使ったのもないだろうしな。聖杯戦争始まったばかりだし。限りある資源だし。シロウじゃあるまいし。

「ま、リンに発言力と影響力があるのはいいことだな」

アーチャーにシロウを襲うな、って言っても無意味なことは分かっている。

ならばアーチャーへの絶対的な命令権を握っているリンに頼むしかない。

試験的な意味を含めて対峙して 結果は上々。問題はない。

おかげでシロウがヤバかったけど……。

うむ、シロウは生餌としては一級品だな。敵多いし。いらん敵作るし。

まあ、少なくとも今回の一件でアーチャーからシロウが狙われることはなくなるだろう。

いや、狙われることはあるが殺されることはないだろう、だな。

リンは相変わらずシロウのことを生かしたがってるし、

ちゃんとアーチャーの行動に目を光らせてくれることだろう。

うむ、頑張ってくれ。俺はもう知らん。

「今までサボってた分、頑張るとするか」

まだ完璧にこっちの準備が整った訳じゃないが、しばらくはシロウの護衛に力を入れるとしよう。

参拾捌話：戦場からの帰還（後書き）

以下ちょっととした裏話（凜とセイバーさんのやりとり）

セ「そう言う訳でお宅の従者さんが信用できません。なんらかの対策を願いたい」

凜「初っ端から飛ばすわね………仕方ないか」

セ「うむ。そっちの情報とこっちの情報合わせればアーチャーがシロウの後を追ったのは間違いないだろう。監視については俺のほうでも頼んでたしな」

凜「ライダーの情報が正しければ、って話だけどね」

セ「そりゃごもつとも。だが俺は弓兵とシロウを二人きりにさせる気はない。

可能性があるのなら潰しておきたい」

凜「分かってるわ。でも戦闘に入ったとしても貴方なら問題ないわ」

セ「どういうことだ？」

凜「悪いわね。それは言えない。でも貴方とアーチャーが戦う分な

ら問題はない」

セ「ふむ……まあこれ以上時間を潰すのも勿体無いな、俺は行かせて貰う」

凜「ええ、そういえばセイバー」

セ「あん？」

凜「協定の再締結する時に分断されたら……って言った通りの状況になったけどこれは偶然なのかしら」

セ「偶然だろうな」

眞実は闇の中。

五日目終了しました。

アーチャーとセイバーの戦闘シーン考えてたのですが、そうすると今回で終わらなかつたので省かせていただきましたご了承ください。今月はこれで更新終了です。それでは。

誤字脱字指摘などありましたらご報告ください。

第参拾玖話：しばしの休息（前編）（前書き）

二週間ぶりです……の三十九話目です。

内容は柳洞寺戦の後日の話です。

敵も決まって、聖杯戦争中なので穏やかと言える日々ではありませんが日常編導入です。少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

第参拾玖話：しばしの休息（前編）

士郎SIDE

「……う」

身に付いた習慣が、身体は疲れきっているというのに意識が浮上する。

障子を通って幾分か鋭さを和らげた朝日がいつもの事なのに何故かうとういしい。

上半身を起こしたただけで頭がぼうつとして立ち上がれない。

（ここんとこいろんなことがあったからなあ……）

瞼を閉じて日光を遮断してしばし気を落ち着ける。

（いや、こんな時にへばってる場合じゃない。この程度で疲れるなんて修行不足だ）

体を動かしていれば目も覚めるだろう、という結論に辿り着き、
気合を入れて一息に立ち上がれ？

……

……急に視界が真っ白に……って、なんで俺布団に逆戻りしてるんだ？確か俺は立ち上がるかと……。

うつ伏せになっている体を動かして立ち上がるつもりだが体がだるい。上手く動かせない。

「シロウ？なんちゅう格好で寝てんだお前」

呆れが混じったセイバーの声に応えようとしたが意識が遠の……。

士郎SIDE END

しん、とした室内。

これと言って特徴のない和室の中央には布団が敷いてあり、そこには顔を悪くしたこの屋敷の主人が寝かされている。

「ずばり」

屋敷の主が暗殺でもされたんじゃないかと勘違いしてしまいそんな騒ぎとは打って変わった沈黙を破って、話を切り出したセイバーに不安そうな、それでいて窺うような視線が集まる。それを受け止めて安心させるかのように力強くセイバーは頷く。

「ただの貧血だな」

病を診断する医師のようになんでもないといわんばかりに言い切ったセイバーに、布団に伏せている土郎を痛ましそうに見ていた桜が食って掛かる。

「貧血って　こんなに酷い顔色なんですよ!？」

「……血色のいい貧血など聞いたことがないんだが」

「誤魔化さないください！先輩が貧血を起したことなんて一度もないんですよ？それがどうして!」

「さあ？前とは環境も違うんだし、万事がいつも通りってワケにやかないだろうとは思っけどな」

「それは……」

「桜ちゃん、そこまで」

責めるような視線と、咎めるように問い質すマトウサクラを止めたのはフジムラタイガだった。

「士郎は休ませるにしても、私達は学校に行かないと。士郎のことで桜ちゃんに学校を休ませたり遅刻させたりした、なんて桜ちゃんのお爺さんに知れたら申し訳立たないもの」

「藤村先生……分かりました、支度してきますね」

「うん、心配してくれてありがとうね桜ちゃん。」

さ、遠坂さんも支度支度、私の目の黒い内はサボりなんて許さないんだから！」

「はい、では失礼しますね」

「うむうむ、遠坂さんもいい子でよろしい」

気分を切り替えるように軽快な動きと口調で退室を促すフジムラタイガに感心する。

何も知らずとも、言われずとも、シロウの日常を守るうとする、…
…シロウにもそれだけの甲斐性があればなあ　無理か。

マトウサクラとリンが退室したのを見送った所でフジムラタイガがこちらに振り返る。

「というわけで、私達は学校があるからセイバーさんに士郎の看病

とお留守番を頼んじゃうことになるんだけれど……」

「ん、任せられた」

「ありがとうセイバーさん」

ヒラリと手を振って応えんとすかさずお礼を言われる。

原因は俺だしお礼を言われる筋合いはないのだが……ま、ここは素直に受け取っておくか。

ここでとやかく言うのはシロウにもフジムライガにも益にならないしな。

「じゃあ私は学校に行くけど、士郎のこと無理させないようよろしくね」

「……ああ、ちゃんと面倒みてる。安心して行って来い」

「うん、いつてきます」

安心したように笑うと一度だけ礼をして、シロウを起こさないようにしてか静かに廊下を歩いていった。

「なんだかなあ」

「セイバー……」

「ん、聞いてたか」

「桜が悪かったな、本当は俺が悪い、のに……桜も普段ならあんな言い方しないんだけど……」

「敵にや態度も冷たくなるさ。そもそもマトウサクラのことは気にしてない」

『敵』という言葉には眉を寄せたが、後半の言葉には本当に？と窺うような視線を向けられる。

何を考えてんだか分かんが、生憎あれ位で傷心するほど柔じゃない。

マトウサクラがマトウシンジの妹というのなら（シロウは納得してないが）敵陣の人間ということだ。

マトウサクラの態度からして聖杯戦争のことは知っているだろうし、それを隠して一般人の振りしてシロウの傍にいるような人間にシロウのことにとかく言われる筋合いはない。

助けたいなら動け。口にしる。一般人が何も出来ないなんて間違いだ。

そう言う訳で「何でお前にそんなこと言われなきゃいけないの」とは思いはしても傷つきはしない。

俺に意見できるのはシロウの保護者であるフジムラタイガと、まあ、なんだ……至極不本意だがシロウだな。

まさか目の前に俺がいるのに無視してシロウを殺そうとは思わなかった……とか、

言い訳はまあ言い出したらきりが無いが、俺の力不足でシロウを危険な目に遭わせた。

んで、シロウが自分でそれを回避した。ここまでくりや大人しく苦言のひとつやふたつ受けてやるんだが……

(そんな事いう性格じゃねえよなあ)

そう、シロウがその事について責めるような性格ではないので、衛宮法廷では無罪放免。

晴れて自由の身なのである。ワイイ。……本当、調子狂うよなあ、この家の人間。

「まあマトウサクラのことはどうでもいい。シロウ、何で貧血になったか身に覚えがあるか？」

「え？……昨日のことしか思いつかないんだけど」

「正解だ。お前に渡してある護符は傷の修復はしてくれるが失った物は戻らない。

腕が消し飛んだら戻らないし、血が流れたら戻らない。覆水盆に還らずってやつだな」

「あー……確かに昨日はやばかったな……っそうだ！キャスター！」

「そこでキャスターなのかお前は。取りあえず落ち着け」

立ち上がるうと半身を起こした所で眩暈がしたのか動きを止めたシロウをすかさず布団に押し戻す。

普通ここはアーチャーのことを聞くべきかと思うんだが……やつぱ他人の命がかかっているキャスターの方が問題なのかね、シロウ的には。

とにかく、これで決心がついたな。この馬鹿には渡しておけない。

「シロウ、護符を返してもらおう」

「へ？」

「生半可に傷が治るからお前は自分の身を省みず無謀な戦いを挑もうとする。」

お前はもう少し周囲と、あと自分を省みた方がいいな。お前がどんな役割を担っているか、ちゃんと理解しろ」

「俺は……それでもキャスターを放っておけない」

「はあ……取りあえず没収な」

「ああ、ありがとな心配してくれて。でも俺は野放しに出来ないんだ」

シロウの枕元に置いておいた護符を取り上げてもしロウは反論しなかった。

……本当、こいつ分かってないよなあ。

キャスターの件はシロウなりに譲れない物があるんだろうから何も言わんが、自分の身を省みろっていつてんのにこころも容易く身を守る術を手放すとは……頭痛い。

うむ、結局何もいわんがな！反映されない忠告ほど無意味なものはない！

「心配してねえ。お前が無謀な戦闘に頭突っ込むところちもとばかり食うんだっての。いい加減自覚しろ」

「う、それは悪い………そういえば朝の鍛錬もまだだったな、今から
「昼まで寝てる。近くになったら俺の昼食を作らせてやる」

「………わかった」

モフ、と再度身を横たえたのを見送った所で俺は部屋を後にする。
シロウから没収した護符を身につけながら廊下を歩く。
目指す先は何のことはない　朝食だ。

第参拾玖話：しばしの休息（前編）（後書き）

以下ちよつとしたおまけ

セ「それにしても昔のヤツは良く分からんよな」

士「ん？何がだ？」

セ「何で零した水を盆で掬おうと思つたんだか。掬えても底が低いし直ぐ零れんのに」

士「セイバー、盆つて意味分かつてるか？」

セ「お前俺を馬鹿にしてるだろ。あれだろ、飲み物乗せてくるやつ」

士「それはお盆。この故事が指してるのは水盆、鉢とか容器みたいなもの」

セ「……人間つて紛らわしいよな」

ちなみに士郎がキャスターを倒すのに躍起になつてるのは実際に被

害を目の辺りにしているから（原作中の一成とか）です。ライダーの件も片付けなければならぬのは理解していますが、実際に事が起こっている訳ではないので、実際に起きているキャスターの方を如何にかしたい。そしてライダーの件とは違い、アーチャーが放置する姿勢を見せたのを見て自分がなんとかしなければ、という心境でもあります。

追記：セイバーの護符

『生存』の呪いが掛かっているので生死に関わる傷は治してはくれますが、
士郎の場合ちゃんとしていないので必要最低限のランクに下がっています。

誤字脱字などありましたらご報告ください。

第肆拾話：しばしの休息（後編）（前書き）

PV40万、ユニーク4万を越えました！週に一度の更新もままならぬ上だから続けている作品に付き合ってください恐縮です。ありがとうございます！！

今回は士郎が休暇なのでほのぼの(?)傾向です。少しでもお楽しみいただけたら幸いです。

第肆拾話：しばしの休息（後編）

穏やかな昼下がりに。

昼食を終え、早めに夕食の準備を終えようとしてか、それとものんびりと気ままな昼食を摂る為の準備をしようとしてか、はたまたその両方か。

もしくは他愛のない世間話を繰り広げる為なのかもしれない。予測は尽きない。

未成年もいるにはいるが、その殆んどが歳が二桁に満たない幼児ばかりで、夕食と明日の朝食の買出しにやってきたシロウは実に浮いていた。

だからだろうか、こつも簡単に、前触れもなく唐突に、今までの日常に終止符が打たれたのは。

「セイバーって卵料理が好きだよな……セイバーが来てから消費量が半端ない」

「一応日本の和食の有名どころは抑えておこうと思ってたが……」

「ああ、納豆か。あれは癖があるからなあ」

「うむ、朝の日本食の定番と教えてもらったから頼んだが……もう絶対いらん」

「うーん、癖の強いのはセイバーはダメかあ。発酵食品は大丈夫なんだろう？チーズとか」

「ちーず？バターの親戚みたいなヤツだったか？」

「惜しいような惜しくないような……いやだめだ、全然別物だ。

両方とも材料に牛乳使って、固形にしてるからって一緒くたにしてるだろセイバー」

「俺は食べる専門で作るのは専門外だからな。

あ、材料揃って捌くくらいは出来るぜー？でけえヤツはやった事ないが鹿位までな」

「止めてくれ。

……一回動物園でも行くべきか？食用じゃなく観賞という概念を植えて……いやでもなあ……」

「おっ……」

店から出て空手だった両手に荷物を乗せたまま次に周る店について相談していたのだが、段々と脱線していく話にシロウが何故か考え込むように悩み始めてしまった。

うむうむ、若い内に悩めるだけ悩んでおけシロウ。などと考えながら眺めていると、背後から聞きなれた第三者の声が俺たちの間に入ってきた。

「っにい、ちゃああああん—————!!!!」

「ふっ!」

勿論声だけじゃなくて、声の主本体までもがミサイルのように標的に突っ込んできた。

心ここにあらずのシロウがその衝撃に耐えられるはずもなく、無様にコンクリートに沈むかと思いきや、倒れるか、倒れないかの瀬戸際に踏ん張り堪えていた。

「放せよ」

「無理、いうな……っ!」

イリヤスフィールの服を掴んだ俺の腕を掴みながら。

いや、シロウが倒れるのは構わんがイリヤスフィールまで倒れて服汚したら大変だろ。

「あははっ、シロウったらおもしろーい!ぶるぶるしてる!可愛いー!」

「イリヤっ!危ないから動かないでくれ!セイバー、頼む、引っ張ってくれ!」

「ノー」

「セイバアアアア！」

俺は日本人じゃないのでノーと言える。

全く、いくら周囲も世間話で喋りこむ人間ばかりとはいえここまで騒げば目立つというのに……。

学校を休んで商店街で騒いでいたなんてフジムラタイガの耳に入っても俺は知らん。

……む、これはもしかして俺の監督不行き届きということになるのか？ハハハまさか。

「あー、面白かった！」

「イリヤ……もういきなり飛びついてきちゃダメだぞ、危ないから」

「はあい」

結局、シロウの知り合いなのか分からない人間の一人が「土郎君、大丈夫？」と手助けをし、荷物もイリヤスフィールもシロウの服も無事という結果に落ち着いた。

シロウ自身？フツ。

「セイバー、イリヤ、その知識は誤解だから……いや、誤解じゃないけど一般的ではないからな。」

たしかに、夏にアイスを食べると『冷たくて美味しい』になるから、アイス本来の味を楽しむなら冬、っていうのは聞いたことあるけどさ、日本人皆がそういう考えってワケじゃないからな」

「ふうん、でも日本の食事の見方って面白いわ」

「そうなのか？でも美味しく食べられるのが一番だと思わないか？」

「む、そういう目で見ないで欲しいんだけど……お礼は言うわ、ありがとう」

口の端についたクリームをシロウが微笑ましいものを見るような目で見てから指で掬い取る。

一連の動作にちょっとだけ眉を寄せたイリヤスフィールだったが、嫌ではなかったのかすぐに礼を口にしてソフトクリームに取り掛かるべく小さなスプーンを動かす。

「はい、お兄ちゃん、あーん」

「ブッ！」

「どうしたの？」

イリヤスフィールの手ずから食べてくれると信じて疑わない純粋な赤い瞳はじっとシロウを見つめる。

俺には確信犯の笑みにしか見えないが、シロウにとっては嬉しそうにはしゃぐ子供にしか見えないだろう。蚊帳の外の俺は微笑ましい光景を見るような笑みを浮かべて見守ることにしておこう。

シロウの助けを求めるような目は気のせいだ。

「いや、それはイリヤのдарろ？俺は大丈夫だから……」

「これはこの前セイバーが持ってきてくれた一人分じゃ絶対多すぎるお弁当のお返しなのよ？」

それとも私はお礼も出来ない子供だっていうの？」

「いやそういつワケじゃないけど……」

「……それとも私のこと嫌いなの？」

「ありがとないリヤ、おいしいよ」

宥めるように両手を前に上げて首を振るシロウにイリヤスフィールが唇を尖らせて拗ねるように見上げる。それでも尚言い募ろうとするシロウにトドメを指せば呆気なく勝敗はイリヤスフィールに傾いた。

うむ、これほど勝敗の決まっている勝負というのも珍しい……くはないな、所詮シロウだ。

フ、そうやって誰にでもいい顔しようとするからこのように困る羽目になるのだざまあ。

「あ、分けてくれたセイバーにもお裾分けしてあげるわ、あ〜ん」

……………取りあえず目が合った瞬間GOサインを出したシロウは死んだ方が俺のためだと思う。

士郎SIDE

いくらコートとマフラーで完全防備をしているとはいえまだ冬だ。それに、ソフトクリームで内側から冷えてしまっただけは寒いのが苦手だと言ったイリヤには辛いだらう。

頑なに「いらん」「これはお礼よ?」「不要。礼なら他のもんがいー」「あら、感謝の心に難癖つけるなんてセイバーったら子供ねー」「兎に角いらん。要らないったら要らない」「ほらセイバー、溶けちゃうわ。服が汚れたら責任とって貰うわよ」と延々と大人気ない応酬続いているのを眺めているのもなんだし、せめて俺は席を外してやるうという気遣いの下、一人で近くの販売機まで飲み物を買って出歩く。

「ほらイリヤ、ソフトクリームのお礼だ」

「え?別にお礼なんて……………」

ソフトクリームを食べ終わったのか、両手でブランコのサイドの鎖を掴みながら話をしているイリヤとセイバーの元へ向かい、買ってきたホットココアをイリヤの膝の上に乗せた。すると丸まった赤い瞳が自分の膝の上と俺の顔を交互に行き来する。嫌いだったら今度はイリヤを連れて一緒に買いなおしに行こうと思っていたが、どうやらそうではないらしく、ちょっとだけ安心した。

「貰つとけ貰つとけ、子供は甘えてなんぼだろ。シロウ俺の分は」

「ほら、ミルクティーでいいか？他はコーヒーだけど」

「んじゃミルクティーでいいや」

カシユ、と数日前とは打って変わって危なげない手つきでプルトップをあけるセイバー。

俺もイリヤの隣りの空いているブランコの方に座り、プルトップを開けようとしたが、イリヤに動きがないのに気付いて声を掛ける。

……まさか缶ジュース飲んだことない、とか……ありえそうだな。

「イリヤ？」

「なんでもないわ、ありがとうお兄ちゃん。そういえばセイバーはミルクティーが好きなの？」

「特に好きというワケじゃないがこっちにきて初めて飲んだのが紅

茶だったからなこの種類の黄色いヤツ」

「ふうん……」

白い缶を上げてパッケージの表をイリヤに見えるように持ち帰るセイバー。

イリヤはその西洋風のパッケージに興味があるのかないか曖昧な相槌を打ちながら眺めている。

ブランコに揺られながら話すイリヤと、その前の柵に腰を掛けながら応えるセイバーは兄妹のようだ。

数日前に敵として現れたのを覚えている。

でもこうして何でもないように他愛のない話をして、暖かい物を食べたり飲んだりして一息ついていると、聖杯戦争なんて嘘のように思える。……でも、嘘じゃないことは理解している。

ここで聖杯戦争のことを出すのは勿体無さ過ぎる　　だけど、その話をすべきに相応しい場所であってしまっただらこんな風に他愛のない話をして、笑い合って、のんびりとした時間を過ごせることなんてないだろう。いいや、絶対はない。

こうした穏やかな景色の中でも思い出せる。暴風と旋風のぶつかり合い。互いの命を削りあう攻防。

動くことも出来ず、ただ圧倒されていただけの夜。今度は、次は、自分で出来る限るのことを。

そう思う俺がいるけれど……今度も、次も来なければいいと、この光景を見て思ってしまった。

遠い遠い、俺の想像も超えてしまえるほどの遠い昔の空。

泣きたくなるくらいに鮮やかで、息を忘れるほどに胸を刺すような
紅い空。

幾拾。幾百。幾千。

数えるのも億劫になるほどの死体が無造作に重なって出来たなら
かな丘の上。

そこに一つ、ポツリと伸びた黒い影。

それを見て、俺は思ってしまったのだ

まるで、墓標のようだ、と。

勝利に酔うことも、喜ぶこともない。

平穩を守ったことを誇ることも、安堵することもない。

強敵を打ち倒したことに驕ることも、愉悦を感じることもない。

まるで死体の丘に立てられた墓標のようにひとり立っていただけ。

死体に視線を向ける訳でも、用は無いと立ち去る訳でもない。

夕日が映っているであろうその上等な夕焼けすらも飲み込む紅いガ
ラス玉は虚空に向けられていた。

何度も、何度も、何度も

それが彼の勝利の印。

この聖杯戦争の結末を、終着を見届けたい。そう思った。でも夢の中に見たあの結末は決して見たくない。

「お兄ちゃん？」

「シロウ？」

「……………へ？」

「ボケるにはまだ早いぞシロウ。せめて成人して貯蓄してからにする」

「ボツ…ボケてなんて無いぞ?!ただ平和だなあって思ってたただけだっ」

「末期症状だな……………まあいいや。どっちにしろ今日は無理だな、また今度ということだ」

「うん、いつでも来ていいよ。あ、場所わかんないか」

「地図書けるか?シロウ書くもん」

「大丈夫よセイバー、今お兄ちゃんに教えてあげるから」

ぴよい、と軽やかにブランコから降りると、イリヤはトテトテと

俺の目の前まで歩いてきた。

え？え？いったいどういう状況なんだ今。

「なんかお礼に本格的なお茶会にご招待してくれるんだと」

「え、ああそうなのか？」

「ええ、その時だけは聖杯戦争には関係なく歓迎してあげる。あ、勿論聖杯戦争でも歓迎してあげるから安心してね」

「いや、それは……」

逆に安心出来ない、と言おうとした所で目の前のイリヤの笑顔がグニヤリと歪んだような気がした。

第肆拾話：しばしの休息（後編）（後書き）

イリヤスフィールルート開通（嘘）。

イリヤさんの口元を拭った手は近くの手洗い場で洗ったので悪しからず。

日本の食文化……というよりも魔改造（ビーフシチュー 肉じゃが など）は実に面白いと思います。どうしてそうなった！っていうビフォーアフターが。

誤字脱字などありましたら、ご報告ください。

第肆拾壹話・忍び寄る影（前書き）

先月中に更新する予定だったのに出来なくて、すいません；；；
楽しみにしてくださっている人がいるのは分かりつつも暗い話は書
くの苦手です；

主役である土郎やセイバーさんが出てこない暗い四十一話ですがど
うぞ。

流石に楽しんで……とはいえませんが；

第肆拾壹話・忍び寄る影

日の光は届かない。それはこの部屋が造られた時から決まっていたことだろう。

窓は無く、唯一の外界との繋がりは階段を上った先。だと言つのに薄ぼんやりと室内を見渡すことが出来るのは何故か。答える者はない。何故ならこの部屋を訪れた時点でそのような他愛の無い疑問など消えさせる。

キィキィと蟲の鳴き声が。ザワザワと蟲が蠢く音が。グチャグチャと蟲が擦れる音が。

部屋の主の命なのか、意思なのか、到底理解することも理解しようと言つ気力も沸かないが、無音を保っている室内に在ると言つのにいるだけで息を吸えば喉から、吸わなくとも耳から足から指先からとあらゆる所からジクリジクリと犯されていく感覚をこの部屋への訪問者は感じていた。

「来たか、ライダーよ」

訪問者は部屋の主の呼びかけに無言で持つて応えた。

その反応に何がおかしいのか、口元に走った皺を更に濃くし、随分とすばまった肩と背が揺れる。思わず顔を歪めてしまいそうになる老人の反応にも、ライダーは何の反応もせずに見下ろしていた。

「呼んだのは他でもない、桜のことじゃ」

「……」

「恐らく近い内にお主と遠坂の娘、それと衛宮の子供が戦うことになる」

それはもう、避けることの出来ない戦闘。

サーヴァントとして呼ばれた時より決まっていたこと。それに対して恐れを抱くことは無い。これは聖杯戦争。

戦争なのだ。ならばどれほど不利な状況になろうとも、戦いの駒として呼ばれたからにはそのことに恐れを抱くことはない。

「戦闘は学校ですることになろう、その時桜がおれば……どうするじやろうな」

「……用件を」

「ほっ、そう急ぐでない。主から言付けて欲しいのよ。桜に戦場にくるなとな」

「？」

ここに来て初めて反応らしい反応を返したライダーに間桐臓硯は「なあに」と言葉を続ける。
皺が濃く刻まれた表情から、仕種から、声色からその真意を読み取るうとしても窺い知ることは出来ない。

「聖杯に選ばれ、お主を召喚したことに期待をしたがそれが外れただけのこと。不出来でもアレも可愛い孫娘じゃ、無駄死にをさせる気はないのにな」

「……………分かりました。シンジは？」

「心配要らぬ。慎二には既に伝えてある」

「なんと？」

「カツカ、信用がないのお。桜には聖杯戦争を降りさせる、後はお主に任せようとな」

その伝達役にライダーを少し自由にさせてもらうことを条件にな、と告げる臆視。

ライダーはしばらく考えるように黙っていたが今度は質問もなく従順に頷いた。

「……………分かりました。それでは出かけて来ます」

「うむ、頼んだぞ」

(信じた訳ではありませんが、サクラがこの戦争を降りられるのならば……………それが一番でしょう)

桜の中に埋め込まれた蟲たちによって桜は自分の意思に反して聖杯戦争に参加している。

蟲に命令を送る臓硯が許可したのならば桜は何事も無く聖杯戦争を降りられるだろう。

勿論……間桐臓硯の言葉が本心からのものであれば、の話だが。

裏があることは分かっている、その裏で何を考えているのかが分からない。

だが、サクラはマトウのただ一人の後継者だ。だからこそゾウケンがその身を案じるのもおかしくはない。

(それだけならいいのです、それだけなら……)

霊体化したまま空を跳ねる。

漆黒の姿は勿論、その苦悩する表情は見えないがライダーは齒噛みした。

彼女の頭には最初から自分がどう使われるか、捨てられるか、など自身を案じることは無かった。

一目マスターであるサクラを見た時から、そしてこれから訪れるであろう最後まで。

最後、と考えてライダーは更に眉間の皺を濃くした。

(私には最後まで……サクラは続くのです……あの日々が)

ライダーは聖杯戦争が終わればそれまでだ。

しかし間桐桜は違う。彼女はサーヴァントでもゴーストライナーでもない生きている人間だ。現在生きていて、これからの未来もある。それがライダーには心配でならなかった。

『エミヤ、シロウ……』

サクラの唯一の想い人。その名を声無き声で呟いてみる。学校で襲撃した時は悪くは無かった。それでも安心して任せられない。

どうしたものかと考えている内にサクラが通う学校へと到着する。学生らしき人間達が幾人も校門を通り、学校を後にしている。既に授業が終わって下校しているのだ。慌てて流れていく人ごみに目を向けるが目当ての少女の影は……あった。

周囲の人間は複数人で帰っているのが多いのに、サクラは一人で歩いていた。が、その足は速い。駆け出しではないが、今にも駆け出さんばかりだ。表情を見れば、行動を見れば直ぐに分かった。

エミヤシロウのことを考えているのですね。

思わず口元を緩めてしまう。人通りが少し少なくなった頃、声を掛けようとして……やめた。

もう少し。そう、もう少しだけあの少女の少女らしい姿を、表情を

見ていたかった。

色彩鮮やかに冬木の町を彩り照らす太陽から、ベールのようにさ
さやかに、でも確実に夜へと続く薄い幕を空がゆったりと重ねてい
く。

遅い時間ではないのに、陽が落ちるのが早いからか商店街に訪れ
る人々の人数は少し減ったように感じる。それはとても些細な変化
だが、毎日この商店街を通る桜の目には分かりやすい変化だった。
最近では土郎たちが通う学校の方でも遅くまで残るような活動は自
重する様呼びかけていた。桜の所属する弓道部も例に漏れず、早め
に練習を切り上げ帰宅するよう言われていた。

（おかげで早く先輩の看病が出来る）

店先に並ぶ品物を覗きながら歩く桜の足は軽い。でもものんびりす
る気はないのか行動は素早く、商店街に来るまでの道のりで、今朝
の記憶にある冷蔵庫の中身と相談しながら考えていた夕食と明日の
朝食の材料を次々と選び抜いていく。

「え……？」

早く帰らなければ先輩が夕食の準備を始めてしまう、そう思った桜は必要な物だけを買って終えたと足早に商店街を抜けようとした。が、視界の隅に映った長い薄紫の髪を見たような気がして立ち止まる。

「ライダー？」

確かめようと視線を向けても、名前を呼んでみても応えはない。ただ消えたであろう先は夕陽の光が届かない建物と建物の間、闇とは言わなくとも今いる場所よりも暗いことだけが分かる。一拍の間その場に立ち止まっていた桜だったが、意を決したのか既に決めていたのか建物と建物間にその身を滑り込ませた。

桜SIDE

建物と建物間に一歩踏み込めば一気に暗くなったような気がした。でもまだ夜ではないからぼんやりと目の前に続く通路や、建物に取り付けられた換気扇、青いポリバケツなどが見える。でも、後ろの商店街の喧騒とは打って変わり凄く静かで、別世界に投げ込ま

れたようで少しだけ怖じ気づく。

「ライダー……？」

人なんていないのが分かっているのに左右をキョロキョロと見回してしまふ。時折上を見てみるが、建物と建物の中で切り取られた狭い夕空が覗けるだけだった。

もしかして私の見間違いなのかな……先輩のこととか、学校に張られている結界のこととか、聖杯戦争のことを気にしすぎて、唯一その話が出るライダーに甘えてしまっているのかもしれない。……都合のいい時だけ相談に乗ってもらおうだなんて、私は本当に……。

「サクラ」

「ッライダー！」

「お久しぶりですね、何か変わりはありませんか？」

短く自嘲の息を吐いたところで上から聞き覚えのある声が降ってきた。私の名前を呼んだ声に勢い良く顔を上げれば口元に笑みを浮かべたライダーがこちらを見ていた。私を気遣う言葉に思わず泣きそうになる。

「ライダーこそどうしたの?!まさか兄さんがまた何かしたの?」

ライダーは兄さんの傍にいる。私が呼んだのに、私が聖杯に選ばれたのに、マスターの役割を兄さんに任せて、兄さんをライダーに押し付けてしまった。兄さんに預けたことによりライダーが十分に力を発揮できていないのを分かっている。私が呼んだのにマスターとしての役割をこなさなければかりか、ライダーの優しさに甘えて迷惑を掛けてしまっている。だから少しでも……間桐桜に出来ることなんてほんの少しのことだけれど、ライダーに何かお返ししてあげたい。それが出来ないなら掛ける迷惑を軽減したい。

「いいえ、シンジのことではありません」

「でも、ごめんね……ごめんねライダー。謝ったって仕方ないって分かっているけど……謝ることくらいしか出来ないから……。私が呼んだのにちゃんとマスターになってあげられないばかりか、戦いも兄さんも押し付けて……」

「サクラ」

少し困ったように笑ったライダーに抑えきれず謝罪の言葉が口を飛び出していた。言いたいことがぐちゃぐちゃで謝らなきゃいけないことばかりを羅列していく内に鼻の奥がツンとしてきた。視界がじわりと歪んだ所で伏せがちだった顔を完全に伏せてしまう。そこにライダーが私の名前を呼んで思わず肩を跳ねさせてしまった。

「私はあなたのサーヴァントです。戦いは私の役割でサクラには関係のないことです。それにシンジのことも気にしないで下さい。私は気にしていません。あと今日ここにこうしてきたのは別の用があるのです」

「別の用？」

「はい、ゾウケンからの伝言です。

『戦場に来るな』と。」

「戦……じよ、う？」

「はい、近い内に校内で戦闘が行われます。その時にサクラがいると問題が発生する可能性があります。なのでしばらくの間は学校へ行かないようにしてください」

「ライダーは大丈夫なの？だってライダーは」

「大丈夫です。安心して下さいサクラ」

嘘だ。と思った。

ライダーと兄さんがやっていることを姉さんは勿論、先輩だって許さないだろう。

今聖杯戦争がどういう状況になっているか分からないけれど、校内で戦闘が行われるということは、私を遠ざけようとするということ。は、ライダーが誰かと戦うということだ。相手なんて分かっている…先輩と姉さんだ。

安心させようとしているのか口元に笑みを浮かべているライダー

を信じられないと言う目で見てしまったのだろう、ライダーは口元に浮かべていた笑みを消して少しだけ不機嫌な声で言った。

「サクラ、私も能力が制限されているとはいえ、列記とした英霊なのです。そう簡単にやられはしません」

「だ、だって……」

「サクラ、大丈夫ですよ。何の心配もいりません。命の危険があれば戦闘から離脱する術もあります」

問うように見上げれば頷きで返された。

「私よりもサクラ、あなたの方が心配です。ゾウケンは何かを企んでいる……気をつけてください。」

………それと、何かあれば……いえ、何でもありません」

「?」

「それではサクラ、くれぐれも体調には気をつけてください。あなたの元気な姿を見て良かったです」

「ライツ　！」

ライダーが去ったであろう方向に目を向けてもそこには影も形もなかった。制服が汚れるのも構わず、というよりもそんなことも考

え付かないまま呆然としてペタリとその場に座り込む。

ライダーは戦闘から離脱する術がある、といった。それは本当のことだろう。ライダーは私に嘘は吐かない。でも術があるからといって本当に離脱出来るかは別問題なのだ。セイバーとアーチャーの二人相手にやすやすと逃げ切れるはずがないと私は思う……恐らくライダーも。

「……らいだー」

私は貴女のサーヴァントです、とライダーは言った。次いで貴女の味方なのだと。

嬉しかった。救いのなかったあの家の中でライダーが私の救いだっただ。……そんな彼女が消えようとしている。

「セイバー……」

先輩との日常を奪ったばかりか、先輩の命を脅かし、今度はライダーの命を脅かそうとしている。

ジワリ、と暗い感情がせり上がって

「つつく……！」

キチキチキイキイ身に埋め込まれ、既に体の一部と化しているであろう蟲が蠢く。まるで煮えたぎるような暗い感情に呼応するよう

にザワザワと身を苛む。息を止めて、コンクリートに固められた地面に指を立てて溢れ出ようとする衝動を押さえ込んだ。外からの痛みと内からの衝動にしばらく動けずに座り込んでいたが、なんとか押さえ込むことができたことにほうと息を吐く。でも、顔は上げない。上げられない。

「……は、は、……どうして……修行もしてないし、最近は蟲も大人しかったのに……」

熱の籠った息を吐き出して自問する。魔力を使うことなんてないのに、身体は魔力が足りないかと喘いでいる。自分の身体のことなのに分からなくて押さえつけるようにギュウと身を抱きしめる。

「……先輩」

このままじゃ帰れない。こんな状態で先輩の家に帰ったら心配されてしまう。

壁を背もたれにして寄りかかる。冬の空気に冷やされたそれはとても心地の良い物だった。

桜SIDE END

第肆拾壹話・忍び寄る影（後書き）

桜嬢の想い人である土郎を試すライダーさん……ってなんだか娘の結婚相手にケチをつけるお父さんのような気がしたのは自分だけでしょっね。きつと。

活動報告には既に書いてあったのですが、しばらく更新を停止させていただきます。

誤字脱字などありましたらご報告ください。

第肆拾貳話：ある夜の終着（前書き）

じ、自分の中の一ヶ月は世間にとっての二ヶ月だったのだ……！といつものように謝罪で始めるのはワンパターンかと思いちよつと屁理屈を捏ねてみました。すいません……ようやく更新です、四十二話目です。

もう本当待たせてしまつてすいません。というより待つていてくださりありがとうございます。文章力乏しくてすいません。内容は題名通りで前日のいざこざを終着させました。それでは少しでも楽しんでいただければ幸いです。

第肆拾弐話：ある夜の終着

時はさかのぼり

柳洞寺戦終了日夜。

ライダーとキャスターによる襲撃が去った後は何事も起きなかった衛宮邸では、ようやく通常通りの夜の静寂が戻っていた。しかしそれは外観から見た衛宮邸の話であり、士郎を担いで戻ってきたセイバーが一步、否玄関を何気ない仕種で開けてしまった彼の目に映ったのは通常ではない光景　　ギリギリと睨んでくる遠坂凜の視線と説教を腕を組んだままという不遜な態度で聞き流しているアーチャーの姿だった。

「お前ら邪魔」

「ッ、セイバー！士郎は大丈夫？！」

キャスターとの攻防の後間髪入れずに起こったアーチャーとの戦鬪に疲弊していた（為、俺の手刀を避けきれずに）気を失いぐったりとした様子で俺に担がれているシロウを見たリンがアーチャーを放り出してこちらに近寄ってくる。どうやら心配して玄関で待っていたらしい。んで、先に帰ってきたアーチャーと衝突ってところか。

「おかげさまでな。とにかくシロウ寝かせてくるから通せ。邪魔だ。まだ話し足りないってんなら俺が通り過ぎたあとにでも続ける。それか居間行け、居間」

「その様子じゃ本当に大丈夫みたいね……」

「ふん、だから言っただろう。失敗したと」

「あんたは……はあ、いいわ、続きは居間でやるわ。どうせこんな所で話しても寒いのは私だけだもの。」

セイバー、話すことがあるから衛宮君を寝かせたら居間に来て頂戴」

「おう分かった」

若干冷静になったのか、自分の体を冷やす気温に意識が向いたり
ンが寒そうに腕を擦った。

リンの言葉に頷いてリンとアーチャーの間を通り抜けてシロウの
部屋へと向かった。

「
まずはじめに」

シロウを寝かせ、リンの言葉に従って居間に戻ってきた俺にリンが口を開く。

「ごめんなさい　　こんなことになったのはアーチャーに自由行動を許した私の責任でもあるわ」

「なんだね、ならばあの時あの未熟者が敵の罠に掛かっているのを見逃せば良かったのか？ああそうだな、あそこで放っておけばあの小僧はキャスターが始末してくれてただろう。全く私としたことがいらぬことをしてしまった」

「黙って」

「はは、んなことになったらお前が帰ってくる前にリン殺してっから。物音に気付いて起きたこの家の人間ごとな」

「……」

「だって俺記憶操作なんて芸当出来ねえもん。」

「そうだな、フジムライターが俺のマスターになる確率があるってんなら生かす意味あるけどな」

「ないだろ？と言葉を失ったままこちらを見ているリンとやや眉を寄せて何も言わずこちらを見下ろすアーチャーに訊ねる。目撃者は消す、それは当然のことだろう。シロウの護衛としてこの家に居た俺がシロウが行方不明になった時点でここにいれる訳がないし、突然いなくなつた俺を怪しく思わない筈もない。所詮俺は他人なのだ。」

んで、俺に関してもそういう諸々の事情を抱え込んでまでフジム
ライイガやマトウサクラを生かす理由などないって訳だ。変に詮索
されても動き辛いだけだしな。マスター不在で魔力を補充できない
状態でそんな厄介事抱えたくねえ。

つまり、アーチャーは関係ない人を巻き込まない最善の選択をし
た訳だ。いやーホント助かった助かった。

「ま、そうだった訳でシロウが唐突に行方不明とか不自然死とかし
たら困る訳だ　　分かるよな」

「……　　分かったわ。アーチャー、意思は変わらないのね」

「……………この同盟が終わるまでのことだ、自重するぞ」

「そう、謝罪する気がないってこと」

「そうだな、中途半端な結果になったことには謝罪しよう」

フン、と軽く鼻を鳴らして肩を竦めて見せるアーチャー。反省の
色なし。まあ敵マスターに対する扱ってこんなもんだよな。いく
ら協力関係であっても。一番殺し易いやつを殺すのに躊躇してたら
話になんねえし。わざわざ謝罪させるって……………なんだかなあ。サー
ヴァントとそのマスターらしくないっていうか……………ああだめだ。例
えが出てこねえ。

本当、なんでこんなところを聖杯戦争なんて物騒なものの舞台に
しちまったんだか。

何度も心の中で呟いているこのシステムを作った奴らに呪詛を吐きながらもアーチャーの言葉に頷いておく。俺としてもこの件が片付いた後でも縛り続ける気はない。それじゃあ「お前聖杯諦めろ」って言ってるようなもんだし。

この協力関係中アーチャーからの安全が確保出来りや問題ない。ま、今夜みたいにリンの発言（魔術か？）で行動を縛っては貰うけどな。あとはリンに主人としての責任を取ってもらえりや……。

「そんな謝罪の仕方、納得できるか……っ！
Anfang……！」

リンに対する要求を言葉にしようとした先、唐突にそんな呪文が居間に響いた。

アーチャーが信じられないものを見るように見ている。

俺も呆然と目の前で繰り広げられる信じられない光景を見ている。

そして、

「Vertrag……！ Ein neuer Nagel

Ein neues Gesetzl Ein neues V

erbrechen !」

「待て、この件に関してはセイバーも納得し」

ついにその呪文は完成した。

「私が納得できないのよ！衛宮士郎への戦闘行為の一切を禁じる
！」

そんなこんなで、弓兵は信頼を裏切った代償を主従仲良く揃って
払うことになったのだった……お前ら、大丈夫か？

え？俺の要求？んなもんいいよ。はつきりいつて期待以上という
か予想外の結果になったしこれ以上は、なあ。

こうして衛宮邸の夜はひと波乱ふた波乱ありつつも穏やかに過ぎ
ていったのだった。

士郎SIDE

「よし、今日はここまで」

体調も戻ったと言うことで様子見も兼ねて軽く鍛錬をして、今ま
で道場に張り詰めていた緊張の糸が切れた。セイバーの一言を聞いて
その場に腰を下ろす。いつもより短時間であったとはいえ、既に
身体は汗だくだ。

いくら様子見と言ってももうちょっとやるかと思ってたんだけど……セイバーも心配してくれてるんだろ。それは嬉しいけど時間もないし、ちょっと休憩挟んでまた相手してもらおうように頼むかな。

そんなことを考えながら息を整えつつ、薬缶から直接水分を補給する。セイバーはいつも通り道場を掃除して……あれ、いない。

「今日は客が来てるんでな、今日はこれでお開きだ。たまにはお前が掃除しろ、俺は寝る」

「は？」

セイバーは既に道場の入り口に立っていた。その後ろには遠坂が立っていて、何故かこちらを窺うように見ている。

「え、ちょっと待ってくれセイバ……」

勿論俺の制止の言葉なんて最後まで聞かれることもなく、いつものようにひらりと軽い調子で手を振ってセイバーは道場を後にした。そして残される俺と遠坂。

何故遠坂がここに来たのか分からない。共通の話題と言えば聖杯戦争のことだけど、いつもはきはきと用件を告げてくる遠坂の様子がおかしくて、こっちとしても思わず遠坂を黙って見てしまう。

「……」

「……」

「……遠坂、そこ寒いだろ、中入ったらどうだ？時間掛かるようなら俺お茶でも淹れてくるけど」

とにかく落ち着こう、と考えて曖昧に笑みを浮かべつつそんなことを提案してみたが、

「いらぬから、ちょっと座って……話したいことがあるの」

「あ、ああ」

やっぱりいつもとは様子が違う遠坂のまま断られて、道場を離れて隅に置いてあった座布団を持ってきて真ん中に敷いてみる。道場の入り口を閉めた遠坂が軽く「ありがとう」と礼を言って座り、その向かいに同じように座布団を敷いて俺も座る。

「……」

「……」

「……その、昨日の夜は、しゅめん」

長い長い沈黙の後、遠坂の口から零れたのは言葉を選ぶようにたどたどしいが、それは確かに謝罪だった。話というから聖杯戦争がらみ　慎二か学校、サーヴァントのことについてだと思っただから、突然の謝罪に間抜けな声で返してしまった。

「え？」

「だから昨日のコト。アーチャーには令呪を使っただけだから。」

……そんなんでいまさら済まされないけど、ごめん」

「」

思わず言葉を失った。

令呪　それはサーヴァントに対する三度だけの命令権。この聖杯戦争では切り札となる重要な物。どれほどの価値があるかなんて俺よりも遠坂の方が分かっているだろう。それを遠坂は使ったと聞いたのだ。

「遠坂。それは、つまり」

「……ええ。協力関係にある限り、絶対に衛宮くんを襲うなって令呪で命令したわ。」

だから、今後は昨日みたいなことは起きないから」

「」

セイバーがアーチャーに関して何も言わなかったことが疑問だったが、それが今解けた。アイツこのことを知ってたんだな……もしくはアイツから要求したか

「言っとくけどこの判断にセイバーは関係してないわよ。むしろセイバーですら驚いていた処置だもの」

「遠坂お前なあ……それってそれくらい割に合わない取引だったってことじゃないか……」

「そう？言っておくけど私はこれ以上協力関係をこじれさせるつもりは無いの。ここで曖昧な対応したらいざとなつた時困るだけじゃない。それにアーチャーが私の意思を無視して勝手な行動をしたのは間違いないもの。その件に関してもここでビシッとケジメつけとかないといけないと思っただけよ」

「……遠坂、ちょっと自棄になつてないかお前」

「う。な、なによアンタだつて……私の為に令呪使おうとしてたじゃない（ボソ）……」

「？なんだよ」

「何もないわよ。兎に角、今後アーチャーが士郎を襲うことはないからそのことだけは安心していいわ」

「……」

俺も慎二のことを黙ってたり、遠坂には結構迷惑掛けていると思
っている。だが俺に関しては何の咎めもなかったし……いや、貸し
という形の保留なのか。兎に角今回の遠坂の判断はやり過ぎではな
いかと思う。そもそもアーチャーの独断で遠坂が謝ることじゃない
じゃないか。ああでも遠坂にとってはそうじゃないのか。　な
んか堂々巡りになるような気がする。令呪を使用する前だったらあ
れこれ言えるけど使ってしまった後ならばもう意味がない。俺の出
来ることは遠坂の謝罪を受け止めて、その信頼に応えることだけだ
と思う。

「分かった。もうこの件に関しては　　そういやアイツなんで俺
を襲ったんだ？」

「……それが、敵は少ない方がいい、だって。

士郎はどうでもいいけど、セイバーは後々厄介になるから、今のう
ちに潰しておくべきだとかなんとか。

昨日みたいに簡単に他のマスターに操られると迷惑だから、ここで
切り捨てた方がいいって判断したんだって」

「　　」

額に手を当てて溜息を吐き出すように返された質問の答えに、そ
の反論の余地のない内容に言葉を失う。

セイバーのことも頷けるけど、キャスターの手に落ちかけた俺は
足手まといだ。キャスターに操られた時点で、アイツは俺を厄介者
と判断したんだろう。

「納得いった。それじゃこの件に関してはもう終わりにしよう。俺が悪い点もあったし、悔しいけどアイツがいたおかげで助かったのは確かだしな。だから遠坂もあまり気に病むなよ。俺もやりにくいからさ」

「うん、分かったわ。じゃあこの話は終わりね。次は魔術の修行に
関してのことなんだけど」

少しだけ考えるように顎に手を当てて考えていた遠坂だったが、
頷くといったものように真っ直ぐにこちらを見返してきた。そして話を
切り替えるように別の件、頼んでいた魔術に関しての話をし始める。
る。

今夜は寝られるだろうか……。

士郎SIDE END

第肆拾弐話：ある夜の終着（後書き）

間が空いたので書き方を思い出しつつ書いていたので、ちょっと内容に不審なところがあります（キャラの性格とか性格とか。何か疑問や指摘があれば直させていただきますのでお気軽に。

次回からはライダーさん戦、の予定です。合言葉は予定は未定！更新予定も当てにならないので未定にしておきます！；

誤字、脱字などありましたらご報告ください。

第肆拾参話・日常の異変（前書き）

ライダーさんのマスターの居場所搜索とか諸々。

第肆拾参話・日常の異変

「慎二が見つからない？」

朝、いつも通り鍛錬をしようと道場に向かう俺たちを待ち構えていたリンに切り出されたのはライダーのマスターであるマトウシンジの所在について。当たり前だが学校には来ておらず、家にも帰っていないらしい。普段から遊び歩いているということだが、町の巡回がてら探してみても見つからず、こうして協力者であり、マトウシンジの友人であるシロウに報告がてら相談にきたと言っ訳だ。

「……そうか、慎二のやつ学校に来てないのか」

「そりゃ完全に敵対してるマスターが二人に、正体不明のマスターが一人潜んでるような場所、畏を張ってるとはいえのこのこ出ちゃこねえだろ」

頼みの畏はリンの妨害で魔力と言う恩恵を得るまでには時間掛かるし、あの状態のライダーで二人：下手したら三人のサーヴァントと戦うなんて無理な話だ。少し考えりゃ分かる。お前がマトウシンジの立場なら暢気に学校通うつもりか……あ、なんだろ、否定する可能性が100%じゃないあたり己の不運さに涙がでそうだ。その前に俺ライダーみたいに従順じゃないから見捨てるけど。

じい、と呆れと諦めとなにやらが混じった目で見られているのに

気付いたシロウが「あ、いやさ……」と慌てて付け足す。

「アイツ遠坂と俺がマスターだって知ってても学校に来てたたる。なのに今は来ていないってことは本当に完全に敵として見なされたんだなって思ってたさ……」

エミヤシロウはとてつもなくお人好しで、甘くて、どうしようもないバカだ。でもこいつは自分なりに日常を守ろうとしていてその中にマトウシンジがいるのだろう。だから少しだけ期待したんだろ、お人好しのシロウが「敵対する」と言うほどに怒るマトウシンジの行為をマトウシンジが見直してくれることを。

ま、俺にはシロウの考えなんて分からないし、憶測でしかないけどな。

「シロウ」

「うん、分かってるセイバー。俺は絶対に慎二を止める。その言葉に嘘はないよ」

「そ、ならいいんだけど」

シロウの目には迷いがなくて真っ直ぐだ。それを見てリンが安心するよふうに笑う。

「で、話に戻るけど士郎なら私よりは慎二の行動分かるでしょ。どこか当てない？」

「友人の家にも泊まってるのか……」

「え、うそ、アイツあんた以外に友だちなんていたの？」

「友だちって言うか……ほら、慎二のやつ女の子に凄い人気あるじゃないか。だからその内の誰かの所に行ってるんじゃないかな。遠坂が探して見つからないって言うんなら町を出歩いてる訳じゃないだろうし」

「あー、そっちかあ……そっち方面は思いっきり見逃してた」

今夜はそっち方面でも当たるか、と呟くリンにシロウが心配そうに声をかける。

「遠坂俺の修行とかも見てくれてるし忙しいだろ、俺の体調も問題ないし分担しないか？」

「それは良い考えだな。二人でいちゃあっちもいろいろ不都合だろうし、妙にシロウを気にしてるようだし」

マスターはもとより、サーヴァントにも目を付けられているあたりシロウの生餌としての能力は計り知れないと思う。

「……そうね、じゃあそうしましょう。それにしてもしくったわ…
…慎二相手にここまで時間掛けるなんて」

はあ、と溜息を吐くりん。一応他のサーヴァントとマスターの調査もやっているんだろうが、そちらの成果も思わしくないだろう。聖杯戦争が始まって結構経つし、いつまでも正体が分かってるマスターに梃子摺りたくないのだろう。

「ふむ……手っ取り早く片付けたいんなら町や知人を調べるより手っ取り早い方法があるぞ」

「え！」

「本当かセイバー！」

「敵はシロウを敵視してる、敵の畏は学校に張ってある。ならシロウが学校つろつければ自分から掛かってくるだろ」

「それは……」

「ああ、シロウはおとりとして危険な目に遭うのは当然。学校関係者も危ないだろうな」

でもそれは初めから分かっていたことだ。いつか耐えられなくなつて、標的をシロウから純粹に魔力の補給に向けたら知らずの内に結界が発動してました、なんてことになってなりうる。ま、だからこそリンは学校から目を離さないし、マトウシンジの件でシロウと

協力関係になっただんたろうけど。

「……士郎、」

「……セイバー、結界が発動しても……皆を助けられる可能性はあるんだな」

「ああ、前にもいっただろ。時間との勝負だつて」

俺の答えを聞いてシロウは考えるように目を閉じた。

静かな朝の道場にコクリ、とシロウが唾を飲む音が響く。

そして少しの沈黙の後、目を開けたシロウが決意を込めて、言った。

「分かった、今日から学校に行く」

「なら私も引き続き呪刻を探すわね、まだ見逃しているものがあるかもしれないし」

「ああ、ありがとうな遠坂」

「なんでお礼なんて言うのよ。むしろ困役を買ってくれた士郎に私がお礼をいすべきじゃない」

「そうかな……うん、でも本当にありがとうな、遠坂」

「ちょ、何言ってるのよ！ああもういいわ、朝の鍛錬潰しちゃって悪かったわね、私もそろそろ支度してくるわ」

「あ、そうだなそろそろ……やば、また桜に朝食の用意まかせちまった……」

「……………別に気にすることないと思うけど」

「へ？」

「なんでもー？じゃあね、居間で合いましょう衛宮くん」

時計を見てあちゃあ、と言う顔をするシロウにリンが何事かを呟くが、聞き返したシロウにひらりと手を振ると黒い長髪を靡かせてサツサと歩いて道場を後にした。その後姿を見送って、リンの態度に何かを感じたのか首を捻っていたシロウがこちらを振り返り「なんかしたかな、俺」と目で問い掛けてきたので笑顔で答えてやった。

「知るか」

そろそろ朝食の準備が終わってる頃だろうので鈍感野郎を置いて俺は一足先に居間に向かう。背後からシロウの俺を呼ぶ声が聞こえたが無視だ無視。一生やってる。……うむ、本気で一生やってそう
な気がする。

居間に続く襖を開けると目の前には既に綺麗に食卓が整っていて、その席の一つには既に制服を着たマトウサクラが座っていた。電源が付いているテレビから流れるニュースは特に目新しい物はなく、ここ数日と殆んど変わらない情報が流れている。

「いつも早いな」

「……………セイバー、さん」

別に気配を消してたとか言う訳でもないのに俺の出現に気付いていなかったのか、声を掛ければぼんやりとした視線がこちらを向いた。俺の名前を呟いた声はその視線よりもぼんやりとしていて、いつものマトウサクラとは明らかに違う態度に首を傾げる。

そんなに熱中するほどの情報が流れているかとテレビを見るが相変わらず飽きもせずガス漏れ事件のことだった。そして再度座っているマトウサクラに視線を向ける。ぼんやりと虚ろな目でこちらを見ているマトウサクラの目は少し潤んでいて、頬には赤みが差している。

「顔赤いぞ」

「へ?」

「顔。熱でもあるのか」

「へ、あれ、セイバーさん？ってこれはちがうんです、ちょっと料理してたときの湯気に当てられちゃって」

「そうなのか」

「そうなんです！……その、そんな分かりやすいですか」

ようやく正気に戻ったのかいつも通りに振舞うマトウサクラだったが、さっきの強い肯定の声から一転、急にこちらを窺うような物言いで何か悪い事をしたのを見つけたかのような目でこちらを見上げてくる。

……………はーん。

「別に俺はそんなこと気にしないぞ」

「えっ？」

「そもそも年齢制限をつける理由が分からん。飲みたい時に飲む、それでいいと思っけどな」

「……………えっと、セイバーさん？」

「ああ、フジムライガが酒が足りないって言ってたら俺が飲んだってことにしてやるよ」

「……………あ、ありがとうございます」

「礼はいらん。いつも上手い料理作ってくれてるし少しくらい融通するのは当然だろ」

「は、はあ」

そもそもフジムライタイガも未成年ばかりのシロウの家に酒を持ち込むのが悪いのだ。こうして魔がさして口にしてしまう人間だつて出てくるだろう。ま、真面目なシロウやマトウサクラが保護者の目を盗んで飲酒する、なんて夢にも思わなかったのやもしれんが。しかしマトウサクラが朝っぱらから酒をかつくらうとは……………うむ、人は見かけに寄らんとは本当のことだな。

しかしこのままではバレる可能性がある……………俺は酔ったことがないし、酔っ払って赤くなった頬を元通りに戻す方法なんて分からんし……………

「冷やしてみるか？」

「え?!」

「赤いの、ばれないか？」

「あ。じゃあちよつと洗面所に行つてきますね」

「おう、気をつけろよ」

「はい、ありがとうございます」

俺の提案を聞いてそそくさと居間をあとにするマトウサクラ。誰も居なくなつた居間にテレビの報道の声だけが響く。誰も来てないのに朝食に手を付けるつてもアレだしな。あ、納豆発見。……この国の人間は味覚に関して自分をも痛めつけるのが趣味なんだろうか。あ、嗅覚もか。俺には理解できない。したくもないが。

「あれ、セイバー？桜は？」

「知らん」

「トイレかな」

「……シロウ、それ他のやつらの前じゃいつなよ」

「流石に遠坂や藤ねえの前じゃ言わないぞ俺……て、またこのニュースか」

「内容は変わってねえぞ。犠牲者もなしだ」

「そっか、なら良かった」

暇潰しに横目で見ていたニュースの情報を返してやればあからさまに安堵した答えが返ってくる。

いつマトウサクラが帰ってくるか分からない状況なので聖杯戦争のことを話すこともできない状況を見たシロウが「お茶でも淹れるか？」と聞いてきたので「頼む」と頷きシロウが台所に消えた所で

どどどどどと慌しく廊下を駆けてくる音が居間に響いた。そして数分の間もなくスッパーンと襖が音を立てて開かれた。

「おっはようー！ふむふむ、今日も相変わらず豪勢ねー！うんうん、これでこそ一日を元気に始められるってものよー」

「藤ねえ、もうちょっと静かに入ってきてくれよ」

「おはようフジムライガ、相変わらず元気だな」

「まあねーあ、士郎お茶淹れるのなら私のも入れてくれると嬉しいなあ」

「了解、静かに座っててくれよ」

「りょうかーい、あれ、セイバーさんの分の納豆はないの？」

「いらん」

「納豆のよさが分からないなんてセイバーさんたらお子様ねえ」

「藤ねえ、セイバーに突つかかるなよ……ほらお茶」

「ありがとう流石士郎、いい湯加減だわ」

「あらやっぱり藤村先生でしたか、おはようございます」

「おはよう遠坂さん、やっぱりってどついでのことなのよ」

「いえいえ私の口からはとても……あれ、桜は？」

「そついえば遅いな」

「俺ちよつと様子見てくるよ」

「……………」

「なんだよセイバーその沈黙は」

いや、トイレに行ってると思っているのにその女子の様子を見てくると言えるお前についてちよつとな。

とは言わずに「なんでも？」と答えてから「見に行くなら見に行けよ」とシロウをけしかけておく。

流石に酔いは冷めてるだろ。冷めてなかったら……シロウがどうにかしてくれる。多分。どっちにしろ俺にはもう手に負えない事態だしな。

「さ、桜?!」とシロウの慌てた声の後直ぐに、「藤ねえ、ちよつと来てくれ!」と廊下から響いてきた声にフジムライタイガが立ち上がり声の方向へと走る。すぐにその後をリンが追う。俺は居間から廊下に顔を出して耳を澄ます。

「本当に大丈夫ですから」「ダメよ桜ちゃん、大事をとって休まなきゃ」「でも、私……」「とにかく私体温計を持ってきます、救急箱にありましたよね」「お願いね遠坂さん」「ほら桜、取りあえず居間行くぞ」「先輩……私、学校行かないと」「七度以上あつた

「絶対にダメだからな」「……………はい」

……………。

「ああ　風邪だったのか」

第肆拾参話・日常の異変（後書き）

予告？そんな1話分の文量でライダーさん戦までこじつけるなんて
…自分には無理でした。ええ、無茶。

誤字、脱字などありましたらご報告ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5011n/>

ソードマンの聖杯戦争

2011年10月19日00時28分発行